高力士云貴妃誠無罪然將士已殺國忠貴妃在陛下左右豈敢自安願陛下割恩之將士安則陛下安矣正末唱

風入松止不過鳳簫羯鼓閒琵琶忽剌剌板撒紅牙假若更添箇么花十八那些兒是敗國亡家可知道陳後主遭着殺伐皆因唱後庭花

旦云妾死不足惜但主上之恩不曾報得數年恩愛教妾怎生割捨正末云妃子不濟事了六軍心變寡人自不能保唱

支那文學大觀
第五巻

LIBRARY
JUN 9 1971
UNIVERSITY OF TORONTO
PL
2717
U47T3
1926
v.1
第五巻

桃花扇傳奇解題

一　作者の略傳と作劇の由來

此の傳奇の作者孔尙仁、字は季重、號は東塘、別に云亭山人とも言つて居た。本貫は山東曲阜縣で、孔夫子の遠孫に當る。康熙中國子監博士を授けられ、累官して戶部の郎中となつたが、後、官を退いた。博學强記、詩文に長じ、音律に明るかつた。著書には闕里新志、岸塘文集、湖海詩集、會心錄などがある。沈德潛の國朝詩別裁集には左の二律が收められて居る。

紅　橋

紅橋雲柳裊煙村。　隋代風流今尙存。
酒旆時遮看竹路。　畫船多繫種花門。
曾逢粉黛當筵舞。　未許笙歌避吏尊。
可惜同遊無小杜。　撲襟絲雨總銷魂。

憶　昔

憶昔春宵傍父兄。　故國風景乍承平。
城門吏放深更論。　樓下人聽上界笙。
珠履貪遊從雪浣。　花燈不息任天明。
誰知此夜來爲客。　漁火江村照獨行。

佳句誦すべく、人をして直に其の風流蘊藉を酒旗歌扇の間に想像せしめるものがある。然れども云亭をして不朽の名を成さしめたものは實に桃花扇傳奇其のものである。

此の桃花扇を著した次第は云亭自ら本末に於て詳しく述べて居る。云亭の族兄孔方訓といふ者が、明の末頃に南京に仕官して居た。舅の秦光儀は、亂を避ける爲めに、姻戚の緣を求めて寄寓する事三年、悉く弘光の遺事を探り得、郷里に歸つた後、屢屢云亭に話した。殊に李姬の面血を扇に灑いだのを、楊龍友が畫筆もて之を點染した事は、實に新奇にして以て後昆に傳へるに足る事を深く感じて、桃花扇を作らうと志し、なほも傳聞に誤もあらうかと博く史料を蒐輯して、腹藁既に出來上つたが、自重して容易に人に示さない。京師に出掛けて、仕官するやうになつて愈愈僚友と此の事を談じ、想を練る事十有餘年、三度藁を易へて始めて完成したのが即ち此の傳奇である。時に康熙三十八年己卯の六月。傳奇を上下二篇に分ち、筆を先聲に起して餘韻に終る。全部四十四齣、頗る苦心の作と稱せられて居る。是より先、云亭の小忽雷傳奇を撰した時は、其の塡詞は友人顧天石の代作であつたが、是の時、天石は既に都中には居らず、會會明朝の末に秦淮の淸客として有名であつた丁繼之の友人、王壽

熙といふ者が、招聘に應じて京邸に留り、常に云亭と往來して居たから、一曲が仕上る毎に節を按じて歌はしめ、少しでも拗字があれば改訂を惜まなかつた。故にすべてに於て聱牙の弊がなかつたのである。又從來の曲本は、說白が少くて、殆ど其の三分の一しかなく、其の七分は登場の俳優が任意に加へたもので、俗態惡謔が多く、往往にして金を點じて鐵となし、文筆の累をなすことも少くなかつたから、此の傳奇に於ては、其の弊を救ふ爲めに、說白を詳細にして、一字をも增減することを許さない、篇幅の稍稍長いのも畢竟これが爲めである。であるから歌曲といひ、說白といひ科といひ、悉く云亭の胸中から出たもので、曲は婉麗にして風神多く、科白も亦雅趣に富んで居る。一度本傳奇の世に出づるや、上は王公縉紳より下は婦女子の輩に至るまで、賞玩しない者はなく、一時紙價を高からしめるの譽があつた。其の歲の秋には、遂に內侍に索められて、乙夜の覽を辱うするの光榮に浴し、翌年開歲の燈節には、當時の總憲李木庵は俳優を集めて扮演せしめたといふ。一日木庵は云亭を招いて之を觀覽せしめたのに、翰林院の諸公は席を云亭に讓つて上座に就かしめ、更に伶人に命じて杯を獻ぜしめたから、滿座嘖嘖として感嘆の聲を放ち、云亭頗る意氣揚揚たるものがあつたといふ。此より桃花扇の名、一時に轟き、京師の戲院に於て、本傳奇を演ずるもの歲に虛日なきの有樣で、其の盛況眞に想ふべきである。

二　本傳奇の梗概

本傳奇の始末は、試一齣、先聲中、滿庭芳の曲に總括せられてゐる。曰く、

公子侯生、秣陵の僑寓、恰も南國の佳人と偕にす。讒言暗に害し、鸞凰一宵に分る。又天離り地覆るに値ふ江淮に據り、藩鎭紛紜。督主を立て、歌を徴し舞を選び、黨禍奸臣より起る。良緣は再び續ぎ難し。樓頭に激烈、獄底に沈淪す。御つて蘇翁、柳老に賴り、解救ふこと殷勤。半夜君逃れ相走る。烟波を望み、誰か忠魂を弔はん。桃花扇、齋壇に揉碎せられ、我れ與めに迷津を指す。

更に之を左の四句に約言してゐる。

奸馬・阮は中外長劍に伏し
巧柳・蘇は往來して密線を牽く
侯公子は花月の緣を斷除し
張道士は興亡の案を歸結す

さても本傳奇の主人公、侯方域は、字を朝宗といひ、中州歸德の人、司徒侯恂の子である。名節、文章一世に卓越して、才氣亦見るべく、久しく東林の幟を樹て、新に復社の壇に登つた。壬午の年、南闈に下第してから、莫愁湖畔に寓する正に一年、九十の春光漸く酣なる頃、社友陳定生、吳次尾と約して、將に冶城道院に往いて、梅花を賞玩しようと思つたが、時會魏府の徐公子が客を招いて先に來て居り、一座の道院、既に占領せられて居るのを聞き、路を轉じて敬柳亭の所に向つた。敬亭は秦州の人、說書を本業としてゐる。然れども頗る奇傑の士、曾て阮大鋮の門客となつて居たが、後に阮が崔・魏の逆黨であるのを知り、潔く辭去したのを、侯等大に感

嘆し以て我黨の士となし、快く論語の講義を聽いて歸る。（聽稗）

李姫字は香君、秦淮舊院の名妓李貞麗の養女である、芳紀正に十六、温柔纎小にして、才色兼備、匹を儔ぶする者がない。貞麗、罷職の縣令楊龍友と昵む。龍友字は文驄、鳳陽の督撫馬士英の妹婿で、阮大鋮とは義兄弟を結んで居る。常に院中に出入して、姫を鍾愛し、字を選んで香君と呼び、必ず姫の爲めに梳櫳の客を招かんことを約して居た。香君の歌曲の師を蘇崑生といふ。亦頗る任俠を好む。一日温習了つて相語るの時、龍友、崑生に對つて、昨日侯司徒の公子侯朝宗に會つたのに、客囊頗る富み、又才名倫を絕つ、正に這裏にあつて名姝を物色して居るが、崑老知つて居らるるかと言ふと、崑生は彼の人は我が同鄉の名家で、才名悉く仰せの通りであると答へた。龍友すかさず、此の緣談は好機逸すべからずと勸めたから、貞麗大に色動き、龍友に極力斡旋して此の好事を成就せらるるやうにと願つた。（傳歌）

文廟の丁祭の日に、吳次尾等往いて祭に與るの時に、阮大鋮南京に蟄居し、亦來つて此の盛典を覩て居る中に、忽ち次尾等に見出されて散散に打擲された。（鬨丁）是に於て大鋮、憤悶遣るかた無く、門を閉ぢて出かけない。大鋮本より詞曲に明かるく、家には聲妓をも養つて居た。會〻陳定生客を招いて、大鋮の新作、燕子箋傳奇を借覽したいと求めたので、大鋮悉く興に入り、態態優伶を遣つて扮演せしめ、又其の僕に吩咐けて竊に之を窺はしめた。龍友も亦大鋮を尋ねて到り、共に杯を傾けて對談して居る時に、阮家の僕歸つて、諸公子大に稱贊の辭を惜しまなかつたといふと、大鋮大に喜び、僕に命じて、更に往つて之を窺はしめた。旣にして僕復命して、公子

一度天下の事を談ずれば、主を罵詈して已まないと言つた。大鋮且つ愧ぢ且つ怒つたが、龍友が傍から之を慰藉して、陳・吳は侯朝宗と文酒の親交がある。朝宗、閒居無聊、一佳麗を覓めようとして居るのを聞いて、我彼の爲めに一人を物色して居る。願はくは吾が兄、幸に梳櫳の資を出して、彼が歡心を買ひ、然る後に、彼に託して兩人を和解したならば、一擧雙擒といふものであると言つた。大鋮にそれは妙計であると直に贊成して、侯生は我が年姪であるから、必ず甘くいくであらうと、三百金を出して、龍友に其の調停方を託した。（偵戲）

侯生、書劍飄零、長らく客舍に逗留して居たが、無聊に堪へず、且つ香君の艷名を聞くに及んで、春情按へ難く、淸明の節に柳敬亭を携へて、舊院を訪れると、會會盒子會の催があつて、龍友、崑生等が來合せて居る。侯生香君を見るに、聞く所になほ勝つたものがある。心恍惚として、竊かに定情の歡を結ばうと思つて居た。貞娘も亦吉日を擇んで、聘禮を定めようと暗かに祈つて居る。然れども侯生既に客囊乏しく、如何ともすることが出來ない。（訪翠）龍友はそこで、箱籠、首飾、衣服を送り、且つ筵席の費用までも用意して吳れたから、貞娘の喜び譬へるに物なく、丁繼之等の淸客、卞玉京等の歌妓を迎へて、侯生香君の爲めに合歡の式を擧げた。此の夕、侯生携へた所の宮扇を出し、詩を題して香君に贈り、以て定情の驗とした。一座艷賞、各各歡を盡して退散した。（眠香）

其の翌日早早、龍友來つて喜びを道ひ、且つ備に大鋮の意中を話したのに、侯生も心解け、龍友に阮老は我が年伯なれど、其の人となりに慊らぬ所があるので、久しく絕交してゐたが、既に過を悔いて來り投ずるからには、

之を拒むのもよくあるまい。陳・吳の兩名は我と親交あれば、明日にも相見えて懇談しようと言つた。側にあつた香君が之を聞いて大いに怒り、郎君、何と仰せられる。阮大鋮は權奸に阿附し、廉恥の心が毫もない者、婦女子と雖も、唾罵しないものはないのに、郎君が之を救解されるのは、果して何の心でありませう。此の多くの釵釧と衣裳とは、固より我が眼中にはないと大いに罵つて立ろに簪を拔き、衣を脫したから、侯生も大に感嘆して、好し、好し、斯くの如きの見識、我の倒つて及ばざる所、眞に我が畏友であると、乃ち龍友に謝意を述べて言ふには老兄の好意甚だ多とすれども、婦女子の笑ふ所となるのが甚た殘念であると言つたので、龍友、如何ともすることが出來ず、悄然として歸つた。（卻奩）

端陽の夕、陳、吳の兩人秦淮に遊んで、丁繼之の水榭に於て文會を催した。侯生は香君を携へ、船に乘つて其の下を過ぎ、共に登つて酒を飲み詩を賦す。する中に燈船妓を載せて、節を賞する者、陸續として絕間がない。大鋮も亦船を買つて來り、樓上に復社の文會の燈を見て、大に狼狽して、燈を滅して一目散に逃げ出した。陳・吳の兩人之を見て追つかけようとしたが、侯生之を攔り止めて、事無きを得た。（鬧榭）寧南侯左良玉、武昌を鎭守して居たが、糧食乏しく、兵士は飢餓に迫つて、喧嘩して反を企てようとした。良玉再三慰撫したが、聽かない。竟に如何ともする事が出來ないので、南京に移つて、糧食にありつかうと約したから、兵士歡呼して退散した（撫兵）する中に南京では、左兵謀反して東に下り、南京を掠め、北京を窺はうとしてゐるとの流言が專らで、人心殊に恟恟として居る。然るに良玉は本と朝宗の父、侯軍門が嘗て卒伍より拔擢して戰將として吳れたのが基

で、次第に立身したから、平生其の洪恩を感謝して居た。龍友爲めに侯生に說き、父の書を僞作せしめて、良玉の擧兵の意を阻止せんことを願つたから、侯生之を承諾して、一書を認めて、其の輕擧を戒めた。書旣に出來上つたが、其の使者の無いのに難んだ。然るに敬亭が奮つて往かうと願ひ出た。（修札）左良玉其の書を手にして天地を拜し、他心なき事を言ひ、敬亭亦快辯を揮ひ、直諫傍嘲、良玉を說き伏せたから、良玉大に喜んで、耿耿たる臣の心、惟天表すべしと誓つた。（投轅）一面には朝廷に奏聞して、良玉に官爵を加へ、子を蔭し、糧食も送つたけれども、南方の流言浮說愈愈甚しく、南京の文武百官、一堂に會して、大事を議するに至つた。阮大鋮竊に此の機に乘じて、侯生を除かうと謀り、衆に向つて左兵の來るのは、暗に內應するものがあるからであると聲言した。史可法がそれは誰であると詰つた時、大鋮は侯方域其の人であると答へた。可法は侯の父の門生であつて、侯生とも世交があるから、決して其の樣なことはないと論辯し、龍友も亦傍から斷じて其の樣なことはないと辯じたけれど、大鋮固く執つて聽かない。却て書中都べて字眼暗號があると言つて、馬士英に命じて之を拿へさせることになつた。龍友、事の頗る急なるに喫驚し、私かに走つて侯生に告げ、夜逃れて可法の軍に赴かしめることにした。發するに臨んで、香君悲嘆遣る方なく、行裝を收拾し、淚を揮つて、滿地の烟塵、重ねて來るは、未だ必すべからざるなりと言ひ、離合悲歡一瞬に分つと唱つたが、此の語竟に讖をなして、侯生との緣は永久に斷絕したのである。時は崇禎十六年の十月であつた。（辭院）

翌年の三月、流賊北京を陷れ、毅宗皇帝煤山に自縊して崩ぜられ、凶聞頻りに武昌に傳つたので、左良玉慟哭

して師に誓ひ、勤王の兵を率ゐて北上し、中原を恢復しようと決心した。(哭主) 是の時、福王由崧、難を避けて江浦に居られたが、馬士英、阮大鋮等は之を迎へて帝位に即かしめようと思つて、史可法に謀つた。侯生は可法に說いて、福王の三大罪、五不可立を論じて、之を難じた。(阻奸) 然るに馬・阮は迎立の功を專らにしようと思ひ、黃得功・劉澤清・劉良佐・高傑等四鎭の武將に說いて其の同意を得、竟に駕を迎へて朝を設け、元を弘光と改めた。馬士英は迎駕第一の功を以て內閣大學士、兵部尙書に陞補され、史可法以下各各差等があつた。そして四鎭は盡く侯爵に進められた。(迎駕、設朝)

阮大鋮は光祿卿に用ひられ、楊龍友も亦禮部主事に補せられ、同鄕の田仰は漕撫に擢んでられたが、一美妓を尋ねて任所へ帶往しようと思ひ、聘金三百兩を出して、之れが周旋を龍友に願つた。因て龍友は靑樓色藝の精は香君に及ぶものはないと、舊院の諸妓、淸客に其の旨を授けて香君を說かせた。香君怫然色を作して侯公子の題した所の扇面定情の詩は、萬兩の雪花銀にも勝つて居る。媚を鬻ぎ、笑を賣るは、自ら勾欄の艷品がある。妾は薄命の人であるから、爾後朱門に入るを願はないと固く拒絕した。(拒媒) 馬士英之を聞いて大に怒り、使者を遣して、之を招かしめたのに、使者歸つて、香君病に託して肯て樓から下りて來なかつたと復命した。(媚坐) 士英愈愈憤怒し、更に家奴に命じて、衣銀を備へ、轎を以て無理に香君を奪ひ來らせようとした。龍友も亦同行して、貞娘に容易ならざる事になつたと知らせ、俱に與に香君に其の聘に應じるやうにと促した。香君は愈愈益益怒つてそれは何事であるか。當日は楊老爺作伐をなし、母、婿を主りて、妾を侯郞に嫁がしめた事は滿座の賓

客、誰一人として知らないものはない。現に定情の品は藏して茲に在ると言つた。龍友は更に侯郎は禍を避けて、今や行方不明になつて居る。若し三年歸らなくても、なほ只顧他を待つて居られようかと言つたのに、香君は、三年が十年、よし百年他を待つても、決して田仰の意は迎へないと、且つ罵り且つ泣いた。しかも此の時門外觸を促すの聲が頻りに聞える。龍友、貞娘も竟に如何ともすることが出來ない。香君の爲めに頭を梳り、衣を穿たしめ、强ひて樓より下らしめようとした。香君茲に於てか、詩扇を手にして前後に亂打し、恰も防身の利劒の如き感があつた。譬令身は死すとも此の樓を下りないと訴へ、地に倒れて頭を撞き、流血淋漓として、飛沫扇を汚し、殆ど氣絶したかのやうである。貞娘大に驚いて、侍兒をして扶けて臥房に入れて靜養せしめた。然るに外邊人を要むる聲愈愈喧しい。貞娘狼狽周章、爲す所を知らず、之を龍友に謀つた。龍友は茲に於て一策を案じて、宰相の權力には當ることが出來ない。若し其の意に背いたならば、必ず母子の爲めに宜しくあるまい。娼家が良に從ふは固より其の所である。況んや田府に嫁すれば衣食に不自由はない。香君既に此の幸福を辭せば爾他に代つて享けよと言つたが、貞娘なかなか以て應じない。龍友已むを得ず之を劫すに及んで、心ならずも、其の意に從ひ、俄に艶裝して香君であると欺瞞して轎中の人となつた。龍友は貞娘人に嫁し、香君は節を守り、阮兒の恨を雪ぎ、馬舅の威を傷けず、李を以て桃に代へ、一擧にして四得、倒つて是れ妙計であつたと喜んだ。(守樓)

香君幸にして難を免れたが、此より一病に沈み、獨り寂寞たる空樓に其の日を送り、常に侯郎と貞娘とを思慕し、折折は詩扇を取り出して、其の血痕に汚れたのを見て、

爾看よ疎疎密密濃濃淡淡、鮮血亂照す。是れ杜鵑の拋つならず、是れ臉上の桃花。紅雨兒と做つて飛落し、一點點氷綃に濺ぐ。

侯郎侯郎、這れ都べて爾の爲めに來ると。放聲一哭、疲れて昏睡した。折りしも龍友、蘇崑生と同じく訪ね來り、此の有様を見て大に同情を寄せた。龍友竊に其の扇面を抽いて反覆諦觀すれば、幾點の血痕、斕斑其の上に附着し、紅艷眞に並ぶものがない。龍友本より繪に工なれば、之に對して畫情湧出、抑へるに由なけれど、奈何にせん、繪の具がない。そこで崑生即ち盆草を搾つて鮮汁を得、龍友之を畫筆に浸して、花は美人の紅血を借り、葉は芳草の綠滴を分ち、即座に折枝の桃花を畫き了り、眞に是れが桃花扇であるといつた。香君驚き醒め、畫を見て嘆息し、薄命なる自家の小照であると喜ぶ。龍友香君の苦節を高とし、崑生は本香君と師弟の情誼があるから、往いて侯郎の所在を尋ねてくれるやうにと懇願した。崑生之を快諾し、香君に手書を認めんことを迫つたが香君無文の故を以て之を辭し、龍友に代筆を求めた。龍友は汝の胸中、どうして寫すことが出來ようかと言つたので、香君沈思多時、妾が千愁萬苦は俱に扇頭にあるからとて、そこで、扇を崑生に託して侯郎を尋ねさせた。

(寄扇)

阮大鋮は累りに馬士英に拔擢されて、內廷の供奉に轉じ、弘光帝に遊宴逸樂をせられるやうに勸め、殊に自製の燕子箋傳奇を演ぜしめんが爲めに、舊院知名の歌妓淸客を擇んで、朝旨を以て之を召さしめた。是に於て卞玉京、丁繼之は烟花を拋ち、飄然として出家した。香君も亦脫する事が出來ないので、遂に李貞麗と稱して宮廷に

入り筵に臨んで大に馬・阮を罵つたので、馬・阮激怒して、將に鞭撻を加へようとしたが、龍友が傍から調停したので僅に事無きを得た。（罵筵）是より香君は內廷の女樂に充てられ、悒悒として宮廷を出づるの日なきを嘆じた。（選優）

是より先き、四鎭の武將、兎角に相和せず、史可法も亦竟に之を制するの實力がなくなつた。（爭位）就中高傑最も驕傲で、他の三鎭と戰つたが大に敗れた。（和戰）可法乃ち高傑に防河の事を掌らしめた。侯生をして其の軍監の職に當らしめた。（移防）然れども高傑猶ほ改めず、侯生の諫をも聽かず、總兵許定國を面のあたり責罵し、却て禍を受けて、賺し殺されてしまつた。（賺將）蘇崑生は侯生が高傑に從つて、河南に在ることを聞いて一路之に馳せ、黃河の堤防を過ぐる頃、高傑の亂兵の逃れ去るに出遇つて、竟に驢馬を奪はれて、水中に陷つた。會會一艘の船前面から來つて崑生を救つた。救はれて船中に入れば、豈に料らんや、李貞麗のあらんとは。相見て大に驚いて之を問へば、貞娘は先に田仰に嫁し、一時は其の寵を受けたが、本妻の嫉妬の爲めに、出されて一老兵に嫁した。即ち此の船は漕撫の報船で、老兵は今正に上陸して船に居らないので、兩人は火に對して座を占め、衣服を焙りながら、舊を偲び今を談じて、愁涙雨の如く下つた。此の時又一個の船、侯生を載せ、流に順つて來り碇泊した。蓋し高傑が死んだので、將に鄉里に歸らうとして偶偶此の處を通過したのである。侯生、隣船の話聲を聞いて、其の崑生に似て居るのを思つて、尋ねて見ると、それは果して崑生であつた。貞娘も亦茲に在る奇遇を喜び、鼎座して相語り、香君の苦節を聞いて、侯生痛く感激して、一度相見えて前後を商量しようとて

崑生を伴ひて貞娘と袂を分つた。（逢舟）

やがて南京に入りて、崑生を客舍に留めて行李を守らせ、一人舊院を尋ねて、媚香樓を訪へば、哀れや美人一度去つて、院落寂寥、妝樓は變じて畫室となり、龍友の友人藍瑛が寄寓して居た。あまりの事に呆然として事の仔細を聞けば、香君は既に宮中に入つたといふ。會會楊友も亦來つて香君の近狀を語る。侯生之を聞いて大に嗟嘆した。藍瑛其の畫く所の桃源の圖を出して題詠を求めたから、侯生は直ちに筆を援つて、

　原是れ花を洞裏に看るの人
　重ねて來れば那ぞ得ん、便ち津に迷ふ
　漁郎は誑つて指す、空山の路
　桃源を留取めて、自ら秦を避く

と題した。龍友は侯生に勸めて、速に去つて馬・阮の難を避けしめた。（題畫）

侯生は既に舊院を辭して、舊友陳定生、吳次尾を訪問しようと思つて、蘇崑生を伴つて、三山街を通過したのに、書賈蔡益所の店前に一面の廣告がある。題して『復社文開、陳定生、吳次尾兩先生新選』と有るのを見て、陳・吳の此處に在るを知り、刺を通じた。時に阮大鋮も新に兵部侍郎防江總督に陞り、其の挨拶の爲めに、轎子に乘りて、店前を過ぎ『復社文開』の四字を見て、これも亦東林の餘黨であると、命を傳へて陳・吳及び侯生を捕縛させた。（逮社）蘇崑生は之を見て大に驚き、左良玉に救を求めようと思つて、其の營に往つて柳敬亭に遇つた。敬

亭因つて良玉に謁見をさせた。良玉は今更に馬・阮の專横を怒り、先づ之を誅伐しようと檄を草して、敬亭をして南京に傳へさせた。(草檄)馬・阮大に恐れ、黃劉三鎭の兵を移して、左兵を阻止せしめようと謀つた。(拜壇)敬亭も亦捕へられて獄に下り、侯生等に面晤した。(會獄)する中に左良玉君側を淸むるを名として兵を擧げた。馬・阮之を聞いて大に懼れ、黃得功等を調して坂磯に在つて截殺させた。左兵竟に利あらず、良玉、崑生をして大義を以て得功に說かせた。會會良玉の子夢庚が、反して九江を占據したから、良玉面目がないといつて憤死した。(截磯)

是の時に當つて、淸兵江淮の虛を窺つて南侵して來た。史可法孤軍を以て揚州に滯在し、師を督して堅く守つて居た。(誓師)京師爲めに物狀騷然、弘光帝以下出奔し、馬・阮亦狼狽周章、家族財物を携へて難を避けたが途にて賤民の掠奪に出會し、龍友の救に依つて纔に免るる事が出來た。淸客妓女爭つて宮闕を出掛けたから、香君も亦出でて、舊寓に歸つて見れば、龍友も會會尋ねて來た。そして龍友の將に鄕里に歸らうとするのを見て、涙を掩うて、侯郎は未だ獄中から赦免されないし、老爺も亦鄕に歸らうとしてゐる。奴家誰を力にして日を送らうやと、正に別を惜む時、蘇崑生、息せき切つて歸つて言ふには、左將軍が死なれたので、連夜京に囘り、急いで獄門に來て見れば、衆徒悉く四散し、侯公子の行方も不明であると告げたので、香君愈愈悲嘆の涙にかきくれて、遂に崑生と同じく兵亂を城東の棲霞山中に避けるやうになつた。(逃難)

弘光帝往いて蕪湖に到り、身を黃得功に寄せられる。得功は固より忠義の士であるから、誓つて國に報いよう

と思つて居たのに、二劉報を聽いて來り、得功に向つて、弘光帝を劫して、北朝に送らうと說き勸めた。併し得功は頑として聽かない。二劉終に得功を殺し、駕を奪つて淸に降つた。(劫寶) 史可法揚州を死守して居たが、力盡き糧も絕え、加ふるに外からの援兵は來ないし、城遂に陷つたから、繩を便りに城から下つて、報船に遇ひ、江を渡つて來り、忽ち皇帝は既に逃れ、北兵は江を過ぎて、南京も既に陷つたことを知り、國家の興隆竟に成すべからざるを見て、大に慟哭して、身を江に投じて死んだ。侯生等も獄を逃れて、此に到り、史公の死を悼み、陳吳は手を分つて故山に還り、侯生は敬亭と共に棲霞山に往つて、暫く亂を避け、然る後に歸鄉の計を廻らさうと思つて居た。(沈江)

初め大錦衣張薇、崇禎の末、北京は陷り、毅宗崩じ、又周皇后も自盡せられるや、棺を買つて屍を殮めたが、後淸兵が闕に入つて流賊を破り、毅宗を改葬したのを見て、南京に往つて兵亂を避けて居た。(閒話) 再び新主の中興を迎へて、舊職に補せられたが、權奸が局に當り、朝廷の有樣日に日に非なるを見て、新に城東棲霞山中松風閣を作つて、職を棄てて日每に籠居して居る中に、蔡益所等亦往いて友となつた。(歸山) 香君は蘇崑生に伴はれて、一道庵に投じ、思ひかけなくも、卞玉京が道姑となつたのに邂逅して、之に身を寄せた。侯生も亦柳敬亭を從へて、同じく棲霞山に赴き、玉京の葆眞庵を訪ねたが、收留することが出來ず、丁繼之に遇つて、其の采眞觀に宿つた。(棲眞) 斯くて侯生と香君とは同じ山中に居ても、互に未だ相識らないといふ有樣。共に七月中元、毅宗皇帝の追善法會の席に列して、圖らずも相見て互に驚喜し、彼の所謂桃花扇を出して、絮絮叨叨として相語

つて居た。時に張道士、壇上にあつて、法話を說いて居たが、怒つて壇を下り、大に叱咤して何物の兒女か、敢て此の清淨なる道場を汚さんとするとて、兩人の手より扇を奪ひ、裂いて地に擲つた。侯生も亦稍稍色を作して、從來女室家は人たるものの大倫であつて、離合悲歡は情の鍾る所、毫も先生の管する所ではないと言ふと、道士益益怒つて曰く、呵呸、此の兩個の癡蟲、爾見よ、國は那裏に在りや、家は那裏に在りや、君は那裏にありや、父は那裏にありや、此の地は覆り、天翻るの時に當つて、這の花月の情恨を割斷する事が出來ないのかと大喝破したので、侯生、香君、之を聞いて、冷汗淋漓として、忽ち夢から醒めたやうに感じた。道士は二人に諭して入道せしめ、壇を下つて大笑すること三聲。

爾看よ、也雨つながら襟を分ち、去るに臨むの愁波をば掉はざるは、俺が桃花扇を扯碎いて一條條たるに虧了る。再た癡蟲兒の自ら柔絲を吐いて、轉た萬遭なるを許さず。(入道)

是を本傳奇の大結とする。外に餘韻の一齣がある。柳敬亭、蘇崑生及び南京の老贊禮の懷舊談を以て終りとして居る。

三　概　評

悲しきは生別離より悲しきはなく、慘なるは亡國より慘なるものはない。支那上下四千載、幾多家國の興亡を經たれども、明の毅宗が煤山で自縊されたよりも痛烈に感ぜられるものはない。況してや其の事は纔に數十年前

の事であつて故老猶ほ存し、當時に喧傳せられてあるに於ては一層の事である。李姬は侯郎と同棲する事僅に一年にして、奸人の毒計に阻まれて、侯郎一度去つて遂に歸らず、身は樓頭に在つて、死を以て苦節を守るに至つては、誰か其の熱誠に感動しないものがあらうか。作者云亭山人は好箇の題目を選んだものと言はねばならぬ。

扨て本傳奇は筆を崇禎十六年癸未の二月に起して、弘光乙酉に終り、前後僅かに二年有半に過ぎない。南朝の興亡を緯とし、侯・李花月の艷情を經とし、秦淮烟花の境に配するに、兵馬倥偬の景を以てし、風流の韻事に雜ふるに、離合の感慨を以てし、奇話百出、恰も走馬燈のやうに、人をして應接に遑なからしめるものがある。しかも作者自身が言つたやうに、全く事實の上に結構したもので、才子佳人、一段の因緣は、侯生自ら撰する所の李姬傳に據つたものである。そして其の布置排列の巧なる、變化もあり、波瀾もあり、忽ちにして花月消魂、忽ちにして羽書旁午、局面屢屢改つて、正に點染の妙を極めて居るのは、彼の西廂記の平板で、何等の奇のないのと、牡丹亭の荒唐で、不稽なるものとは、日を同じうして談ずることは出來ないのである。

抑抑侯朝宗は絕代の才人であつて、英雄の資を具へ、慷慨にして大節を有つて居たが、不幸時に遇はず、大功を千載に樹つることが出來なかつたとは云へ、其の新朝の粟を食むことを屑しとしなかつたもので、其の人物固より偉大なりとせねばならぬ、香君は慧眼靈心、雪膚花貌、色藝一時に冠絕して居るばかりではなく、よく人を識り義を重んじ、氷清玉潔、終始一貫、操を改めず、實に烟花の淑女、脂粉の丈夫と言はねばならぬ。此の二人は實に理想的の男女であつて、配して妙を得て居る。彼の西廂に於ける張生、琵琶に於ける蔡生の如きは、共に

無能庸劣であつて鶯鶯、牛趙に配するのは寧ろ當を失して居る。其の他李貞麗の俠、楊龍友の慧、柳敬亭、蘇崑生の氣慨、馬士英、阮大鋮の奸佞、史可法、左良玉の忠勇、弘光帝の暗愚、四鎭の强悍、面貌躍如として紙表に生動するが如くに感ぜられる。而も其の艷麗は秦淮舊院の紅燈綠酒に過ぐるものはなく、其の悲慘は武昌の營中、殺宗の凶鬪を傳ふるに過ぐるものはない。香君が樓頭の守節、實に痛烈を極めて居るし、張道士、山中の棲眞、其の清絕の極である。敬亭の說書は能く人をして頤を解かしめるし、崑生の寄扇は、眞に姬を思ふ情の厚きに泣かしむるものがある。若し夫れ才子佳人、『訪翠』の相識は、風流の業寃、煩惱の起因とも言はれようし、匆卒『辭院』の分袂は、誰か他年重ねて逢ふの難きを知ることが出來ようぞ。『逢舟』の遇は、實に奇遇であつて、『題畫』の不遇に、轉た同情に堪へざるものがあるし、『入道』の再會は、人を喜ばしめたるも一炊の夢で、忽ち永劫の分袂となる。遇不遇は是れ皆本劇の關節とも言ふべき所である。兒女の鍾情と、國家の興亡とは、自ら別箇のものたる感があるのに、常に侯、李の間を往來して、專ら情界政界の聯繫を保つものは柳、蘇の運動である。そして侯郎、李姬共に道士の言に頓悟して、情苗を芟り盡くし、左と右に境を分つことは、實に傷心の極、又天晴の至、從來の雜劇、傳奇に絕無の所であつて、構想の妙、蓋し人の意表に出て居る。若し强ひて其の短所とも云ふべきものを擧ぐれば、馬・阮の權を擅にし、左良玉が兵を起し、又史可法が江に沈むあたり、稍稍冗漫に失する嫌がないではないが、之を要するに、結構の雄大、局面の變化、脚色の整齊、描寫の精密等、大體に於て成功に近いと言はねばならぬ。

作者云亭の戯曲に於けるや、別に一隻眼を有し、最も樂律に重きを置き、同時に又說白の文にも注意したことは、本末及び凡例の條に於て詳細を盡して居るから、ここでは省略することとする。之を從來の雜劇が白の文が少くて、優人が戯場に於て任意に增添したのや、琵琶・牡丹亭の動もすれば、律に諧はないで、伶人が多少修正を加へたものに比較すれば、多大の相違があることを認めねばならぬ。且つ砌抹即ち道具立の細いものに至るまで一一列擧したのを見れば、唯、塡詞の名家といふばかりではなく、搬演の上にも頗る造詣が深かつたと言はねばならぬ。大手筆にして、而も用意の周到なものでなくば、どうして斯くの如き成果を得られよう。古今に艷稱せられて、驊騮獨步の觀あるは固より其の所と言はねばならぬ。なほ云亭山人の友人、顧天石といふもの、詞曲に通じて居て、桃花扇を申べて、南桃花扇となし、佳人才子をして、場に當りて團圝せしめたのは、恰も會眞記は崔、張の永訣で終つて居るのに、西廂記には兩人の再圓に了つて居るのと、同一の筆法で、畢竟世俗の耳目を滿足せしめんが爲めであらうけれど、却て文の餘情を缺いで居て、蛇足の擧といはねばならぬ。又我が國の朝顏日記に熊澤蕃山を題寫し、扇子に歌を題する結構は桃花扇を學んだものとも云はれて居る。

此の傳奇の評言は頗る多いが、今その主なるもの二三を擧げて見よう。科錯道人劉中柱は、

一部の傳奇、五十年前の遺事を描寫し、君臣將相、兒女友朋、人人活現せざるなく、遂に天地間、最も關係ある文章を成せり、往昔の湯臨川、近今の李笠翁、皆敵手に非ず。

言簡にして意味深長、知言といはねばならぬ。又、顯上の劉凡は、

奇にして眞、趣ありて正、諧にして雅、麗にして淸、密にして淡、詞家の能事畢れり。前後の作者、未だ此の本より盛なるは有らず。名世の一寶と爲すべし。

と言つて居るし、又婁東の葉藩は、

慷慨悲歌、凄涼苦語、是れ何種の文章ぞ、之を讀んで、涙を墜さゞる者は、其の心必ず石、其の眼必ず肉なり。

と言つて居るが誠に眞を穿つた評である。

抑抑淸朝の戲曲で有名なものも少くないが、就中、最もてはやされたのは此の桃花扇傳奇と長生殿とで、殆ど雙璧とも稱すべきものである。長生殿の作者を洪昇といふ。字は昉思、王漁洋の門人で、詩を以て名のあつた人である。其の長生殿傳奇は白樂天の長恨歌に基いたもので白仁甫の梧桐雨雜劇をして顏色なからしめた。余は此の二傳奇に、小說の紅樓夢を加へて淸朝純文學界の三傑作と稱するに躊躇しない。尙ほ金埴の桃花扇の題辭には、

兩家樂府盛康熙　進御均叨天子知
縱使元人多院本　勾欄爭唱孔洪詞

と賞讚して居る。之を世界の文壇に進めて、西歐の大文豪と比肩せしめても、猶ほ且つ遜色がないといふを憚らないのである。

桃花扇　巻上目次

桃花扇〔上〕

清 云亭山人著
今 東光譯

序幕　前口上

登場人物

老司祭

聲　（但し舞臺に現れず）

老司祭　（羅紗の帽子、道服、白鬚にて登場。歌ふ）

こんな古物が世にあろか
玉か、銅か、いやまて
紅かねつけた役者様
生きさらばつて
たつたひとり
笑はれるものよ
せんもなや

昔のうさは筆に消す
のんで、うたへば
風流居士よ
孝行、忠義、さても
御代泰平のめでたさ
その上長生き
虫がよや

日は麗かに世は堯舜　　　花は亂れ咲く甲子の年
山路にも賊はなく　　　まこと地上は極樂淨土　　　「詩」

さてもこのおいぼれは、もと、南京、太常寺の司祭でござつたが、位はずんと下賤故、姓名の儀は平に御容捨、しあはせにも、無事息災に九十七を生きのび、あまた、國の盛衰興亡の跡を見とどけてまゐりましたに、またしても、國の干支のはじめ、その目出たさにかてて加へて、尊き帝のまつり事、賢相は位に在つて、四民は安樂、年年の豐作つづきぢや。今年康熙の二十三年、その故でか十二の祥瑞を目のあたりに見申した。

（幕裏に聲あり）

聲　それはもおし、どんな祥瑞でござりました。

老司祭　（指をまげて）されば、さ。黄河から龍圖が出る。洛水から龜書が出る。景星あきらかに、慶雲あらはれ、甘露はくだり、膏雨は落ちる。鳳凰あつまり、麒麟は飛び、それにそれ、堯の時、階前にひらいたとか傳へられる蓂莢（めいけふ）はひらき、靈芝（れいし）は生じ、海に浪なく、黄河の水まで、澄みました。

いや何といふ、目出たごと揃ひ、ぢやによつて、わたくし、かやうな御代のうれしさに、ただもう、あちこちと、遊びほほけてゐましたぢやが、きのふのことにござりまする。大平園に觀ました新狂言、外題を桃花扇と申す一すぢは、明の末つ頃、ついこの程の、南京の出來事でござりまするが、色戀の、なさけの筋合ひに、國、盛衰の歎きをとり入れて、事柄、人物、皆よりどころあつての、實ごとにござりました。そればかりか、この老ほれの耳で聞き、現にこの目で見たことばかり。それにうれしい次第は、わたくし奴（め）のよほくれ姿を舞臺にさらし、その劇中の一役として、一度は泣き、一度はわらひ、又おこり、わめく格好。

されば滿座のお客様方。かやうにまかり出でたるこやつ奴も、芝居のなかの一役（やく）とは、でも何とお氣づきなされてでは、ありますまいがな。

聲　（幕裏にて問ふ）もしもし、その戲曲は、誰の作にてござりまするな。

老司祭　どなた様にも御存知ないか。元來、作者と云ふものは、名はハツキリと出さぬもの。ただ、作中に褒貶の筋あつて、かの春秋の筆法に據り、また韻律を正したのは、詩經の旨に由つて、聊か教訓のおもむきをば

とり入れたのでござります。

聾　（幕裏にて問ふ）さう云ふ作者は、てつきり、云亭山人にございませうがな。

老司祭　あたりました。そのとほりにござります。

聾　何とけふは紳士方のお集りなり、この一曲を演けて見たい。お前は幸ひ昔育ち、それに新曲も聞いた筈ぢやで、その傳奇の荒すぢを、先づ一とほり御披露なされ。皆皆様、よつくおきき下され。

老司祭　張道士の、滿庭芳の一ふし。これなと歌つてお聞かせいたしませう。

侯公子

金陵のかりずまひ

南の國の美人に馴れ染め

せかれ、さかれて

本意ないわかれ

園はかりごも

江淮あたりのみだれ雲

鈍なみかどをおし立てて

舞へや、歌へ

ほんに、禍は奸臣から

切れた糸では是非もなや
うてなの上のすさまじさ
ひとやのつらさ
ようぞ、柳、蘇のぢいよ、わしをば
助け出しては下された
さても夜なかにみかどは落ち
宰相はしる
波間に沈む忠義のたましひは果敢なや
祭の庭に桃花の扇、土にまみれて
まよひの夢は、醒めてうららか

聲　（幕裏にて問ふ）妙、妙。だが歌ひ上手にひき込まれて、筋がピンと腹に來ぬわな。もつと短かくつめて唄つておくれ。

老司祭　では、

賊臣、馬・阮身をほろぼし
智者の柳・蘇人は人知れず、嫌曳の糸をあやつる
侯公子、比翼のつばさをさかれ
張道士、人たるの彼岸を示す　　　　「詩」

おや、まだうたひ切らぬうちに、早くも、侯公子の御登場だ。皆皆様、御ゆるり見物なされませ。

第一幕　講釋を聽く場

登場人物

侯　朝　宗　（主人公。復社の文士）
陳　貞　慧　（同じく　復社の文士）
吳　應　箕　（同じく　復社の文士）
柳　敬　亭　（講　　釋　　師）

侯朝宗　（儒者の服裝にて登場。歌ふ）

孫楚樓のあたり
莫愁湖のほとり
幾かぶのやなぎ
影をゑがき
風情たをやか

桃花扇

たそがれに酒を賣つて
人にゆめ見さす
美しの人
南朝のつくり
花にあそぶ燕鶯
國の大事にかかはりなし

院中ひつそり
勝手はさむざむ
ねぶたや
京の花ながめて
人は年寄る
朝の雨、城をこめ
木木は枯れ
潮ざゐよせる江のほとり

殿の礎はこはる
おもひでにいたみ
今様をうたふ
旅のかなしみ
ふる里の夢
胸はみだれて糸にし似る
水けむる村ほとり
ことしはどこに泊るわたしぞ

私こと、姓は侯、名は方域と申し、字は朝宗、中州歸德の者、代代、河南の名流だ。祖父は太常、父は司徒の職に就かれた。わたしは、東林の學黨にくみし、詩を江南に、文を都門に擧げて、今また、復社の學友に成つてゐる。弱冠にして、斑固、宋玉の名を汚し、中年の今は、韓愈、蘇軾に劣らぬ文章をつくる。耀華宮の隣りにすまひすれば、かの孝王の例にならつて、文士らのつどひあつまるに都合よく、花の名所、洛陽にも遠からぬことなれば、花栽培の苦勞に、あたら春をば無駄使ひにする必要もない。去年、壬午の歳、南都、禮部の試験に落ちて以來、この莫愁湖邊にかりずまひしてゐるが、戰火、いまだ收まらぬによつて、家にさへ、たよりが出來ぬ始末だ。おお、まう春も半ばだな。草は綠に、生生と、故鄕へかへる友づれも見つ

け出さぬうちに、あの兵亂だつた。たうとう、ひとり避難の身になつて了つた。（嘆く）

莫愁、莫愁、その名のやうにわたしをしてくれる工夫はないかしら。さうだ、社友の陳定生、吳次尾の二人が、蔡益所書坊に身を寄せてゐるが、日頃たづね合つて、このつれづれをなぐさめてゐる。けふも冶城道院に、梅見の約束をして置いた。ではいそいで行かう。

　風あたたかに水けぶる
花かげにひらくうたげを
笛吹きみだす
な行きそ、烏衣の巷
そのかみの人は見えずして
家のみよ、あらた　（退場）

陳貞慧（定生）　吳應箕（次尾）　（儒者の服裝で登場）

王氣、金陵におとろへ
つづみ、旌旗（はた）
いづくの空に走る
やがて北風の

江をわたつて吹きよせん

陳貞慧　わたしは宜興縣の陳貞慧。

吳應箕　わたしは貴池縣の吳應箕。

陳貞慧　（吳にたづねて）次尾君は戰爭の模樣をお聞きですか。

吳應箕　きのふの京報では、賊兵がしきりに官軍をやぶつて、段段京にせまり、寧南侯左良玉は、歸つて襄陽に陣されたさうだ。國には今人物がない。もう萬事は窮した。まあ、今のうちに少しでも春を娛んで置きませうよ。「合唱」

ぬしはなくとも

春はくる

雨、風に

梨の花の朝げはひ、あたら

（侯、登場）

侯朝宗　（相見て）やあ、矢張りおふたりともおいででしたな。

吳應箕　お約束に從ひ。

陳貞慧　わたしは、人に云ひつけて、寺の掃除をさせ、酒も用意させて置きました。

（しもべいそがしさうに、登場）

僕　少しひやつきますので、冷酒はいけませんな。花盛り故、莫迦な人出です。旦那様、ですがおそうございました。おかへりになつた方が上分別でございますよ。

陳貞慧　何、遲い。

僕　えい、それそれ、魏府の若様が御招待で、梅見の宴を催されましてな。さすがの大寺も御客で一杯にござります。

侯朝宗　それなら、こちらは秦淮の水樓へ參つて、物云ふ花を見るのも、又一興ではなからうか。

吳應箕　さう、だが、少し遠すぎはしませんか。それより、御存知でせう、君は。かつて吳橋の范大司馬、桐城の何老相國にまで褒められた、泰州の柳敬亭。あの人は實に講釋の名人ですが、聞けば、何でもこの邊に住んでゐると云ふ話です。どうです、これから、うさはらしにかれの講釋でもききに行つては。

陳貞慧　それもいいでせう。

侯朝宗　（怒つて）　柳の、あのあばた面奴は、魏忠賢の乾分、阮の鬚やつこの居候になりをつたとやら、そんな奴の講釋は聞かなくていい。

吳應箕　ああ、まだ貴郎は御存知ないのですな。阮めはやつと罪を免じてもらつた身分なのに、隱居もせず、しやあしやあと出しやばり居つて、歌うたひを大勢あつめ、華族仲間にとり入る不埒加減。そこで私は「留都

亂を防ぐの檄一といふのをつくつて、かれの罪をあばき立ててやりました。で、やつと、阮が崔魏一派のしれ者だと知つた門下生らは、その曲の濟まぬうちに、ぷんぷんして、退散しました。柳もそのうちの一人ですよ。どうです、えらいぢやありませんか。

侯朝宗 （おどろいて）あいつらの中にも、そんな頼母しい男がゐますかね。では行つて見ませう。

（三人一緒に、出かける）

をちこちに聞く笙の音

仙洞のうち

世の姿を見まもる

雙の眼

僕 もうここが柳敬亭のすまひでございます。呼んで見ませうか。（呼ぶ）柳麻子どの、おうちですか。

陳貞慧 （叱る） これつ。柳子は世にきこえた方だ。柳旦那様とお呼び申せ。

僕 （又叫ぶ） 柳旦那様、御門をおあけ下さい。

柳敬亭 （小さい帽子、廣袖の禮服、白鬚にて登場）

門とぢ

苔むす

みやび男の
訪れ

（一同を見て）これはこれは、陳、吳、御二方で。御出迎へもしませず、失禮、平に御容赦。（侯に）この方はどなたで。

陳貞慧　これはわたしの友人、河南の侯朝宗氏。當代での名士です。かねがね、お話をうけたまはりたい希望で居りましたが、今日、わざわざ、同道いたしました。

柳敬亭　恐れ入りました。どうぞお坐り下さい。御茶でも差し上げませう。（一同坐す）どなた樣も、皆學者。史記、通鑑の講釋はお手のものだ、今更、おやぢふぜいの俗談をお聞きにとは、解しかねる次第ぢや。（指さす）御覧なさい。

荒れ庭のやれ垣の枯松
糸よりもほそい春雨に草はにほふ
六朝の
うつりかはりの寂しさよ
鼓板のみだるる音
涙まじりの講釋

子どもだましの、これもざれごと

侯朝宗　御遠慮は無用です。さあお話をききませう。

柳敬亭　折角のお出でだ、遠慮は申すまい。だがさ、いつものごぜの歌では、お氣に入りさうもない。仕方がない、皆様が御覽の論語の一章、あれについて、おきかせしませう。

侯朝宗　これは素的だ。しかしどう論語を。

柳敬亭　（笑つて）皆様がなさるのに、この老人に出來ないこともありますまい。まあ、けふは、兎に角に論語をやつて見ませう。

（席に就いて、鼓板を叩きながら、講釋口調になる）

我に問ふ、何事ぞ碧山に棲むと。笑つて答へず。心自ら閑なり。桃花流水杳然として去る。別に天地の人間にあらざるあり。

（たたき板でうつて說き出す）

さて皆様のおききに入れる、けふの講釋は、餘の儀ぢやござらぬ。論語の一節、太師摯が齊にまゐるの一章ぢや。この一章は、魯の大夫、孟、叔、孫が三家、僭上の罪科を述べ、孔聖人が、音樂をただすのいさをしをたたへ申す一條ぢや。折り柄、周の朝廷は東に遷り、魯の國の勢も寂びれ出した事ぢや。それぢやによつて三家は、諸侯の格式にならひ、食膳を退くに雍の樂を使ふし、季氏は季氏で、天子に眞似て、八佾の舞

を庭に舞はすと云ふ有様、下剋上といふも淺間しい世の中ぢや。そこへ、我が孔聖人が、衞の國から魯の國にかへられた。孔聖人の力や大したものぢや。音樂が、ぴたりともとの格にかへつた事ぢや。伶人どもは身を恥ぢて、おのおのに、皆、退散して了つた。一體、孔子樣は、どれ程のお骨折をされたことぞ。それがどうぢや。わが孔子樣は、ただ一本の筆を把つて、目に幾本の書を看、さて易經をあつめては、上は天時を律し、下は水土ををさめ、書經を修めては堯舜を祖述し、文武を憲章されたのぢや。禮記をただせば、父子親あり、君臣義あり、長幼序あり、朋友信あり、夫婦別あり。春秋をつくられれば、亂臣賊子は怖ぢ恐れて、身の置きどころに窮したとある。詩經を刪られたおかげで、雅も頌もスッカリ格に合ひました。別に苦勞もなされずに、三家の者たちの亂れがましい劇場を、一寸の間に屛息させ、即座にしやんとされたのぢや。痛快至極と申さうか。それにしても、聖人のなさりやうは、素的か、つまらぬか、神妙か神妙でないか。

（たたき板を叩いてうたふ）

むかしから聖人のやり口のうまさは
風を呼んで、雨を呼び
豆を撒いて兵とする
一むれの亂臣の禮なくして
歌舞を教ふるを見ては

ほんの少しの方法で
朝めし前に片づけて仕舞ふ
奸臣共の子分を退治
皆、天晴の男にかへた
（たたき板で叩いて）
あの太師、名は摯といふ者が眞先に齊に行つた。何故かれが齊に行つたぞ。わしの云ふをば聽き給へ。
頭分たる太師の云ふに
ああわれ何のためにかいかはつて
三家景陽の鐘を撞かうよ
さきには目なく
いたづらに
泥の底に交つてゐた
今こそ淸らに、大股に
東北は、敬仲老先生の仲間に入り
わしの名をあらはさう

屹度孔子をよろこばし
三月肉の味をわすれしめ
景公樣に泪こぼさせ
きき惚れさせよう
あの賊共が
たとへ豹の肝
くまのゐを食はうと
姜太公の家に押しかけ
この樂師をとらへ得ようぞ
（たたき板で叩いて說く）
二度目の飯の樂師干は楚に行つた。三度目の飯の樂師繚は蔡に行つた。四度目の飯の樂師缺は秦に行つた。
この三人がどういふわけで去つたのやら、まあ聽き給へ。
（鼓板をたたいてうたふ）
この一組の樂師ども
かれらの長を見ぬ故に

ひとり、びとりに
ゆく手をえらぶ
二度目の樂師の言ひ分は
亂臣、堂上に碗をとる時
われらは侍して樂を奏した
しかし頭(かしら)は齊にゆかれた
そのあと、追うてどうなろ
わしは亦、熊繹大王の膝下に投じて
その威權によらう
三度目の樂師の言ひ分は
河南の國は小さいが
これもと中原、都に近い
四度目の樂師の言ふのには
遠く西秦を見るに
天子の氣有り

あのつはものたちが幕の内に
高らかにこそ箏をならそ
皆一せいに言ふことに
汝、亂臣、日毎夜毎に
權高ぶつてわれらを追ひつかうたが
けふよりのちぞ
われらがとほい樂の音にも
頭なやまさうず

（たたき板でたたき、たたき）

鼓打ちの方叔といふ者、これは黃河に入つた。でんでん太鼓打の武といふ者、これは漢水に入つた。樂師の摯は、磬手の襄は、海に入つた。これは變つてぢや。が聽き給へ。

この磬打ち、鼓打ち、三、四のものの言ふことに
君らがこんな舞臺をきらつて
どこに行かうとそれは勝手さ
だが君ら、この畜生の家をきらつて

どこに新しい主を捜しに出ようと
ただ下づみのはかなさは
もとのなりはひ、そのままぞ
いつそ小舟にさをさして
君よ、かの桃源の里に行かうよ
これこそ何のくさりもつかぬ
江湖、滿地
すなどりの友

（叩き板で打つて説く）

この四人の者の生き方こそ妙、妙、そのかれが何と云つたか、おききあれ。

（鼓板をたたいてうたふ）

その人人が言ふことに
十丈の珊瑚は日にうつつて
さてもくれなゐ
水晶宮はめづら玉

糊つきの帳をかぞへよう

（皆、わらふ）

この笑罵

風流放逸

拍子木、一聲

溫にして厲、

鼓板三つ

慨にして慷

（柳歌ふ）

また重ねて來たまへ

桃の花のしるし、迷へるとき

漁夫、われにきかれよ

侯朝宗　（柳に向つて）あのときに、阮の邸を出た人は幾人ですか。

柳敬亭　皆な散り散りになつて仕舞ひました。だが、歌の上手な蘇崑生だけが、この近所に居ります。

侯朝宗　またおたづねします。おきかせ下さい。

柳敬亭　むろん、わたしとても。

柳　歌ごゑやめば、早や日ぐれ。
陳　院の向ふに殘る花の香。
吳　無數の樓臺、無數の草。
侯　清談覇業、ふたつながら茫茫。　　「詩」

第二幕　歌稽古の場

登場人物

李貞麗（老妓）
楊文聰（貞麗の顔馴染）
香君（貞麗の娘）
蘇崑生（香君の歌の師匠）
禿

李貞麗　（厚化粧で登場。歌ふ）

眉深うけはひして
青樓はひらき
長板橋の糸やなぎ
糸にひかれて駒すすむ

琴の音じめのしまりよう
笙の袋の見事さよ
　梨の花は雪に似て　草こまやかに煙り
　春は訪ふ秦淮の岸　水に連る青樓の
　灯かげに踊る　だをやめの群　「詩」

あたくしこと、姓は李、字は貞麗、一番の流行つ妓。舊券のうちにそだち、長板橋のほとりに、幾春の夢を結んでゐます者。のこんの色香、風情もまだ棄てがたしとやら、養女が一人ございまするが、ものごし格好、それはそれはしとやかに、器量好し、いつも、立派な席によばれながら、まだ、男を知らぬ、生娘めにございます。さて、ここに休職の知事さま、楊龍友と申し上げ、あの鳳陽の督撫、馬士英様のお妹婿、もと光祿卿の阮太鋮様の兄弟分にあたられる方が、始終、この里であの子を御最屓、どなたかよい御客を見つけて、身受けしてとらさうとの仰せ、幸ひけふの花日和、御いでのこととお待ちしてをります。（呼ぶ）かむろや。簾を捲き、よく御掃除をして、御客様のおむかへをおし。

禿　（内より答へて）あい、あい。

楊文驄……　（登場）

　　繪にもかきたい三峯の姿

六朝の風流の品さだめ　「詩」

わしは楊文聰、字は龍友、擧人出の縣令、今は休職で閑散な身だ。この秦淮の名妓、李貞麗は、わしの古馴染。この花日和にかれを訪ひ、世間話でもいたさう。おおもうここだ。どれあがらう。（あがる）貞麗ゐるか（貞麗を見て）ほ、いいな。御覽、貞麗、もう梅が散つて柳が青青としてゐる。のどかな景色だな。さあ、眠氣ざましに何かして遊はう。

李貞麗　ほんにね。まあ二階へおあがりになつて、香を焚いたり、お茶でも召し上りながら詩篇でも御覽遊はせな。

楊文聰　それは素的だ。（二階へあがる）

簾紋は架鳥を籠め
花かげは盆魚をまもる　「詩」

（見まはして）娘の化粧部屋ではないか。あいつはどこへ行つた。

李貞麗　朝じまひが出來ないので、まだ床にゐますよ。

楊文聰　あれを呼んでおいで。

李貞麗　（聲高に）娘や早く御いで、楊の旦那様がおいでですよ。

楊文聰　（楊、壁の詩を見て）おい、大分、名士連の詩があるな。なかなかこんなのは手に入らんものだよ（うし

ろ手に、詩を吟じてゐる）

香君　（綺麗に着かざつて登場）

紅閨の夢をぬけ出て
口紅はいて
結びがみ
春のうれひは寂しいものよ
わすれかねるは
今の稽古の歌の文句

（楊を見て）旦那様、これはしばらく。

楊文驄　しばらく見ないうちに、お前は莫迦に綺麗になつたな。この詩のとほりぢや（又、詩を見てびつくり）オヤ、張天如、夏彜仲、こんなえらい方方のも贈られてゐるな。ではわしも、是非一つ和韻せにやならぬて。

（貞麗、筆と硯を持つてくる。楊、筆を持つて永い間吟ずる）

とても駄目だ。いつそ詩は止して、墨繪の蘭を、白壁にあしらはうか。

李貞麗　それは一段と、妙でございませう。

楊文驄　（壁を視て）　これはおどろいた。こりやあ、藍田叔の畫いた、こぶし大の石だ。ぢやあ、その隅に蘭を

ぬたくつて、つゝまにしよう。（描く）

　白壁にうつす詩人のすがた

　花も若葉も雨になやんで

　けむに酔ふ

　墨の香にほふ、石や、花や

　苔むす、岩が根

（遠くより眺めて）　こんなところか。

　元ぴとの瀟洒とした蘭の

　墨いろにくらべられようか

　名姫

　湘川が蘭の佩によし

李貞麗　何てお上手なんでせう。おかげでこの二階も、めつきりと引き立ちました。

楊文驄　いやはや、お笑草。（香君に向つて）　お前の號は何と云つたかね。それによつて落欵をしよう。

香君　まだ、號がございませんの。

李貞麗　幸ひ、けふは旦那さまに、號をつけていただかうよ。ねえ娘や。

楊文驄　（考へる）左傳にかうある。『蘭に國香あり、人之に服媚す。』香君はどうだ、お前。

李貞麗　まあ、いい號だこと。これ香君、よくお禮を申し上げなさい。

香君　有りがたう御座います。

楊文驄　（笑ひながら）樓名もつけたよ、（落欵する）

崇禎癸未仲春。偶寫二墨蘭於媚香樓一。博二香君一笑。

貴筑　楊文驄。

李貞麗　畫と申し、書と申し、申分のない出來ばえ、有りがたうございます。（皆、座る）

楊文驄　香君は中國一の美人だが、藝はどうかな。

李貞麗　いえもう、すつかりと甘やかしすぎて、一向何の稽古もいたしません。ついこの間、お師匠さんについて、歌を教へて頂いて居ります。

楊文驄　そのお師匠さんと云ふのは誰かね。

李貞麗　蘇崑生とおつしやる方でございます。

楊文驄　蘇崑生か、あの男は本當の姓は、周と云つて河南の人で、無錫にかり住居してゐる。前からわしと懇意な仲で、素的もない名人だ。（問ふ）今、何を習つてゐるかね。

李貞麗　あの、それ、玉茗堂の四夢を。

楊文驄　どの位覺えたい。

李貞麗　丁度、牡丹亭を半分程。（香君に）ねえ、外の方とはちがふのだから、どうだらう、お前、本を出して、ここでお浚ひして見ては。お師匠さんのおさらひが濟んでから、さきを敎へていただけば、都合がいいよ。

香君　（眉をひそめて）でもお客樣の前で、おさらひなんかしては惡いわ。

李貞麗　馬鹿をおつしやい。どうせあたしたちは、こんな稼業だもの、おどりや、唄は米櫃さ。お前、唄のお稽古をしないでどうおしだえ。（唄の本をみる）

生れながらの浮稼業
花にうぐひす、春の鳥
こののど一つが、身すぎよすぎの
歌の稽古もおろかにや出來ぬ
そのふし廻しようおぼえ
紅牙の板をそと叩いて
梨園の春を色なうさせ
とめて見しよもの、公達の
公達の、おゝ馬がたづな

蘇崑生　（大黒頭巾をかぶり、袷のきつけで登場）

紅燈の巷に心おきなく
唄を教へる面白さ
權門をくぐりて
牡丹をほむるは心ぐるし　「詩」

わしは固始縣の蘇崑生といふ者だが、阮大鋮の屋敷を逃げ出し、今では、この紅燈の巷に隱退して、妓女どもを相手に、唄の稽古のその日ぐらし。だが、これとて、阮めの心ならぬたいこになるより、何ぼうしあはせかもしれやしない。（入つて楊を見る）楊氏、こりやしばらく。

楊文驄　いや、崑さん。素晴らしいお弟子が出來て結構。

李貞麗　お師匠さんのおいでですよ。香君や、御挨拶をおし。

（香君、挨拶する）

蘇崑生　いや何の――きのふの唄はもう覺えたかね。

香君　ええやつと。

蘇崑生　丁度楊氏もいられるし、對し向ひでお浚ひしませう。その方がいい。

李貞麗　是非、さう願ひませう。

（香君、蘇と向ひあつて唄ふ）

荒れ庭の花
色もとりどり
晴れた景色も
あだし夢

蘇崑生　いけない、いけない。「晴れ」で間を置いて、「あだし」で間を置いて、さ、やり直し。

晴れたけしきも
あだし夢
めでて、うかれて
そりや、どこのこと
軒端の雲や
かすみたなびく朝あけや
風にさざめく玉すだれ
夕ぐれとざす雨の糸

またいけない。「糸」は肝心のところだ。のどの中でうたふのだ。

（香君うたふ）

夕ぐれとざす雨の糸

けむる浪間の屋形船

錦の寝屋の姫君は

春のひかりをうとむげな

素的、素的、そのとほり。さあ先をうたつた。

山の青葉を赤く染め出す

ほととぎす花

ほのかにかげらふ藤の花

牡丹もよいが

春におくれて何の魁

そこが少しなまだな。もう一度。

牡丹もよいが

春におくれて何の魁

ほんにつばめのあの話しぶり

齒切れがようて、はつきりと
　　あれ、うぐひすのほがらかな
　　聲も惚れぼれ、玉をころがす
　いい出來、いい出來、これで一段あがつた。

楊文驄　（貞麗に）安心するがいい、いやもう、天下の名妓だ。（蘇に）それはさうと、きのふ、侯司徒の令息、侯朝宗に逢つたがね。金もあり、才人だ。しきりに尤物を搜してゐられたが、崑氏は御存知かね。

蘇崑生　あの人は、わたしの鄕里の名流です。實に才物で。

楊文驄　この緣談は逃がしてはならぬぞ。

　　春や春
　歌ものどかに馬をやる
　纏頭に錦
　さしつさされつ、さかづきや
　かはす枕の、夜のくぜつ
　嫁入車來るを待つ
　こんな公子が添臥なれば

ほんに歸へさぬ、はなさずと
一生迄の里ずまひ

李貞麗　そんな御方がお出でになつて、この娘と緣組して下されば、どんなにかしあはせでせうに。楊樣、をがみます。一肌ぬいで下さいませな。

楊文驄　いや、それは先刻御承知だ。

玉も何かは
手の中の娘
初うぐひすの
鳴きごゑも學んだ
誰も氣づかぬ
春のとびらの奥のぬし

李貞麗　こんなにいい春の日に、ぼんやり坐つてゐるなんて、野暮の骨頂ですわ。さあ、下で、一口召し上がれ。

楊文驄　よからう。（皆、一緒にゆく）

楊　みめよき人のいます、簾の前の畦の花。

貞　ものうき春の鳥の聲。

楊　べに絹につつむ櫻桃の實よ。

蘇　道ゆく公子の車に投げこも。

「詩」

第三幕　祭禮騷動の場

登場人物

阮大鋮（魏黨）
吳應箕（復社の文士）
老司祭
小官一、二
司業
國子監の生徒四人
其の他

（孔子祭典係の小官二人登場）

小官一　代代、祭の道具をつたへる、役柄、家柄。
小官二　ぢぢいの代から。

小官一　壇毎に番號があるだろ。
小官二　數をしらべるだろ、
小官一　朔日、十五日に門をひらき、御蠟をあげるに。
小官二　道の掃除ぢや。
小官一　膝まづいて、祭主のおいでを待たうぞ。
小官二　しくじるまいぞ。
小官二　何故、そんな不體裁なことを云ふんだい。
小官一　お前にうまく云へるなら、云つて見ろ。
小官二　四季に給料、戸部で頂戴。
小官一　金持な。
小官二　金殿玉樓に住んで。
小官一　女房、貰てか。
小官二　薪は買はでも、鋸一つで。
小官一　樹どろ棒。
小官二　年が年中、野菜なんかはふりむきもせず。

小官一　供物の肉を漬けて置く。

小官二　チエツ。大根め。お里が知れるわ。

（一緒に笑ひ出す）

わしらは南京國子監の祭典係り。半年しびれを切らし抜いて、やつとけふが、春の丁の日の祭だ。大常寺から、もう供御の品品が届いた。どれ、これから供へようか。（卓をならべる）

小官一　栗に棗、鬼蓮に菱、それからええとはしばみ。

小官二　牛に羊、猪に兎、鹿と。

小官一　魚や芹や、かぶらや、竹の子、そして韮か。

小官二　鹽に酒、香。木綿に蠟燭。

小官二　これで一つも不足はないが、氣をつけろ、氣をつけろ、祭官らにぬすみ食ひされて、あとでお小言を喰ふな。

（老いたる司祭、そつと登場）

老司祭　こら。お前たちさへひよんな眞似をしなければそれでよいのぢや。よけいなことを申すな。

小官一　（手を拱して挨拶する）小官に御容赦。私どもの氣づかつたは、いぢきたない方方のこと、あなたは君子何のぬすみ食ひなどなされませう。

老司祭　まあいい。もう夜もあけた。時刻だ。さあ、御蠟でもあげろ、あげろ。
小官二　はい、はい。
（冗談を云ひながら三人登場）
祭酒　（衣冠束帯で笏をとり、登場）
松柏は煙り
階段のあかしは燦らる
笙の音、歌の聲
酒、幣帛をささげ
肉、醴酒を奉り
にほひよき芹ども
早く供へよ
司業　（衣冠束帯、笏をとつて登場）
祭人の一人となつて
つつしんで南雍
孔子祭につらなる

祭酒　わしは南京、國子監の祭酒。

司業　わしは司業、けふは孔子廟の丁祭だ。いで、これから禮拜しよう。

（二人わかれて立つ）

吳應箕　（平服で登場）

杜太鼓の音高く
しらむ大空
聖壇にあゆみよる人人

國子監の生徒四人　（登場）

雲のごと
禮樂通曉のみ弟子三千
あつまつて
聖廟を拜す

阮大鋮　（鬚むしやに衣冠束帶して登場。うたふ）

羞に汗ばんだ顏をかくして
そつと祭場に混り込む

吳應箕　わしが吳應箕だ。楊維斗、劉伯宗、沈崑銅、沈眉生ら、復社の同人と一緒に、けふの祭につらなること
　になつた。

生徒四人　次尾さん。隨分お待ちしました。皆席順にならびませう。

阮大鋮　（顏をかくして）　俺は阮大鋮だ。丁度幸ひ南京に居るために、この盛典を觀ることが出來た。（列前に立つ）

　（老いたる司祭、出て令をかける）

老司祭　列をつくれ。整頓。腰をかがめ、地に拜せ。起て。（皆、令のままに四拜する）

　　雲を摩す天井に
　　宸筆、金字の額を見る
　　孔子のみすがた
　　四賢の座
　　おごそかなる樂のうちに
　　朱のきざはしに平伏して
　　皆、禮拜す
　　詩書を讀んでは
　　昔の大學に愧ぢず

夫子が洋洋たる靈顯を畏る

老司祭　（拜し終つて立ち）　幣帛を焚け。禮拜終り。（皆、互ひに禮をかはす）

祭酒、司業、（歌ふ）

北面して肩を並べ

共に祭る

春丁の祭典

環のひびき

行列はめぐる

呉、その他

籩を司り

豆をささげる魯の學徒

悉くこれ廟堂の人

阮

南京の非職

いともあることをよろこび

野にあつて
志士がうれひをなげく
（祭酒、司業、退場。阮大鋮手を拱して挨拶する）

吳應箕　（阮を見て驚いて問ふ）　お前は阮鬍子ぢやないか。どうして又、この祭場へ來居つた。先師に失禮、斯文を汚すやつめ。（叱りつけて）　トツトと出てゆけ。
阮大鋮　（立腹して）　俺は堂堂たる進士だ。立派な名家だ。何故、祭場へ這入つてはならん。
吳應箕　貴樣の罪惡は世間周知の事實だぞ。恥知らずの人でなしめ、何だつて廟へなぞやつて來た。この間の兵亂の檄文で、貴樣の罪をあばいてやつたではないか。
阮大鋮　俺は、俺の赤心を知らすために、わざとここへやつて來たのだ。
吳應箕　おお、貴樣の本心は、わしが貴樣にかはつていひきかせてやらう。（歌ふ）
　魏の子分
　客の犬
　どちらにしても小悴め
　崔、田に氣脈を通じ
　崔、田に腹を合はし

兄弟のちぎりを結び
糞をあらそひ嘗め
癰をともに吸ふ
東林のうちに飛箭を放ち
宦者の獄に糸をひく
事理明白
何ぞ世人の目をおほひ得よう

「合　唱」

あらをかし
氷山消えうせ
鐵の柱がねじかへる

阮大鋮　君たちは、俺の苦衷を知らないで、勝手な雑言を浴びせられる。だがこの阮はな、もともと、趙忠毅先生の門下なのだ。魏黨横暴のみぎりには、俺は親の喪に服してゐた。その俺が、どうしてただの一人にも危害を加へようぞ。何故、諸君俺を攻めなさる。

飛霜、黑盆の狂言にも勝るむじつの罪

一つ一つに、尾ひれがついて
あとかたもない根なしごと
かくてぞ、まごころを知る
かくてぞ、まごころを知る
周、魏を救ひ、東林の志士
救はむためには、身を棄てしわれぞ

前輩の康對山は、李空同を救ふために、一度は劉瑾の門に這入つた。わたしが前日、節を屈したのも、ただもう東林の諸氏のためでした。それにかへつて、諸君がわたしを責めなさるとは言語道斷。

春燈謎の劇
誰か見る人ぞ
十錯認の狂言
いひとく人もない
よつてたかつて俺をせめる
（指さして）
人のこころを知らぬ若う人

をかしくののしる

吳應箕　こいつが、よくもののしつたな。

衆皆　こんなやつが、聖廟の中で、公然と人をののしるとはあべこべだ。

老司祭　（叫ぶ）あべこべだ、あべこべだ。この司祭に、初手にこいつをなぐらして下さい。（打つ）

吳應箕　そいつの口を打て、手をむしれ。

（皆、ひげをむしつてののしる）

ここな犬奴

ここな犬奴

何でう、許さう

汝がごとき、聖廟を拜するを

汚らはしや、人でなし

學堂をけがし

參列のわしらをけがす

鼓を鳴らし

こやつめの罪をあばき、遠ざけ

おなじ日の下に住まず
　豺虎の餌食にあたへ
　豚どもと交らせろ

阮大鋮　よくも打つたな。（老司祭を指して）貴様、俺を打つたな。

老司祭　この老司祭なりやこそ、孔聖人のお言葉どほり、附和雷同と知りつつ、和するものを打つたのだ。

阮大鋮　（鬚を見て）鬚もみな落ちて了つた。誰に合せる顔があらう。腹が立つ、ああ、腹が立つ。おのれ。（いきなり走り出す）

　　多ぜいに無勢
　　拳骨（げんこ）の雨
　　ひぢは折れ、腰もくじけた
　　腰もくじけた
　　急いでのがれる
　　まごまごしないで

「呉以下合唱」
　　正邪の分ち

奸賢の差別
逆黨のさばき
鐵のごとし
逆黨のさばき
鐵のごとし

空をゆるがす
以前の勢ひ
けふの逃げ腰
笑止笑止
儒冠はひしやぐ
家にかへつて
筆硯を燒き棄てよう

吳應箕 けふこの有樣は、東林のために會稽の恥をすすぎ、南京國子監のために光を放つたものだ。何と愉快な出來事だ。これから皆、一さうに努力して、こやつ等の小芝居をゆるすな。

衆皆　さうとも、左樣、左樣。

衆　堂堂の義擧、聖門の前。

吳　黑白の裁判は、よろしく機先を制すべし。

衆　とは云へ、勝負は時の運。

吳　人事は最善をつくしても、亂れるときはただ天運。

「詩」

第四幕

劇場偵察の場

登場人物

阮大鋮（魏黨）
楊文驄（貞麗の顏馴染）
召使

阮大鋮 （物案じ顏に登場。歌ふ）
前半世は夢うたかた
昔の友もはや散りぢり
落ちぶれて、鬢も胡麻鹽
悶悶として歌ふにものうい
世間のやつには恥をかかされ
この身一つの置き場所もなし

俺は阮大鋮、別に號して圓海ともいふ。詞章の才子、科第の名家だ。かの顏延之と同じ光祿の職にあれば詩も亦かれと比肩された。かつ同姓阮籍のごとく、俺も等しく酒豪を以て聞えてゐた。胸三寸に謀りごとをめぐらし、中原を指揮し、作文の聲名は、京洛を壓して高かつたものだ。しかるに何事ぞ、その俺が一身の利慾に迷ひ、權門に膝を折つて、時たまたま、客、魏の手にすがつて、その犬になつて仕舞つた。ほんにきのふは勢ひ猛に焔を飛ばせ、權威、あたりを拂つて、得意の境にをつた。けふはいきほひ、西山に落ちて、おち葉林に惡禽の名殘を止どめてゐる。四面楚歌、惡罵の的となつた、今のあはれさ。つくづく思へば、この俺も、また萬卷を讀破した男だ。どうして忠佞、賢奸の別をわきまへぬ道理があらう。癡呆でもない、邪病でもない。ただ一時の心のまよひから、たうとう魏黨の一人になつて仕舞つたのだ。（足ずりする）思ひかへせば、愧と悔に、この胸が張りさけるわい。止さう、止さう。流石は都だ。都の寛大さは何人も住まはせる。俺は新に褲子襠の町に、大きな邸を買ひ、巧緻な庭もしつらへて、歌舞を教授してゐる。紳士たちの、來てつき合つてくれるものがあれば、入用もいとはずに、歡迎いたさうし、または、君子の俺をあはれに考へてくれるならば、また優曇華の花咲く時期も來ようと云ふもの。（聲をひそめて）若し天道のかへることを好まば灰にも又燃えるときが來よう。いやいや、この阮鬍子、名譽もどぶに棄てて去らう。いつそのことに、思をば仇でかへさうか。やつ、こんなことはこの場かぎり。さて、だがきのふ、聖廟で、復社の青年にひどいはづかしめを受けた。かれらの粗忽とは云ひ條、飛んだ目に會つたな。しかしあいつら輕薄な少年に近づ

く手だてはないかしら。（首を掻いて考へ込む）

風流才子
皆、青雲の志を抱く
黨を結んで
たけだけし
さわぎ、わめいて
ひげをむしり
腕を折る
骨に達するこのうらみ
晴らすすべもなく
宅にこもつてしよげこむ

（名刺を持つて出る）

都離れして、訪ふ人とてなく
門の戸遠く、鳥の聲す　「詩」

召使　もうし旦那樣、お客樣が參られて、お芝居を借してくれとの事でございます。

阮大鋮（名刺を見て）御存知の陳貞慧とな。（驚いて）アッ、これは宜興縣の陳定生氏だ。評判の偉い公子だ。その公子が、この俺に芝居を借せとは、はてな。（召使に問ふ）そのお客様が、どうおつしやつたな。

召使　そのお客様のおつしやるには、ほかにも、方密之、冒辟疆なる御二方が見えて、鷄鳴埭の宴席で、貴郎様の新曲、燕子箋を見物いたしたいとのことで、借りにおいでの由にございます。

阮大鋮（召使にいひつけて）これこれ、急いで二階へ行つて、上等の道具一組をとり出して、仲間の人に吩咐けて、髪をゆひ、顔を洗つて、早く箱について行かせろ。お前は又名刺を持參して、あの連中と一緒に參つて、よく心をつけてやれ。（召使かしこまつて退場）

（小者、箱を持ち、役者連、場をめぐつて退場）

（召使を呼び）チヨツと、チヨツと。（小聲で）お前な、あの席へ行つて、あいつらが芝居見の節に、何といふか聽いて、直ぐ知らしてくれ。

召使　承知いたしました。（退場）

阮大鋮（笑つて）ハツハ、あいつがこの俺を知つてようとは意外だつた。こりやおもしろい。まあ書齋で返事でもまたう。（退場）

（楊文驄、平服で登場）

楊文驄　　　周郎の扇底に新曲を聽き

米老の船中に舊友をたづねる　「詩一

わしは楊文驄、圓海とは極く親しい文筆友達。かれの詞曲、わしの書畫、ともに今の世の寶ぢや。幸ひけふは用もない。かれの新曲、燕子箋を聽きにやつて來た。どれ、行かう。（歩きだす）おお、これが石巢園だな。山石花木、一つとして風流ならぬはない。屹度、これは華亭の張南垣の工夫だらう。

花林はまばらに
石は苔むす
倪、黄の畫景

（仰ぎ見て、讀む）『詠懷堂、孟津の王鐸書す』か。（ほめる）いい筆だ。（下を看て）赤毛氈が布いてあるぞ。芝居を見る場所か。（うたふ）

杜甫草堂の圖裏に
黑頭巾そびえ
調べによし
銀の箏、紅の板

（指して）あの花の、澤山咲いたところに、（歌ふ）

何故しめやかに門をばとざした

新詞をあらため
　舊稿を刪るためにか

（立って聽く）どうやら詩を吟ずる聲だ。圓海君があすこで書を讀んでゐられるな。（呼びかける）圓海君、一憩みしてはどうです。生命あつての物種といふから。

阮大鋮　（出でて大聲に笑ふ）これはこれは誰かと思へば、君は龍友君ぢやないか。まあ坐り給へ、坐り給へ。

楊文驄　（座って）こんないい日和に、どうして家に居るんだ。

阮大鋮　ただ傳奇物を四いろ程、今度出すについて、誤字の校正をしてゐるところさ。

楊文驄　成程。聞けばもう燕子箋は舞臺にかかつたさうだ。それでわざわざやつて來たのだが。

阮大鋮　あいにく、けふは皆出はらつてゐるが。

楊文驄　又どこへね。

阮大鋮　公子連が借りに來てね。

楊文驄　ぢやあ仕方がないから、書抜きで見せてくれ給へ。それを酒の肴にしよう。

阮大鋮　（呼ぶ）おい誰かゐないか。酒の支度だ。楊さんと飲るんだ。

聲　（内より）承知いたしました。（雜仕共、出て來て酒の支度をする。楊、阮、飲みながら書を見る）

　新曲はこまやかにうつす

金玉の文字
花の乙女の戀の夢
またひき出す
風流の春のたはぶれ
讀んで、ここにいたれば
わしのおもひはいまひとしほ
まだこの「燕子」は春をふくむに
やなぎ、花白くつけて
人のみの老ゆるよ

阮大鋮　いや愚曲で、お笑ひ下さい。（酒をすすめて）まあそれより一杯。（共に飮む）

（召使急ぎ登場）

召使　出まかせの評を聞いて、御主人にお知らせしよう。もし旦那樣。わたくし鷄鳴埭にまゐり、酒もりいたすこと十たび、芝居三幕の濟むのを待ちかねて、急いでお知らせに歸りました。

阮大鋮　公子たちの評判はどうだつた。

召使　公子樣方は、あなたの新曲を見て、大喝采でした。

うなづいて聞き
調子、とり、とり
ほめちぎり
酒もりやめて
大喝采

阮大鋮　（喜んで）妙、妙。あいつらにも目はあるて。（また問ふ）何とか云つてゐたか。

召使　「眞の才子、筆凡ならず」とかおつしやいました。

阮大鋮　（おどろく）おやおや、そんなに感服するなんて、これは珍らしい。
外に、何か云つてたかね。
（召使、うたふ）

そのうまさ
天仙の吏
地上に謫せられた者、それか
文壇に長たらん君よ

（わざと恐れて）何と云ふ過褒だ。俺にはしかしそんな資格はないよ。さあ、もつと樣子が見たいが。

何と云ふかな。（召使に）もう一度行つて、樣子を見て、歸つて知らしてくれ。

（召使、急いで退場）

阮大鋮　（大笑して）全く意外だ。あの公子たちが俺の知己であらうとは。（酒をすすめて）さあ、もう一杯。

われこそよ

南朝の江山

風流の舊事をものす

花のうてな

雨の窓

燈しびの夜半

血を吐くおもひに、ひねもす

書きつづけた

知る人ぞ知れ、今や

楊文驄　時に、その曲を借りに來たのは誰だね。

阮大鋮　宜興の陳定生、桐城の方密之、如皐の冒辟疆、どれも皆、大學者だ。それが俺の曲に感心してくれたのだ。

楊文驄　かれらは滅多に人をほめないものだが、しかし、この燕子箋はたしかに名作だ。どこに非難のありやう

がないからね。

（召使、急いで登場）

召使　兎のやうに早く、鳥のやうに飛んでくる。旦那様へ、わたくし鷄鳴埭へまゐつて、芝居は半分程、酒もりが早やしまひになりかかるのを見て、急いでおしらせに歸りました。

阮大鋮　公子たちは何と云つてゐた。

召使　かう申してをられました。旦那様。

これこそよ
南國の秀
東林の彦
翰林の班

阮大鋮　（わざとおどろくふりをして）一句、一句、俺をほめてゐる。全く恐縮だ。（問ふ）その外に何とか云つてたかね。

召使　かう申してをりました。（うたふ）

何故に
崔、魏に投じ

自ら、そこなふ

阮大鋮　（眉に皺を寄せて、卓を叩いてなやむ）馬、馬鹿なこと、しかしどうともあれ。（問ふ）まだ何か云つてゐたか。

召使　いろいろ申しました。だが申し上げますまい。

阮大鋮　いいさ、遠慮せずに云へ。

召使　方方の申されるには、旦那様。（うたふ）

親分とよび

乾分といふ

はづかしい話だ

また人のいきほひに乗る

犬と一般

阮大鋮　（怒つて）無禮至極な。そんなことを云ひ居つたか。おのれ。

曲を見るなら

曲にのみよれ

花見の酒に興を添へよう

新曲一篇
ただにほめよ、わがこころ
掬みてもとらで
ひたにけなす
奇怪至極

楊文驄　何故、そんなに君を悪く云ふのだ。

阮大鋮　俺にもわからん。この間も、つつしんで聖廟に參り、五人の學生共に、無念の目に會つた。けふは又、氣持よくこの新曲を貸してやつて、三人の公子らに、存分にののしられた。これからは、何か方法を講じなくては、一歩も家から出るわけに行かんて。（愁ふる）

楊文驄　さう心配を爲給ふな。いい思ひつきがある。しかしそれに君が贊成するかしら。

阮大鋮　（よろこんで）そりや有りがたい。何で君にそむきませう。

楊文驄　御承知のとほりに、吳次尾は學生の領袖で、陳定生は公子連の先達だ。この二人さへ沈默すれば、あとの雜兵共は甲を解かうではないか。

阮大鋮　（卓を打つて）さうとも。（問ふ）しかし、だれが斡旋してくれるのかい。

楊文驄　外でもない。河南の侯朝宗さ。酒に文に、極く二人と仲がいいから、あの人に賴めば、九分どほり大丈

夫さ。きのふ聞けば、かれ無聊のあまり、秦淮の美人を手に入れたがつてゐると云ふ話だ。そこで僕は、あれのために一人の美人を搜し出してやつた。香君と云つて、藝の達者な美人だが、そこさ。君が侯のために身受けの金を出してやつて、懇意の間柄になり、その後にかれにたのんで、二人を云ひなだめてもらふのだ。一擧兩得と云ふものさ。

阮大鋮　(手を拍つて笑ひ)　妙、妙。こいつは良分別だ。(思ひ出して)　あの朝宗の父と云ふのは、俺と同年度の進士だ。その位のことならしてやつてもいい。(問ふ)　だがどの位でいいかね。

楊文驄　嫁入道具と宴席の費用で、さうさ、二百金あまりも出したら無論いいだらう。

阮大鋮　御安い御用だ。すぐ三百金を君の家におくりとどけよう。いいやうにつかつてくれ。

楊文驄　なるべく、安くあがるやうにしよう。

楊　白門の花柳、よづるはたれぞ。

阮　酒と歌とにけふも日ぐらし。

楊　これこそ、わが思ふ壺のをとめ。

阮　君のみこころ次第よ。　　　　「詩」

第五幕　秦淮に遊ぶ場

登場人物

侯朝宗（侯方域、復社の文士）
柳敬亭（講釋師）
楊文聽（貞麗の顏馴染、阮大鋮の親友）
蘇崑生（香君の歌の師匠）
李貞麗（秦淮の老妓）
香君（貞麗の娘、秦淮の名妓）

侯朝宗　（盛裝して登場。歌ふ）
六朝のなごり
消えやらぬ佳人
見わたすかぎり草けむらひ

寂しさ腸を斷つ
花をさそふ
　雨かぜのうれひよ

わたしは侯方域、さすらひの年を重ねて歸國の程もいつの日やら、この三月のきのふけふを、六朝の昔をしのぶ歌姫らが、住まふあたりに、かりのやどりの今の身だ。旅のうれひはもとより、戀ごころは又一段と辛い。きのふ楊文驄に逢つたところ、李香君は實に美人で、廓第一の名妓であるとか、默つて聞けば、いやもう自慢たらたら。けふもけふとて、蘇崑生が、かれに歌を教へてゐるところから、このわたしに身受けをしろとのすすめ、だが、落魄の今の身では、かなしや、それも出來ぬ。どれ、けふは清明の節、ひとりボンヤリかうしてゐられぬて。先づ、散步にでも出かけよう。それから舊院の靑樓に參つて、一あそびするのもおもしろからう。（行く）

見わたす廓
鳳城のひがし
柳のみどり一筋に
紫のたづな人を招く
飛びかふ燕

つがひはなれず

柳敬亭 （登場）

鶯はあかつきの夢を驚かし
春の愁をうごかす、白髪　「詩」

（呼ぶ）侯君、どこへ行かれますな。

侯朝宗 （ふりかへつて）これはこれは柳敬亭氏、よいところへ参られた。丁度散歩に出ようとする所だが、つれがなくて弱つてゐる所です。

柳敬亭　幸ひ、私も閑です。おともしませう。（ともに行く。指して）これが秦淮のながれです。

小波寄するかなた
窓の戸は綠に
碧窗に紅き杏
垣根をのぞく　「詩」

（指す）これが有名な長板橋です。まあ、ゆつくりと參りませう。

侯朝宗　帶長長と
長板の橋

見ゆるは何
青樓(ちやや)
遊興の船船

柳敬亭　オヤ、もうこゝが舊院です。

侯朝宗　閑かな巷よ
らうがはしげに
花賣りとほる

柳敬亭　（指して）この路の裏が、皆、これが有名な妓(をんな)たちのすまひです。

侯朝宗　成程、樣子がちがつてゐる。黑漆の門の上に、
挿した一枝
露にぬれて
しだれ柳

柳敬亭　（指す）この高い門が、李貞麗の家です。

侯朝宗　して、李香君の家は。

柳敬亭　李香君はつまり貞麗の娘なんです。

侯朝宗　成程ね。實は李香君に逢ひたかつたのだが、いい所へ來たものだ。
柳敬亭　では、案內を賴みませう。（門をたたく。內から開く）
內　どなたですか。
柳敬亭　いつも來る柳だが、お客さまのお伴をして來た。
內　御新造さんも、香姉さんも、皆樣、お留守ですが。
柳敬亭　どこへ行かれたな。
內　卞玉京さんの、盒子會へ。
柳敬亭　成程、うつかりしてゐた。けふはさうさう。
侯朝宗　何の會ですか。
柳敬亭　（腿を打つて）ああ、足がつかれた。しばらく、あの石段の上で、一休みして、ゆつくりと貴郎にお話しませう。（二人坐る）貴郎は御存知ないんですか。この廓內の妓たちは、そろひの手帕をしるしにして、兄弟分になることがあります。昔、神前に香を焚いて、義兄弟となつた、香火兄弟、まあ、あれとおなじ例でせう。それが日を選んで、會をするのです。
きぬの手拭
結ぶえにしの姉妹

よき日につどひ
花と競ふ

侯朝宗　左樣ですか。成程、けふは清明節の祝日だと云ふので、それらが會をするのですな。しかし何故それを盒子會といふのですか。

柳敬亭　盒子會といふのは、つまり重箱の宴ですな。その日は、てんでんに辨當持ち寄りで、しかも、それが皆御馳走づくめなので。
山海の珍味
涼しの飲み物

侯朝宗　その會では、どんな事をするのです。

柳敬亭　藝くらべをしまして、
琴やら
阮やら
笙簫の音
嘵嘵

侯朝宗　それは面白い。男も、そこへ入れてくれますか。

柳敬亭　（手を振つて）駄目、駄目。男たちのどかどか押しかけて來ない樣に、門をしめ切つて、家の外で聞かせるだけです。

侯朝宗　聞いて、氣に入つた者に逢ひたい時は。

柳敬亭　氣に入つたら、何か、物を家の中に投げ込みます。すると向ふから直ぐ果物を投げかへします。

　　うまく當れば

　すぐに盃

それから先の約束は

闇の中

侯朝宗　ぢやあ、わたしも、是非行きたい。

柳敬亭　おいでなさいまし。ようございますとも。

侯朝宗　玉京の家つて、どこかしら。

柳敬亭　煖翠樓と云つて、すぐ近所です。さあ、おともしませう。（二人ゆく）

侯　家家に挿した墓のやなぎ。

柳　あちこちの飴やの簫。

侯　花にうぐひす、三里の巷。

柳　水けぶる二つの橋　　　　「詩」
(指して)ここが左様です。さあ、御這入りなさいまし。
(向ふから、楊文驄と蘇崑生、つれだつて登場)
楊　つどひ集まる美形たち。
蘇　化粧のをんな、まゆずみの君。　　　　「詩」
楊文驄　(見る)朝宗君、どうして、ここへ、これはお珍らしい。
侯朝宗　龍友君は、阮鬍子のところへ行かれるやうに、伺つてゐたが。
蘇崑生　わざわざ、貴郎のお喜びのために參上しました。
柳敬亭　まあ、坐り給へ。(倶に坐る)
侯朝宗　(見わたす)立派だな。煖翠樓は。
よく見れば
窓はあかるく
庭ひろし
早くも、歌舞の國に來た
(問ふ)李香君は、どうして見えないのです。

楊文聰　今、樓上に居ります。

蘇崑生　（指して）おききなさいまし、樓上で演奏して居ります。

（内にて、笙笛を吹く。侯、耳をかたぶける）

笙と笛との音も高く

雲に生まるる

（内にて、琵琶と箏を彈く。侯、耳をかたぶける）

絃のしらべの

ゆるやかに

（内にて、雲鑼を打つ。侯、耳をかたぶける）

玉をまろばす

きくからに思ひ亂るる

（内にて、簫を吹く。侯、聽きとれる）

つばさ並べて

鳳凰の

つばさ並べ

侯朝宗　（大聲に）この簫の音、これを聞いては、魂が空に飛んで仕舞ふわ。もう我慢が出來ぬ。投げ込まう。纏頭を投げるぞ。（扇の根付を取つて、家に投げ込む）

　南の國のいみじき物
　風に舞ひ、乘つて
　當れ、美人の
　胸のまん中、心の底

　（内から、白いハンケチに櫻桃をつつんで、投げかへす）

柳敬亭　こりや、素的だ。果物を投げかへした。（ハンケチをほどいて、櫻桃を盤の中にあける）おや、變だな。今頃、櫻桃があるのは。

侯朝宗　誰が投げたのかしら。香君なら結構だけれど。

楊文驄　（ハンケチを取つて見て）この薄絹のハンケチを見ると、どうも香君らしい。

貞麗　（茶壺を棒げ、香君の花瓶を棒げたるを連れて、登場）

　香り高い草はなびくよ、蝴蝶のままに
　降りてくるよ美人は、鳳凰臺　「詩」

蘇崑生　（驚いて指す）　こりや、天人の天降りだ。

柳敬亭　（合掌して）　南無阿彌陀佛！　（皆、立ち上る）

楊文驄　（侯の袖をひいて）　朝宗君。見給へ。これが貞麗で、あれが香君ですよ。

侯朝宗　（貞麗を見て）　わたしが河南の侯朝宗。永い間　お目にかかりたいと思つてゐたが、やつと願が叶つた。

（香君を見て）　全く美人だ。龍友君はいい目利だ。（坐る）

貞麗　虎邱の新茶など差しあげませう。（茶をいれ、皆、飲む）

香君　　青やぎや、紅あんずや、

　　けふのよき日の色どり。　　「詩」

皆　（贊する）　さうとも、さうとも。茶を煮て、花を見る。これこそ、風流の會さ。

楊文驄　こんな、風流の會に、酒がないなんて不思議だ。

貞麗　お酒なら、とうに支度が出來て居ります。玉京さんは、會の世話に手をとられて、お相手には出られません。私が代りにおとり持ちします。（聲高に）もし、お酒を。

（給仕、酒を持つて出る）

何故、皆樣は、酒興の掟を決めてから、召しあがりにならないのですの。

楊文驄　つつしんで、御主人のお指圖に待ちますよ。

貞麗　あら、でもあまりに圖圖しくて。

蘇崑生　しかし廓の作法だから。

貞麗　（賽と盤を取りあげる）御免遊ばせ。（香君に）香君、お前はお酌をするのですよ。それから、わたしの投げた賽を御覽。

皆　さあさあ、おきてどほりだ。

貞麗　（餘興の決めを言ひわたして）お酒は順に召しあがれ。一杯飲む毎に、皆さん、十八番のものをなさるのですよ。その藝が、酒のお肴でございます。一が櫻桃、二がお茶、三が柳、四が杏、五が香木の扇の根つけ、六がうす絹のハンケチで御座います。（香君に呼びかけ）香君や、侯様にお酌をなさい。

（香君、お酌をする。貞麗、賽を投げる）

香木の扇の根つけでございますわ。若樣、この盃をお乾しになつて、早くお肴をおきかせ下さいまし。

侯朝宗　（酒を飲んで）僕は、詩をつくらう。（吟ずる）

南の國の
美人のおびもの
袖には
なかくしそ

君の扇の影のまにまに
ゆれ、ゆれて
身にこそ匂へ

楊文驄　うまいな。

柳敬亭　いい根付だ。あまり、動かしすぎて、それをこはさねばいいが。

貞麗　楊樣にお酌してお上げ。

（香君、お酌をする。貞麗、賽を投げる）

うす絹の、ハンケチでございますわ。

楊文驄　わしも詩をつくらうか。

貞麗　人眞似ではいけませぬ。

楊文驄　それでは、八股文でもつくらう。（しばらく考へて）

汗ぬぐひを見るに
くれなゐの色
顏にのぼる
汗の、汗ぬぐひをぬらすは

必ず、春のいろの
顏に射すためよ
このうす絹もて
誰の顏かぬぐふ
絹のしろきと
頰のあかきと
ふれ合ふ樣のうれしさよ

侯朝宗　素的、素的。

柳敬亭　こんな名文章で受けて見給へ。進士、擧人の試驗は、共に立どころだ。

香君　（柳に酒をつぐ）お師匠さん、さあ、お酒を。

貞麗　（囊を投げて）お茶ですよ。

柳敬亭　（酒を飲みながら）道理でうすいと思つた。

貞麗　（笑ふ）ホ、ホ、ホ、ホ。あなたの餘興はお茶ですよ。

柳敬亭　張三郎の茶を喫む一段でも語らうか。

貞麗　講釋は長過ぎますわ。落語の方がいいでせう。

柳敬亭　では、一つ、笑ひ話でもやるとしませう。

蘇東坡と、黄山谷が、佛印禪師を訪ねました。東坡は、定州燒の壺一箇を送り、山谷は、陽羨茶、一斤を贈りました。

さて三人が、松かげで、茶の品さだめを致すことになりました。所で、佛印の申すに、黄秀才のお茶好きは、ひろく、世間にきこえた事だが、鬚面の東坡どのには、茶の菫はわからぬ。けふは、御兩人で、勝負をおつけなさい。そこで、東坡が申した。どうして勝負をつけようと。佛印の申さるるには、かうだ。君が一つの問答をかける。黄秀才が返答する。もし、かれに答へられなかつたら、君が一棒をくらはせる。そこでわしが一筆かう書きしるす。君は鬚面故、鬍子、いいかな、鬍子秀才を打つとさ、もし又、君の方で返事が出來なかつたら、黄秀才が、一棒くらはせるのぢや。わしはかう書くよ。秀才、鬍子を打つと。そして、最後に計算して、一打ち毎に、一杯の罰茶だ。東坡は、それを聞いて、和尙の言ふとほりにしよう、と申されました。東坡が、先づ聞いた。穴なき針に、糸のとほしやうは奈何。山谷答へる。針先を磨りとれ。佛印がさばく、その答よろし。手のないふくべのとりやうは。東坡答へる。水中に棄して仕舞へ。佛印言ふ。その答も、惡くなし。東坡、亦問ふ。猿股の中の虱は見えるか、見えないか。山谷のまだ答へない前に、東坡が一棒をくらはした。丁度、山谷が、壺を手に持つて、茶をついでゐたときであつたから、たまらない。地にとり落して、微塵にくだいて仕舞つた。東坡が大聲でどなりました。和尙、錄し給へ。鬍子、秀才を打つ。

しかし、佛印は笑ひながら申される。君は、あのピシヤンと言つた一聲をお聞きなされたらう。して見れば、翡子が、秀才を打つたのではなくて、秀才が、壺子を打つたのぢや。（一同笑ふ）

柳敬亭　いや、お笑ひめさるな。秀才こそ、かへつて、でかしました。（壺を彈いて）こんなに堅い壺でも、皆、こはして仕舞ひます。況んや、軟壺子の阮の翡子なざあ。

侯朝宗　敬亭老、君は實に名人だ。口を突いて出る滑稽、すべてが、これ機鋒だ。

貞麗　香君や、お前のお師匠さんにおあげ。

（香君、蘇に酌をする。貞麗、賽をなげる）

蘇崑生

杏の花ですわ。

（うたふ）

たそがれの

化粧の殿に

杏の花のいたましさ

わたしのきぬのうすさ

（香君、母の方に向く）

貞麗　娘や、わたしに一杯頂戴。（酒をのみ乾して、賽を投げる）櫻桃です。

蘇崑生　わしが代りにうたはう。（うたふ）
　　櫻桃の紅ほころばせ
　　白齒を見せて
　　しばしの後に
　　物言ふ人よ
柳敬亭　崑君、罰だ、罰だ。その櫻桃はくちびるのことで、盤の中の櫻桃ではないからなあ。
蘇崑生　罰ですか、えい、受けませう。（手酌で飲む）
貞麗　香君や、自分でお酌してお飲み。
侯朝宗　わたしがお酌をしてあげよう。（酌をする）
貞麗　（簪を投げて）そら、柳よ。香君や、さあおうたひ。
　　（香君、恥しさうなこなし）
　お前、恥かしいなら、どなたにでも代つておいただきな。（簪を投げる）お茶よ。これは、柳のお師匠さんですわ。
蘇崑生　これは、これは。柳君、けふはえらいあたりだな。
柳敬亭　この老爺め、姓は柳と申します。ぶらりくらりと五十年。そこで、一番怕しいのは、柳の一字にござい

ます。けふは清明の佳節。家毎に、柳を門に挿し、子供は、輪につくつて、その枝を頭にかぶりまする。そこで、ぢぢい奴も、柳の輪をつくつて、白髪頭にのつける、とはどうでござるな。（皆々わらふ）

蘇崑生　もう、落し話はやめたり、やめたり。

侯朝宗　大分、過酔しました。もう、おわかれとしようか。

柳敬亭　美人才子は、滅多に逢はれぬものですよ。（侯と香君の手をとつて）さあ、お二方、三三九度のお盃ぢや。

（香君、羞しげに、袖をふり切って退場）

蘇崑生　香君は、まだ初心だから、目の前では話しにくいが、きのふ申した身受けの一件はいかがでせう。

侯朝宗　（わらひ乍ら）秀才の、首席に當つたやうなものですな。何の不足がありませう。

貞麗　御不足さへなければ、吉日を選んで、こちらから申し上げませう。

楊文驄　この三月十五日は、花月の良辰です。緣結びには、もつて來いですて。

侯朝宗　一つ、弱つたことがあるのだが、何分にも、旅先で、勝手もと不如意の場合、十分なことが出來ないので。

楊文驄　その事ならば、心配御無用。支度一切、披露の金一切は、わたしの方で、よいやうにはからひます。

侯朝宗　そんな御心配をかけては。

楊文驄　なあに、そんなことは、當り前の事ですよ。

侯朝宗　濟みませんな。

ゆくりなく
ここに來て
思ひ初めたが
ゆきずりの思ひにやあらぬ
春の夜の日出たや
仇とはなしそ
このえにし
何の棄てらりよ
高唐の夢の支度の數數

（侯、別れの挨拶）

貞麗　お引きとめはいたしませぬ。十五日には、師匠方を呼んだり、藝者衆を呼んで、晉曲を入れて、お祝ひいたしませう。（退場）

柳敬亭　（蘇に向つて）おや、おや、すつかり忘れてゐた。わたし達はお伴が出來なかつた。

楊文驄　えツ、何故ね。

蘇崑生　黄將軍の船が水西門につないであるのですが、この十五日に、旗祭だと云ふので、酒宴がある筈。

侯朝宗　それは困つた。

楊文驄　いや、丁繼之、沈公憲、張燕筑など、皆立派な師匠たち。あの連中に賴んで貰ひませう。

蘇　煖翠樓のやさし乙女。

楊　六朝のそぶり、なつかしゆかし。

柳　野を行けば春まだあさく。

侯　明日亦來れば、花、牀に滿つる。　「詩」

第六幕　侯香契りの場

登場人物

貞　麗
楊　文　聰
香　君
侯　朝　宗
丁、沈、張（三人の藝人）
鄭、卞、寇（三人の藝者）
こゝ、もゝの

貞麗　（盛装して登場。歌ふ）

春の衣裳を袖に捲いて
花にほふ紅樓に
琴かいならす

ぬひの簾を捲き上げて
君をよぶ
君來ませば
歸へさじ
あはれ
私は李貞麗、娘の香君は、もう十六にもなつたのに、まだ櫛あげの方もなく、日頃、そればかりが氣になつてゐたのに、幸ひ、楊龍友様の御心添で今度、お家柄の若様に召されることになりました。その方は、それ、いつぞや、ここでお酒を召上つた侯朝宗様、お家柄なり、學識なり、音に聞えた方でいらつしやるさうな。けふはそのお櫛あげの晴の日、お酒盛もさかんに、音曲も賑かにいたさうとて、お師匠さん方、藝者衆皆なに來て頂くことになつて居ります。ほんに、いそがしいことと云つたら。(呼ぶ)これ誰か居ないかい。

こもの (扇をうごかしながら、ゆるゆる登場)

あつちの座敷でも色ばなし
こつちの花の陰でも口說　「詩」

そこへ、御新造様が又お呼びだ。もうし御新造様、御寢間の御支度はどちらにしませう。

貞麗 (怒つて)これ何を言ふの、ふざけて。けふは、香姉さんのおぐし上げの日ぢやないか。お客様が、もう直

ぐにもいらつしやるのに、お前、夢でも見てるのぢやないのかい。早く、すだれでも捲いたり、庭掃除でもして、机でもお並べ。さあ、さつさとしておしまひよ。

こもの　はい、はい。（貞、机の並べ方を指圖する）

楊文驄　（新服で登場。歌ふ）

園の桃をば繡にして
君の樓をば彩色しよう
金の孔雀の屛風に
春の晝をばたたみ籠め
金の甌
獅子の香爐を据ゑつけて
たれに參らそ
かの君のいみじさよ

わたしは楊文驄　阮圓海の賴みを受け、嫁入の道具を持つて參つた。（聲高に）貞姐さん居るかい。

貞麗　（楊を見て）御世話を下さつて、有り難う存じます。もう、支度も出來上りました。まだあの方はおいでがないでせうか。

楊文驄　もう御見えになるだらう。（笑ふ）香君のお嫁入りの道具を運ばせて來たよ。

（こものたち、嫁入道具を運び出して來る）

（それらに言ひつける）御寢間の方に運んで、よく並べて置くのだ。（こもの承知して、退場）

貞麗　（感謝して）このやうに御迷惑をかけて、本當に相濟みませんね。

楊文驄　（袖から金を出して）これは、披露の宴のかかり、三十金だけ、お渡して置かう。思ひ切り　盛大にね。

貞麗　（呼ぶ）香君や、一寸おいで。

（香君、厚化粧にて登場）

楊旦那様から、色色頂戴をしましたよ。お前からも、よくお禮を申し上げなさい。

（香君、拜謝する）

楊文驄　何、これしきのことを。それには及ばぬ。あちらへ、あちらへ。

（香君、退場。こもの、急いで登場）

こもの　（知らせる）婿樣のおいででございます。

（盛裝して、伴をつれて登場）

侯朝宗　われはまだまだ

進士の空にのぼり得ないが

君はこれ
月中、嫦娥の身
（楊以下、貞麗、香君、出むかへる）

楊文驄　お目出たう御座いますっ秦淮一の美人がお手に入りました。しかし、わたくしには、何一つお祝ひも出來ませんで、ざつと、嫁入の支度と、御披露の宴の一切だけを、お引き受けすることになりました。
侯朝宗　（一禮して）わたくしこそ、飛んだお世話に相成ります。實にお禮の申し上げやうもない。
貞麗　まあお坐り遊ばせ。お茶でもおいれ致しませう。（皆、座につく）
（こもの、茶をささげて登場。皆皆飲む）
楊文驄　もう、支度は出來たかね。
貞麗　旦那樣のおかげで、何一つ不足もございませぬ。
楊文驄　（侯に向つて、拱手の禮をする）けふのお祝ひに出しや張りは無用。わたしは、これで御免蒙つて、あしたの朝早く、お祝ひに參るとしませう。
侯朝宗　御同座になつても、いいぢやありませんか。
楊文驄　いやいや。（別れを告げて退場）
こもの　旦那樣、お召しかへをなされませ。

（侯、着物を換へる）

貞麗　わたしは、お嫁入りの支度やら、お酒の支度やらで、一寸御免を蒙りまして。（別れて入る）

三人の藝人　（登場）

一生の花月の夢

張三影

五階の樂の事

李二紅　「詩」

丁　わたしは丁繼之。

沈　わたしは沈公憲。

張　そして、わたしは張燕筑。

丁　けふは若様の御祝言とて、いち早く參りました。

張　ところで、歌妓を幾人お呼びなのかしら。

沈　何でも、舊院の年増衆だとか。

張　成程、さうか。それなら皆わたしが、櫛あげしてやつたのだ。

丁　お前は大金持かい。幾人、櫛上げしてやつたのだ。

張　みんな、何、後見があるのさ。けふの侯旦那だつて、一錢も出しはしないのさ。

沈　餘計なことを言ひなさんな。侯樣　お召しかへだ。さあさあ、御挨拶に行かう。

皆　（侯に挨拶をする）お目出たうございます。

侯朝宗　今日は、御かげ樣で。

三人の歌妓　（登場）

氣もそぞろ
にほ草の空にはろばろ
身もそぞろ
花やぎの
日がらひね　「詩」一

張　そこな藝者衆、皆名乘つた、名乘つた。

鄭　おや、お前さん、いつその筋のお役人におなりなの。わたしに名乘れなんて。

侯朝宗　（笑ひながら）御尊名をうけたまはりたい。

卞　わたしは、卞玉京。

侯朝宗　成程、天上の玉京の仙女か。

寇　わたしは、寇白門。

侯朝宗　成程、白門のしだれ柳。

鄭　ところで、わたしは、鄭妥娘。

侯朝宗　（考へ込んで）いかさま、妥當なところか。

張　ところが、少しも妥當ぢやないや。いやはや。

沈　何故妥當ぢやない、何がいや早だ。

張　大變な男ツくひ。

鄭　ヘツ。男ツくひなればこそだよ、お前さんたちが、腹一杯におまんまを喰べて、生きて行かれるのは。

（皆、ふざけあつて笑ふ）

卞　お婿様がお出でなのに、早く、香さんを御案內申し上げなくちや。

（寇と、鄭と、香君に附添うて出る）

沈　わたしたちは、奏樂でお出迎へしよう。

（沈、丁、張、十番の曲を奏する、侯と香君と顏を見合はす）

鄭　ここは御堂の中ぢやあないよ。直ぐに、お盃としませうよ。

（侯と、香君と、上座につく。丁、沈、張、左の方に座を占め、卞、寇、鄭、右に坐る。こもの、酒壺を持

つて登場。左に酒、右に音樂）

侯朝宗　（歌ふ）

その昔のみやびごと
しのび出でて
心はゆめみ
身もうつつ
揚州の、小杜の歌のこころよ
妻のために眉を描くなさけ
簫吹く人を聞くはたが子ぞ
春を手にして
氣も晴ればれ
あな、待ちどほの
たそがれや
先づ一杯の酒、酒

（右より酒をすすめ、左方にては、樂を奏す）

香君

（歌ふ）

花匂ふうてなの
簾の春かぜ
君が姿の雄雄しさ
ゆかし
あはれ、身のさち
そぞろに君の胸に倚る
わたしは野べのはかな草
はかな草にも香は寂し
妻ごめにいよよ添はまし
今宵
灯影のあかるさに
見なれたお方も
羞かしや
いかにしてまし

第　六　幕

丁　あれ、もう、夕日は西の山蔭に、鳥も、塒に急いで行く事で御座います。若様と香君を、早く、お部屋にお送りしませう。

沈　まあ、さうせき給ふな。侯の若様は、當代での詩客、絶色の佳人の、お櫛上げをなさるのに、もう、お盃だけ濟んだからつて、このお目出たい席上に、契りの歌一つないつて法があるものですか。

張　その通り、その通り。わたしが墨も磨り、紙もひろげて、御揮毫に供へませう。

侯朝宗　詩箋はいりませぬ。宮扇を所持して居ります。これに書いて、香君に贈りませう。それをこの日の記念に致しませう。

鄭　それは好い思ひつきで御座います。わたくしが、お硯をお持ちしませう。

寇　まあまあ、鏡と御相談なさいまし。お硯の持ち役つて柄か知ら。せめて、靴脱ぎのお役のところね。

卞　それより、お硯持の役は、香君さんにお願ひしたらどう。

皆　それがいい、それがいい。

（香君、硯を捧げ持つて、侯、扇に書く。皆皆讀む）

茶屋の店店

並ぶあいさの

路を縫ひ

しのび、しのんで
通ひそめしよ
見わたすなべに
こぶしの老い木
さても
及ばぬものか
桃李、くれなゐの花に　「詩」

皆　素的、素的。香君、大切にしまつてお置きなさい。

（香君、袖に收める）

鄭　わたし達が、桃や李の花に及びもつかないのは、わかつてゐますけれど、こぶしの老い木とはひどいわ。

張　こぶしの花つて言ふのはね、枯れ木に花の咲くことさ。

鄭　枯れ木に花ですつて、これでも昔は、一花咲かしたこともあるんですよ。お生憎さま。

（こもの、詩箋を持つて登場）

こもの　楊旦那様から、詩、お贈り下さいました。

（侯、受けとつて讀む）

くはし乙女は
袖に祕めて
身に添ひ伏しの
えにし、濃やかに
搔いまきてあれや　「詩」

侯朝宗　（笑つて）この親爺なかなか開けてゐる。寢ろと言つて寄こした。愉快、愉快。

張　袖に祕めて、身に添ひぶしのつて言ふのは、香君の體の小さい事ですね。成程、扇の根つけか。

鄭　馬鹿馬鹿しい。あんな、扇の根付に、何のねうちがあるものか。まだ、それより、わたしのくりくりした猫の眼の方がいつそましだ。（皆、笑ふ）

丁　さあ、みんな、彈いたり、吹いたり。お二方にも、お酒を薦めた、薦めた。

鄭　さうよ、さうよ。ささ氣嫌で、お床入りがようござんしよ。

（左右、樂器をかなで乍ら、侯と香君に酒をすすむ。兩人、歌ふ）

寄つてたかつて
無理酒の
すすめ上手に

酔ひつぶされた
宵のくち
そつと
手に手をとりかはし
ほんにこころもやせるよな
春の夜の
そのひとときの
ながながしさ
人の手前も
えい、まあどうして
帶のとかりよ
早く夜ふけて
おひらきの
鐘の鳴れかし

丁　おや、もう二番太鼓だ。では、おひらきと致しますかな。

張　こんな、結構な御馳走を、戴いて仕舞はないのは殘念千萬。

鄭　わたし、まだ食べたりないわ。もう少し、皆さん、待つて下さいな。

卞　そんな、不粹を言ふもんぢやあ有りません。さあさ、みんなで一彈きやつて、お二方樣の、お床入りのお見送りをしませう。

（皆立つて、十番を奏し、合唱して、侯と香君をおくる）

皆高どのをおりて
よい歌うたお
火はきらめいて晝に似る
ここな二人の似合の夫婦
香も沁みよ、錦の帳
床のむつび、やけて堪らぬ
醉うた姿も
又よい物よ
生れつきかよ
くるわ遊びの程のよさ

（こもの、燈をとり、侯と香君と手をとり合つて退場）

張　えつ、どうだ。俺たちも、一組づつ行つて寢ようぢやないか。

鄭　おぢいちやん、ふざけちやいけないよ。わたしたちは、現金でなきやあ駄目なのだから。

（張、十文の金を數へて與へ、手をとる。鄭、錢を受けとつて、調べ、悪い錢を替へ、ふざけながら退場）

「合唱」

廓のかすむ月蔭は
何處もかしこも
べに、白粉の匂ひに滿ちて
夜毎夜毎の花ごころ
散り散つてつきぬよ

張　江南の花ひらいて、水もいういう。
寇　くるわ通ひにうれひもとけて、
沈　何も忘れて、いみじの人に抱かれ、
卞　夜半の歌にゆめ見るよ。　「詩」

第七幕　嫁入道具を返すの場

登場人物

楊文聰
貞麗
侯朝宗
香君
こもの

こもの（おまるを持ちて登場）

龜の小便、龜の小便、小さな龜が跳ねて出る。鼈の血、鼈の血、小さな鼈が化けて出る。龜の小便と、鼈の血と、見れば、見る程、曖昧至極。鼈の血と、龜の小と便、說つても、見ても、何が何やら、あつさり、はつきり、ちつともしない。ぼんやり、やんわり、さつぱり、ぼんやり。（笑ふ）

うるせえ、うるせえ。きのふは、香姐さんの御祝ひ日で、夜中過ぎ迄、御酒氣騷ぎ。けさはけさとて朝早

くから、おまる洗ひの、しびん洗ひ。いそがしくつて、やり切れねえ。それを、又、あの、大ぜいの客めらと、女郎らが、いつ迄抱きつき、へたばりつき合つて居やがるんだ。（おまるを刷ふ）

楊文聰　（登場）

白河夜ぶねの
柳かげ
夢おどろかす門の外に
花はえ
すだれふかぶかと
釣り手の音もほのか
とばりの奥のはるかなる
春の眠り

わしは楊文聰　この朝あけに、朝宗君へ、一言、お祝ひを申さうため、とる物も取りあへず參つた。おや門が閉つてゐる。下女、下男の、聲もせぬ。まだ、華胥の國の住人さうな。（呼ぶ）おい、おい。お前、新郎新婦の窓の下へ行つて、わたしが、早くから、お祝ひに來たと、申し上げてくれい。

このもの　きのふは遲かつたから、まだ、まだ、けさはお目醒めでないでせう。旦那、けふはおかへりになつて、

又、明日おいでなさいまし。

楊文聰　（わらつて）馬鹿、無駄口を叩いて居ずに、早く行つて、聞いて來い。

貞麗　（内から聲をかけろ）これ、誰かお見えになつたのかい。

こもの　楊旦那様が、お祝ひにお越しで。

貞麗　（忙しげに登場）

　　ゆめの手枕
　　春の夜の短かさ
　　まださめがての門を叩く
　　索

貞麗　（楊を見て）旦那様、お世話様でした。お蔭様で、やつと、娘の嫁入も相すみました。

楊文聰　何んの、それより。（問ふ）もう、二人は起きたかい。

貞麗　きのふ、遲かつたので、まだ、起きませんわ。（座をすすめて）まあ、お坐り下さい。起してまゐりませう。

楊文聰　いや、そのまま、そのまま。（貞、退場）

　　娘ごころは花のみつよ

甘く、うれしく
いちづのおもひ
一つ枕のゆめの緒
誰のとりもち
わしが首尾して
あまた調度の
その品品も
はれやかに
ひろめの宴も
知るや、知らずや

貞麗　（登場）

旦那様、そりやあ、をかしいんですよ。あすこにをりますがね、二人がお互に釦を締め合つたり、二人で鏡に向つて、髪だけは撫でつけたものの、着物や、冠り物は、いつの事でござんせうやら。さあ、旦那様も、一緒に寢間においでになつて、つれて來て下さいませ。そのあとで、迎へ酒なといただきませう。

楊文驄　そんな、罪なことをするものではない。（兩人、退場）

（侯と香君、美しく着かざつて登場。侯うたふ）

侯朝宗

この添ひ伏しのうれしさに
思ひはれば
かたみに抱きつ、しめられつ
誰ぞきぬぎぬの夢をやぶる
かいまきは紅の波をかへし
心、容様
あな、あはれ

「合唱」

かみの香のこる
枕がみや
手ふきのうつり香
氣も消えがての胸のうち
ゆめのうら葉になめてこそ知れ

（楊文驄、貞麗、登場）

楊文驄　やつと起きて來た。おめでたう。おめでたう。（一禮して坐る）昨晩の詩の文句は、御氣に召しましたか。

侯朝宗　（禮をかへして）有り難う。（笑つて）實に結構ですよ、結構ですが、ただ一つ。

楊文驄　ただ一つとは。

侯朝宗　香君も小さいことは小さいが、武帝の阿嬌ではないが、金屋のなかに藏つて置きます。（袖を見て）まさか、この小さい袖のなかにしまつて置くわけにも參りません。（二人、ともにわらふ）

楊文驄　昨晩の契りの歌は、さぞ、見事な出來でせうな。

侯朝宗　一時のがれの、責ふさぎ、お目にかける程の物ではありません。

楊文驄　拜見願へませんかね。

香君　それ、この扇に。（袖から扇を出す）

楊文驄　（手にとつて見る）おお、これは白紗の宮扇だ。（香を嗅いで）いい匂ひだ。（詩を吟じる）うまいものだ。香君は、この詩にそつくりだ。（香君に返す）よく、しまつてお置きなさい。（歌ふ）

桃の香よ

すももの匂ひよ

みな宮扇の上にこそ

第　七　幕

吹くな夜あらし
朝け　野分
かくせ、秘められ
袖の中

（香君を見て）お前は、お櫛上げをしてから、一段と美しくなつたね。（又侯を見て）朝宗君、君は仕合せ者だ。こんな尤物を手に入れるなんて。

侯朝宗　香君の天來の美しさに、またしても、髪かざりやら、衣裳やら、十二分の美しさだ。全く、素晴らしいものだ。

貞　これと云ふのも、皆、楊旦那のお心盡しでございます。
そのたま物は何何ぞ
色くさぐさの綾錦
寶の小函
玉の屛風に
靑のついた
ふさの下つた御帳

銀のほんぼり
闇に匂ふ
金のさかづき酒なみなみと
歌こゝろどめく
披露の宴

けふはけふとて、朝早くから、お出でになりました。
まるで自分の子のやうに
嫁入道具も皆そろへ
朝もとくから
祝儀に來られた

香君 聞けば、楊旦那樣は、桴撫、馬士英樣の、極く親しい御身内でいらつしやるさうな。だが、どうやら、苦しいおくらし向きの、今は食客の御身の上とやら。それがどうして、このくるわで、あのやうにお金を撒き、湯水のやうにおつかひ棄てになるのだらう。いただく私は心ぐるしく、下さる旦那樣には筋のない事。けふは打ちあけたお話を聞いて、いづれ、又、御恩報じの端にもいたしたいと存じます。

侯朝宗 香君、よくそれに氣がついた。わたしと楊兄とは、極く親しい間柄ではあるが、昨日からの御厚情、わ

たしにも、どうやら腑に落ちない。

楊文驄　さう聞かれれば、是非もない。打ち開けた話を致しませう。あの嫁入の調度やら、披露の金、三百いくらと云ふものは、實は、これは皆懷寗の人のふところから出たものです。

侯朝宗　懷寗のどなたです。

楊文驄　あの、前光祿卿たる阮圓海です。

侯朝宗　ぢやあ、あの安徽の阮大鋮ですか。

楊文驄　さうですよ。

侯朝宗　してまた、何のために、こんなに斡旋するのです。

楊文驄　ただただ、あなたとおつき合ひがしたいばつかりに。（歌ふ）

人もうらやむ
君の風流
君のみやび
君の才、君の文
誰かよろこび迎へぬ人ぞ
をみなが投ぐる花をもて

君の車は滿ちみつ
秦淮の巷
君ののぞみ
一人の美人あつて
その櫛あげのこがねとぼし
君が爲めその調度をととのふ
その人は誰ぞ
南隣の光祿、阮大鋮
嫁とり支度
ひねもす
人のためにいそがし

侯朝宗 圓海老人は、わたしの父と同年の進士だが、わたしは、かれの人となりを嫌つて、永い間、絶交して居た。その彼が今になつて、何故、こんな深切を示すのか、益益わからないね。

楊文驄 圓海氏の苦衷をお察し下さい。それについて、あなたにお願ひしたいことがあるのです。

侯朝宗 うかがひませう。

楊文驄　圓海氏は、もと趙忠毅先生の門人でした。元來、私達の同輩です。それが、後年、魏黨と交りを結ぶやうになつたのは、唯、東林を救護するためだつたのです。處が案外にも、一度魏黨が失脚してからは、東林黨とは、水火の仲になつて仕舞ひました。その眞意も知らず、近頃、復社の同人が、攻撃三昧、惡口の存分をつくされる。いはば、同士討です。圓海氏にも、昔からの友人もあるにはあるが、その行動の明らかでないために誰一人、辯解して呉れる者がない。毎日、天に向つて、大いに歎いて言はれるには、これ、元來、身内同志の敵呼ばはり、とてもたまつたものではない。これは河南の侯朝宗殿でない限り、われらを救つてくれるものはない。そこで、手をつくし、品をつくして、あなたにおつきあひを願ふ譯なのです。

侯朝宗　成程、さうですか。圓海老の心中、實にお察しする。よし、眞に魏黨のひとりにせよ、後悔して降參したのを、すげなくするのも、これも非道です。多少、罪に宥すべきところのあれば倘更です。定生、次尾の兩人は、わたしの極くの親友ですから、明日逢つたら、よくとりなしておきませう。

楊文驄　さう願へれば、どんなにか仕合せでございませう。

香君　（怒つて）まあ、あなたは、何といふことをおつしやるのです。阮大鋮はへつらひ者とか、横暴者の、恥知らずと、をんな、子供さへも、顏を背けない者はありません。人は攻める、あなたはこれを救ふ。あなたはそれでどうなさるおつもりです。

かりそめの深切

人のため
罪を救ほと
罪をゆるそと
さあれ
世間の口の戸を
注意あれ
注意あれ

香君　あなたは、あの人が私の支度をしてくれたと言ふかどで、私ごとのために、公の事を廢されようとなされます。だが、私はこんな髮かざり、衣裳、持物などを、何とも思つては居ませんのに。（髮ふ拔き　着物をぬぐ）
こんな衣裳が何であろ
困らば困れ
はだかの身
名にこそ匂へ

楊文驄　これは又、香君の氣强い。

貞麗　こんないい品品を、みんな棄てて仕舞ふなんて。何んて勿體ない、勿體ない。（拾ふ）

侯朝宗　全くだ、全くだ。わたしは、お前のその見識に對しても、實に恥かしいよ。それでこそ、わたしの畏友だ。（楊に向つて）楊老兄。おとがめ下さるな。わたしが承知しないのではない。女子供にわらはれたくないのです。（歌ふ）

春の卷に
けなげにも
名を知る乙女
それにひきかへ
まなびの道に
いそしむものの
無學さよ
物のけぢめも
ろくにわからぬ

かの多くの社友が、平素、この朝宗を重んずるのは、ただ、この一點の義氣のためだ。若しそのわたしが、横暴者にくみするなら、その時こそ、皆がわたしを嚢味噌に攻め立てるだらう。自分をさへ救ふひまのない者が、どうして人を救はれよう。

節と名と
世にも重重
重きは
輕きは
よく考へて
世に處せよ　「詩」

楊文驄　だが、圓海老の心づくしの程も考へて、あまり手強いことはなされますな。

侯朝宗　いくらわたしが頓間でも、井戸の中の人間迄救はうとは思ひません。

楊文驄　さう言ふ次第なら、もうわたしはおいとましよう。

侯朝宗　この澤山の道具類は、もともと、阮大鋮の物です。香君が使はないとなれば、藏つておいても仕方がない物、御遠慮なく、御持ちかへり下さい。

楊文驄　いかにも、恩を仇でかへすやつだ。輿に乘つて來て、輿つきて歸るとはこの事だ。（退場）

（香君、怒る）

侯朝宗　（香君を見て）香君の縹緻は生れつき、かうして、飾り物全部を捨てて、うすもの一つを脫いでも、申し分のない顏かたちが、尙、一段と美しくなつた。

貞麗　ですか、澤山の支度物を皆捨てて仕舞つて、本當に惜しいわ。

珠も黄金もさらりと捨てる
鐵火の肌
見ならつて
親の苦勞を露、子の知らず

侯朝宗　何、こんな物。又、わたしが同じ物を買つてあげるよ。

貞麗　それなら結構ですけれど。

貞　かざりの金や、化粧の費、さても惜しや。
香　布子一枚、ばらのかんざし、それも時世。
侯　だのに、湘君、おびものを解いて、
香　今のはやりをよそに見る。　　「詩」

第八幕　燈籠船見物騒動の場

登場人物

陳貞慧
呉應箕
侯朝宗
柳敬亭
香君
蘇崑生
阮大鋮
こもの

（陳貞慧、呉應箕、登場）

陳貞慧　（歌ふ）

科擧の場は
秦淮の近く
うたひ女と學生と
その勝負、いづれぞ

吳應箕　（歌ふ）
端午のにぎはひは
ただ一とき
滿都の繁華
そのかみの
榮華のあとを
訪ふ人も稀

陳貞慧　（吳に問ふ）時に次尾君、旅のつれづれに、共に秦淮に來て見たが、同人の誰にも會はないが、どうした事かね。

吳應箕　多分、燈籠船にでも乘つてゐるのだらう。（指して）これは、丁繼之の水樓だ。あれにのぼつて見物しようか。

（水樓には燈がつき、簾がかかつてゐる。二人、登樓）

陳貞慧　（たづねる）師匠、お家かい。

こもの　（小僮、登場）

　　　　柘榴は眞赤で火のやうだ

　　　　艾は青くけむりのやう　　　「詩」

（二人を見て）これは、陳と呉の旦那様。生憎、主人は、燈籠船の會に參りました。しかし、酒席をしつらへまして、どなたさまでも、お心置きなく、お憩み下さるやうにとの事にございます。

陳貞慧　あの男らしいね。

呉應箕　それは御好意だな。

陳貞慧　この風流の席に、勝手に、俗人共が這入つてこられても困るな。よし、何とかして、そいつらの足を追つぱらつてやらう。（小僮を呼ぶ）燈籠を一つ持つておいで。

（小僮、答へて退場。直ちに燈籠を持つて登場。陳、書く）

『無用の者入るべからず』　復社文會

（小僮、燈籠をかける）

呉應箕　同人たちが通りかかつたら、呼び込まうぢやないか。

陳貞慧　勿論。

こもの　（指す）もしもし、笛、太鼓の音がします。燈籠船でございますよ、屹度。

（陳、吳、欄干に出て見る。侯朝宗、香君、柳敬亭、蘇崑生、笛、大鼓の音よろしく、船に乗つて登場）

陳貞慧　（歌ふ）

いと竹の
ものの音ほのか
風流の
一むれをのせ
燈籠船
岸のやなぎに夕日は匂へる
みやび男、たをやめ
參れ、その船
このやの下に
酒、くみかはそ
いざ

呉應箕　（歌ふ）

こころにく
夕べの凉を追ふ人の
ふねの有様
繪巻物

陳貞慧　（指して）あの舟に乘つてゐるのは、どうやら侯朝宗らしい。

呉應箕　侯朝宗なら、同社の人間だ。呼ばう。

陳貞慧　（指して）あの女は李香君だ。あれも呼ばうか。

呉應箕　阮鬍子の、嫁入道具をつつかへした女だ。同人に薦めたい程の女だ。無論、呼び給へ。

陳貞慧　では。（呼ぶ）侯氏。朝宗君。

侯朝宗　（見上げる）水樓の上で、大聲に呼んでゐるのは、陳定生と呉次尾の兩人だな。（禮をする）おお、今日は、

陳貞慧　（手招きして）ここは丁繼之の水樓で、酒席の支度が出來てゐます。朝宗君、さあ、どうぞ。それから、香君初め皆樣も、是非おあがり下さい。ここで端午のお祝ひを致しませう。

侯朝宗　それは結構。（他の三人に向つて）さあ、折角のお薦めだから、皆さんあがりませう。

（吹いたり、彈いたりしながら登樓）

侯朝宗、香君　（歌ふ）

龍の豬牙舟
頭をそろへ
梶をあやつる
葵の花
蒲の葉ににほふ酒だる
樓樓朱く重つて
紫屏風を山とめぐらす
つゞみ、簫の音
空高高

陳貞慧　（見る）皆樣が來て下さつたので、すつかり、復社の文會になりました。
侯朝宗　何の事です。
陳貞慧　（燈籠を指して）あれを見給へ。
侯朝宗　（燈籠を看る）成程けふは文會だつた。度忘れしてゐた。がこれは丁度よかつた。
柳敬亭　『無川のもの入るべからず』――おや、これは失禮しました。

陳貞慧　どうしまして、あなた方は阮奴のたいこにならなかつた方方。つまり復社の同人で。

侯朝宗　香君も社友かしら。

陳貞慧　香君が調度をつかへされた手並みはどうして社友もはだしだからね。

呉應箕　以後は、復社の女王にあがめませうか。

香君　（笑つて）あら、どうしませう。

陳貞慧　（小僮を呼ぶ）おい、おい。酒だ、酒だ。さあ、皆さんでお祝ひしませう。

（一方には陳、呉、侯、坐り、一方には柳、蘇、香君、坐つて、酒をくむ）

陳貞慧、呉應箕　（うたふ）

ここにしたしむ
風流の星星
うちとけて
春めきわらふ

柳敬亭、蘇崑生　（うたふ）

昔を偲ぶ
たそがれの

陳貞慧（一禮する）では、御免蒙つて。

端午のいはひ秦淮の樓
こころをかたる伊達者の家（陳）
黄をちりばめる、金柑の薬蔭
べにをほころばす、ざくろの花（呉）
菖蒲のつるぎ、何の用ぞも
日かげに向ふあふひのこころ、たがはぬ（侯）
いくさをよけて祭あそび
邪魔を拂つて硃砂の酒（陳）
（三人酒を飲む。柳、小銅鑼をうち、蘇、月琴を彈き、香君、簫を吹く）
ほのぼのと、秦淮あたり、蜃氣樓
斜めなる長板の虹の橋（呉）
義和の牽き出す燈のあまた
龍つかひが拏る船船（侯）
星は今しも海をはなれて

玻璃盃、更に冴えわたる（陳）
光はるばる銀河の水
影はうごく、赤城の霞（呉）
（飲酒、奏樂、前に同じ）
玉樹の歌の調子奇怪に
漁陽の曲の拍子外れて（侯）
龜年の笛のうるささよ
嵆康の阮の音色らうがはし（陳）
ともづなつなぐ、千本の錦
窓につらなる、幾萬の紗燈（呉）
碁盤に向つて石を置くをやめ
急須を執つて茶を呼ぶしきり（侯）
（酒、奏樂、前のとほり）
ほのほは、除夜に燃やすはぢかみ
聲は、とりでに迫る雄たけび（陳）

稻妻はしらす、花火の群
玉かんざしは誰が家の子かすぐれし（吳）
ほのかにほたる光りゐる、無人の庭
樹がくれの衙に鳥の啼く（侯）
欄による人無き今を
とむらふ歌や、長沙の詩人（陳）
（すべて前に同じ。皆立つ）

吳應箕　素的だ。到頭、十六聯出來た。明日、直ぐに發表しよう。

陳貞慧　わたしたちの詩には、いろいろの感慨を寄せて居り、この人たちの音樂には、凄凉の氣がみなぎつてゐる。樓下にも、舟中にも、この氣持のわかつてくれる人が居るか知ら。

蘇崑生（柳に向つて）兎に角だ。昔から、良宵は甚だ短く、吉事には逢ひがたいとやら申します。そこで、どうでせう。わたしたち二人は、こちらで、歌をうたひ、陳、吳のお二方は、あちらで、お酒をすすめることにして、あの若樣と、香君のお二人を、上座に直して、もう一度、風流の會を致さうぢやございませんか。

柳敬亭　いや、結構ですな。それこそ、われわれ、おとりまきのつとめだもの。

陳貞慧　わたしと次尾君は、もともと、亭主役だ。お酌の方に廻りませう。

呉應箕　さあさあ、順に並んだ、並んだ。

（侯と香君は正座に、陳、呉は左に、柳、蘇は右に並ぶ）

侯朝宗　（香君に向つて）　皆様のお志だ。御免を蒙つて、正座に直り、もう一度、三三九度の盃のとり合をやらう。

（香君、笑ふ。陳、呉、酒の酌）

柳敬亭、蘇崑生　（うたふ）

歌のはじまり
まだ夜のうちよ
君よ
重ねてうたひ給へ
ささくみ給へ
歌は壁に
酒は口にと
三三九度
さてもよい仲

(こもの、報せる)

こもの　燈籠船がまゐりました。

吳應箕　もう、十二時にもなるのに、燈籠船がとほるとは、をかしいなあ。

(皆、立つて、欄によつて見る)

(阮大鋮、燈籠船に坐し、役者ども、通人らしき歌、音樂を奏して、ゆるゆる登場)

柳敬亭　こりや、たいこ持の船だ。諸君、耳をすまして、よくおききなされ。

阮大鋮　(船上に立つて、ひとりごと)おれは阮大鋮、むろん、早くから、船あそびに出たくてならなかつたのだが復社の亂暴書生に會ふのがいやさに、今迄こらへてゐた。不快至極な。(指して)おや、まだ丁家の水榭には燈がついてゐるぞ。(呼ぶ)おい、おい。誰があそこに居るか見て來い。

(こもの、岸にのぼつて見、回つてしらせる)

こもの　燈籠に、「無用の者入るべからず。復社の文會」と書いてございます。

阮大鋮　(驚いて)これは、これは。(袖をふつて)音曲をやめ。早く燈を消せ。

(燈を消し、音曲をやめて、逃げるやうに退場)

陳貞慧　立派な燈籠船が、何故、音曲をやめ、燈も消して、しよんぼりと行くのがしら。

吳應箕　これは不思議。誰か見にやらう。

蘇崑生　何、見にやらせる必要はありません。老眼ではござれど、わたしには、かれが誰であるか、よくわかつて居ます。あの鬚むしやが、阮圓海です。

柳敬亭　道理で、はやし方がちがふと思つた。

陳貞慧　（いかる）何といふ大膽な老ぼれだ。このわれわれの目の前で、あてつけがましく遊ぶとは。

吳應箕　俺が行つて、あいつの鬚をむしりとつて來てやる。（行かうとする）

侯朝宗　（ささへる）止せ、止せ。もう逃げて仕舞つたよ。わざわざ、さうひどい目にあはさなくつてもいいさ。

陳貞慧　君は知らないからさう云ふのです。ひどいのは、かへつてあいつなんだ。

蘇崑生　もう、船は行つて仕舞ひました。堪忍しておあげなさいまし。

吳應箕　けふは、まけとくか。

香君　大分、夜も更けました。おひらきとしませう。

蘇崑生　香姐さんは、お母さんが氣にかかるのです。わたしも、姐さんを送つてかへりませう。

陳貞慧　吳應箕　わたしたちは、ここにとまることに致します。

侯朝宗　おとまりなれば、船のわたしたちは、では、ここらで、お暇することにしませう。お休みなさいまし。

陳貞慧　吳應箕　おやすみなさいまし。

（二人、退場。四人、船にうつる。こもの、船を漕ぐ）

桃花扇

ふけゆく樓をおりて
人ちりぢり
小舟のなかの
春ふたり
夜ふけの門を
今頃
などでたたかれよう

侯　烏羽玉の夜の烟に路も白露。
香　あけの小家に春はねむる。
柳　水、ひたひたと秦淮の上。
蘇　夜ふけの舟に君を送る。

「詩」

第九幕

軍隊鎮めの場

登場人物

左良玉（湖北の督軍）

二將

兵卒四人

（將官二人兵卒四人登場。歌ふ）

將士

軍門に捲く將旗
大弓射れば
魔もをののぐ
夕べの道に
攻めつづみ
弓をかひなに

馬をやる

われらは武昌の鎭守、兵馬大元帥、寧南侯麾下の將士だ。けふは、朝の點呼に、元帥のおいでになるによつて、ぜひなく、これに伺候した。

（軍樂裡に、門開く）

左良玉　（武裝して登場。歌ふ）

七尺ゆたかの武者振りよ
虎の頭、燕の頷
繪にも見たや
ますら夫の天地よ
その隅隅もきはめ
拍車千里
飛んで肉を喰ふ
雲に乘り
風を操る
弓矢もて國にむくい

胸の燃える血をそそぐ
牙を建て角を吹いて喧を聞かず
三十壇に登る衆の尊ぶ所
家萬金を散じて士の死に酬い
身に一劍を留めて君恩に答へん　「詩」

俺は左良玉、字は崑山、家は遼陽に在つて、世世、都指揮使司にのぼつた。前に一たび罪を得て、職を辭したが、ふたたび、昌平に用ひられ、大將軍、侯恂のめがねによつて、歩卒より抜かれて、戰將となり、一年經つか經たぬうちに、鎭臺の司令官に拜された。北討南征の功によつて、侯伯に封ぜられ、強兵勁馬を統べて、湖北の督軍に命ぜられて居る。（氣負つて）見よ、われこそは左良玉、幼き時より、武藝を習ひ、强弓、早弓の達人。李自成、張獻忠のごとき鼠賊を滅ぼすは、朝めし前の話だ。ただ遺憾なのは、督師に英傑なく、計略を、機宜にめぐらす事が出來ないことだ。熊文燦、楊嗣昌ら、私ごとに、事をあやまり、丁啓睿、呂大器ら、ただ、のらくらとその日をくらし居る。獨り、わが厚恩の元帥、侯恂公は、智勇兼備、よく、中原を經理する腕前が有りながら、奸邪の輩に忌みきらはれ、世に出ると、間もなく、斥けられてしまはれた。そのため、俺は、胸にあふるる熱誠はあるが、主恩に報いる折とてもない。殘念千萬。（足摺りする）駄目だ、駄目だ。湖南、湖北は、守るによく、戰ふによい。暫く、樣子を見て、この身の進退をはからう。（坐る）

（幕内に衆兵の叫ぶ聲）

左良玉　（驚いて問ふ）軍門の外で、誰が喧嘩をして居るのだ。

二將　（申しあげる）元帥に申し上げます。軍門の外は靜肅にございます。別に、誰も、喧嘩してゐるわけではございませぬ。

左良玉　（怒る）あれ、あのとほり、喧嘩して居るわ。何事もないとは何だ。

二將　あれは、食に饑ゑた兵が、食を求めて騷いでゐるだけのことで、決して、喧嘩ではございませぬ。

左良玉　何だと。前に、湖南から、三十艘の糧米を借りて來た。あれはどうなつたのだ。一月になるかならない内に、皆、食つて仕舞つたのか。

二將　申し上げます。鎭臺の兵は、三十萬あまりございます。あの位の糧食は、直ぐになくなつて仕舞ひます。

左良玉　（机をうつて）これは弱つた。どうしたらよからうか。（立つて歌ふ）

見よ

中原の豹虎共

麻とみだれて

皆、機をねらう

みかどの宮居

たつとびまつり
ぬかづく者は誰ぞ
大義の旗を取るものは誰ぞ
督師、老將、ひとりのあるなく
つはものどもは
みなわらべ
ここにわれ立つ
かへつてわれをふるひ立たしむ
殺氣滿滿
兵糧の空しきをなげく
喧喧、囂囂
手打ち、足を踏んで
わめき、へしあふ
聞け、その聲
聞け、その音

あの騒がしさ
何となだむべき
蜂の巣に
群り叫ぶ
蜂もかくありや
（左坐る。内には、又喊聲）
あれ、聞け、門外で、いよいよ、騒ぎ出したわ。謀叛でも起さうとするのか。貴様たち、よく俺の言ふことを聞け。（立つて、うたふ）
俺をうらむな
俺をうらむな
かりにも俺を
誰か帝の犬馬でないものが居よう
天朝ここに三百年
かつて帝の汝らにつれなかりしやいな
つれなかりしやいな

よく貴様らの胸に聞け
何のためにか鼓を打ち
門を敲き
いやが上にも打ちさわぐ
官庫にせまり
官衙をかすめようためにか
まことに江州の兵糧船
風に乗つて疾く來たれ
待ちとほし
待ちとほし

（左坐る。令箭を抽いて、地に投げうつ）

二將　（箭を拾ひ、内に向つて吩咐る）元帥の命令だ。三軍の兵士、よく聞け。今、兵糧のとぼしきは、貯への少ないためではない。したひ寄る人馬の多いためである。謹んで、朝廷の御恩にむくいまゐらせ、將軍の命令に從へ。まして、江州より糧船が、近日中に參る。皆、靜かに聞け。騒ぐでない。（歸つて復命する）元帥の軍令に從つて、三軍に諭して參りました。

（内にて、また叫ぶ聲がする）

左良玉　騷が、段段軍門に近寄つて來た。お前たち、行つてさとして來い。（立つて、歌ふ）

しのべ
この一夜さのすき腹を
やがて江西の船が來よう
わしは南京に檄を飛はし
檄をとばし
陸相に申し
帝にねがつて
この鎭臺をうつし家をうつす
みゆるしをこはう
われらの鎭臺をうつし家をうつす
みことのりを乞はう
糧に就いて
汝らをやすめ

馬をやすめ
屋形船を
燕子磯の邊りにつないでたのしまう
兵らよ

二將　（令箭を持つて、內に向つて言ひきかせる）　元帥の命だ。三軍、よく聞け。糧船の來次第、直ぐに、米を支給しよう。だが、船の遲さに、すき腹の待ちがたきも怕れ、不日、漢口の兵を撤し、食を求めて南京にうつり、永く欠乏の虞なく、共に、滿腹のよろこびを分ち合はうと思ふ。各自、よく合點せよ。決して、騷ぐこと勿れ。

（內にて、歡呼の聲）

內　しめた、しめた。皆、その用意だ。歸京の準備だ。

二將　（左に復答）元帥に申し上げます。皆、大よろこびで、退散致しました。

左良玉　もう、かうなつては、術のほどこしようもない。日を決めて、鎭臺をうつし、暫く兵を休ますか。（考へる）だが、待てよ。勅命も待たずに、勝手に歸ることは、いくら、聖恩の寬大にして、かりに、われらを罪し給はずとするも、世間の批議は免れまい。成程、これは、も一度考へ直さう。
兵の心をしづめんも

今は法なし
食をもとめて京にかへる
即ち靜肅
誰知らう、一片
陽にめぐるこころ

（退場。内にて軍樂。門をとぢる。四卒入る。二將、對談）

甲　考へて見ると、天下には、偉い武將も多いが、元帥程の人も居らぬ。兵としても左樣、わが武昌は中國一さ。明日、江に順つて、東へ行けば、誰か、刄向ひ得る人のあらう。一致して、元帥を立てて一直線に、南京をかすめ、天子の旗をひるがへして、北京に進み出るのもいいだらう。

乙　（手をふつて）左將軍は、忠義一途の人。たはけたことは言ひつこなし。むしろ、飯のある方に、家をうつして、存分に、食ひ飽きることだなあ。

甲　だがな。一度南京へうつつたら、京は大騷動だらうよ。よしんば、北京は取らなくても、この惡名は免れまいて。

乙　皆ねがふ、うつり住まばや。

甲　幕府の門の夕暮に、君聞き給へ、胡笳の聲。

乙　千古の英雄、よく考へよ。

甲　危ぶな、危ぶな、船を東に下し給ふな。　　「詩」

第十幕　書を以て難を救ふの場

登場人物

柳敬亭
侯朝宗
楊文聰

柳敬亭（登場）

獨り自慢の鼻高親爺
古今話はこれ生涯
ただいやなのは御用太鼓よ
そこで裏屋に茶で暮す　「詩」

（笑って）わしは柳敬亭ぢや。幼い時から、無宿者の世間をわたり歩いて、いつとなく、講釋師になりはなつたが、ただいたづらの、穀つぶしにはなりたくない。（一禮して）諸君見たまへ、かく云ふわたしは、一體

何に似て居りませう。丸で、閻魔にそつくりでせうがな。何故となれば、この一册の大帳面は、多くの古人の、過去帳にござりますれば。又、一體の、彌勒佛にも考へられませうか。この、突き出した布袋腹に、浮世の、榮枯盛衰をしまうて置きまするで、よいかな、鼓板をそと叩く。そら、風ぞ。そら、雨ぞ。そら、雷ぞ。そら、露ぞ。舌がちよつとはねる。そりや、月旦よ、春秋よ。少しでも、寃をふくむの、孝子忠臣にはいかなる氣焔でもあげさせようし、得意で世を去りをつた、奸雄、邪黨のやからには、是非、存分に、人禍天誅を加へてやりたい。これが即ち、天意を補ひ、人を救ふの微權で、また、褒貶の妙用といふもの。(笑ふ)これは、わたしの出まかせだが、かへつて、又、これが面白いのさ。昨日、河南の若樣から、茶代の前錢、けふの晝過ぎに來られて、わたしの講釋をきかれようとの仰せ。どれ、鼓板でもとり出して、客寄せのもうけ仕事にかかるとするか。(鼓板をとりだし、敲きながら、うたふ)

退屈まぎれの出放題
皆、その中の酸いも甘いも
選りどり御勝手
古來十萬八千年
夢のごとくに飛んで今日
天下動亂

第十幕

弓、てつぱうの荒仕事
名利のつけ合ひ
こうるさい
そんな二輪加は、
あの陳搏に
おまかせ申して
高枕
こちや高枕

侯朝宗　（登場）

花園に美人をたづね
たそがれに軍談を聴く　「詩」

けふは、柳敬亭の講釋をきくことにしよう。おや、うちで、鼓板の音がするな。もう、誰か、お客があるのかしら。（會つて、互ひに笑ふ）客もゐないのに、何を獨りで喋舌つてゐるんだ。

柳敬亭　この講釋は、私の本職。だから、君方が、書齋で、詩を吟じたり、琴を彈いたりすると、同じわけです。人が聞かうと、聞くまいと、そんなことには頓着致しませぬ。

侯朝宗　（笑つて）成程。

柳敬亭　けふは、いつ時代のお話をしませう。

侯朝宗　別に、註文はない。一つ、豪義なやつをきかしてもらひたい。

柳敬亭　ですがね。榮華の一くぎりは、沒落の初めですよ。面白事は、心配の手先と言つたわけでね。いつそ、亡國の、はかない國民の話。さて、その幾くさりで、皆樣の淚をおながしした方がいいでせう。

侯朝宗　（感服する）流石は敬亭老。見上げた御見識だ。敬服、敬服。

楊文驄　・　　（急いで登場）

　　鐵のくさりを、江に沈めぬ注意せよ
　　白旗なびかう、南京の城　　　　　　　「詩」

わしは楊文驄。一大事出來に就いて、侯君と、相談せねばならんのであるが、方方をたづねて、やつと、ここにゐられることがわかつた。では、はいらうか。

侯朝宗　（楊を見て）これは、いいところへ來られた。丁度、敬亭老の講釋を聽いてゐるところで。

楊文驄　（せき込んで）何をねぼけて、軍談どころですかい。

侯朝宗　君こそ、何をそんなにあわてて。

楊文驄　ほう。少しも御存じない。では、お話ししませう。左良玉が兵を率ゐて、南京をかすめ、更に北京に攻

め入らうと、くはだてたのです。兵部尙書の熊明遇は、ただ茫然と、呆れてゐるばかり。そこで、わたしに賴んで、よく、あなたの御考へを聞いて來いとの話で。

侯朝宗　わたしにだつて、別に妙案はないが。

楊文驄　かねがね承つて居りますが、あなたの御父君は、左良玉の恩人でいらつしやるさうで。それで、わたしの考へるには、一つ父君の御手紙をいただいて、かれに說諭してお貰ひ申せばと思ふのです。屹度、直ぐにかれは退却いたすに相違ございません。いかがでせう。

侯朝宗　それもいいでせう。併し、父はもう廟堂から退いて、隱居の身の上ですから、果してその手紙が、きつと役に立つとは受け合ひませんよ。それに遠いところだから、今の今には、間に合ひますまい。

楊文驄　もともと貴郎は、伊達が看板の方。その貴郎が、この國家の大事をよそに見ると言ふことがあるものですか。父君に代つて、一筆したため、目の前の危難を御救ひ下さいませ。父君へは後日申し上げても、別に御責めになることはないと思ひますが。

侯朝宗　臨機應變も時にとつてはいいでせう。家に歸つて起稿しますから、萬事はその上で御相談しませう。

楊文驄　さう手間どつてはいられません。今直ぐ手紙を出しても、間に合ふかどうかわからないのですから。

侯朝宗　さうですか。では、ここで書きませう。（侯、手紙を書く）

この親爺

身の程を知らぬわざながら

一筆啓上

將軍よ

とく考へよ

名のなき兵は人うたがふ

軍旗は東にうつし給ふな

高帝さだめたまふ

南京の都に

みささぎあり

ゆめにも

馬は入れ給ふな

かゝてがなければいかにも致さう

よし窮すればとて

わすれ給ふな

一片耿耿の心

第十幕

（書き終つて、楊に見せる）

楊文驄　結構、結構。はげしいながらに巧みで、情あり、理ある文面。きつと、この通りに、うまくまゐりますでせう。御機轉の程、敬服の至り。

侯朝宗　さう。ですが、熊大司馬におわたしして、もう一度、よく手を入れて貰つて下さい。

楊文驄　何、結構です。わたしから、お話しした丈で充分。（心配顔する）だが困つたな。手紙は出來たが、持つて行く人がない。

侯朝宗　もともとわたしは旅の身の上。二人の子供をつれて來たばかり。手紙の届けやうがない。

楊文驄　しかし、このやうな密書、うかつな人には頼まれぬ。

侯朝宗　困つたなあ。

柳敬亭　いや、御心配なさるな。このおいぼれをおやり下さい。

楊文驄　貴方が行つて下さるか。それこそ、もつけのさいはひだが、ただ途中で、しらべられたらどうなさる。

柳敬亭　實を言へば、この柳麻子、本姓は曹と申します。身の丈は九尺程ありますが、あの曹交身とちがつて、粟ばかり食べてゐるわけではございませぬで、臨機の口さき、應變の腕前、いささか、心得もございまする。

侯朝宗　しかし、左良玉の軍門は、至極嚴重で、いちいちしらべて、無用の者はいれぬとのこと、君のやうな老人に、うまく通れるかな。

柳敬亭　又、あんなことをおつしやる。それは、講釋師のいつもの手のうち、行かうと思へば行きますし、行きたくなければ行かぬまで。（立つて、歌ふ）

あなたはそこですらすらと
手がみをつくる
わしはわし、ここで
腹は決つた
揚足とりに口喧嘩
それらはわしに
おまかせ下さい
龍宮の
乙姫さまにやるふみなれば
海の底にも參るべう
臨機應變
行きにやこそこそ
かへりにや大手

首尾よう參れば
御手拍子、喝采

楊文驄　素的、素的。しかし、手紙の文句は、君が上手に說明してくれないと、役に立たないのだが。

柳敬亭　……（うたふ）……
說明なんど、何、無用
腮骨たたくまでもなく
ぶらりと出かけ
舌一枚でやつつけりや
あんな軍勢
空に消し飛ぼ

侯朝宗　何と言つてやつつけるね。

柳敬亭　言つてやりますよ。賊を防ぐ氣か、それとも、手前が、賊になる氣か。一體、どちらだ。返答いかに、さあ、さあつてね。

侯朝宗　そいつはいい。わたしの手紙より、ずつとわかりがいいぞ。

楊文驄　では、早く行つて呉れ給へ。わたしが旅費の工面をしよう。今夜、直ぐ立つてくれれば、尙都合がいい

のだが。

柳敬亭　無論、承知承知。（叮嚀に挨拶して）ではお先へ。（退場）

楊文驄　柳敬亭が、あんな立派な人物とは、少しも知りませんでした。

侯朝宗　いや、わたしは、つねに、わたし達の仲間だと誇つてゐました。講釈などは、餘技ですよ。

手がみ一つに
かこつけて
柳の舌さき
口前で
寄手の兵が追へるなら
夕べの山に靄ふかく
この南京の城は靜か

楊　紙きれ一つ、將軍の器量に勝り。

侯　荊州の船姿も見せね。

楊　名士はすべて江東生れ。

侯　笑つてのぼる大將の座。

「詩」

第十一幕　營門に到着の場

登場人物

柳敬亭
左良玉
副官
兵卒二人

（二人の兵卒登場）

（歌ふ）

兵卒一　賊を殺して
賊の荷物を物したろ
民を救けて
民の家をば物したろ

いつそ
お上の倉をせしめて
一擧三得
兵士一人で
三人前を物したろ　「詩」

兵卒二　おい、おい。今では、さう歌ふんぢやねえぜ、
兵卒一　ぢやあ、お前歌つて見ねえ。
兵卒二　（歌ふ）

賊も不景氣
盜つた得物もあぶれ勝
民も逃げ出す
のころはあき家
お上も貧乏
お倉は閉め切
千に一つの

割前もなし　　　　　　　　　　「詩」

兵卒一　それぢやあ、こちとらのやうな、すき腹兵隊は、餓死して仕舞ふより外には仕様がねえぢやねえか。

兵卒二　まあ、早く言へばさうよ。

兵卒一　この間、騒いだ時には、元帥閣下は、あわてて南京盗奪をお許したされたが、あれつきり音沙汰なしだ。さては、お心がはりになられたな。

兵卒二　向ふがそんなつもりなら、こちらは、もう一ぺん騒ぐだけさ。何でもねえ。

兵卒一　それはさうと、軍門へ行つて、朝の點呼を受けてから、それからあとの相談にしようぜ。餓死がいやなればこそだ。好きこのんで、誰が軍令などを犯すものか。（兩人、退場）

柳敬亭　（包を背負つて登場）

葉のない林を駈け出れば
落葉の音のかさこそ
一むれのあしの花
蓼はくれなゐ
風に吹かるる白ひげの
道化親爺の旅なれば

白の帽子
湛盧のかたな、楚に入る
これが釋師の今東方と
誰が知らう

わしは柳敬亭。風を截り、雨を侵して、江づたひにやつて來たが、どこにも兵士の亂暴の跡など、ありはしない。ほんの、噂だつたのだらう。うれしや、もう、ここが武昌の城外だ。ぢやあ、この草原に包をひらいて、靴や帽子を取り換へて、身仕度して、手紙をばとどけに行くとしよう。（地面に坐つて、靴や帽子などとりかへる）

二卒

（登場）

烏の叫びよ
餌のない烏の
城にあさけの雨がふる
石ころ道のけぶるむかうに
軍門半里

（指す）

風にひろひろ
旗じるし
きこえる空の
笛やつづみや
　腹のすいたは
つらいね
月の三八や
朝の點呼か

向ふに見えるのが軍門だ。さあ、さあ、急いだ。

（柳敬亭、起きあがつて、一禮する）

柳敬亭　もしもし、お二人の兵隊さん。將軍樣の軍門は、どちらでがせう。

兵卒一　（卒二にささやく）このぢぢいは、どうやら、江北なまりだ。こいつ脫走兵かな。それともごまのはひかな。

兵卒二　おい、おい。あいつを殺して、持金をさらつて、飯でもくはうぢやねえか。

兵卒一　よからう。贊成、贊成。

兵卒二　（柳に）將軍家の軍門かね。

柳敬亭　いかにも左樣で。

兵卒一　俺たちが案內してやらう。（繩を投げて、柳をしばる）

柳敬亭　何故、わしをお縛りなさるので。

兵卒二　俺らは、武昌兵營の巡邏兵だ。貴樣をしばらないで、誰をしばるのだ。

柳敬亭　（二卒を、押して地に倒し、指して笑ふ）このめくら乞食め。成程、腹ぺこと見えて、よく、ころがり居るわ。

兵卒一　お前がどうして、俺たちのすき腹を知つて居るんだ。

柳敬亭　お前たちの、すき腹を知つて居ればこそ、俺がここへ來たのだ。

兵卒二　では、お前さんは、兵糧を持つてこられたのかい。

柳敬亭　兵糧方でなくて、何んだと思ふ。

兵卒一　やつ。これはめくらだつた。さあさあ、お荷物をお持ちしませう。軍門迄、御案內つかまつりませう。

（二卒、柳と同行）

柳敬亭　（うたふ）

波の音たかく

城をめぐる

寂しや
鸚鵡洲ひろびろ
空に彫られた、黄鶴樓
犬の病み鳴き、尾垂れどり
けむり細細、粥も啜れぬ
無慘さよ
町はせうでう、ひつそり閑
狼どもの足の跡よ
そびゆる城の
荒れしさま
耳を刺すさけび
喇叭のひびき
馬のいななき、あな

兵卒二　（指して）ここが、元帥閣下の軍門だ。（柳に）御老人、ここでお待ち下さい。御取次をねがつてあげます。
（太鼓を打つ）

副官　（出る）

元帥閣下の偉大さよ
出でては、帝王の尊さを凌ぐ　「詩」

（問ふ）今、門の外で、太鼓が鳴つた。何事か、見て來い。

兵卒一　番所で、一人の見知らぬ男をつかまへました。口では、兵糧を送つて來たと申しますが、眞僞の程はわかりませぬ。軍門に迄連れて參りました。いかが取り計らひませうか。

副官　（柳に問ふ）お前は、兵糧を送つて來たとの事だが、何、公文書でも持つて來たかね。

柳敬亭　（答ふ）公文書は持參しませんが、お手紙は持つて參りました。

副官　さては、怪しい奴。

北から來たとは嘘であろ
そりやをかし
手がみ一封
さしだし人もなく
そのいひわけは出まかせ
瓢箪から駒が出る

空から米がふる
笑止千萬
少しも辻褄があはぬ
さてこそ貴樣
脫走兵な
それとも、泥棒
いづれかに決つた

柳敬亭　これは驚いた。泥棒や脫走兵なら、何しに軍門に參りませう。

副官　それもさうか。では、手紙があるなら、取り次いでつかはさう。

柳敬亭　これは密書。ぢきぢき、元帥におわたし申したい。

副官　此奴、益益あやしいぞ。元帥閣下に申しあげ、おとり次の濟む迄、貴樣は、ここに待つて居れ。

（二卒と柳、退場。音樂裡に開門、兵卒六人、皆、軍器を持つて、向ひ合ふ）

左良玉　（軍服にて登場）
荊襄の雄鎭、大江のほとり
國の安危を一身に

日日糧食に心をうばはる
どうして此の戰を
笑つて鎭められよう　「詩」

（座について、いひつける）この間は、すき腹の兵隊をなだめるために、南京に行かうといつはつたが、よく考へて見れば、食糧をあてに兵をやるより、兵をあてに、食糧を取り寄せる方が勝だ。九江から、米を送つて來るとの話だ。おつつけ、もう着くであらう。けふは點呼をよすによつて、各、陣地にかへつて、食糧の來るのを待て。

副官　畏りました。（退場。又、直ちに登場）元帥閣下の御命令だ。今日の點呼を免す。三軍の兵ら、皆陣地にかへれ。

左良玉　何か、報告することがあるか。あつたら早く申せ。

副官　別に何も御座いません。ただ兵糧を送つて來たとか申す、老人がございまして、元帥閣下に、お目通りを願つて居ります。

左良玉　（よろこぶ）何、兵糧が參つたか。おう、おう。（問ふ）して、持參の文書と言ふのは、どこの役所からだ。

副官　公文書では御座いません。密書ださうで、直接にお渡ししたいと申して居ります。

左良玉　それはをかしいな。ことによると、賊の間者かな。（いひつける、左右、聽く）お前たちよく氣をつけてを

れ。（副官に）そいつに、膝行して參れと言へ。

（副官、柳を呼んで、進ます。左右又武器を執つて構へる、柳、進み、入つて見え、一禮する）

皆　承知致しました。

柳敬亭　元帥閣下に、お目通り仕ります。

左良玉　一體、貴樣は誰だ。恐れげもなく、此處に參つて、無禮至極な。

柳敬亭　わたくし奴は、一介の平民、何の無禮を働きませう。

わたくしめは
奥山の老ぼれ木こり
王の前にも禮知らず
ぴかつく槍も
きらめく劍も
木ぶかい森や
むらがる木立
草むらよぎる
狐、狸の遊び事

うそぶく虎の
哮えたきや哮えよ
何んであらう
あらをかし
あらをかし
鬼づらをかし
ひとり旅故脅かされて
せん方なしの最敬禮
とは云へ、何の無禮しましよ
（手を拱して、禮をする）
おゆるし、おゆるし
軍中の禮儀はちつとも知らぬ
（笑ふ）
おつと、張合ぬけ
手紙が御座ります

元帥閣下
よく、よく御覧下されい
左良玉　（聞き返す）誰からの手紙だ。
柳敬亭　歸德縣の、老先生からの御手紙にございます。
左良玉　侯司徒閣下は、わしの恩人だ。お前はよく知つてゐるな。
柳敬亭　わたくし奴は、侯先生のお邸に居りまするで。
左良玉　（拱手の禮をして）これは失禮した。（問ふ）手紙は、どこに持つて居られる。
（柳、手紙を差し出す）
これ、門を閉めさせろ。
（音樂裡に閉門、皆退場）
まあ、お坐りなさい。
（柳、側に坐る。左、手紙を見る）
情こまやかに
あたたかく
幼な子に敎ふるそれか

この手紙

この文面は、一寸見ただけでは、よくわかりにくいが、鎮臺を守つて、兵を內地に移すなとの事。（歎ずる）

恩人、侯元帥よ。恩人、侯元帥よ。お知り下さい、この左良玉は、

一片の忠心

神神も御照覽

君が海より深き御恩

など背いて

その推薦の名譽を汚しませう

（柳に問ふ）貴方のお名前は、

柳敬亭　申し遲れました。わたくしめは、姓は柳、號を敬亭と申します。

（卒、茶を捧げて登場）

左良玉　敬亭殿、お茶をおのみ下さい。

（柳、茶をうけ取る）

君も御承知だらうが、この武昌城は、かの張獻忠が、一たび、放火盜奪を致して以來、家と云ふ家は、十に九までなくなつて仕舞つた。わしが鎮守して此處に居ることは居ても、まぐさはなし、兵糧はなし、兵士

も毎日騷動に日を送り居る始末。わしにも、どうにも、法がつかなくなつて仕舞ひました。

柳敬亭　（怒つて）元帥閣下、何ですつて。昔から、よく申します。兵は、將に隨つて轉ずと。大將が、兵の後からついて歩くと言ふことがありませうか。

君は將軍
手ににぎる
六韜三略
千軍の棟梁
山こそうごけ
令は微塵も動かすな
飢えたる兵ら
さわぎどよめいて
京を侵す
手をこまねいて
彼らのするに任せ
君に何らの策なければ

いかでか
惡名をまぬがれよう
いかでか
惡名をまぬがれよう
あはれ
三軍統帥の權
君にして
執り得ずんば

（茶碗を投げる）

左良玉　（怒つて）何をする。無禮者。茶碗を投げ棄てたな。
柳敬亭　（笑ふ）何の私めが無禮を致しませう。つい、自分の歌につり込まれて、手のまゝに投げて仕舞つたので。
左良玉　手のまゝにと言ふのは、心が、それを腹へ切れぬと申すのか。
柳敬亭　心が、腹へ切れる位なら、こんな騷ぎは、しでかしませぬ。
左良玉　（笑ふ）成程、敬亭殿の言葉にも一理ある。手の者の腹があまりへつたので、內裏に行くことを許したのであるが、それも、窮餘の手段に過ぎなかつた。

柳敬亭　わたくし、遠方より参つたので、莫迦に腹がへつて仕舞ひました。だが、元帥閣下からは、まだ何のお聲がかりにも預らない。
左良玉　すつかり忘れてゐた。膳部を出すやうに直ぐいひつけるから。
柳敬亭　（腹をさする）腹がすいた、腹がすいた。
左良玉　（催促する）馘間奴が。早く膳部を運はぬか。
柳敬亭　（立つて）とてもかなはぬ。内へ行つて頂戴しよう。（内へ行きかける）
左良玉　（怒る）何故、内へ行かれる。
柳敬亭　（ふり返つて）でも、腹ぺこだ。
左良玉　いくらすき腹だつて、内に行くことが許されるか。
柳敬亭　（笑ふ）いくら腹ぺこでも、内裏へは行けないつて。元帥閣下、やつと、おわかりだな。
左良玉　一句一句、わしのしくじりをやり込められる。いい辯士だ。わしの幕下にも、あなた位の人が、一人居てくれればな。

つきあひの日こそはないが
わしはひとりの東方朔を見た
その胸中に祕められた

事の數數
さても上手に
ぢかの諫言、又
それとない、いさめ
お好み次第の悧巧者

柳敬亭　どう致しまして。ただ、のらくらと、その日ぐらしの、老ぼれに過ぎません。

左良玉　（問ふ）　敬亭どのには、貴族方の間に、出入なさるであらうが、けふは一席、是非伺ひたいもので。必ず、立派な藝でせうで。

柳敬亭　子供の時から、碌に學問を致しませず、何の藝などございませう。少しばかりの野史を讀み、口から出放題の講釋。それが、吳橋の范大司馬、桐城の何老相に、飛んだお褒めにあづかつたが機緣で、貴族方にも隨分と、お近附きになりましたが、いや、汗顏の至りで。

われ稗史小說に
不平を吐き出し
美しの景色に向つて
にが酒をのむ

ふるへる手もて叩き出す
小つづみよ
可愛の歌板
一字一字に
忠孝かがみ
軍ばなし
ひらめく舌さきは
鞘ばしる、利劍
轟く雄たけびは
いかづち、大づつ
冷かし、煽て
筆墨の力はいらぬ
げに豪傑よ、我が友
勘定違ひは疾く疾く
帳消しになされ

第十一幕

左良玉　いや、實にいい氣持だ。今の今迄、敬亭どのに、こんな腕前があらうとは、夢にも知らなかつた。どうぞ、長くお留り下さい。これから朝夕に聽聞いたしたい。

今昔ばなし
日日に拜聽
雨に、風に
この結ぼれをとかう
君は蘇、張の
講釋上手
わしの弓、櫂は
幷幕もしりへにしく
ただ、籠る兵馬のけむり
いつの日に晴るる

柳敬亭　それはさうと、元帥閣下。内裏に向つて兵をうつすとは、どんな考へでいらつしやるので。

左良玉　この眞心は、神神も御照覽あれ。勸說を待つ迄もなく、文責を待つ迄もない。

左　わしの心は水に似て、夕べの青い空を照らし。

柳　居ながら、龍顔にまみえて、道も一歩。

左　天下を二分して、その一つを保つ。

柳　東に、海門の潮こそ見ざれ。

「詩」

第十二幕　秦淮、別れの場

登場人物

楊文驄

阮大鋮

史可法（淮安の漕撫史）

馬士英（鳳陽の督撫）

蘇崑生

侯朝宗

香君

貞麗

用人

このもの

楊文驄　（冠帶して登場。歌ふ）

東南錦の國國
英雄割據してふんぷん
今くりかへす
周郎が昔のうらみ
江の水
東に向つてはしる

わしは楊文驄。きのふ、熊司馬の命に依つて、侯氏に、左良玉の北上を止める手紙を書かせ、柳敬亭に、大急ぎで持たせてやつた。しかし、まだ不安なので、一面には朝廷に奏聞して、彼に官爵を加へ、その一族にも官職を與へて、又一面には、各處の督撫、及び在城大小の文武官に、通知して、議事堂に會議し、かれが糧食を助けてやらうとの相談。これも是非ない調停の法だ。わしと阮圓海とは、休職の身ではあるが、御呼び出しがあつた程に、少しも早く參らう。

阮大鋮　（冠帶にて登場）

世は盤上の、黑白の爭か　「詩」
舞臺の上の役者かも

（楊を見て）おや龍兄、今日は。けふは何でも、軍についての會議だとて、お呼び出しが參つた。ほつとく
わけにも行くまいて。

楊文驄　事態重大だ。わしらの如き非職者は、意見は述べずともだ。出席さへすれば、それで充分だらう。

阮大鋮　何と言はれる。

　朝廷の事は
ゆめ、不眞面目には爲給ふな
太祖の都、今し搖ぐ
取り越し苦勞は無用のわざぞ
反兵の東上
內應のみ怖ろし
角の聲
鼓の音
城に震ふ
帆、高高と
幟飛んで

追風江に滿つ
都取ること明らかなれば
ひそかに門をひらくもあらう

楊文驄　確かな證據もないのに、うつかりしたことを言ひ給ふな。

阮大鋮　聞き込んだ事があるのだから、言はずには居れぬ。

用人　（登場）

あつち、こつちで、不穩な噂
日毎、日毎に、會議、會議　「詩」

申し上げます。淮安の漕撫、史可法樣、鳳陽の督撫、馬士英樣がお見えになりました。

（楊、阮、出迎へる。史可法は白鬚、馬士英は無髯、各冠帶で登場）

史可法　天下の軍糧、運漕のつとめ
無能の儘に空しく帶ぶ、三公のつるぎ　「詩」

馬士英　長陵の土、國の命數を卜す
さあれ、徒に戰火の絕ゆるを願ふのみ　「詩」

（楊、阮、禮をする）

史可法　（用人に問ふ）兵部尚書は、まだお見えにならぬか。

用人　けふ、朝命によつて、兵の檢閲に參られました。

馬士英　ぢやあ、會議もお流れだな。どうしたらよからう。

史可法　（歌ふ）

黄塵起つて
王氣昏く
孔明なし、金陵の軍
檄は飛び交ふ、幕府山
五馬渡をくだる櫓船
起て、揮へ、管仲
江東、まさに君を待つ
かかる時節
清談何の用ぞ
共に身を棄て
甲斐ない身を棄て

邦の危難に當らうず
いざ君、いざ君。

楊文驄 さう、御心配なさらなくも大丈夫ですよ。左良玉は、もと、侯司徒の部下でしたから、昨日、手紙をつかはして、東上の中止を勸めてやりました。まさかの事もございますまい。

史可法 わしも聞いたが、熊司馬の思ひつきとは言へ、皆、君のお骨折です。

阮大鋮 皆、人がいいなあ。左良玉の來るのは、內通するものがあるからだ、と言ふ噂を御存知ないのですか。

史可法 そりやあ、誰だ。

阮大鋮 わたしと同年の進士である、侯恂の息子、侯方域です。

史可法 あれは、わしの先生のお子だ。復社の內でも錚錚の人物。よもや……何かの間違ひだらう。

阮大鋮 貴方樣は御存知ないのだ。かれと左良玉は親友ですぞ。つねに手紙のやりとりをして居ります。一日も早く、かれを除きませんと、先へ行つて、屹度內通を致しますでせう。

馬士英 いかさま。一人の者を惜むばかりに、滿城の命を失ふやうな仕儀になつたら、それこそ一大事だ。

史可法 馬鹿な。まして圓海氏は非職の身分。國家の大事に就いては、迂闊なことを言はれないのが身の爲で御座らう。（別れる）では、失禮する。これなん、横着者に正論なく、公儀の議論は皆私情による奴だ。（退場）

阮大鋮 （指して恨み、馬士英に向つて）どうして、史道鄰（可法の事）殿は、席を蹴つてお歸りになられたのでせう。

わたしの申す事は、皆、一一、證據のあることです。承れば、先日、又も柳麻子に賴んで、手紙をやり居つたさうで。

楊文驄　これは又、陷し入るるも甚だしい。敬亭の出かけたのは、わしの指金です。それに、手紙は、わしの目の前で書いたのだ。その文面の用意加減は、到れり盡せりで、あれで、疑ひをうけるやうなら、どうかしてゐる。

阮大鋮　龍友兄は御存知ないのだ。あの手紙は、皆、暗號で出來て居て、よそ目にはわからないやうになつて居ります。

馬士英　（うなづく）うん、成程。そんな奴は殺して仕舞へ。わしは歸つて、直ぐ捕縛さしてやらう。（楊に）妹婿殿、さあ、御一緒に歸らう。

楊文驄　有りがたう。一足お先へ、どうぞ。直ぐおあとから參ります。

阮大鋮　（馬に）わたしと、お妹婿は義兄弟であるのみならず、いつも、貴方のお噂を申しあげて、御深切を感謝して居りまする。お目にかかつたのを幸ひ、けふは、夜もすがら、お話して、わたくし奴の心構へも、おきき取り願ひたいと存じます。

馬士英　前前からも、御贔屓に預つて居る。これからもよろしく。（一緒に退場）

楊文驄　よく、あんなことが言へるわ。侯兄の素行は、よく知らないが、手紙の事だけで言へば。

この冤罪をどうしてすすご
かの作りごと
曾參、人を殺す
このうらみ
どうして忍ばう
強ひて錄す
陳恒、君を弑すと

さうだ、かれにしらして、早く、身をかくさせよう。（行く）

花にねむり
香に酔ひ痴れて
ゆめうつつ
ほんに薰籠の疲れごこち
誰知らう、今宵
むごい彈めが飛び込んで
この鴛鴦のつがひを散らす

ここは、李家の別院だ。先づ、起さう。

（門を敲く。内にて音樂。蘇崑生出る）

蘇崑生　どなたな。

楊文驄　早くあけてくれ。

蘇崑生　（門をあけて、楊を見）　これは、これは、楊樣。して、こんな夜ふけに、お遊びに。

楊文驄　（認める）　ああ、蘇崑老か。（問ふ）侯兄、おいでかい。

蘇崑生　けふは、香君が、新しい歌を一つ濟ましたので、今、樓上で、その歌を聽いて居られます。

楊文驄　一寸、お顏を拜借して貰つてくれ。

（蘇、入つて呼ぶ。貞麗に侯、香君と共に出る）

侯朝宗

嬉しいなさけに、ほろよひ酒

寒む夜の床に花とこもる　　「詩」

楊兄、今晩は。貴方も夜明しですか。

楊文驄　君は、何にも、御存知ないのだ。それどころか、一大事が起きて、やつて來たのです。

侯朝宗　御冗談でせう。一大事とは。

楊文驄　けふ、議事堂に集つた折、阮圓海が、皆に、貴方と、左良玉が、舊友であるによつて、つねづね、手紙

をとりかはして、内應し合つてゐると申した。そこで、當局の方方は、貴方を捕縛しようとしてゐる。

侯朝宗（驚く）わたしと阮圓海の中に、どんな恨がある。それが、どうして、そんな目に合はさうとするのだ。

楊文驄　多分、嫁入道具を突き返された折の恨を根に持つて、こんな目に合はせるのでせう。

貞麗　ぐづぐづして居る場合ぢやありません。早く、高飛びの御用意をなされませ。側のものに、連累を喰はして下さいますな。

侯朝宗　尤もだ。（心配顏に）だが、香君。お前との新婚の宴、あれをうつちやつて行かれようか。

香君（改つて）貴郎は、御自分でも、豪傑をもつて任じられる方、それが、まあ、何と言ふ女女しい事でございます。

侯朝宗　一言もない。だが、どこへ行つたらよからう。

ちちのみの父

たらちねの母

ともに居ませど

ともに居ませど

おぼつかなのたよりや

いまはや

戰ひ起る
戰ひ起る
ふるさとの
その半ばは荒れつ
わがふるさとの道はいづこぞ
天かけり、地にしもぐれど
身を容るるに處なし
いづこに行かん
烏羽玉の
闇にまよふ

楊文驄　さう、あわて給ふな。少し、考へたことがある。

侯朝宗　敎へて下さい。

楊文驄　會議の折に、漕撫史可法と、わたしの舅が居合はしたが、非常に舅の言葉は、貴郎に不爲だつた。史漕撫が獨りで辯解してゐられた。それに貴郎のお宅とは、以前から御懇意ださうで。

侯朝宗　（考へて）いかにも、史道鄰殿は、父の門下生でした。

楊文驄　そんなわけなら、丁度、都合がいい。あの方と一緒に、淮においでなさい。そしてお家からの、おたよりをお待ちなさい。

侯朝宗　それはいい考へだ。お考へ通りにしませう。有りがたう、有りがたう。

香君　一寸、お待ち遊ばせ。旅の支度をして差しあげます。（香君、旅支度などととのへる。）

ゆめ、ゆめ、ゆめ
はかない夢よ、皆ゆめよ
君とわたしの
わたしと君の
わかれのつらさ
ここしばらくはこらへましよ
結ぶまゆ根のうれひの雲よ
香はわたしの思ひのしるし
青のしとねのうるふまで
しとねはしつかと結びつけ
くすりは文庫に入れました

どれも涙に濡れました
（こもの、登場。侯、香君とわかれを惜む）

侯朝宗　ここ、しばらくの別れだ。近い内には、又遭へるだらう。

香君　（泪を拂ひながら）　と申して、どこもかしこも彈けむり、いつ、又逢へることでせうやら。

逢うた嬉しさ
別れのつらさ
ほんのたまゆら
又逢ふことの
雲のうへ

貞麗　あの、見まはりの兵隊が、捜しに來るといけませぬ。少しも早く、さあ、お出かけを。

侯朝宗　（歌ふ）
吹くよあきかぜ
追はるるわが身
暫しのかりねもゆるされず

史漕撫は、どこにお居ででせうか。

蘇崑生 何でも、公用で御上京の時は、いつも、市隱園に居られるさうです。わたしが、御案內しませう。

侯朝宗 さう願へれば、實に結構で。（侯、蘇、こものと共に退場）

貞麗 こんな間ちがひは、もともと、楊旦那から起つた事、この始末も、旦那樣にお願ひしませう。明日にでもつかまへにやつて來たら、どう致しませう。

楊文驄 御安心なさい。侯樣さへおいでがなければ、何の關係もないのだから。

楊 逢ふもいぬるも、いづれやら。

香 歌、酒のあと、しとねのなかはまだあたたか。

貞 花一枝のねむらで、

楊 朝の門邊に嵐吹きなむ。　「詩」

第十二幕

第十三幕　崩御哀悼の場

登場人物

左良玉
柳敬亭
袁繼咸（九江督撫）
黄澍（巡按御史）
傳令使
將校一
早馬の者

傳令使（登場）

江の向ふの漢陽の樹樹
青くけぶる

畫中の山
畫中の人
あなあはれ
黄鶴樓のあたり
朝朝によぎる
騎馬の砂煙

「詩」

わたしは寗南元帥府の傳令。元帥閣下が武昌を元通りになされた功によつて、侯爵に成られた。所が、又きのふ恩命が下つて、太傅の官を加へられ、若様の左夢庚様も、總兵の職に任ぜられた。特に巡按御史黄澍閣下を遣はされて、元帥府に於て、その旨を傳へさせられる。けふは、九江の督撫袁繼咸閣下が、糧船三拾艘を送つて、御自身參られて、支給された。元帥閣下には、殊の外のお悦び。わたしに命ぜられて黄鶴樓に於て酒盛を催し、お二人様におもてなし申し上げ、江の景色を肴に、お酒をお勸め申せとの事。(向ふを見る)

とほく見えるは晴川の梢
草かをるあうむ洲のほとり
人人の歡歌
三軍のよろこび

げにうれし
大平の景色
遠くで先ぶれの聲がする。間もなく元帥もおいでだらう。どりや、酒もりの用意でも致さう。
（臺上に、黃鶴樓の額を揭げる。傳令、席を設け、牀を置く。將校ら、旗さし物をひらめかし、軍樂を鳴らして、先導をつとめる）

左良玉　（軍裝して登場）
春はのどか
ひかる風物
水に溢れる草の青み
そのかをりや
空に刺さる黃鶴の樓
聞える笛の音、『梅花落』
花の蔭に車を入れて
物をたうべ
くつろぐ

われぞ將軍
大刀物わざはむろんのこと
また風流の詩人

われこそは左良玉。今日黄鶴樓に酒宴を催し、袁、黄の二卿を請じ、酒を飲んで江の風景を眺めようと思ふ。早く參られればいいが。（吩咐ける）これこれ、將卒共は樓下に待たして置け。

（衆、答へて退場。左、登樓）

三春の絶景胸に迫り
萬里の風物眼中に到る　「詩」

（眺望しながら）見ろ、ひろびろたる洞庭の水、藍をたたへた雲夢の澤。これらは、西南の險を控へ、江漢の要衝に當る。われ左良玉はこの名邦の鎮守。愉快至極ぢや。（坐して呼ぶ）傳令、傳令。

傳令　（跪いて）御用で。

左良玉　酒の用意は出來たか。

傳令　とうの昔に、出來て御座います。

左良玉　お二人は、馬鹿に遲いな。

傳令　幾度か御催促致しましたが、袁閣下には、江岸で今糧をしらべて居られます。黄閣下は又、龍華寺で御客

様と御話し中ださうで。多分、日くれ方においでのことと存じます。

左良玉　さういつ迄ここに待つてゐられるか。誰か、敬亭君をここへ呼んで來てくれ。話でもして、退屈を忘れるとしよう。

一將校　（跪いて申す）

丁度、敬亭氏は下に居られます。

左良玉　では、すぐこれにお通しせい。

（將校、柳を請ずる）

柳敬亭　（登場）

氣は呑む雲夢の澤
聲はうごかす岳陽樓　「詩」

左良玉　敬亭君、どうして來られた。

柳敬亭　わたくし、閣下の御退屈を察し、お相手に參りました。

左良玉　これは不思議だ。退屈がどうして御わかりになられた。

柳敬亭　よく言ふでは御座いませんか。儒生の文會はたそがれ時と。科擧出の文官はとかくぐづで御座いますからなあ。

左良玉　（笑ひながら）成程な。（指して）だが柳君、まだやつと午過ぎだ。灯の點くまで待たれようか。

柳敬亭　若し、お耳ざはりでなければ、ゆうべ、お話しした、秦叔寶が叔母に會ふの一段を、又つづいてお聞かせしませう。

左良玉　それは結構だ。（問ふ）だが、鼓板をお持ちかな。

柳敬亭　よく背から申します。官員は官印をはなさず、商人は商賈道具を忘れぬと。私もつまりそれで。（鼓板を取り出す）

左良玉　誰かゐないか。茶を一杯くれ。それから椅子を持つて參れ。先づは、くつろいで、ゆつくりとお話をうけたまはらう。

（將校、椅子を据ゑ、茶をたて、左、着物をかへて坐る。將校、背中を打つて按摩をする）

（側に坐つて、鼓板を打ちながら、講釋を初める）

柳敬亭　大江の流れながれて
　　浪は東に
　　興亡を洗ひつくす
　　水のほとりに指折つて思へば
　　たれか一個の英雄ぞ

はかな　　　「詩」

こんな、新しい詩はやめにして、昔話をはじめませう。

さてさて、人生に一番有りがたい事は、戰ひのあとに、骨肉のめぐり合ふ事でございます。北に南に、時は經へうつり、物も自然にうつりかはる。幾度の兵亂に、さすらひ、うらぶれるも是非ない仕儀にございます。仕合せにも、秦叔寶は、羅公の帥府に送られ、手枷、足枷に、御裁きを待つ折から、親身の伯母御に會はれた。伯母御は簾を捲き、階をおり、頭を抱いて大いに歎かれた。その時、新しい着物に換へさせ、席を設けて歡待なされた。死刑を待つばかりの人が、青天に白日を仰いだわけ。これ即ち、運が去れば、黄金もねうちを失ひ、時が來れば、頑鐵も光を生む理合で御座りまする。（醒木を打つ）

左良玉　（涙を掩ふ）俺にも覺えがあるぞ。

柳敬亭　さても、かの羅公に於ては、叔寶の武藝話に、滿悦この上もなく、殊更、その本領を見せようとして、直ぐ様、大砲を放つて、練兵の命をつたへ、御自分、演武の道場におくだりになられた。雄兵十萬、雁翼の陣をなす眞ッただ中に、堂と居据り、おおと一聲叫べば、三軍の兵、言下にこれに答ふ。掌中に握る生殺の權。秦叔寶はその側にうづまくり、一つ一つにうなづいて、口をきはめてほめそやす。言葉にこそは出さぬが、心中、大丈夫まさにかくの如かるべし。（醒木を打つ）

左良玉　（得意相に笑ふ）左良玉とて、そのとほりだ。そこに、人としての生き甲斐があるのだ。

柳敬亭　さて、羅公は、秦叔寶に目をうつして、大聲に聞かれる。叔寶君、君の身體はどうも立派だ。これ迄に武藝を磨かれたかな。叔寶、ハッと地に跪きその答は、立板に水を流すやうであつた。わたくしこそは、二本の棒をつかひまする。羅公は、命じて、二本の棒を取り寄せられる。その二本の銀棒は、共に重さは、六十八斤。それも、叔寶の常用、あの鐵棒に比べれば、重さは半分の物だ。もとより、かれは、重棒の使ひ手。手にすれば、素手も同樣だ。階段を飛び下るや、秘法のかぎりをつくして見せる。左にまはせば、玉の蟒の六尺の身を攻めるがごとく、右にをどらせば、銀龍の體を護るに似たり。蟒、身を攻めれば、光散り散つて萬光、億光、また、銀龍の體をまもるや、一輪の月光、目にも淸らか。羅公、帳の中に在つて、一天晴れ、神技や」とお褒めになれば、三軍、聲をそろへて、どよめきたり。ときの聲をあげる。山も崩れるか、雷もひびくごとく、十里四方はためにゆれたと。（醒木を打つ）

左良玉　（鏡を見て、鬢を鑷く）われ、左良玉、功を邊防に立てて、誰やつか刃向ふ。また、天下の大丈夫なるに、今、やうやく、白髮、顏を埋める頃に至つて、まだ賊類をつくすことが出來ぬ。無念至極。

傳令　（登場）

恐れ乍ら、元帥閣下に申しあげます。お二方樣が御着になりました。

（柳、いつか退場。左、冠帶に換へ、側の者、その邊をととのへる。袁繼咸、黃澍、冠帶して、人拂ひしながら出る）

第十三幕

袁繼咸　日は長湖に落ちて、あたりほのぐらう
黄鶴樓にのぞむふる鄕
黄澍　笛を吹くの仙人はここに住む
風にのぞんで盃をとればよろこび洋洋　「詩」
左良玉　（迎へて挨拶する）お二方、よく御出で下された。御禮申し上げます。先づは酒でも飲んで、江の春景色を御覧に供しませう。
袁繼咸、黄澍　とうから、お目にかかりたう存じて居りましたが、やつと、望みが叶ひました。特に樓上の厚いおもてなし、氣も晴晴と致しまする。（席に着いて、酒を飲みかける）
早馬の者　（急いで登場）
天下大變。えらいこつちや。とにかく、忠義の方方にお報せしよう。元帥閣下に申し上げます。一大事に御座います。
（衆、驚いて起つ）
左良玉　騒騒しい。何事だ。
早馬の者　（急いで言ふ）元帥閣下に申しあげます。多勢の賊兵、北に攻めのぼり、十重二十重に神京をかこんで、三日の間、援兵は參りませず、つひに、城内に押し入つて、宮闕に火を放ち、あらん限りの亂暴狼藉。

（地を打つて）御いたはしいは、崇禎皇帝。（哭いて言ふ）煤山の楕に、くびれて、お崩れになられました。

衆　（驚いて問ふ）それは本當か。一體いつの事か。

早馬の者　（喘ぎ乍ら）こゝ、この、三月十九日の事で。

（衆、北をのぞんで、大いに哭く）

左良玉　（起つて手を搓み、跳つて哭き）われらの聖上よ。われらの崇禎帝よ。われらの大行皇帝よ。臣、左良玉、不幸、邊地に遠ざかつて、おん君のため、一合戰も致さず、極罪、何によつてか償ひませう。

高皇帝よ
九天のかみにゐまし
國の安危も知り給はぬや
みこの
憂き日もよそに見給ふや
十七年のあまた歳
國のうれひを
ただにうれひまし
大君よ

われ、いたづらに君をもとむる
今神助けず
兵來りすくはず
おんうなじの白き絹のみぞ
あはれ君よ
いたまし
煤山のひとりみゆき
國たみのため
身をすて給ひね
國たみのため

（皆皆、大いに哭く）

袁繼咸　（手をふつて、大聲に）まあまあ、しばらく。悲しみは悲しみ。一大事に就いて、御相談があります。

左良玉　一大事とは。

袁繼咸　もはや、北京もなければ、皇帝とてもおはしまさぬ今日。將軍にして、早く、義旗をお立てにならずば忽ち、天下の大亂と相成りませう。

黃澍　いかにも左様だ。（指す）この荊襄の地こそ、天下を二分して、西南の半壁を保ち得るの所、萬一、ここが守りを失つたら、二度と取りかへしはつきますまい。

左良玉　不肖、わたしは兵權をにぎつて居ります程に、その責任は負はねばなりますまい。兩公のお力に待つてこの疆を守ることに致しませう。

袁繼咸、黃澍　必ずともに、お力添へ致しませう。

左良玉　さう、事が決つたら、皆、喪服を着けて、大行皇帝の在天の靈にお歎き申しあげ、おん前に於て盟を立てませう。（喚ぶ）これこれ、喪服の備へがあるか。

傳令　何に致せ、急な事で、直ぐには間に合ひかねます。そこで、近所の民家から、喪服三着と、白布三條を借りて參りました。

左良玉　仕方がない、よしよし。では、支度をいたすとしようか。（吩咐る）三軍の者共も拜をなせ。

（左、袁、黃、衷を着け、頭を布で裹む。兵ら、又、共に拜して、哀悼の聲を擧げる）

「合唱」

われらが先帝。

宮車いでて

國かたぶく

桃花扇

中原やぶれて
復するすべもない
文臣をやしなへど
帷幄にはかりごとなく
武夫をやしなへど
事に當つて、たけからず
今こそのこる
水と山と
江に向へば
月あきらかに
又、水あきらかに
樓のわたりに
なげく聲のみ充ち滿つ
（又、哭く）
いつの日にかこの恨晴るる

あまつ神にもしろしめせ
今よりのちは力を合せ
命を合せ
國の仇をむくいて
直ぐにも神京をとりかへさう
國の仇をむくいて
直ぐにも神京をとりかへさう

左良玉　われら、かうして、盟を結びたる上は、義は兄弟と變りなし。袁君は督師となり、黃君は軍監となつて下されい。われ、左崑山こそは、兵を操り、馬を練り、邊防を死守致しませう。もし、太子諸王の皇族方の内で、中興して、國をお建てになる曉には、その時こそ、王に勸めて北上し、中原を恢復しませう。かうあつてこそ、今日、仕甲斐のある義擧たるに恥ぢないものと申されませう。

袁、黃　委細畏りました。

傳令　（登場して）元帥閣下に稟し上げます。城内騷がしく、どうやら、變事が起りさうで御座います。早く、下にいらしつて、人心をお靜め下さいますやうに。（共に樓を下る）

左良玉　貴方方はこれから、どこへおいでになりますな。

袁繼咸　わたしは、九江に還りませう。

黃澍　わたしも、襄陽に還ります。

左良玉　では、暫くのお別れを致しませう。（互に別れの挨拶をかはし、左、呼び止める）少し待ち給へ。もし重大事が起つた時には、又、ここで御相談いたしませう。

袁、黃　その時はお手紙をいただきたい。直ぐに馳けつけるで御座いませう。では。（二人退場）

左良玉　ああ、こんな大事に逢はうとは、夢にも思はなかつた。氣絕しさうだ。

飛ぶ花の盃、手にもとり合へず、
一言の大事に滿座おどろく。
黃鶴樓中に欵きの聲絕えて、
江の月黑う、夜は更けわたる。　「詩」

第十四幕　奸謀阻止の場

登場人物

侯朝宗
史可法
阮大鋮
召使

侯朝宗　（登場。歌ふ）

定めなき宿りに
何とて恙なきを傳へん
空を仰ぎ斷腸の哭き
君の仇雪がざるに
いかでふる鄕を思ひ

戀を語られようぞ

わたしは侯朝宗だ。去年の冬、あわてふためいて、夜夜中を、史可法どのの許に難を避け、連れられて、淮安の漕撫衙門に參つてから、もう、半歳も經つて仕舞つた。昨日、南大司馬熊公の宮中に召されてより、史可法どのも補せられて、その後任に昇られる事に成つた。從つて、わたしも、こちらに歸れる身になつた。可法どのは。わたしの才學を重んじて、兄弟のやうに、私を待つて下さるによつて、いつそ、南京に移住しようと思つたこともある。ところが、南北、斷絶して、ただ今は、天子擁立の評議とりどり、事なかなかに決まらぬ樣子なれば、心配でかなはぬ。史公のお歸りを待つて、樣子をばお伺ひすることにしよう。（退場）

史可法　（心配げに登場。後に、用人を隨へる。歌ふ）

みかど神去りましし後は
小せがれ共のさかしら
なさけなの時節や
都のさまの
おぼつかな

わしが史可法だ。字は道鄰。國は河南だが、燕京に寄留してゐる。崇禎四年に進士となつてより、國家多事の折柄、内には曹郞となり、外には州郡の監司となつて、ここに十年と云ふものは、ただ一日も、枕を高

くして寢たことがない。今度、淮安の漕撫から、南京の兵部尙書になつたが、就任して、一月立つか立たぬ内に、この大變。どうしてよいやら、途方に暮れて仕舞つた。幸ひにも、長江の險に據つて、この南京を護る。とは云ひ條、一月にもなつて、定つた帝さへなく、人心の落ちつく場所もない。日每日每の册立問題。けさ程も、江上に兵を指揮する折柄、少しばかり、北方の樣子を知ることが出來た。侯兄に聞いて、少しも早く、考へをめぐらす事にしよう。

侯朝宗 (出でて、史に會ふ) 老先生。北京の樣子はいかがですかな。

史可法 けふは、よいたよりに會つて來た。北京はやられたさうであるが、陛下の御身には、何の恙もあらせられず、海を越えて、南の方に御出でになり、太子も、又、間道から東へお逃れになつたと。だが、眞僞の程は明らかでない。

侯朝宗 その通りならば、國家のためには幸福ですが。

使番 (登場)

朝廷からは詔がなく
將相からのお傳へを　「詩」

(門前について) 御門にどなたかおいでかね。

召使 どちらからのお出[いで]です。

使番　鳳撫の役所から參りました。馬士英樣からのお見舞狀を持參しましたが、お返事を頂戴したい。

召使　一寸お待ち下さい。（入つて、史に）申し上げます。鳳撫の馬士英樣から、お使が見えて、お手紙で御座います。

史可法　（手紙を披いて、眉をひそめる）馬瑤草が、また册立問題の事で言つてよこした。

清議堂上
三たびの會議
眉にしわ寄せ
天井眺めて
靴を蹴る
顏と顏とを見合せて
吐息、溜息
首を垂れて
物も言はねば
意見もない

國の大事に
何としたこと
わしに意見が
ないでもないが
うつかりとは
手紙にそれと
書いてはあるが
こいつは少し
あせり氣味

（侯に）この手紙によると、福王を立てようと考へてゐるらしい。また、聖上には、確かに煤山におかくれなされ、太子の行方も不明らしい。だが、こんなわけなら、わしが贊成する、しないにかかはらず、どちらにせい、彼は、自分の計畫どほりに實行するだらう。まして、皇族踐祚の順番から考へても、福王殿下の擁立は、差し支へのない所か。まあ、いい。この返事は、明日、會議の折に、皆と一緒に署名すればよいだらう。

侯朝宗　それこそ、飛んでもない話です。福王は、私の國の藩主だから、よく承知ですが、斷じて、これは宜し

くない。

史可法　それは又何故にです。

侯朝宗　誰も知つてゐる三つの大罪があるからです。

史可法　三つの大罪とは。

侯朝宗　まづ、聞き給へ。

藩主、福邸

かれこそは神宗の蕩兒

母の鄭氏は

淫らはしの女

いつぞやは、太子を弑して、皇位をねらつたことさへ有ります。

もし上を思ふ

大臣なくば

神器もかれに

盗まれようもの

史可法　これは、仲仲の重罪だ。（問ふ）そして、その外の大罪は。

侯朝宗　實に驕奢
山とつまれた
官の品品
み倉の錢も盜みつくす
わたくしごと
前にも、河南に賊が逼つて來た時に、一文の金、兵糧も出すどころか、つひに國は亡んで、身も亡ぶ結果に陷り、滿宮の財寶は、唯、賊のふところを肥やすに過ぎませんでした。

史可法　これも、大罪と言ふべきだ。して、第三の大罪とは、それは何です。

侯朝宗　この大罪は、今の世子、德昌王の御身の上。あの方は、父君が賊の手にかかつて、まだ、葬ひもすまぬ內に、不孝至極とも、不埒とも、そのどさくさに、人民の妻を奪つて、妾にいたされた。
君たる德のすべて空しく
すべて、虧き給ふ
十善の位
なぞ、ゆるさるべき

史可法　全くな。實に三大罪と申すべきだ。

侯朝宗　それのみか。まだ、外に、五つの立ててならぬ理由があります。

史可法　まだ。外にも五つの理由とは。

侯朝宗　帝ましますやいなや
　うはさとりどり
　天に二つの日があらうや

その二つは、よし、聖上の國のために殉ぜられたものとしても、なほ、太子の攝政たるべき人がおいでです。

　太子の君をうち棄てて
　末葉細枝をたづねようぞ

第三には、中興の主たるものは、必ずしも順序に依る必要はありませぬ。
　中興の君は、光武帝の如かれ
　かかる英主であらまほし

第四には、
　強藩折をねらつて立たん

第五には、又、小人どもが、

擁戴の手柄をさしはさまん

史可法　成程、御高見の程、恐れ入つた。先日も、副使、雷縯祚、禮部、周鑣らが左樣に申して居つた。ただ、君の意見のやうに、透徹しては居らなかつたやうだ。一つ、その三大罪、五不可立の論を、これに書いては戴けまいか。それを以つて、返事と致さう。

侯朝宗　畏りました。

（燭を點けて、手紙をしたためる）

阮大鋮　（伴をつれて、燈を提げて登場）

この好機が何で逃がされよう

新しい功名は我が手に

「詩」

俺は、阮大鋮。そつと、江浦に行き、福王殿下にお目に掛り、夜を日についで、歸つて來て、馬士英と擁立の計畫を立てた。ただ、心配なのは、兵部尙書、史可法が、ヒヨツとすると、これに、反對しはせぬかと言ふことだ。それで、けふも手紙をつかはしたが、まだ、心がかりだ。されば、今宵は、自分で參つて、よく、相談を致さうと思ふ。（門の外の使番を見て）お前は、手紙を持つて參つた筈だが、何故、早く歸らない。

使番　御返事を待つて居るのですが、まだ、頂戴が出來ません。（喜んで）旦那樣、恰度いい時に御出でになりました。一つ、旦那樣から御催促をなさいましては。

史可法　お賴み申します。

召使　どなた。

阮大鋮　（召使に叮嚀に）御苦勞ながら、お取次願ひます。褲子襠裏の阮が、閣下にお目にかかりたい、とお傳へ下さい。

召使　（ふざけて）何、褲子襠裏の「軟」だ。此奴、軟とは當にならぬぞ。よく言ふぜ。十人の鬚男、九人迄は助平だと。どれ、どれ。軟か軟でないか、先づ、俺がさぐつてやらう。

阮大鋮　冗談は止しにして、早く、お取次にあづかりたい。

召使　もう、遲いので、旦那樣はお休みだ。滅多に、お取次は出來んて。

阮大鋮　折り入つて、御相談に預りたいことがある。是非、お願ひだから、お取次願ひたい。

召使　それでは取次ぐから、待つてゐなさい。（史の前に出る）申し上げます。褲子襠裏の阮がまゐりまして、旦那樣にお目にかかりたいとて、門外に待つて居ります。

史可法　どこの阮だ。

召使　褲子襠裏にすまひする、無論、阮鬍子の事で御座りませう。

史可法　こんな深更に、何の用事で參つたのだらう。

召使　云ふ迄もなく、あの一件についての相談で御座いませう。

史可法　去年、清議堂に於いて、侯兄を誣ひた奴はきやつだ。きやつは、もともと魏黨の一人。腹からの小人だ。あんなやつにとり合ひたくない。お前、追ひかへして仕舞へ。

召使　（出でて叱りつける）　俺が言つたとほりだ。深更だから駄目だと、案の定、御立腹だ。さあ、歸つたり、歸つたり。

阮大鋮　（召使の肩を打つて）　君は、物のよくわかる男だ。おわかりないかな。夜晩く參るのは、素的な儲け話だ。まつぴるまでは、興覺めなものだ。

召使　さう言はれれば尤だ。甘く行つたら、進物は山分だぜ。

阮大鋮　無論だ。欲しければ、もつとあげてもいい。

召使　そんな次第なら、もう一度、お取次して見よう。（史の前に出る）　旦那樣、阮は、是非お目にかかりたいとの事。また、素的な儲け仕事なさうに御座います。

史可法　馬鹿め、國家滅亡の折柄、何が儲け話だ。早く追ひ出して、門を閉めて仕舞へ。

召使　馬士英殿への御返事は、まだお出しになりません。

侯朝宗　手紙が出來ました。御覽下さい。

史可法　祖宗のみかど
　　國を創められてこの方

みかどつとめ給ひ
國一たびは衰へぬ
その絶望をつぐはたれぞ
くはしく記す
福王の
大いなる罪三つ
立てかねる
理由五つ
止みなん、やみなん
その君をさて措いて
他のよき人を
たづね求め
わが心、ここに定まる

文面、いかにも明白だ。これで、かれも滅多なことはしまい。（召使に）これを鳳撫の使にわたして、早く門を閉めて仕舞へ。また來て、つまらぬ事を申してはいけない。（起つ）

史　これぞ、江上の孤臣、白髪を生ず

侯　燈前の旅人、琴を彈かず　「詩」

（史、侯、退場）

召使　（出でて、呼びかける）　馬士英殿のお使。

使番　はい、はい。

召使　御返事を受けとつて、早く歸り給へ。門を閉めます。

使番　（手紙を受けとつて）　阮の旦那樣が、お目にかかりたいと、申して居られます。何故、門をお閉めになるのです。

阮大鋮　（召使に）　今し方、お目にかかりたいと、お願ひしたのですが、御忘れなさいましたか。

召使　（わざと）　お前は誰だ。

阮大鋮　私は　褲子襠裏の阮ですが。

召使　チエツ。よる夜中に何だ。阮だ。阮か、軟か、軟とか、硬とか。何んで、人をねかさないのだ。（推し出す）さつさと歸れ。（閉をしめる）

使番　御返事頂戴、お先に失禮します。（退場）

阮大鋮　（煩悶する）　無禮ものめ。たうとう、閉めて仕舞ひ居つた。（呆れる）止め、止め。この阮は、十年前にも

こんな侮辱に會つた。幾度もな。まあ、我慢しよう。（手をこすつて）だが、この機會を外しては駄目だ。この史可法めが、現在、兵部の印を持つてゐるが、かう頑固では、福王擁立も駄目かな。さて、どうしたものかなあ。（考へて）へツ、われ乍らをかしい。今日では、天子の玉璽も行方不明なのだ。兵部尚書の印が何の用に立つ。（指して）おいぼれの史可法め。お前はな、折角、持つて來てやつた、一皿の御馳走を食べないと云ふなら、他人にやつて仕舞ふまでのことさ。あとで吠面をかくな。これこそさうだ。

つまれば、ひらく、われ、
主なき山水の取り次第。
人形買つた、誰にやろ、
この富くじは誰の手に。「詩」

第十五幕　弘光帝擁立の場

登場人物

馬士英
阮大鋮
書記
召使

馬士英　（冠帯して登場。歌ふ）

一旦、神京守りを失ひ
こもごも中原に
鹿を追うて走る
一番乗りは誰ぞ
相に拜せられ

侯に封ぜらる
皆、擁立の功

われは馬士英、別字は瑤草、貴州、貴陽衛の生れだ。萬曆己未の進士に身を起し、現に、鳳陽の督撫をつとめる。幸ひ、國家の大變に會ふ。今こそ、われらが得意の時。先日、史可法に手紙を送つて、福王迎立の相談いたしたに、その返事に、三大罪、五不可立云云をとなへたてて參つた。また、阮大鋮の赴いて、面談をとげようと致したについては、門をとざして入れなんだとやら。どうやら迎立をよろこばぬさうな。ただ現に、あいつは兵權をにぎつてゐる。一度、こいつが兎角云へば、かの九卿の、高弘圖、姜日廣、呂大器、張國維なんどの輩は、つひに、擁立を拒むであらう。さうなると、事穩かには濟むまい。是非なく、阮大鋮をやり、四鎭の武臣、また、勳威ある宮內官らを說かしめたが、その結果はどうであらう。馬鹿に、氣がいら立つわい。

阮大鋮（登場）

胸中既に成竹有り
山には、とれね柴のなし　「詩」

これは馬公の書齋だ。さあ、中に這入らう。

馬士英（阮を見て）阮君かへられたか。して、どうだつた。

阮大鋮　四鎭の武臣は、お手紙を拜見して、大よろこび、即座に承知して、四月二十八日、儀仗をとゝのへて、一緒に、江浦に參上しようとの約束。

馬士英　結構、結構。そして、高、黄、また二劉は何と言つてゐたな。

阮大鋮　（坐する）あの人人の申すには、（歌ふ）

君恩をうけ
列侯に封ぜられ
江淮ゑ鎭して
はるかに意見を問はるゝに
まだ神京の收まらぬ
まだ神京の收まらぬ
わたくし共のやうな。
冷汗三斗
功をみだりにし
餉をつひやす
鎭臺の將、われ等

江浦に車駕をお迎へ申し
兵をひきゐて
新帝を扶け參らせ
節を持し、讐をむくはう
大事に臨んで
何、ためらひませう

馬士英　その外に、參ることを承知した人人は誰だ。
阮大鋮　魏國公の徐鴻基、司禮監の韓贊周、吏科給事の李治、監察御史の朱國昌などでございます。
馬士英　武功の門閥、監察の家柄、どちらにも手掛りがある。よし、よし。それで、かれらは何と申して居た。
阮大鋮　かれらの申すには。（うたふ）

馬中丞殿の
眞先かけて乘り出さば
諸公の誰かためらふものぞ
早早、官名を名乘り申さう
早早、官名を名乘り申さう

皆の者が参つて、
　書を上り
　表を陳べ
　君を立て
　都に入らう
　中興の帝、君を
　玉座に拜し
　今日の勞苦の功にむくい
　虫ばんだ因緣を解いて
　この大計に添ひまつらう

馬士英　果して、そのとほりならば、至極結構。ただ一つ困つた事がある。わしは一箇の地方官、あの武將達も閣員ではない。さしあたり、表を奉るに、名の書きやうがないのだ。

阮大鋮　何んでもない事。職員錄を見て、とつつきから寫せばいいでせう。

馬士英　とは言ふものの、萬一、帝の行幸の時に、百官の送迎するものがなかつたら、われら、三五人でどうなるものか。

阮大鋮　朝廷の公卿たちに、定見などがあるものですか。帝が、一たびおいでになれば、官職名を名乘り出る者は、目白押しでせう。

馬士英　成程、上表は書いて仕舞つたが、まだ、官名が落ちてゐる。職員錄から、早くうつすがいい。

書記　（職員錄を持つて出て）

西河の岸の、洪家の發行にかかる職員錄でございます。（退場）

阮大鋮　では、始めませう。（頭をかしげ、職員錄を遠くに持つて、眺めながら）上表の字體は、細字の楷書でなければならないのに、目がかすんで、書けない。これは困つた。（考へて）さう、さう。（腰から眼鏡をとり出して、書き出す）吏部尙書、臣高弘圖。（手がふるへる）手がふるへるな。今、出かける間際に、これでは埒が明かぬ。チエツ。

馬士英　書記に書かせ給へ。

阮大鋮　この中には、拔き差しがあります。書記には出來ませぬ。

馬士英　よく、敎へて、やらし給へ。（大聲に）書記、急用だ。

（書記、登場。阮、職員錄と照らし合せて、敎へながら、書記に示す。書記、退場）

阮大鋮　よく、申さう。先んずれば、人を制すと。早いが勝ちだ。直ぐ、衣冠をととのへて、けふの內に出かけよう。

（召使、あたりを片づける）

阮大鋮　御伺ひしますが、私はどんな服裝をして參りませう。

馬士英　迎駕の式は、不斷の拜謁とは事がちがふ。冠帶がよろしからう。

阮大鋮　しかし、私は休職の身分ですから。

馬士英　成程。（考へて）では仕方がないから、上表の持ち役で我慢して呉れ。少し、氣の毒だが。

阮大鋮　どうしまして、大丈夫が功を立てようとする今に、何の不足めいた事を申しませう。時が時だし、角ばつた事は申しませぬ。

馬士英　（笑つて）さうとも、さうとも。そこが、それ、軟圓殿の價値な。

阮大鋮　（使者の服裝に着換へる）

老いの身は
冷たい灰と
諦めてゐたを
こは、うれし
ほし海に水さして
素的な魚を釣り上げし

釣り上げし
太公望の釣糸に生れた
子まごの繁榮に似て
しがないわざも
時世時節
右筆役もやがて
宰相のもとる
笑はば笑へ
何を恥ぢよう

（登場）

書記　やつと出來上りました。御覧下さい。

阮大鋮　（見て）成程、立派、立派。すぐにな。よくつつんで、箱に入れて呉れ。

（書記、つつしんで、箱に入れる）

これを、脊負はなきやいけないのかな。

（書記、召使、箱をかゝげて、阮に負はす）

馬士英　（笑つて）圓海殿、これは、御苦勞千萬。

阮大鋮　（きびしい顏で）御冗談でせう。いづれ、凌烟閣にでも描かれて御覽なさい。かへつて、立派ですて。

召使　（馬を引き出して）もう、日が暮れます。馬にお乘りなさいませ。

馬士英　（吩咐ける）この迎駕の大事には、澤山の人は、連れてゆくわけに行かぬ。お前たち、二人だけが伴をしろ。

阮大鋮　御褒美は、あとでたんまりやるぜ。

（共共に馬に乘つて、急いで走り、場內をめぐつて、退場）

「合唱」

南山に雨收つて
夕陽の影
つき毛を飛はす
うまや路
急げ、急げ
もう、あれだ

浦江の空の雲模様
呉楚の境
運に乗らんず、英雄の
龍虎の急ぐ
疾く疾く
銀燭の下
天顔にまみえん

馬士英　家來たちを、さきにやつて、旅館を捜させよう。

阮大鋮　いや、いや。私たちは大切な使だ。休んでゐるひまに、急いで參りませう、急いで。

馬　靜かな風景よ。

阮　水のやうに馬は走るよ。

馬　防風氏にまなんで、おくれるな、ゆめ。

阮　明日は塗山にむらがる諸侯。　　　「詩」

第十六幕　政治初めの場

登場人物

弘光帝
衆人
史可法
馬士英
黄得功（四鎭の將）
劉澤清（同）
宦官
阮大鋮

高皇の昔の都

弘光帝（皇帝の服裝にて宦官二名を從へ登場。歌ふ）

桃花扇

宮門殿閣
高くひろく
重なり重なる
見渡すかぎり
紫の雲のあらた
鍾山にしづもりいます
太祖の御德
仰ぎ見る國たみの心
われを靑天の上に迎ふ
雲消えて簾を捲く
東南の氣の壯なるや
　一朶の黃雲御牀を捧ぐと
夢醒めて後も、うつつの心や
中興にも親征の戰は無用
塵顏を洗つて、御衣を纏ふ

「詩」

われこそは、神宗皇帝の御孫、福邸親王の王子、幼きより德昌郡王に封ぜらる。去年、流賊の河南を陷れ
父王の國に殉じ給ふ折、われはのがれて江浦に難を避け、九死に一生を得た。料らずも、北京守りを失ひ、
先帝のかくれましますや、南京の民ら、われを押して、國政を攝せよとの事。實に意外。
さて、けふは、きのえさる年、五月の一日、早早起きて、孝陵をふし拜み、宮中に歸つて、しばし便殿に
出御し、百官の奏章を見ることに致さうか。

(史可法、馬士英、黃得功、劉澤淸、文武官正裝して登場)

再び冠裳の盛んなるを見
重ねて殿閣の高きを瞻る
金甌は尙ほ無缺にして
玉燭は又新に調ふ　　　　「詩」

一同
我等文武官は、昨日、鑾を江浦に迎へ、この朝明けには、孝陵の參拜にお伴して、官、姓名を聞えあげ申
したとは言ふものの、まだ、朝賀とは申すことは協はぬ。當に謹んで表文を奉り、萬乘の高きにつかせ給へ
と御願ひ申さう。(皆、進み、跪いて表を奉る) 南京吏部尙書、臣高弘圖等、恭しく陛下に聞え上げ奉る。早く
帝位を定め給ひ、改元して、政ごとを聽かせられ、國民の望みに添はせ給へ。恭しく惟んみるに、陛下は、
福邸に時を望んで

望みは九天
神宗のおゝ影さながら
天津日嗣のただしき血筋
久しく御徳あらはれ
世の頼み重く
内外共に
堯帝の器を仰ぎまつり
慕ひまつる
金枝玉葉の御身にましませば
宜しく十善のみ位にのぼらせ給へ
臣、伏して
仰ぎ願はくは天の下しろしめし
高み座の末つがせ給へ
（四拜する）

弘光帝　寡人は、外藩の末流である。才も徳もうすいが、まげて、臣民の請のままに、來たつて、高祖の宮を守

るだけである。君父のみ靈、怨みなほ晴れず、その怨みはまだ報ずるすべとてもない。何のかんばせ有つてか、厚かましくも帝位に昇ることが出來ようぞ。ここ暫くは藩王として、まつりごとを執り行ひ、前通りに崇禎十七年と稱し、一切の政務も、從來のままにとりはからはう。諸卿よ、さは願ひ立てて、寡人の罪をこの上重ねさせることのないやう。

強ひては吳れるな
中原の亂れみだれて
王孫も食を江頭に乞ひ
草かげにかくれる今ぞ
かへり見れば
この戰場の
いづこの土地に身を安ませよう
洛陽の園に花ひらけど
のぞみ見れば
兵塵けぶらふ墓のべの病み松
黃帝が鼎湖の弓劍

葬る人も無きに
何ぞ儀を立て
王座にのぼつて
　世を知ろしめすに堪へよう

衆人　（跪いて呼ぶ）萬歳、萬萬歳。實に仁君聖主の言。臣ら、どうして仰せに背きませう。しかし乍ら、國の仇は一時も早く、これをうたねばなりませぬ。中原の地をとく取りかへし、また、將相の任命も急がなくてはなりませぬで、謹んで、官名簿をとり添へて、裁決を願ひ上げ奉る。（本を奉る）

　中興のかたちさやか
高樓の軒端を籠める
祥靄、瑞雲
王業重ねて復始まる
ともに天を戴かぬ讐
薪に眠り膽を嘗め
忘るるなゆめ
實に實に

中原をとり戻し
まつりごとを行はんには
早早忠亮を任じ
欠けたる官職は
乞ふ、賢を選び給へ

弘光帝　この名簿を見るに、讐をむくい、國をとり返さうとする願ひで一杯だ。忠誠の程、感じ入る。その將相の任命に就いては、寡人の胸中に考へがある。卿ら、よく承け給はれ。
職掌は先づ初めに將相を任ずる
麒麟閣上の功勞を以て論ずれば
迎立を上とす
表を江頭にささげて
夜をこめてゆき
鑾輿の儀仗を擁し
寡人を訪ねて
黄袍を上り

萬歲を叫んで
拜舞して申す
事繁き折柄
つひにわれ璽符を受けつ
今日の行賞
受くる者は誰ぞ

卿ら、しばらく退いて、正門に旨を待て。

（弘光、宦官を引いて退場。史可法、馬士英、黃得功、劉澤清ら退下）

史可法　迎立の論功と言ふことになると、さしづめ、宰相は馬先生といふところですな。

馬士英　わたしは一鎭臺の將撫。どうして、一足飛びに、そんな出世が出來ませう。軍國多事の折柄、史先生は現に、兵部尙書でいられる。宰相は、間違ひありませぬ。（黃、劉に向つて）四鎭の方方には、車駕擁護の手柄がお有り故、公侯に加封せられるは、今目前ですよ。

黃得功、劉澤清　それと言ふのも、皆、貴方のおかげで御座います。

宦官　（宣旨を捧げて出る）聖旨が下りました。

鳳陽の將撫、馬士英。迎立を倡議して、功第一に居る。即ち、內閣大學士に陞補し、兵部尙書を兼ね、閣

に入つて、事を辨ぜしむ。

吏部尚書、高弘圖。禮部尚書、姜日廣。兵部尚書、史可法。亦、皆、大學士に陞補し、各各本官を兼ねしむ。高弘圖、姜日廣は閣に入つて事を辨じ、史可法は、師を江北に督せしむ。その餘の部院、大小の官員、現任の者は、各各三級を加へ、缺員の者は、迎駕の人員を以て、功を論じて補選せん。

又四鎭の武臣、靖南伯、黃得功。興平伯、高傑。東平伯、劉澤淸。廣昌伯、劉良佐。右等は封を侯爵に進め、各各衛戍地に囘らしむ。恩を謝せよ。

衆人　（感謝して）萬歲、萬萬歲。（起つ）

史可法　（黃劉に）わたし事、兵部尚書の職に居ながら、中原平定の思ふやうにならぬのを、平素恥づかしく思つてゐた。今、聖上には、わたしに江北軍を督せよとの事。力を協せてなしとげるには勿怪の幸ひ。ここで、諸侯と約束し、五月十日に、一齊に揚州に集り、復讐の相談を致しませう。諸侯らも努力して、遲れないやうに。

黃得功、劉澤淸　承知いたしました。

史可法　わたしは馬を走せて任地に參りまする。實に東漢を再び起さうず君、光武帝の再來とも申したたへませうか。兎も角、中原の平定はわたしにお任かせ下さい。（皆に別れて、退場。黃、劉、入りかける）

馬士英　（呼び止めて）將軍たち、一寸おかへり下さい。（手をとつて語る）聖上には、わたしの迎立の功を嘉みせ

られて、相に拜し、侯にお封じ下された。わたし達は、皆動舊の大臣だ。外の人とは少し違ふのだ。これからは、內外ともにしめし合せて、この富貴を逃がさぬやうに致さう。

黃得功、劉澤淸　お引き立てによつて、今日有るを得たわれわれ、何のお言葉にそむきませう。（急いで退場）

馬士英　（笑ふ）意外にもけふは、堂堂たる首相になりおはせたわ。愉快、愉快。

（阮大鋮、內から頭だけを出して見る）

（退場しかけて）待てよ。國建て直しの際とて、まだ、何もかも亂雜だ。高、姜の二相に、わが大權をとられてはたまらぬ。家へかへらずに、このまま內閣に參つて、事を見ることに致さう。それがよい、それがよい。（退場しかける）

阮大鋮　（そつと出て來て、一禮し）　お目出度う御座います。案の條、宰相におなりでしたな。

馬士英　（驚いて）君は、どこからやつて來た。

阮大鋮　わたくし、官房にひそんでゐて、今の消息を耳に入れました。

馬士英　ここは禁地の場所だ。まして、けふの事始めに、平服でやつて來ると言ふ法があるか。さあ、早く出て行つた、出て行つた。

阮大鋮　いや、私には大事な用が御座います。（耳打ちする）貴方樣は、迎立の功でこの地位を得られた。所で、私めも、表を捧げてお伴をつかまつり、多少の手柄が有つたわけで。何故、お引き立て下さらぬ。

馬士英　さき程の宣旨に、各部院の缺員は、迎駕の人員を以て、功を論じて補選すべし、とあつたのを知らぬか。
阮大鋮　（喜んで）そいつは有りがたい。どうぞ宜しく御願ひ致します。
馬士英　皆、胸にある。心配するな。（退場しかける）
阮大鋮　ぐづぐづしてゐては駄目です。わたくしが、かりに副官になつて、內閣にお伴して、折をうかがふことにしては如何でせう。
馬士英　わたしは、內閣に入るのは初めてだから、事務の都合がわからないのだ。君が來て、世話をして貰ふ分には差しつかへない。だが、氣をつけてくれ給へ。
阮大鋮　委細合點。（馬の代りに笏を持つて、尾いてゆく）
馬士英　（歌ふ）
舊內閣の新宰相
欣喜雀躍
足は高高、有頂天
やつとこ大臣われ
阮大鋮　忘れ給ふな、この附添の心づくし。

馬　高樓の東、あかつきの霧は黄いろ。

阮　新な參知政事のほこり

馬　江をわたる二人、帝のとも人

阮　またきざはしにお伴つかまつる　　「詩」

第十七幕　媒酌を斷る場

登場人物

楊文聰
香君
丁繼之（幇間）
沈公憲（同）
張燕筑（同）
卞玉京（歌妓）
寇白門（同）
鄭妥娘（同）
小使

楊文聰　（冠帶して登場、歌ふ）

南朝は風流を占めつくして
新帝はわかく
大江の淸きながれに
兵燹のけむりを防げば
司びとらも
美人を買ふ

わし事は楊文聰、迎駕の功によつて、禮部主事に補せられ、盟兄阮大鋮は、光祿卿に再任せられる。同鄕の越其傑、田仰らも、皆それぞれに官に補せられた。しかも、皆同日に任命せられた。實にさかんな事だ。丁度、漕撫の官が缺けて居た。で、田仰を推薦した。今し方、身受の金三百金を寄して、美人二人を探してくれ、任地に連れて行きたいとの話。廓中で、器量と言ひ、藝と言ひ先づ、何と言つても香君であらう。どれ一つ、行つて聞いて見ようか。（呼ぶ）小使、急ぎの御用だ。

小使　（登場）

胸に一部の紳士錄
足の下には千筋の衢　「詩」

（見て）旦那様、何か御用で。

楊文驄　急いでな、お前、師匠の丁繼之と、歌妓の卞玉京の家に行つて、用が有るから來てくれと、言ひつたへて來い。

小使　旦那樣、私は小使で御座います。ただ知つてゐるのは、御役所だけで御座います。幇間、藝妓の類については、一向に存じませんで。

楊文驄　これ、よく用をきいて行け。

賑ふ端午のよき日
水樓の春をこめて
伴なふは
きん達と乙女
これが銀河の
織りひめ彥星

小使　ああ、秦淮の水樓でございますか。わかりました。

楊文驄　（指して）お前は。（歌ふ）

棗の花紋
簾の影

窓の杏の花模様
それを目あてに
ねむごろに行け

三人　（丁繼之、沈公憲、張燕筑、登場）
　さとにや、いつも幇間の古だぬき
　役所にや、返り新参の茶坊主か　「詩」

丁　ここは、楊旦那の宅だ。お聞きしよう。（おとなふ）御免下さいまし、御免下さいまし。

小使　（出て見て）あなた方は、どちらから御出でかな。

丁　私めは丁繼之で御座います。この、沈、張の友達と、楊旦那様にお目にかかりたいと存じて参りました。よろしく、御取次下さい。

小使　（よろこんで）丁度よいところに來られた。今、こちらから、出かけようとしてゐたところだ。一寸お待ち下さい。（入りかける）

（卞玉京、寇白門、鄭妥娘、登場）

三人　燕の來かたが早かつた
　鶯の來ようが遲かつた　「詩」

卞 (呼びかける) お二人ともお待ちなさいよ。ちよいと。まあ、御一緒に參りませうよ。

丁 これはこれは、お姐さん方。

張 おぬし達は何をしに來たんだい。

鄭 つまり、同じ心配事さ。あなた方は、御所附の御師匠になるのが厭で、あたしたちは、お弟子になるのが厭だと言つたやうなわけさ。(一緒に入る)

楊文驄 (喜んで) 丁度、いいところへ來てくれた。

皆 けふ、わざわざ參りましたのは、御願ひの筋がありますので、しばらくの間、お話をお聞き下さい。(皆、叩頭の禮をする)

楊文驄 (皆を引き起して) まあまあ。兎に角坐り給へ。時に、その願つて何だね。

丁 (問ふ) 今度、新たに光祿卿になられた、阮樣は、旦那樣とお親しい仲でいらつしやいますか。

楊文驄 さうだよ。

丁 噂に聞けば、新しい陛下が御位におつきになつた時、阮樣が、傳奇物四つを獻上になつたところ、陛下には大よろこびで、その中の、燕子箋の荒筋を書き拔いて、わたし達から、宮中附の者を選んで稽古させようとの事で御座いますが、本當に、さう言ふお話が、あつたので御座いませうか。

楊文驄 その通りさ。

張　實を申せば、私たちもまた、この口一つに、八人の家内を養つて居ますわけで、それが、一たび宮中附になつて御覽なさい。一家の口が干上つて仕舞ひます。

鄭　あたし達も、又八つの口をこの口一つにすごす方で。

楊文驄　（笑ふ）あわてるぢやない。それを引き受けるのは、一組の役者だ。君たちは、皆、名人中に數へられる人人。誰が君たちに手を出すものか。

皆　何分ともに、好いやうにお願ひ致します。

楊文驄　明日、名前を書き出して　圓海氏のもとに送つて、不都合のないやうにして上げよう。

皆　お世話樣で御座います。

　　おもしろ、おもしろ
　南京の
　春の水景色
　舞へよ
　うたへよ
　夕日のかげに

それが、もし私たちを、皆お上の御用に召されて仕舞つて御覽なさい。

さても其後の
里はひつそり
しほさす川邊に
たそがれの
雨しめじめ
店はがらんど
青のすだれの屋形船に
酒くむこともなりませぬ

旦那樣、本當に御不憨をお掛け下されば、こんな功徳は御座りませぬ。

秦淮の
水はとんめり
山はほのぼのと
今迄通りに

楊文驄　わしからも、一つお願ひがある。

丁　貴方樣に、それは一體どんなことで。

楊文驄　わしの身内の田仰が、近い内に、漕撫の役になられるが、あの方が、ついさつき、三百金の身の代を預けて來て、妾を一人、世話して呉れとさ。

鄭　あたしをお世話して下さいな。

張　ぬしでは駄目だ。ぬしに行かれたら、里中の糸の調子がめちやくちやになつて仕舞わあな。

鄭　どうしてさ。

張　わしをひく手がなくなるからだわ。

鄭　しよつてるよ、この人は。

丁　旦那樣には、何かお心あたりが御座いますか。

楊文驄　一人有るんだがね。實はお前に橋わたしをして貰ひたいのだ。

卞　それは誰ですの。

楊文驄　それは、あの李香君さ。

丁　（首をふつて）あれだけは貴方、駄目で御座いますよ。

楊文驄　どうして。

丁　あれは、侯樣がお櫛上げなさいました。契りかはした片身ぢやものを

今更富貴が何んであろ
君に焦れて
春はゆふべの
留守は寂しや
ひるもとばりの奥ふかう
君をひとり
何で浮氣の沙汰であろ

楊文驄　朝宗は一時の花さ。今は災難を避けて遠くへ行つて仕舞つた。いつ迄、香君の事などくよくよ思つてるものか。だから、どこへかたづかうと、香君の勝手といふものさ。

卞　あの香君は、侯様が旅にお出になつてからと言ふものは、身をかたくして、自分の部屋に籠りつ切りでしてね。決して、外へ片づくやうな事は有りませんわ。話すだけ野暮ですよ。

つれに別れた
かり一羽
水に旅寝の
雲に鳴く

夜毎夜毎の
月射す窓に
べにかね落し
扇もなげて
笛も吹かねば
唄も歌はぬ
佛いじりの尼の身の上
水商買の身をなげく

楊文驄　ではあらうが、朝宗よりも好い男なら、また、考へをかへる氣になるだらう。

丁　香君の母親は、旦那のお近づき、いつそ、貴方樣から直にお話になられた方が好いでせう。

楊文驄　だが、君達も知つての通り、朝宗君の櫛あげは、もともと、わしが仲立だ。今更、面と向つて、どうして言ひ出せよう。二人で行つて見てくれ。いづれお禮はどつさりするさ。

丁、沈　ぢやあ、手前どもで行つて見ませう。

寇、鄭　へツ、あなた方にばかり、色商買のいい汁は吸はせませんよ。さあ、あたしたちも行きませう。

楊文驄　まあ、まあ、二人で甘く行かなかつた時に、お前達が行つたらいいだらう。

皆　御尤もで。ではお暇を。

楊文聰　それぢやあ、これで失禮するよ。

氣楽な客にうさ晴らし

仲人役は忙はし　　　　「詩」　　（退場）

丁、卞　楊旦那様がおきき届け下された。いや、有りがたい。

沈、張　全く。

丁　貴公ら四人は、先づ歸り給へ。二人は香君の處へ参つて、楊旦那様に代つて口說いて見よう。

鄭　甘く行つたつて、儲けの一人占めなんかしたら、承知をしないよ。みんなで、八の字と、刀の字にするんだよ。きつとだよ。

（皆、ふざけつつ退場。丁、卞、つれ立つて行く）

丁　ほんたうにさうだ。侯様の、香君をみうけしたときには、私たちがおとり持ちしたつけ。

おもひ出すのは

その夜の披露

花むこ花嫁

結ぶえにしのはなやかさ

たほとたいこの
おとり持ち
笛はひろひろ
箏はこうこう
それがどうだい、これから行つて、ほかの人へとなかうど話。こりや、餘つ程の恥知らずだ。
ほんに宿場の馬子に似た
お客送りの
役人むかへ
いや、いそがしい
卞　私たちが行かなかつたらどうなるでせう。
丁　若し私たちが行かなかつたら。
あの成金のパリパリが
無理にえらんで
えらび出し
お宮の中に押しこまう

卞　こりや、どうしたら好いかねえ。

丁　心配なさんな。どつちの顔もつぶさない、いい方法がある。兎も角、行つて、

しづかにたづね
やんわり話して
相談事の形ばかり
かたばかりで
義理をば濟まそ

卞　本當にそれがいいわ。それがいいわ。

丁　もうここだ。さあ這入らう。（呼ぶ）貞どのお宅か。

香君　（登場）

人もゐぬ家に
獨りわびしく
うれひ顏して
春の日ながを
うとうとと

わづらひごこち　「詩」

（問ふ）下においでになつた方はどなた。

卞　丁さんがおいでですよ。

香君　（遠くから見る）どなたかと思つたら、卞姐さんと丁の伯父さん。これはいらつしやい。まあ、おあがりなさいな。

卞、丁　（香君を見て）お母さんはお留守。

香君　盒子會に參りました。（座をすすめ、茶をくみながら、自分も坐る）

卞　香さん、家にこもつたつ切り、誰と遊んでゐらつしやるの。

香君　姐さん、あたし本當にねえ。

春のなごりの寂しさは
ひとりごもりの
家の窓
君をうらみの一ふしに
たもとにあまる
あたしの涙

卞　どうして、あなたはお嫁に行かないの。

香君　あたしは、もう侯様のお嫁ですもの。どうして今更そんなことが。

丁　あんたの心のうち、よおく、わかりました。實は、今日、楊旦那様がおつしやるには、田仰とか言ふえらい方が、三百金で、あんたを身うけして、妾にしたいから當つて見てくれとの話、それで、ここ迄來たわけだが。

香君　（うたふ）

きこえぬ
きこえぬ
戀につないだ二人の仲は
二人の仲のちぎりの歌は
千萬兩にもあたらうもの

卞　この話はあなた次第なのよ。あなたが、いやだと言へば、それだけの話。外にあたつて見ませう。

香君　（歌ふ）

笑ひ賣るのは
ほかに全盛の君にこそ

あたしや
この世の不幸者
富貴、榮華は
ちり、あくた

卞　かう言ふわけなら、どうお返事したものでせう。

丁　しかし、お母さんが歸つて來たら・金に目がくれないかな。

香君　お母さんは子煩惱ですから、無理なことは申しませんわ。

丁　それなら結構。見あげたものさ。いや、感心、感心。（起つ）左樣なら。

（沈、張、寇、鄭、どやどやと登場）

糸二筋も千里をつなぐ
闇の夜道に
六人衆のお急ぎよ

張　疾く行かうぜ。あの二人が口說き落して仕舞つたら、こちとらには用がなくなつて仕舞ふぜ。

寇　さうは問屋でおろさないさ。たとへ、あいつらがほつぽにしたところで、吐き出さしてやるわな。（皆皆香君のそばへゆく）

張　香さんお目出たう。

香君　何がお目出たいの。

寇　お二人の仲人がいらしつたぢやないの。何故お目出たくないの。

香君　田仰さんのお話の事。

張　さうさ。

香君　それなら、今あたしがお斷りしました。

沈　楊旦那の御心配を、おことわり出來ると思つてゐるのかい。

とるにもたらぬお前のために

大金持のお世話を下さる

香君　でも、あたしは、出世などをしたいとは思ひませんわ。そんな話なら、もう置いて頂戴。

丁、卞　二人で、根氣よくすすめて見ても駄目だつた。この人は、よそへは行きやあしないよ。

寇　よそへ行かないとなると大變だよ。あすにもとつつかまへて、御所にほおりこまれて仕舞ふよ。さうなつたら、もう男の顏など見られないからね。

歌もすみ

をどりもすめば

第十七幕

御所の門がばたり
　毎晩、毎晩
　床にごろり
　ああ、いや

香君　あたしは、一生やもめ暮しでも構ひませんけど、よそへとつぐことだけはねえ。
鄭　まあ、まあ、三百金も出して、こんなすべたが買へないのかねえ。
香君　姐さん。お金が欲しければ、貴女がいらつしやいな。ひとのことなどほつて置いて下さい。
鄭　（怒る）よくもこのあま、姐さんをやり込めたな。もう、もう、我慢が出來ない。（あばれまはる）
　このだるまめ
　このぢごくめ
　よくもこの姐さんを
　つべこべやり込め居つた
張　（威張つて）いけぶてい女だ。知つてるか。楊旦那様は、今度、禮部の主事になられて、手前たちをもお取締りになられるのだぞ。明日のうちにもとらまへられて、糸の彈けねえやうな目に合はされるなよ。
　この色町の取締り

この色町の取締り
雨風強くお叱りあつたら
桃も柳も
散り散りに、覺悟してろ

香君 勝手に咆えていらつしやい。わたしは、もう腹をきめてゐるんだから。

卞 年の割には、仲仲しつかりして居ますね。

丁 嚇かしたつて駄目だ。さあ、歸らう、歸らう。

鄭 あたしが、こんなにあばれたつて、構ひ手がないのかい。えい、もう腹の立つ。腹の立つ。あいつが、嫁かないと言ふなら、あたしが、二階からあいつをねじ下して。

無理滅法に
迎ひの車引き寄せて
無理めつ法に
迎ひの車引き寄せて
頭の物をへし折つて
舞衣なんかは引き裂いてやらう

丁　昔から言ふぢやねえか。金が有つたつて、賣らねい品物は買へないよ。やけを起したつて仕方がない。さあ、みんなかへらう。

沈、寇　あたしたちは、こんなめに會ひたくなかつたのだ。それを、誰だかに引つぱつて來られて、こんなつまらない日に會つて仕舞つた。かへらう、かへらう。

張、鄭　わたしたちもかへるか。

　早くかへらう
　赤い顔をかくし
　齒をくひしばり
　我慢、我慢
　からつ騷ぎ
　金にもならぬ
　糞でもくらへ

（沈、張、寇、鄭、がやがや言ひながら、退場）

丁、卞　香さん、安心おし。わたし達が、楊旦那におことわりして、もう決して、お前さんに、いやな目は見せないから。

香君　（ながむ）お二人様、有りがたう御座います。（別れの挨拶）

丁　なかうど蜂や、蝶のつかひや、ほんにうるさい。

香　窓に飛び込んで、夢を覺ます。

卞　君の心はや折られず。

香　朝な朝なに君を待つ。　　　　　　　　　　　　　「詩」

第十七幕

第十八幕

席次爭ひの場

登場人物

侯朝宗
史可法
高傑
黄得功
劉澤清
劉良佐
給仕
兵士

侯朝宗　(登場)

世の勝敗は碁盤の石

殷浩何の爲に空に字を書く
長江さへも天の南北は限らず
梶を中流に擊つて師にちかふよ　「詩一

小生は侯方域、前の日には史可法殿の代筆をして、腹立まぎれに、三大罪、五不可立の議論を書いて仕舞つた。ところが、意外にも、福王の踐祚、馬士英の入閣する結果となり、また、大勢の迎駕のけらい達も、その功績の次弟で、それぞれに任用せられた。史可法殿も、閣員の一人となられたけれども、このやうに江北軍を率ゐて外にゐられる。これこそ、かれらが史公を疎略にする證據。だが、あの方は氣にも留めないでかへつて、兵を指揮し、賊をつくすの謀り事に夢中になつて居られる。こんなに忠義な御方が、またと二人外に居られるだらうか。現在は、府を揚州に開いて、わたしをその參謀にして下された。時にけふは、四鎭の將軍をここに集めて、清兵南下に對する、黃河の守備について會議をなさる筈。どりや、史公にお目にかからうか。（書齋に至る）執事はお內かな。

（給仕出る）

給仕　これはいらつしやいまし。一寸お待ちを。お取次いたします。

侯朝宗　どうぞ。

史可法　（登場。うたふ）

江のほとりに
節を守る
武威赫赫
國をうれへて
老を忘れ
鬢には白く霜を置く

（侯を見て）けふは四鎭の會議の日だ。やがて、軍の支度を整へ、誓つて、君父のあだを報じようぞ。

侯朝宗　それは實に結構ですが、困つた事が有ります。あの高傑殿が、揚州、通州に鎭守して、我まま勝手なふる舞。それを、黃得功、劉澤淸、劉良佐の三鎭たちが、日頃から、うらみに思つて居る樣子。今日逢ひましたら、よく仲直りをさすことに致しませう。內輪喧嘩でも起つて御覽なさいまし、それこそ、賊軍に見込まれて仕舞ひます。

史可法　さうとも。今日逢つたら、わしからも一番言ひきかしてやらう。

（給仕、報ずる）

給仕　軍門に案內の太鼓、四鎭の參上、お呼び出しをお待ち受け申す、との事で御座います。

（侯、退場。史、正座にのぼり、軍樂裡に開門、兵ら、左右に儀衛として並ぶ）

四人　（高傑、黃得功、劉澤淸、劉良佐、軍裝して登場）

かなしや燕京に樂毅なし

誰知らう、江左に管夷吾のありと　「詩」

（内に入つて、史をみる）

史可法　（手を拱して立つ）

四鎭の小將ら、閣部大元帥にお目通り致します。（四人、拜する）

四人　（立ち並ぶ）元帥閣下、御用の程を仰せ下さいますやう。

史可法　さあさあ、どなたもお立ち下さい。

四人　わしは、閣員で且つ軍を監督する身の上だ。君命は重い。將士は皆わが指揮の下にある。

史可法　は。

四人　だが、四鎭の方方は、また、諸侯たる御身分。尋常の武弁ではない。（手を擧げて禮をする）お席にお就き下さい。軍評定を致しませう。

史可法　どう致しまして。

四人　お席にお就き下さい。わしが言ふのは、軍令も同樣。御遠慮なさるな。

史可法　は。（揖する）御免を。

（高、上座に着き、黃、澤、良の順に坐る。黃、怒つて高を見る）

（歌ふ）

淮南のささへ
江河の守り
勢ひたうたう
怪しき雲の陣を結ぶ
柳垂れ並んで
目もはるばる
風にいななく馬の聲
潮を返す弓のひびき
かのいにしへの
徐、常、沐、鄧はおろか
絳、灌、蕭、曹にも比ぶべし
心を合せ
いざ君、國を建て直さん
今日ここに集まれる

史可法

雄雄しの方方の姿や
見よ、そのかみの閣上の
功臣の繪姿そのまま

黄得功　（怒つて）元帥のおん前、わたくし、もとより好んで事を爭ふ譯では御座りませぬが、（指して）この高傑は、もともと降服いたした小賊、何の戰功でか、それが我我の上座におほつぴらに就くので御座いませう。

高傑　わしは、官軍に歸服する事も早く、年上ですぞ。君たちの下にどうして居られようか。

劉澤清　ここはお前の陣地だ。わしたちはお客様だ。客に對する禮も知らないで、兵を指揮するつもりか。

劉良佐　こやつは、揚州に在つて、貧澤三昧に威張り居る。けふは我らに上座をゆづるべし。

高傑　ふん。貴樣達が、力づくで取るなら、讓つてやつてもいい。

黄得功　何の取らないでどうする。（起ちあがつて）良佐、澤清二氏、一緒に來たまへ。早速、勝負をつけよう。

（怒つて退場）

史可法　（高に）かれらの言ふ事ももつともだ。讓つておやりなさい。

高傑　いや、死んでもかれらごとき者の下座に就くわけに參りませぬ。

史可法　それが大變な間違ひだ。

この堂堂の四人の將の

あればこそ
北朝も恢復出来よう
肩を並べて
押しゐるさまは
兄弟とも思はるゝに
席あらそひ
何のために
同心のよしみを棄つる
年功あらそひ
何しによろこびの色をかへる
一人は
目いからして
同室に打ち物を手にし
一人は
ふんぷんと平地に波をおこす

戰場の雄雄しさならで
屋うちの爭ひは何事であらう
あら笑止
中興の新帝
わきまへもなきこの子供を
侯とし
將軍としてあがめたるを
（指す）四人の方方がこんな馬鹿だとは夢にも知らなかつた。失望した。仕方がない。告示を出して、三鎭に言ひ聞かせ、一先づ守備にかへして、またの指圖を待たせよう。（高に）君はこの土地にゐる者だ。故に、わしの旗本にあつて、先鋒となり給へ。めいめいに、持場持場があれば、いさかひもしまいから。

高傑　元帥閣下に感謝致します。

史可法　わしが告示を書く迄、待つて居給へ。（書きしるす）
（内にて吶喊の聲。高、挨拶せずに出る。黃、澤、良、刀を持つて登場）

皆　高傑、出て來い。

史可法　（出て見て）やあ、貴樣達は、おほつぴらに刄物三昧。さては謀叛し居つたな。

黄得功　謀叛だと、馬鹿な。貴様のやうな、無禮な奴を殺しに來たのだ。

高傑　元帥閣下の御門前で、こんな騒ぎをしでかすやつこそ無禮ぢやないか。（三人、高に詰め寄る。軍門に入つて呼ぶ）閣下、閣下。助けて下さい。三人の奴めが、御府内に攻め込みましたぞ。

（三人、門外にがやがやする）

史可法　（驚いて立つ）

われ只だおもふ
塞馬南に來つて戰を挑み
鯨波漸く高い・と
かへつて我が兵の自ら殺し合ふを
今こそ
互ひに力を合し
戰ふも足らぬに
いかなれば
内輪喧嘩に
仲間割の纂を引き起さう

これこそ
『將はととのへがたく
北賊は討ちやすし』
（兵に言ひつける）早く侯君を呼んで來い。

兵士 （内に向つて）侯朝宗殿、御用で御座います。

侯朝宗 （急いで登場）
すつかり、お聽きしました。

史可法 御苦勞であるが、わしの命令をつたへて、混雜を鎭めて戴きたい。

侯朝宗 どうして、鎭めませう。

史可法 ここに告示がある。これを持參して、言ひ聞かして下さればよい。

侯朝宗 畏りました。（告示を受け取つて、出でて、見る）皆樣、お聞き下さい。私は、幕府の參謀であります。閣部大元帥の命を奉じて、この告示を三鎭に申し傳へます。

恭しく新主の中興に逢ひ、闖賊未だ討ぜず、正に我が輩、戈に枕して旦を待ち、功を立て報効の時。宜しく心に小忿を挾み、大謀を亂ることを致すべからず。中原を收復するを待つて、おだやかに宴を賜ひ、功を論じ坐を叙するは、自ら朝儀あり。目下軍容忽遽なり。凡そ事の權宜、皆、まさに相はかつて、舊交を失ふ

無かるべし。興平侯高はもと揚、通を鎭す。今は即ち留めて本帥の標下に在り。委して先鋒となす。靖南侯黄はなほ、廬、和に囘り、東平侯劉はなほ淮、徐に囘り、廣昌侯劉はなほ凰、泗に囘り、差遣を靜聽し、抗違する勿れ。軍法凛然たり。本帥は、情を容るる能はざるなり。特に諭す。

黄得功　われらは、無禮な賊めを殺さうばかり、何、好んで元帥の軍法を犯しませうや。

侯朝宗　いや、ただ今の、軍門の爭こそ、軍法のゆるさぬところ。

劉澤淸　そんなわけなら、元帥閣下をお騷がせ申すまい。さあ、諸君參らう。

劉良佐　明日、高傑の家に押し掛けよう。國の讐は宥しても、私の恨みは忘れがたい道理だからなあ。（三人退場）

侯朝宗　（入つて、史に向つて）三人は、命を聽いて、一先づ退散致しました。が、明日又、高の家に押しかける模樣で御座います。

史可法　困つた事になり居つたな。（高を指して）

高將軍、君こそは

ほしいままに爭ひの種を撒いた

何の奢りぞ

長老三人の上に座して

彼等を怒らす

言葉巧みに一時は事も靜まれ

事無事なるは一時のみ

とりなしも

空しくあせり

解きがたく

あだに惱む

このあらそひは

見るまでもなく

明らか

仲立ちも無駄ぞ

高傑　閣下。氣をお鎭め下さい。明日、かれらと一勝負致し、三鎭の人馬を我が手に合して、後、閣下に隨つて中原を恢復するも、むづかしいことでは御座いません。

史可法　君は何を言ふのか。現在、流賊は北より攻め寄せて、將に、黃河をわたらうとしてゐる。總兵許定國、それを防ぐことが出來ず、夜をこめての早馬。それ故、四鎭の君たちと相談して、黃河の防りをよくしたいのだ。今、爭ひが起つて見ろ、わが大事は空しくなつて仕舞ふ道理だ。心配になるも當然ではないか。

高傑　あの三鎭は外でもない。揚州が繁華なので、これを取りたいばかりの事。どうして、これをゆづつてなりませう。

史可法　それこそ笑ふべき話だ。

ただ一隊の長なるに
三鎭の者に驕るは
累卵よく泰山を壓せん
二十四橋を占めて
月夜の空に簫を吹き
君の遊ぶを見れば
かの煬帝の宮の跡に
柳たなびく宿を借らうとする
彼らの望みも無理ではない
君獨り
蕃釐の道觀に牡丹花の
世にも稀なる美しさを占むる

錢十萬
鶴の背に揚州を下る
その富貴
君を羨まぬは誰ぞ
あな淺間し
あすは彈けぶり
打ち消さう
廣陵の波

もう、何もかもお仕舞だ。わしは、もう覺悟した。手段もつきた。朝宗君、君の好いやうにして與れ給へ。

侯朝宗 まあ、暫らく樣子を見て、萬事はその上の事にしませう。（史、侯、退場）

（音樂裡に門閉つて、兵も皆退場）

高傑 （一人のこつて嘆息） この高傑も、男だ。おめおめと死んでならうか。明朝早く、黄金壩上に、勢ぞろひして、陣を張つて、かれらの來るのを待ち受けよう。さうだ、さうだ。

龍虎の爭ひ、男子の本領。

酒の席にも、刀を手にとる。
劉、項、何ぞ成敗を以て事を論じ得よう。
よし、首をはねらるるも、降参はせじ。　「詩」

第十九幕　合戰の場

登場人物

黃得功
劉良佐
劉澤清
高傑
侯朝宗
斥候
將校

（黃、良、澤、皆 裝し、將校等旗、武器を執り、吶喊の聲を擧げて登場）

黃得功　よく氣をつけ給へ。きやつめ、兵をあつめて、黃金壩上で待ち受けてゐるさうだ。三隊に別れて、進軍しよう。

劉良佐　わしの軍勢は少ないから、わしに戰ひを仕掛けさせて、君たちが戰つたら好いだらう。

黃得功　わしの部將の田雄がまだ來ないから、わしは二番隊になつて、鶴州殿に殿りを賴まうか。

劉澤淸　では直ぐ押し出せ。

（旗をうごかし、吶喊して、退場。高傑武裝して、軍校武器を持つて、隨つて登場）

高傑　陣を布いて、敵を待ち受けろ。

斥候　（登場）申し上げます。三家の賊共、旗をなびかせ、吶喊して直ぐ寄せて參ります。

（劉良佐、大刀を持つて、登場）

劉良佐　老ぼれ、高傑。さあ、馬を乘り出せ。雌雄を決しよう。

（高傑、槍を手にして、登場）

高傑　この馬鹿め、貴樣なんかが何だ。

（內にて鼓の音、高、良、斬り合ふ）

皆進め、こいつをとりこにしろ。

（兵、登場。亂戰。劉良佐、敗れて退場）

（黃、双鞭を持つて登場）

黃得功　俺の手前はよく知つて居らう。早く降參しろ。命だけは助けてくれる。

高傑　この高樣は、貴樣を生擒にするのは珍しくないわい。欲しいのは、貴樣の死首だ。

（內にて鼓の音。二人斬り合ふ）

者共、進め、進め。

（兵、登場。亂戰）

黃得功（急ぐ）　昔から、大將は大將同志戰ひ、足輕は、足輕同志戰ふものと、相場は決つてゐる。何といふ亂脈さだ。この無禮者めが。けふは是非なくお前に負けといてやるわい。（敗れ、退場）

（劉澤清、双刀を持ち、兵を率ゐて吶喊して登場）

劉澤清　高傑、貴樣一人には威張らせぬぞ。われ、劉鶴州も、また人馬を率ゐて參つた。亂軍も望む所だ。

高傑　俺は荒鷲だ。どこからでも好な所から來い。者共かかれ、かかれ。

（兩隊、混戰。侯方域、指揮の小旗を持つて、高臺に立ち、兵、銅鑼を鳴らす。皆、戰ひを止めて仰ぎ見る）

侯朝宗（旗を搖がして）　閣部大元帥の命令である。四鎭の仲間打は、皆元帥の責任故、先づ願はくば、元帥府に參つて、元帥を殺せ。次いでは、南京に上つて、皇居を掠め取れ。ここで合戰して、人民を騷がすな。

劉澤清　われら、決して反をなすわけでは御座りませぬ。ただ高傑が無禮を働き、席次を亂したるによつて、その黑白を爭はんとするに過ぎませぬ。のちほど、元帥にお目通り致しまする。

高傑　私は、もとより元帥の先鋒、何しに謀叛をはかりませう。賣られた喧嘩は買ふより外に、仕方が御座いま

せぬ。

侯朝宗　軍令に反して、勝手な騷ぎをしでかす者は、皆謀叛だ。明日朝廷に奏聞致す程に、君たち自身參つて、言ひ解かれたら宜しからう。

劉澤清　朝廷は我我の迎立せるもの。元帥は朝廷からさし向けられた者。軍令に背くは、とりも直さず、朝廷に背くの道理。ああどうしたらよからう。つつしんで、罪の次第をお待ち致しまする。元帥にお詫びの程お願ひ致します。

侯朝宗　高將軍、貴方はどう思はれる。

高傑　わしは元帥閣下の手足だ。軍法を犯したとならば、ただ、元帥の御處分にお任せする。

侯朝宗　では、一刻も早く、黃、劉の三鎭にも傳へて、共共に軍門に參つて、元帥にお宥しを乞ひ給へ。

劉澤清　二鎭は敗けて、各各の陣地に歸つて參つた。

侯朝宗　淮安と揚州は、兩兩、相待つ邦であり、何の宿怨もない。何故、人の指圖をお受けなされた。さあ早く行つて、元帥の仰せを承りたまへ。

（衆兵、退場。侯、臺を下りる。澤清、傑、共に行く）

侯朝宗　さあ、軍門に迄參つた。將軍方には、ここでお待ち下さい。お取次申し上げます。

（暫くたつて、又出る）

侯朝宗　元帥の命令です。

四鎭、ほしいまゝに相爭ふ。いづれも、軍法に照らして處分する。ただし、高將軍は禮儀をわきまへず、爭の原因をつくつたによつて、三鎭に謝罪を申しつける。仲直りの後に、追つて沙汰致すであらう。……

……とのお言葉です。

將軍にお勸めする

將軍にお勸めする

自ら思へ

禍來つて後いかに致さう

荊を負つて

軍門に跪き給へ

高傑　（煩悶して）われ高傑は、元帥旗下の先鋒、然るに、閣下は、わたしをかばつては下されぬ。却つて三鎭にあやまれとの仰せ。むしろ、死んだ方がましだ。止しだ、止しだ。元帥もこのわたしを認めては呉れないのだ。そんな次第なら、軍を率ゐて江を渡らう。外にすることがあるて。

この屈辱にどうして堪へよう

この屈辱にどうして堪へよう

江をわたつて
わが軍ぜいの旗をひるがへさう
（喚ぶ）者共われにつづけ。
（衆兵、登場。吶喊して、旗をふり高についで入る）

劉澤清　（これを見て）おや高傑め、つひに江をわたるぞ。さうだ、江南にはあいつの仲間が居たつけ。いづれ、そいつらと組み合つて、われわれを攻めに來るつもりだな。よし、俺も早く往つて、得功、良佐の二人と結んで、支度して、待ち受けよう。
滑稽至極な負けいくさ
滑稽至極な負けいくさ
長江に羞を雪いで
再び襲ふかれの
わざはひをとめよう
（澤清、退場。侯、呆然）

侯朝宗　かやうなことにならうとは、夢にも知らなかつた。
山河半ばは傾いて

山河半ばは傾いて
つくろふ術も今はない
人心崩れて
恩を忘るる

（南を望んで）あの高傑も、たうとう謀叛して仕舞つた。
揚揚と江をわたるを見る
揚揚と江をわたるを見る
中流に旗幟は亂れて
直に南徐口に入る

（北を望んで）あの劉澤清も、あわてて北方に行つて、三鎭の兵を一つに合せて、敵を待たうとするのだ。
戰ひのけむりこもり
戰ひのけむりこもり
實に
元帥の頭を搔かしめ
この參謀の手をもます

第十九幕

（歩き出し）ともかく、元帥に御返事して、何とか工夫をし直さう。さうだ、さうだ。

「詩」

堂堂府を開いて、四鎭を治む。
江北淮南、見廻ること幾度。
ただ恐る兵船と兵馬と。
皆、羨やむ好揚州。

第二十幕　鎮臺を移す場

登場人物

高傑
史可法
侯朝宗
傳令
副官
從卒
番兵

高傑（武器を執り兵を率ゐて登場。歌ふ）
　馬に鞭打つて
　いづこに行かう

いづこに行かう
江のながれは
城のかため
石弓は
攻め手の難儀
且つ兵を收め
且つ兵を收め
この揚州の地にこもらう

われ高傑、兵を率ゐて長江をわたり、蘇州、抗州を掠めようとしたところ、案外にも、巡撫の鄭瑄めが、船を出し、大砲を向けて、港口を塞いでゐた。仕方がない、揚州に歸ることにした。だが、あの三鎭の奴等は、今、どこに居るかしら。

傳令　（登場）將軍にお報らせ申し上げます。黃、劉の二鎭が、軍ぜいを率ゐて、南へ押し寄せて參りました。先陣は、まう高郵迄迫つて居ます。

高傑　ああ駄目だ。南へも行けず、と云つて北にも行けぬ。進退ここに谷まつた。（考へて）萬事は窮した。これから、史可法殿の軍門に參り、よくお賴みして。助けていただかう。（行く）

直ぐに行つてお願ひ申さう
直ぐに行つてお願ひ申さう
はづかし、はづかし
何とお詫びしよう
これこそ、これこそ
自ら招いた罪は
天も助けぬ
（内にて喊聲。高、兵を率ゐて、急いで退場）

史可法　（伴をつれて登場。歌ふ）
様子はかはつて
支へん術もない
夜もすがら
目覺めて
思ひわづらふ

侯朝宗　（登場）

はかな、はかな
經綸、皆反古となる

史可法　侯兄、兄給へ、高傑は默つて去り、三鎭も三鎭、軍令には從はぬ。我が幕下の軍ぜいとて、いくばくも居らぬ。とても、江北を守るわけに行かぬわい。みすみす、大事は去つて仕舞つた。どうしたらよからう。

侯朝宗　聞けば、巡撫鄭瑄が、港口を守つてゐるので、かれは南に行くことも出來ず、また揚州に歸つたさうです。

史可法　して、三鎭はどうしたらう。

侯朝宗　三鎭は高傑の歸つて來たのを知つて、兵揃ひをして、戰ふつもりらしく考へられます。先手は、もう高郵に迄迫つて居ります。

史可法　（愁へて）このさし迫つた難儀を、どう致したらよからう。

三百年の歷史をひるがへす
そは誰びと
片手を以て
あの青天をいかで支へ得よう
兵を退けるにも

むなしい言葉だけか

「合唱」

見わたすかぎり戰ひのけぶり

野にしかばね

纈みの綱は

揚州の兵、ただ

（副官、合圖の太鼓を打つ）

從卒　門外の太鼓。何か變事がありませうか。

副官　高將軍が兵をつれて、軍門に參り、元帥閣下にお目にかかりたいとの事。

史可法　たうとうやつて來たな。會ふと言つてやれ。まあ、何と言ふか聞いて見よう。

（史、正座につき、門を開く。兵、左右にならぶ）

高傑　（走り込んで）わたくし、高傑、ほしいままに陣地を離れ、罪、萬死に當る。何とぞ、御免し下さるやう。

史可法　高傑、君はもと一箇の亂民であつた。然るに朝廷では、君の歸順をお宥しあつた上に、侯爵に迄のぼせられた。いつ、君につれなく當られた。それが、わづかばかり氣に入らぬことがあるとて、謀叛致すとは何事だ。しかも、江をわたる事が出來ぬと見れば、また、軍門に降參する。にはかに叛いたと思へば、いつの

間にか降参してゐる。謀叛や降参を、子供のいたづらと考へてゐられるか。何と云ふなさけ無さだ。本來なれば、軍令に照らして、處分致す所ではあるが、その後悔の早かつたかどによつて、暫く赦してとらさう。

（高、叩頭して起つ）

史可法　それとも、何か言ひわけがあるか。

高傑　（又跪いて）先日、勝手に陣地を離れましたのは、ただ、謝罪が厭なためで御座いました。ところで今、わたくしが戻つて來たのを知つて、三鎭の者が、わたくしをやつつけようとして居ります。わたくしがいかに強からうと、一人ではどうしようも御座いませぬ。どうか元帥のお心添へで、御助けの程お願ひ致します。

（侯に向つて）侯先生も、わたくしのため一言のおとりなしを願ひます。

侯朝宗　どうあつても、謝罪をなさらんと言ふのか。元帥に處分をお願ひするかな。

史可法　いかにも。事今日に到つては、片方の肩ばかりも持てぬ譯だ。

座を爭つて
兵をうごかし
進退を知らず
かれ三家
鼎の足となつて

思ひあがる
ひとりぼつちの
君の軍の危なさ
糸のやう

「合唱」

見わたすがぎり戰ひのけぶり
野にしかばね
頼みの綱は
揚州の兵、ただ

高傑　元帥閣下がどうしてもお助け下さらぬとあれば、たとへ、わたくしは首を軍門に碎くと云へども、かれらの下座につくことは男としてなりませぬ。

侯朝宗　君の、あの黄金壩上の武者ぶりはどうなされた。

高傑　あの時は、向ふに從ふ軍ぜいなく、こちらは、全軍こぞつての混戰。それで勝ちました。だが、けふは三家一緒になつての復讐戰。怕れざるを得ませぬ。

侯朝宗　わたしにいい考へがあるのだが、多分、貴方が聞かれまいて。

高傑　謝罪以外の事なら、何でもしますよ、何んでもしますよ。

侯朝宗　日下、賊軍が南へ下り、黄河を渡らうとしてゐる。許定國には防ぎ切れず、日に夜をついで早打ち。そこで元帥には、兵を出して河を防がれる計畫。何故貴方は、命を奉じて軍を進め、開封、洛陽の鎭めとはお成りなさらぬ。これこそ、さしあたつての危難をのがれ、將來の功を立てる基で御座いませう。かの三鎭にしたところで、將軍の遠くゆかれた事を知れば、何しに又理由のない戰を起す事が出來ませう。さあ、將軍いかがです。

高傑　（首を垂れて考へながら）　少し考へさせて下さい。

（内にて吶喊の聲）

史可法　天をふるはすときの聲、あれは誰の軍ぜいだ。

番兵　（番兵、報ずる）

黄、劉の三鎭が、高將軍と戰はうと、軍ぜいを引きつれて、城門迄寄せて參りました。

侯朝宗　（懼れをなして）　これは弱つた。是非もない、元帥閣下のお命令どほりに致しませう。

史可法　ゆくと云ふなら、直ぐ軍令を出して、三鎭を諭すことにしよう。

（令箭を拔きとつて地に拋つ。物見の兵、令箭を取つて跪く）

高傑無禮、本來は軍法によつて處分致すべきなれど、人物を要する今の場合、また彊を迎ふるの功勞を思ひ、

暫くゆるし、開封、洛陽につかはして、河をふせぎ、功をもつて罪のあがなひをさすことにする。今日、既に揚州を離れた。三鎭、各各小さな怨を忘れ、共に大事に就かれよ。早速陣地に歸つて、沙汰を待つべし。

番兵　畏りました。（退場）

史可法　（高を指して）高將軍、君の氣質では、やはりどこに行つても、折合がつくまい。

　頼りないのは黄河の險
　將軍よ
　よく終りを謀り
　始めをおもんぱかれ

あの許定國、あれも又一こく者だ。

　よくよく用心
　酒の席茶の會上になまくら刀
　引き拔いて
　斬り合沙汰などし給ふな

「合唱」
　見わたすかぎり戰ひのけぶり

野にしかばね
頼みの綱は
揚州の兵、ただ

（侯に向つて）黄河の防ぎは、國の大事だ。わしが見るに、高將軍はどうも勇氣はあるが、謀り事が少し足らぬやうだ。もし、粗忽な事が有つたら、わしも罪を負はねばならぬ。所で、考へて見ると、河南はもともと君の故鄕だ。いつかも君は歸りたがつてゐられたが、道中にさはりがあつて行けなかつた。どうだ、今度、高將軍の軍と一緒に行かれたら。さうすれば、かねての願ひ通りに故鄕へも歸れるし、二つには、軍の監督もして戴けて都合がいいわけ。それが又、故鄕のために幸ひともならう次第。一擧に三得と云ふものだ。

侯朝宗　御好意、有りがたう御座います。それではお暇乞を申し上げ、身支度をととのへて、早速、出かけることに致しませう。

高傑　共にお暇致しませう。（拜別する）

史可法　（侯に）侯參謀が行かれれば、このわしが自身黄河を防ぎに參ると同じ事だ。ただ、形勢がどう變るかわからぬから、用心し給へ。いい便りをお待ち受けする。これこそ、

この人生は
黄河の流

勝負を爭ふ
運に任せて　「詩」
（史退場。軍樂裡に閉門）
（高、侯、門から出る）

高傑　侯先生。聞き給へ。ときの聲がまだする。多分、あいつらが邪魔をするだらう。

侯朝宗　大丈夫。かれらは、將軍の遠く行くのを知つて、怒も靜めて歸つて行くのです。それに、三鎭の兵は、皆東へ急ぐので、こちらは、勢揃ひして、北門から出ればいいさ。江蘇の天長縣から、安徽の六合縣を通つて、河南に急げば、別に故障はないでせう。
（衆兵、旗仗して伺候）

高傑　では出かけますかな。（行く）

侯朝宗　（歌ふ）
ふる鄕に思ひをかけ
隨分、たよりもしなかつた
烏さへ
一つの枝に棲むものを

第二十幕

うつうつとここに居られよう
ともどもに
歸りゆく道
白雲のはしるやう
早くも三年
今ぞ思ひは晴るる

高傑　（歌ふ）
全軍を統べて
行く道すがら
けぶらふ城や
柳の驛
隊伍やうやくみだる
ひそかに行け兵らよ
忍びの旅のわれらなれば
「合唱」

かへり見る
揚州よ、いづこ
平山堂よ
平山堂よ

高　落日は梢に旗をてらし、
侯　軍に從つて北に去る、ふる鄕はうれし。
高　黃河の岸に秋を防ぐの將、
侯　げに英雄が末路のやう。

「詩」

續二十幕　世間話しの場

登場人物

喪服の老人

講　家

商　人

宿屋の亭主

（內にて鐘を鳴らし、鼓を打つて　吶喊する聲）

喪服の老人　（包を背にして急ぎ登場）

戰やむはいつの日

天地の間殘るは老ぼれひとり

白髮戴いた江の邊りの旅人

止めがたなや血の涙　「詩」

畫家　（立ち止つて大いに哭く）

（二人、行李を背にして登場）

日は淡く、村村にのぼる煙

水さむざむと、雨もよひ　　　　「詩」

商人　（行李を背負つて登場）

年年に過ぎゆく道

うつりかはりに心いたむ　　　　「詩」

畫家　（商人に）さあさあ、少しも早く急ぎませう。わたし達は南京に行かうとするものだが、もう日が暮れさうだ。

商人　まつたくね。戰爭さわぎで、舟路は駄目だが、皆さんとおつれになつて好い都合だ。（年寄の役人をさして）あの年寄は、なぜあそこに立ち止つて哭いてゐるのでせうな。

畫家　（老役人に）御老人、道に迷つて、親兄弟にでもおはぐれなすつたかね。

喪服の老人　（手をふつて）いや、私は北京から參つた者で、河南迄來たところが、高傑の軍ぜいに逢つて、それはびつくり致しましたが、やつと逃げ出して、長江を渡つて來ました。路路どちらを見ても、命からがらの人ばかりで、つい悲しくなつて、哭いて居りました。（涙を掩ふ）

畫家　それは、それはお氣の毒な話で。

商人　北京からおいでになつた方なら、向ふの近頃の樣子もお聞きしたい。一緒に、同じ宿に泊つて、お話も伺ひたいが如何でせう。

喪服の老人　結構ですな。年寄の足はもう駄目。早どまりに致すとしませう。

畫家　（指して）あの宿屋はどうやら壁造りだ。あれにしませう。

三人　（讓り合つて）まあ、まあ、お先に。

（一緒に家に入る）

喪服の老人　（仰向いて見る）いい夕がほ棚だ。

畫家　どうです皆さん。行李を下して、この夕顏棚の下で、寄り合つて世間話をしちやあ。

（皆皆、行李をおいて坐る）

宿屋の亭主　（登場）

村の旅籠の塗立の壁

百姓ずまひの古ぼけ瓦の盆　［詩］

（皆に向つて）お客樣方、晩御飯はいかがで御座います。

皆　いや、結構。

畫家　氣の毒だが、酒を少し買つて來てくれ。それから、瓜と豆を出してくれ。お二人とゆつくり草臥やすみだ。

喪服の老人　御馳走になつてすみませんね。

商人　（老役人に）四海兄弟つて言ふのだから、いいぢやありませんか。これを飲んで仕舞つたら、二人でお返しをしませう。

（宿屋の主人、酒と酒の肴を持つて出る。三人、飲み始める）

喪服の老人　さつき、途中でお目にかかつたなり、まだお名前も承りませんが、南京に何か御用でいらつしやいますか。

畫家　わたくしは、姓は藍、名は瑛、字は田叔、西湖の畫家ですが、わざわざ、南京の友達をたづねて行くところです。

商人　わたくしは、蔡益所と云ひます。代代、南京の本屋で、江浦からの掛取りの歸りで。（老役人に）あなた様は、北京からお下りとのこと。失禮ながらお名前は。また、何の御用で、さうお急ぎですね。

喪服の老人　實を申せば、わたしの姓は、張、名は薇、もとは近衛の長官で御座いました。

商人　（驚いて）では、お役人様で御座いましたか。これは失禮致しました。

畫家　（聞く）それがどうして南京へ。

喪服の老人　三月十九日のことで御座いました。賊軍が北京を攻め落し、崇禎先帝には、煤山に於いて、御自分

でくびれて、崩御（おかくれ）になられました。周皇后も、又この災厄に會はれて、自分とお命をお縮めなされた。わたしは城のほとりをひた急ぎに急いで、わづかばかりの將校をひきつれて、御かばねを御尋ね申し、東華門外迄お運び申して、棺を買つてお收め申し、ただ一人、喪服をつけて、御守り申して居つた。

畫家　もとの、文武官はどうしてゐたので。

喪服の老人　何の一人も居りませう。丁度その時、李自成のひきゐる賊はらが、朝廷の役人らを搜し出して、兵糧をうばひ取り、わたしを監禁して、夾板の刑に處しました。わたしは、わたしの財產全部を與へたために宥されて、やつと、陛下の御なきがらの守護が出來ましたわけ。外の役人共は、逃げるものは逃げ、隱れるものはかくれ、また殺され、或はその身を國難になげうち、或は一家こぞつて節に死んだ者もありました。

畫家　左樣な忠臣も有りましたか。感服の至りだ。

喪服の老人　かと思へば、進んで、李自成の朝に參り、賀を申し、その役人となつた者も居ります。

商人　そんな畜生は殺して仕舞へ、殺して仕舞へ。

喪服の老人　（淚を掩つて）おいたはしや、兩陛下の御柩も、路ばたに投り出されて、誰一人、おかまひ申し上げるものとてもない始末。（畫家、商人、ともに淚を掩ふ）そのうちに、四月三日の事で御座いました。禮部は賊の命令で、御柩を皇陵にお送り致しました。わたしも旗を持つて、御柩のお伴をして、昌平州迄參りますと、趙と申す一人の書記が、志のある人たちをあつめて、錢三百貫を投げ出し、田皇后の古い御陵を掘り返

して、その中に、お休め申し上げたことでした。わたしは、陵の見張り番になつて、朝晩、香華をお捧げして居ました。所がどうでせう。五月の初旬、清の大兵が山海關に進んで參つて、李自成の軍を破つて、百姓共に安堵させ、明朝の敵をば討つて呉れました。また工部の役人をつかはして、寶泉局で鑄つた崇禎の錢で造營の材料を買ひ、新規に、拜殿、牌亭、門牆、橋道をこしらへて、他の十二陵と同じ型の御陵をつくつて呉れたことです。實に、昔よりするも、珍らしい次第でありました。わたしは、その工事の終るのも待たず、御位牌の御名をしるし、墓碑銘を書いて、さて、夜を日についで、一時も早く、南京の市民に、報告しようと急いで參りました。せいてゐるわけはかうした次第で。

畫家 えらい。こんな方が又と世間にゐられようか。もし、あなた樣が京にゐられなかつたら、崇禎先帝のお守りするものは、世にゐなかつたらうに。

商人 （問ふ）時に、あの太子樣、二王子樣の方方は、今どこにゐられますな。

喪服の老人 定王樣、永王樣の御消息は少しもわかりませぬ。太子樣は、海をわたつて、南の方にゐらしつたと承るが、多分、亂兵の手に、お果てになつたかも知れませぬ。（涙を掩ふ）

畫家 （聞く）聞けば、北京から、閣部史可法殿に宛て、亡國の將相たる者が、急いで喪に服し、主の靈前に哭かず、また仇討の兵を請はざるは何事かと、書面で責めて參つたとの事。史可法殿には直ぐ返事をいたされ、またわざわざと左懋第をやられて、喪服をつけ、哭せられた由。御存じでいらつしやいますか。

喪服の老人　わたしは途中で逢ひました。互ひに手を執り合つて哭いて仕舞ひました。

（內にて大雷雨の音。宿屋の亭主、燈を提げて急いで登場）

宿屋の亭主　大雨だ、大雨だ。早く、家へお這りなさい。

（皆立つて、袖を頭にのせて室に入る）

皆　これはひどい雨だ、ひどい雨だ。

喪服の老人　日が暮れましたな。わたしは香を焚くことにしよう。

商人　（聞く）どなたのために香をおたきになります。

喪服の老人　大行皇帝がお崩れになつてから、まだ一年と經ちませぬ。さればわたしは、かやうに喪服をつけ、朝晩に香を焚いて、哭拜を致しまする。（包の中から、香爐、香盒をとり出して、机の上に並べる。そして手を洗ふ。北をのぞんで再拜し、跪いて香を上る）

大行皇帝よ、大行皇帝よ、今日、七月十五日、孤臣張薇、叩頭して香を上る。

（內にて大雷雨のやまざる音。老役人、地に伏して、聲を放ち大聲に哭く）

畫家　（商人を呼んで）御いでなさい、御いでなさい。わたくしたち二人の平民も、一緒に哭拜をなして、弔意を表しませう。

（二人、共に跪いて、哭く。哭し終つて、共に叩頭して立ち、又再拜する）

畫家　老先生。長旅でさぞおつかれでせう。早くもうおやすみになつては。

喪服の老人　さうですな。さあ皆さんも御自由にどうぞ。

（皆皆、行李をといて寢る）

畫家　段段、雨がひどくなるやうだ。明あさは早く出かけられるかしら。

喪服の老人　天氣は人にはわかりませんよ。

商人　（老役人に）一寸、伺ひますが、先程の、忠義に死んだ文武官の方方のお名前はおわかりでせうか。

喪服の老人　それは又どうして。

商人　私どもの店で・歌本を拵へまして、世間にひろめ、人人に敬意を表させたいのです。

喪服の老人　それは結構だ。書いて置いたから、明日差しあげませう。

商人　ありがたう御座います

畫家　あの李自成に降つた、不忠不義な奴らの名前も、世間にひろめて、ののしらすのがいいでせう。

喪服の老人　それも、手控へがあります。一緒に差しあげませう。

商人　なほ、面白う御座いませう。

（皆、熟睡する）

（内にて亡靈たちの叫び呼はる聲。老役人驚いて耳をすます）

何やつの聲だらう。

喪服の老人 をかしいぞ、をかしいぞ。窓の外の雨かぜの聲に交つて、泣くやら、叫ぶやらするのが聞える。

（戰死者の亡靈、躍りながら、叫びながら登場）

（窓越に見る）何んておそろしい、何んておそろしい。皆、足が折れてたり、頭がなかつたり。戰死した者の亡靈だ。何の爲にやつて來たのだらう。

（亡靈たち退場。老役人、倒れ伏して、睡る。内にてほのかに音樂。人ばらひの聲）

（驚いて、目を覺ます）窓の外に、人聲やら、馬のいなぎやら、樂の音が聞える。門を開けて、何か見てやらう。（起つて、見る）

（あまたの文武官、冠帶して馬に騎り、旛、幢を立て、底氣味悪い音樂。皇帝、皇后の乘輿をとり卷いて、登場）

（驚いて、出迎へ、跪く）萬歳、萬歳、萬萬歳。孤臣張薇、恭しく聖駕を迎へたてまつる。

（皆、退場）

（立つて呼ぶ）皇帝、皇后、兩陛下には、いづこにみゆきし給ふぞ。孤臣張薇、お伴のかなはぬが殘念に御座います。（また拜哭する）

二人 （蘦家商人目覺めて問ふ）ああ、もう夜が明けた。もし、また拜哭をお初めですが、朝の御燒香かな。

喪服の老人 (泪を掩ふ) 不思議だ、不思議だ。澤山の號び聲を聞いたな。窓をあければ、皆、戰死者の亡靈だつた。

畫家 成程、昨夜は中元でした。地獄の罪の宥される時でした。多分、盂蘭盆に參つたので御座いませう。

喪服の老人 それはさて置き、もつと、不思議な事がありました。

商人 もつと不思議な事とは。

喪服の老人 その後で人聲や、馬の聲や、音樂の音を聞きましたのさ。門をあけて見ると、崇禎の先の皇帝陛下と、周皇后樣が、御一緒で、東の方へ輿でおいでになるのを拜見しました。はつきり見ました。お伴の文武百官たちは、皆、殉難の方方でした。前にほのかに音樂を奏し、儀仗を整へて、昇天なさる御樣子で御座いました。わたしは、路ばたに平伏して、御輿をお送りしながら、思はず、聲をあげて、泣き出しました。

畫家 そんな不思議がありましたか。先の陛下方が、御昇天遊ばすので御座いませう。これと云ふのも、貴方樣のまごころの致すところ。自ら、靈顯あらたかな次第でございませうで。

喪服の老人 わたしは、今日、一つの念願を起しました。明年、七月十五日、南京の景色の好い場所に於いて、施餓鬼を行ひ、潔齋、追薦をして、一切の亡靈を濟度致さうと考へます。お二方にも、御參拜下さいますか。

商人 あなた樣が、さうした御法要をなさるなら、わたくしも應分の御布施につきます。

喪服の老人 有りがたう御座います。御親切な方だ。南京に行けば、又私も、書や、畫を買ひに參りますから、

……度度、お目にかかりたいと存じます。

商人　何分ともに宜しく。

畫家　さあさあ、皆支度をして、も少し先でお別れしませう。

（皆、行李を背にして退場し始める）

雨に洗はれた鷄籠山のみどり。
あさあけのすず風追つて人はゆく。
鳴くは烏か、荒塚の梢。
槐樹の落葉、廢宮の垣に。
みかどの心かよわくて、
うつけ將軍。
老いさらばつて都にわかれ、
なげきながら、戰場を過ぎる。

「詩」

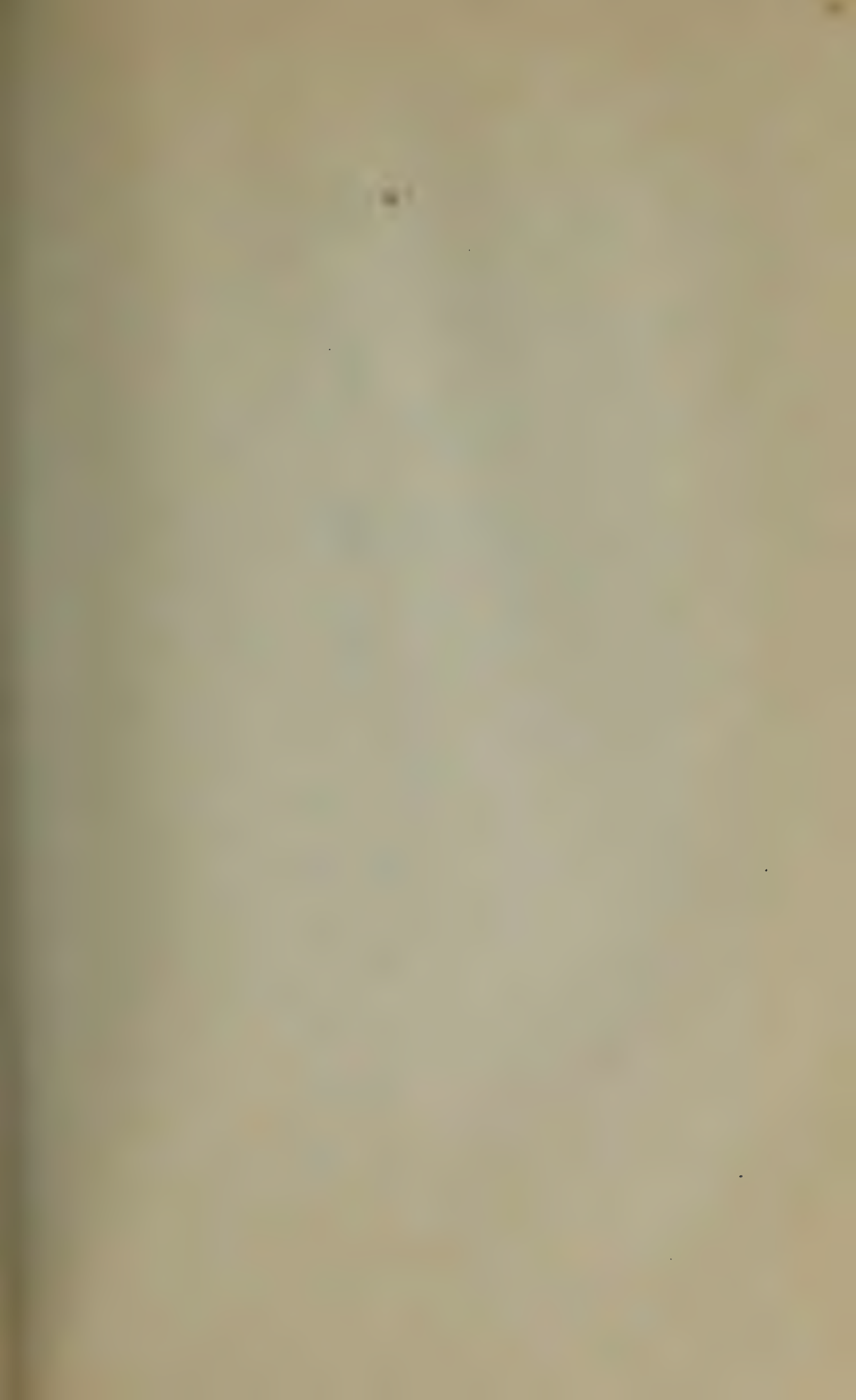
桃花扇卷上目次

桃花扇（上）

清 云亭山人 著
鹽谷 温 註

小引

傳奇雖二小道(一)一。凡詩賦・詞曲・四六・小說家。無二體不一レ備。至下於摹二寫鬚眉一。點二染景物上。乃兼二畫苑一矣。其旨趣實本二於三百篇(二)一。而義則春秋用筆。行文又左・國・太史公(三)也。於下以警レ世易レ俗贊二聖道一而輔中王化上。最近且切。今之樂猶二古之樂一。豈不レ信哉。桃花扇一劇。皆南朝新事。父老猶有二存者一。場上歌舞。局外指點。知下三百年之基業。隳二於何人一。敗二於何事一。消二於何年一。歇中於何地上。不三獨令二觀者感慨涕零一。亦可下懲二創人心一。爲中末世之一救上矣。蓋予未レ仕時。山居多レ暇。博採二遺聞一。入二之聲律一。一句一字。抉レ心嘔成。今携二遊長安一。借讀者雖レ多。竟無二一句一字。着レ眼看畢之人一。每撫レ胸浩歎。幾欲レ付二之一火一。轉(ウタタ)思天下大矣。後世遠矣。特識二焦桐(四)一者豈無二中郎一乎。予姑俟レ之。

康熙己卯(五)三月　　云亭山人偶筆

(一) 小道。猶ほ末技といふが如し、論語に云ふ、子夏曰、雖二小道一有二可レ觀者一、致レ遠恐レ泥、是以君子不レ爲也。

(二) 三百篇。詩經には三百五篇あるにより、普通三百篇といふ。

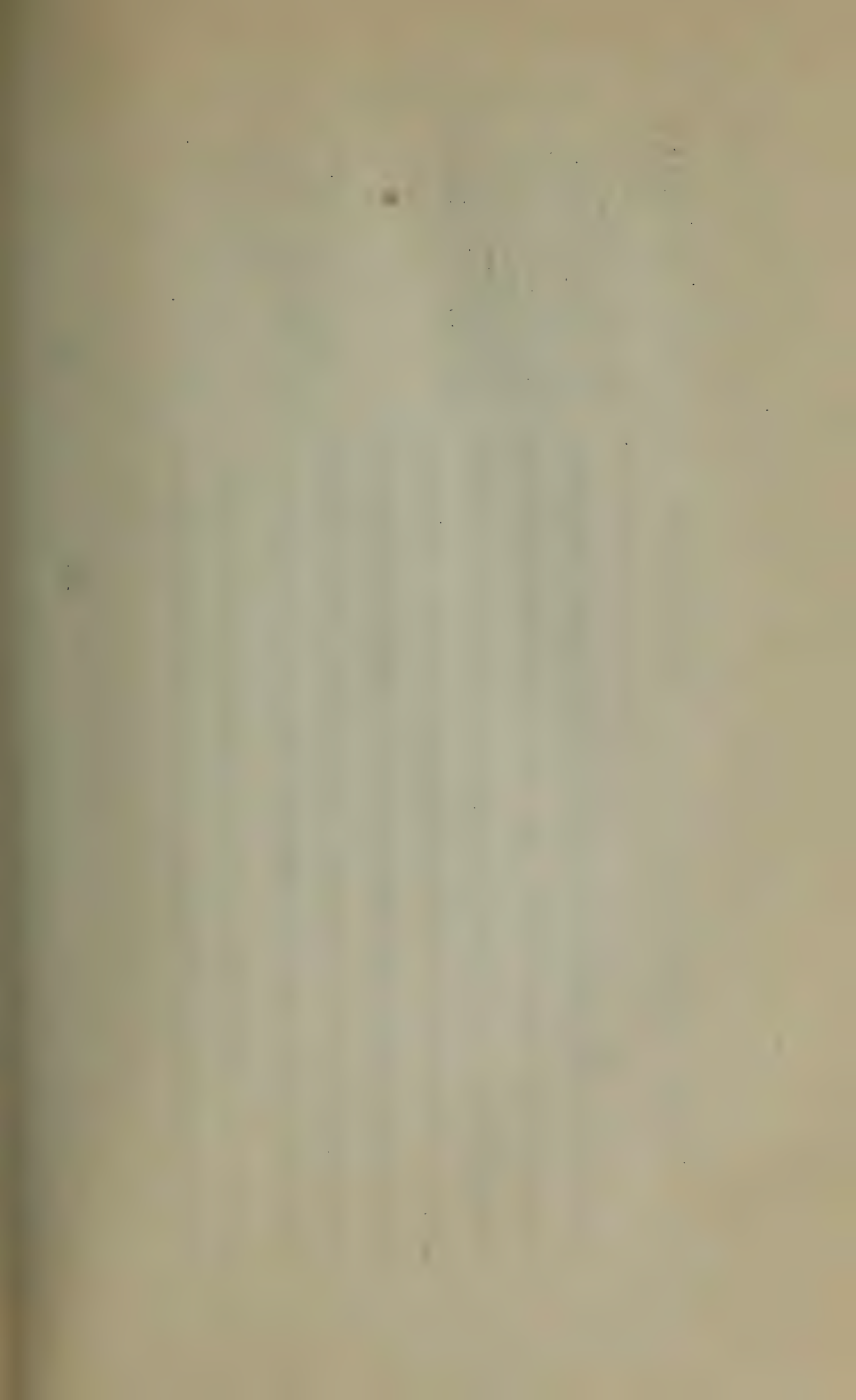
(三) 左國太史公。左傳、國語、及び史記をいふ。

(四) 焦桐。琴をいふ。蔡邕の故事蓋し知音を千載に待つ意なり。後漢書に云ふ、吳の人、桐を燒いて爨ぐものあり、蔡邕大烈の聲を聞きて、其の良材なるを知り、因て請ひ、裁ちて琴となす、果して美音あり、而して其の尾猶ほ焦げたり、時人名けて焦尾琴と曰ふと。

(五) 己卯。康熙三十八年なり。

小識

傳奇也者傳其事之奇焉者也。事不奇則不傳。桃花扇何奇乎。妓女之扇也。蕩子之題也。遊客之畫也。皆事之鄙焉者也。爲悅己容。甘剺(サイテ)面以誓志。亦事之細焉者也。伊(コレ)其相謔。借血點而染花。亦事之輕焉者也。私物表情。密痕寄信。又事之猥褻而不足道者也。桃花扇何奇乎。其不奇而奇者。扇面之桃花也。桃花者。美人之血痕也。血痕者。守貞待字。碎首淋漓。不肯辱於權奸者也。權奸者。魏閹(一)之餘孽(二)也。餘孽者。進聲色。羅貨利。結黨復仇。隳(ヤブル)三百年之帝基者也。帝基不存。權奸安在。惟美人之血痕。扇面之桃花。嘖嘖在口。歷歷在目。此則事之不奇而奇。不必傳而可傳者也。人面耶。桃花耶。雖歷千百春。艷紅相映。問種(三)桃花之道士。且不知歸何處矣。

康熙戊子(四)三月　云亭山人漫書

(一) 魏閹。魏忠賢をいふ。
(二) 餘孽。馬士英、阮大鋮を指していふ。
(三) 種桃花之道士。桃花扇の作者をいふ。
(四) 戊子。康熙四十七年。

族兄方訓公。崇禎末爲南部曹。予舅翁秦光儀先生。其姻婭也。避亂依之。羈留三載。得弘光遺事甚悉。旋里後。數爲予言之。證以諸家稗記無弗同者。蓋實錄也。獨香姫面血濺扇。楊龍友以畫筆點之。此則龍友小史(一)言於方訓公者。雖不見諸別籍。其事則新奇可傳。桃花扇一劇。感此而作也。南朝興亡。遂繫之桃花扇底。

予未仕時。每擬作此傳奇。恐聞見未廣。有乖信史。寤歌之餘。僅畫其輪廓。實未飾其藻采也。然獨好誇於密友曰。吾有桃花扇傳奇。尚秘之枕中。及索米長安。與僚輩飲讌。亦往往及之。又十餘年。興已闌矣。少司農田綸霞先生來京。每見必握手索覽。予不得已。乃挑燈塡詞。以塞其求。凡三易藁而書成。蓋己卯之六月也。

前有小忽雷傳奇一種。皆顧子天石。代予塡詞。予雖稍諳宮調。恐不諧於歌者之口。及作桃花扇時。天石已出都矣。適吳人王壽熙者。丁

(一) 小史。侍僮をいふ。

繼之友也。赴紅蘭主人招。留滯京邸。朝夕過從示予。以曲本套數。時優熟解者。遂依譜塡之。每一曲成。必按節而歌。稍有拗字。卽爲改製。故通本無聱牙之病。

桃花扇本成。王公薦紳。莫不借鈔。時有紙貴之譽。己卯秋夕。內侍索桃花扇本甚急。予之繕本。莫知流傳何所。乃於張平州中丞家。覓得一本。午夜進之直邸。遂入內府。

己卯除夜。李木菴總憲。遣使送歲金。卽索桃花扇。爲圍爐下酒之物。開歲燈節。已買優扮演矣。其班名金斗。出之李相國湘北先生宅。名噪時流。唱題畫一折。尤得神解也。

庚辰四月。予已解組。木菴先生。招觀桃花扇。一時翰部臺垣羣公。咸集。讓予獨居上座。命諸伶更番進觴。邀予品題。座客嘖嘖指顧。頗有凌雲之氣。

長安之演桃花扇者。歲無虛日。獨寄園一席。最爲繁盛。名公鉅卿。墨客騷人。駢集者。座不容膝。張施則錦天繡地。臚列則珠海珍山。選優兩部秀者。以充正色(二)。盞者以供雜脚(三)。凡砌抹(四)諸物。莫不應手裕如。優

(二)正色。主なる役割をいふ。
(三)雜脚。はした役をいふ。
(四)砌抹。道具方をいふ。

詩酒風流。今時王謝(五)也。故不惜物力。爲此豪擧。然聲歌靡麗之中。或有掩袂獨坐者。則故臣遺老也。燈灺(六)酒闌。唏噓而散。

楚地之容美。在萬山中。阻絕人境。卽古桃源(七)也。其洞主田舜年。頗嗜詩書。予友顧天石。有劉子驥(八)之願。竟入河訪之。盤桓數月。甚被崇禮。每宴。必命家姬奏桃花扇。亦復旖旎可賞。蓋不知何人傳入。或有雞林之賈(九)耶。

歲丙戌(一〇)。予驅車恒山。遇舊寅長劉雨峯爲郡太守。時羣僚高讌。留予居賓座。觀演桃花扇。凡兩日纏綿盡致。僚友知出予手也。爭以杯酒爲壽。予意有未愜者。呼其部頭即席指點焉。

顧子天石。讀予桃花扇。引而申之。改爲南桃花扇。令生旦(一一)當場團圞。以快觀者之目。其詞華精警。追步臨川(一二)。雖補予之不逮。未免形（アラハス）予傖父。予敢不避席乎。

讀桃花扇者。有題辭(一三)。有跋語。今已錄於前後。又有批評。有詩歌。其每折之句批。在頂。總批在尾。忖度予心。百不失一。皆借讀者信筆(一四)書之。

（前頁より）導、謝安、共に晋室再造の元勳にして、その子弟、富貴を極め風雅を愛好せり。故に云ふ。

（六）燈灺。灺は燭の餘燼。

（七）桃源。陶淵明の桃花源記の故事、今湖南常德府桃源縣に秦人洞あり、傳へて其の遺址となす。

（八）劉子驥。漁父の話を聞きて、桃源に入らんとして果さざりし人、桃花源記に出づ、

（九）鷄林之賈。朝鮮の商人、白樂天の詩を求む、曰く其の國の宰相百金を以て之を購ひ、僞るものは之を辨ずと。

（一〇）丙戌。康熙四十五年。

（一一）生旦。侯朝宗と李香君。

（一二）臨川。湯顯祖のこと、牡丹亭還魂記の作者。

（一三）題辭云云。題辭、跋語、批評、詩歌等、皆略して錄せず、又後序あり、最も名あり、

（一四）信筆。筆に任せて書くこと。

縱橫滿紙。已不記出自誰手。今皆存之以重知己之愛。至於投詩・贈歌充盈篋笥美。且不勝收矣。俟錄專集。

桃花扇鈔本。久而漫滅。幾不可識。津門佟蔗村者。詩人也。與粤東屈翁山善。翁山之遺孤。育於其家。佟爲謀婚產。無異己子。世多義之。薄遊東魯。過予舍。索鈔本。讀之纔數行。擊節叫絕。傾囊槖五十金。付之梓人。計其竣工。尙難于百里之半。災梨（一二）。眞非易事也。

云亭山人漫述

（一五）災梨。板木の燒けしこと。

凡例

一、劇名桃花扇。則桃花扇譬則珠也。作桃花扇之筆。譬則龍也。穿雲入霧。或正。或側。而龍睛。龍爪。總不離乎珠。觀者當用巨眼。

一、朝政得失。文人聚散。皆確考時地。全無假借。至于兒女鍾情。賓客解嘲。雖稍有點染。(一)亦非烏有子虛(二)之比。

一、排場有起伏轉折。俱獨闢境界。突如而來。倏然而去。令觀者不能預擬其局面。凡局面可擬者。即厭套(三)也。

一、每齣脈絡聯貫。不可更移。不可減少。非如舊劇東拽西牽。便湊一齣。

一、各本塡詞。每一長折。例用十曲。短折。例用八曲。優人删繁就簡。只歌五六曲。往往去留(四)弗當。孤作者之苦心。今於長折。止塡八曲。短折。或六。或四。不令再删故也。

一、曲名不取新奇。其套數。皆時流諳習者。無煩探討。入口成歌。而

(一)點染。修飾なり。
(二)烏有子虛。假想の人をいふ、司馬相如の子虛の賦に出づ。
(三)厭套。陳腐の意。
(四)去留。取捨に同じ。

詞必新警。不ㇾ襲ニ人牙(五)後一字ー。

一、詞曲皆非ニ浪塡(六)ー。凡胸中情。不ㇾ可ㇾ說。眼前景。不ㇾ能ㇾ見者。則借ニ詞曲ー以詠ㇾ之。又一事再述。前已有ニ說白ー者。此則以ニ詞曲ー代ㇾ之。若應ㇾ作ニ說白ー者。但入ニ詞曲ー。聽者不ㇾ解。而前後間斷矣。其已有ニ說白ー者。又奚必重入ニ詞曲ー哉。

一、製ㇾ曲必有ニ旨趣ー。一首成ニ一首之文章ー。一句成ニ一句之文章ー。列ニ之案頭ー。歌ニ之場上ー。可ㇾ感可ㇾ興。令ニ人擊ㇾ節嘆賞ー。所謂歌而善也。若勉强敷衍。全無ニ意味ー。則唱者。聽者。皆苦事(七)矣。

一、詞曲入ニ宮調ー。叶ニ平仄ー。全以ニ詞意明亮ー爲ㇾ主。每ㇾ見ニ南曲ー。艱(八)澁扭捏。令ニ人不ㇾ解。雖ニ强合ニ絲竹ー。止(タダ)可ㇾ作ニ工尺(九)(コンチエー)字譜ー。何以謂ニ之塡詞ー耶。

一、詞中使用典故。信(マカセテ)ㇾ手拈(トリ)來。不ㇾ露ニ餖(一〇)飣堆砌之痕ー。化ㇾ腐爲ㇾ新。易ㇾ板(一一)爲ㇾ活。點(一二)ㇾ鬼垜(ツムハ)ㇾ屍。必不ㇾ取也。

一、說白。則抑揚鏗鏘。語句整練。設(一三)科打諢。俱有ニ別趣ー。寧不ㇾ通ㇾ俗。不ニ肯傷ㇾ雅。頗得ニ風(一四)人旨ー。

一、舊本說白。止作ニ三分ー。優人登ㇾ場。自增ニ七分ー。俗態惡謔。往往點ㇾ金

(五)牙。齒なり、口に同じ。
(六)浪塡。孟浪塡詞の意。
(七)苦事。迷惑の意。
(八)艱澁扭捏。ひれくれてむづかしいこと。
(九)工尺。樂曲の譜。唱歌のド、レ、ミ、フア、ソといふが如し、
(一〇)餖飣堆砌。雜陳すること。
(一一)板。平板、平凡の意、
(一二)點鬼云云。故事を濫用すること。
(一三)設科打諢。所作をいふ。
(一四)風人。風は國風、風人は詩人といふが如し。

是故耳。

一、設科之嬉笑怒罵。[一五]如白描人物鬚眉畢現。引人入勝[一六]者。全借乎此。今俱細爲界出[一七]。其面目精神。跳躍紙上。勃勃欲生。況加以優孟[一八]摹擬乎。

一、脚色所以分別君子小人。亦有時正色[一九]不足。借用丑・淨者。潔面・花面[二〇]若人之妍媸[二一]。然當賞識于牝牡・驪黃[二二]之外耳。

一、上下場詩。乃一齣之始終條理。倘用舊句俗句。草草塞責。全齣削色矣。時本多尚集唐[二三]。亦屬濫套。今俱創爲新詩。起則有端。收則有緒。著往飾歸[二四]之義。彷彿可追也。

一、全本四十齣。其上本首試一齣。末閏一齣。下本首加一齣。末續一齣。又全本四十齣之始終條理也。有始有卒。氣足神完。且脱去離合悲歡之熟徑。謂之戲文。不亦可乎。

云亭山人偶拈[二五]

と。

(一六)勝。佳興の意。

(一七)界出。あらはし出すこと。

(一八)優孟。優人をいふ。孟は楚國の名優、史記滑稽列傳に出づ。

(一九)正色。生・旦・外・末等をいふ、正色に丑・淨を借用すとは柳・蘇・丁・蔡の場に出づる時、暫く粉墨を洗ひ去るが如し。

(二〇)花面。淨・丑をいふ、面にくまどりを施すこと。

(二一)妍媸。妍醜に同じ。

(二二)牝牡・驪黃之外云云、君子小人を求むべき意。

(二三)集唐。唐人の句を集めて全詩となすこと、牡丹亭還魂記の如き是なり。

(二四)著往云云。往は前、歸は後なり。

(二五)偶拈。偶筆に同じ。

一左部

正色

侯朝宗　生

閒色

陳定生　末　吳次尾　小生

合色

柳敬亭　丑　丁繼之　副淨　蔡益所　丑

潤色(一)

沈公憲　外　張燕筑　淨

一右部

(一)潤色。潤は餘なり。

正色

李香君　旦

閒色

楊龍友　末　李貞麗　小旦

合色

蘇崑生　淨　卞玉京　老旦　藍田叔　小生

潤色

寇白門　小旦　鄭妥娘　丑

部分(二)左右。各四色。共十六人。

一奇部

中氣(三)

史道鄰　外

戾氣(四)

（二）左右。左は男、右は女なり、

（三）中氣。中は正なり。

（四）戾氣。戾は不正なり。

（五）煞氣。煞は殺なり、

餘氣

高傑　副淨

煞[五]氣

田雄　副淨

一偶部

中氣

左崑山　小生　黃虎山　末

戾氣

馬士英　淨　阮大鋮　副淨

餘氣

袁臨侯　外　黃仲霖　末

煞氣

劉良佐　淨　　劉澤淸　丑

部分奇偶(六)。各四氣。共十二人。

一總部

經星

張道士　外

緯星

老贊禮　副末

總部經緯各一星。前後共三十八。

色者。離合之象也。男有其儔。女有其伍。以左右別之。而兩部之錙銖不爽。氣者。興亡之數也。君子爲朋。小人爲黨。以奇偶計之。而兩部之毫髮無差。張道士方外人也。總結興亡之案。老贊禮(七)無名氏也。細參離合之場。明如鑑。平如衡。名曰傳奇。實一陰一陽之爲道矣。

云亭山人偶定

(六) 奇偶。奇は君子、偶は小人な

(七) 無名氏。蓋し云亭山人自ら寓するなり。

先聲　副末

聽稗　生　小生　副淨
說書鼓　板　醒木

傳歌　小旦　末　旦　淨
筆硯　曲本　歌板

鬨丁　副淨　丑　副末　外　末　小生　四雜
副淨
祭案　香爐　燭臺

偵戲　副淨　丑　四雜　末
拜帖　戲箱　把子　燕子箋　曲本　酒壺　酒杯

訪翠　生　丑　末　淨　小旦　旦　雜
香扇墜　汗巾　櫻桃　茶壺　茶杯　花瓶　酒壺

酒杯　骰盆

眠香

小旦　雜　末　旦　生　副淨　外
淨　小旦　老旦　丑
妝奩　鏡臺　箱籠　銀封　吉服　酒壺　酒杯　筆硯
詩扇　詩箋　吹彈樂器　紅鐙二　銅錢十

卻奩

雜　末　小旦　生　旦
馬桶　花翠　新衣　詩扇

鬧榭

末　小生　雜　生　旦　丑　淨
副淨　衆雜
水榭　燈籠　酒壺　酒杯　燈船三　樂器　筆
硯　箋

撫兵

副淨　末　四雜　小生
令箭

修札

丑　生　末
說書鼓　板　筆　硯　書函

投轅　淨　副淨　丑

帽　靴　繩索　鼓　牌示　兵械　書函

辭院　末　副淨　丑　外　淨　丑　行裝

哭主　副淨　小生　衆雜　丑　外　末　淨

黃鶴樓匾　卓席　牀枕　鐃鑼　旗仗　鼓吹　說

書鼓　板　塘報　鞭　鈴　素衣裹布

阻奸　生　外　丑　小生　副淨　雜

書函　燭臺　筆　硯　東　燈籠

迎駕　淨　副淨　外　丑

縉紳便覽　眼鏡　筆　硯　表章　差吏衣服

箱包　馬鞭

設朝　小生　小旦　老旦　外　淨　末　丑

儀仗　袍　笏　表文　本章　諭旨

拒媒　末　雜　副淨　外　淨　老旦　小旦

丑

茶杯

爭位

生　小生　外　衆雜　副淨　末　丑　淨

儀衞　筆　硯　告示　刀

和戰

末　淨　丑　衆雜　副淨　生

旗幟　兵仗　大刀　長鎗　雙鞭　雙刀　令箭

傳鑼

移防

副淨　衆雜　外　雜　生　丑

鼓　令箭

閒話

外　小生　丑　副淨　衆雜

白布　麻衣　包裹　酒杯　菜碟　瓦鐙　香爐

香盒　香案　洗盃　旛幢　細樂　乘輿

孤吟

副末

媚座

淨　外　雜　末　副淨

茶杯　茶盤　卓席二　酒壺　酒杯　客單

賞封

守樓

內閣燈籠二　衣包　銀封　綵轎　詩扇　綉衣
梳包頭　血點扇

寄扇

旦　末　淨
血點扇　畫箋　畫筆　桃花扇　手帕　頭繩

罵筵

副淨　老旦　副淨　外　淨　小旦
丑　雜　旦　淨　末　外　小生
道巾　道袍　票子　雪畫軸　卓席二　茶酒爐
茶酒壺

選優

外　淨　小旦　丑　副淨　四雜　小生
薰風殿額對聯　果盒　酒壺　酒杯　十番樂器
宮扇　曲本

賺將

生　副淨　淨　丑　四雜　外　末
小生　衆雜
旗仗　印牌　卓席　酒壺　酒杯　茶碗　筯

燈籠　鼓吹　紙爆　刀　繩　火把　弓箭

首級

逢舟

淨　丑　三雜　外　小旦　副淨　生

包裹　執鞭　船篙　舊衣　火盆　桃花扇

題畫

小生　生　末　雜

畫案　畫筆　硯　色箋　桃花扇　桃源圖

逮社

丑　生　淨　末　小生　雜　副淨

衆雜　淨　四雜

招牌寫金陵蔡益所書坊發兌古今書籍　二酉堂

扁　書架　鋪櫃　毛帚　時文封面寫復社文開

包裹　拜帖　大轎　金扇　執事　黃傘　掌扇

繩鎖

歸山

外　副淨　四雜　淨　生　末　小生　丑

刑具　文書封筒　拍木　公案　籤筒　筆　硯

盒　書函　報鈔　書札　馬鞭　鎖頭　箬笠　芒

草檄　淨　副淨　衆雜　小生　外　末　丑
黃鶴　酒家牌　酒旗　鼓板　酒壺　杯　弓矢
盔甲　旗幟　文武執事全　甯南帥府燈籠二　總督部院燈籠二　監軍察院燈籠二　提鎖　燭臺
筆　硯　案　本稿　檄稿　包裹　酒杯

拜壇　副末　淨　末　外　衆雜　副淨　雜
祭案　香爐　燭臺　帛二　爵三　笏　祭文
燎爐　卓席一　酒壺　酒杯　本章　檄文

會獄　生　末　小生　丑　淨　四雜　二雜
手杻　手牌　繩鎖　標子　提燈

截磯　淨　末　衆雜　小生　雜　末　外
雙鞭　白旗　白盔　白甲　船二　弩臺　攔江鎖
塘報鞭鈴　辰沙碗　香案　香爐　燭臺　劍

誓師　外　丑　四雜　末　淨　副淨　丑

白氊大帽　令箭　提燈　旗幟儀衛　炮　鼓　燭臺

逃難

小生　四雜　淨　老旦　小旦　衆雜　副淨
衆雜　末　二雜　小旦　丑　外　淨
小生　旦　淨
宮燈二　馬鞭　車輛　木棍　行囊　擔挑行李
紗帽　鬚髯　鼓板　包裹

劫寶

末　副淨　雜　小生　丑　雜　淨
丑　衆雜
塘報鞭鈴　馬鞭　雙鐵鞭　巡夜梆鈴　弓箭
包裹　雨傘　劍

沈江

外　副末　丑　生　末　小生
柳鞭　包裹　帽　袍　靴　包裹三

棲眞

淨　丑　老旦　副末　丑　生　副淨
草鞋　草笠　樵斧　擔　繩　綉旛　包裹　葆眞
菴扁　藥籃　船篙　桃花扇　采眞觀扁

入道

淨　副淨　衆雜　老旦　旦　副淨　生

瓢冠　衲衣　拂子　醮壇三　高竿旛　榜　香爐三

花瓶二　燭臺六　酒壺　紙錢錠錁　綉旛　鼓

法衣　仙樂器

執爐二　金道冠　織錦法衣　淨水盞　松枝

故明(一)思宗烈皇帝神位　故明甲申殉難文臣之位

故明甲申殉難武臣之位　九梁冠　鶴補朝衣　金帶　朝靴　牙笏　酒盞三　華陽巾　鶴氅　芒鞋

拂子　拍木　紙錢　米漿　焰口　長香　金幞頭

朱袍　黃紗帕　幡幢　細樂　金盔甲　紅紗帕

紅旗幟　鼓吹　銀盔甲　黑紗帕　黑旗幟　鼓吹

雷鼓　電鏡　鐵鍊　鋼叉　桃花扇　道冠　道袍

女道冠　道帔

餘韻

淨　丑　副末　副淨

(一)明思宗。毅宗のこと、清兵京師を定めし後、禮を以て改葬し諡して思宗といふ

柴擔　樵斧　船篙　漁竿　漁籠　絃子　酒壺
酒甀　紅帽　火具　煙筒　煙囊　綠頭籤　紅圈
票

云亭山人漫錄

考據

無名氏樵史(一)二十四段

董閬石蓴鄉贅筆七條

陸麗京冥報錄一條

陳寶崖曠園雜志一條

余澹心板橋雜記(二)十六條

尤展成明史樂府注四條

張瑤星白雲述

王世德崇禎遺錄

侯朝宗壯悔堂集(三)十五篇

賈靜子四憶堂詩注十二條

賈靜子侯公子傳

錢牧齋有學集十一首

(一) 二十四段。原書に註あれども省略せり。以下同じ。

(二) 十六條。長板橋、秦淮燈船、舊院對貢院、舊院鄭女英字安娘董白死梅村哭詩、卞賽爲女道士、貴陽楊龍友、李香、寇湄字白門、曲中狎客、中山公子徐青君、丁繼之、柳敬亭、沈公憲、李貞麗、沈石田盒子會歌。

(三) 十五篇。李姬傳、寧南侯傳、爲司徒公與寧南侯書、癸未去金陵與阮光祿書、答田中丞書、贈陳郎序、書周仲馭集後、祭吳次尾文、金陵題畫扇、寄寧南侯、寄寧南小侯夢庚、燕子磯送吳次尾、秦淮春興、哀史閣部、哀吳次尾

吳駿公梅村集七首

吳梅村綏寇紀略

楊龍友洵美堂集

冒辟疆同人集二篇

沈眉生姑山草堂集四篇

陳其年湖海樓集三篇

龔孝升定山堂集二十一首

(四)石巢傳奇二種

(四)石巢傳奇。阮大鋮の著したる所、二種とは春燈謎と燕子箋となり。

桃花扇

清　云亭山人編
鹽谷温註

試(一)一齣　先聲

康熙甲子八月

［副末(二)。氈巾(三)道袍(四)白鬚上(五)］

(蝶戀花)(六) 古董(七)先生誰似我。非玉非銅。滿(八)面包漿裹(カネニツツマル)。賸(九)魄殘魂無伴夥。時人指笑何須躱。舊(一〇)恨塡胸一筆抹。遇酒逢歌。隨處留皆可。子孝臣忠萬事妥。休思更喫(一一)人參果。

日麗唐虞(一二)世。花開甲子(一三)年。
山中無寇盜。地上總神仙。

(一) 試一齣。序幕のこと、先聲、前ぶれなり。
(二) 副末。登場俳優の役割。
(三) 氈巾。羅紗の帽子。
(四) 道袍。道士の服。
(五) 上。舞臺に登ること。
(六) 蝶戀花。曲の名。
(七) 古董先生。猶ほ骨董品と言ふが如し。自ら舊時代の人なることを嘲れるなり。編者云亭山人自らを言ふ。
(八) 滿面包漿云々。面に粉漿を塗りて登場の優人となること。
(九) 賸魄殘魂。生き殘つた老人の意。
(一〇) 舊恨塡胸云々。明末の舊事に關する滿腔の感慨を叙述して一部の桃花扇傳奇を作りしを言ふ。

老夫原是南京太常寺一箇贊禮(一四)。爵位不尊。姓名可隱。最喜無禍無災。活了九十七歲。閱歷多少興亡。又到上元甲子(一五)。堯舜臨軒(一六)。禹皐(一七)在位。處處四民安樂。年年五穀豐登。今乃康熙二十三年。見了祥瑞一十二種。

[內(一八)問介]　請問那幾種祥瑞。

[屈指介]　河出圖(一九)。洛出書。景星(二〇)明。慶雲現。甘露降。膏雨零。鳳凰集。麒麟遊。蓂莢(二一)發。芝草生。海無波。黃河清(二二)。件件俱全。豈不可賀。老夫欣逢盛世。到處遨遊。昨在太平園(二三)中。看一本新出傳奇(二四)。名爲桃花扇。就是明朝末年。南京近事。借離合之情(二五)。寫興亡之感。實事實人有憑有據。老夫不但耳聞。皆曾眼見。更可喜把老夫衰態。也拉上了排場。做了一箇副末腳色。惹的俺哭一回。笑一回。怒一回。罵一回。那滿坐賓客怎曉得。我老夫就是戲中之人。

「內」　請問這本好戲。是何人著作。

[答]　列位(二六)不知。從來塡詞名家。不著姓氏。但看他。有褒有貶。作春秋(二七)。必賴祖傳。可詠可歌。正雅頌(二八)。豈無庭訓(二九)。

(一一)人參。長生不死の藥。
(一二)唐虞。堯舜國を建つるの號。清朝康熙の世を堯舜の太平に擬していふ。
(一三)甲子年。干支の初めにてめでたき年とす。恰も康熙二十三年は甲子にあたれり。
(一四)贊禮。祭を司る官人なり。
(一五)上元甲子。清朝一統後第一甲子の年。
(一六)臨軒。政治を聽くこと。
(一七)禹皐。夏禹と皐陶、共に舜の名臣、ここにては賢相をいふ。
(一八)內。樂屋。
(一九)河圖、洛書。聖人の世に出づるといふ瑞祥。
(二〇)景星。德星。
(二一)蓂莢。又曆木ともいふ。月の前半は十五日まで毎日一葉を生じ、後半は一葉づつ落つ。以て日を記す。
(二二)黃河清。黃河の水は混濁故に百年河清を待つの語あり。偶〻清めば則ち河清の頌を献ず。以て太平の象なりとなす。
(二三)太平園。劇場の名。
(二四)傳奇。戲曲。
(二五)離合之情。侯朝宗と李香君との忽ち合ひ忽ち離れし情事をいふ。
(二六)列位。みなさんの意。
(二七)春秋。魯國の歷史を孔子筆削して褒貶黜陟の意を寓す。故に孟子に「孔子春秋を作りて亂臣賊子懼る」といへり。
(二八)雅頌。詩經のこと。論語

〔內〕這等說來。一定是云亭山人（三〇）了。

〔答〕倆道是那箇來。

〔內〕今日冠裳雅會（三一）。就要演這本傳奇。倆老既係舊人。又且聽過新曲。何不把傳奇始末。預先鋪叙一番。大家洗耳。

〔答〕有張道士的滿庭芳詞。歌來請教罷。

（滿庭芳）（三二）公子侯生（三三）。秣陵（三四）僑寓。恰偕南國（三五）佳人。讒言暗害。鸞鳳（三六）一宵分。又值天翻地覆（三七）。據江淮（三八）。藩鎭紛紜。立昏主。徵歌選舞。黨禍起奸臣。良緣難再續。樓頭激烈（三九）。獄底沈淪（四〇）。卻賴蘇翁柳老（四一）。解救殷勤。半夜君逃（四二）相走。望烟波。誰弔忠魂（四三）。桃花扇。齋壇揉碎。我與指迷津（四四）。

〔內〕妙妙唯是曲調鏗鏘（四五）。一時不能領會。還求總括數句。

〔答〕待我說來。

奸馬阮（四六）。中外伏長劍。　巧柳蘇（四七）。往來牽密線。

侯公子。斷除花月緣（四八）。　張道士（四九）。歸結興亡案。

に「吾衛より魯に反る。然る後樂正しく、雅頌各その所を得たり」といへり。

（二九）庭訓。家庭の教。桃花扇傳奇は一部の樂劇にして、しかも中に褒貶の意を寓す。云亭山人のこれを作るは家教に補なしとせずの意。

（三〇）云亭山人。本書の作者孔尙任の雅號。康熙中聖祖に仕ふ博學にして文名高し。

（三一）冠裳雅會。紳士の風流な會合。

（三二）滿庭芳。曲の名。以下括弧內にあるもの皆同じ。

（三三）侯生。侯方域字は朝宗、此の傳奇の主人公なり。

（三四）秣陵。南京の古名。

（三五）南國。江南地方。佳人は秦淮の名妓李香君のこと。

（三六）鸞鳳。夫婦のこと。

（三七）天翻地覆。明朝の滅亡を指す。

（三八）江淮。今の江蘇省の江北地方。

（三九）樓頭激烈。本書第二十二齣、守樓の事柄を指す。

（四〇）獄底沈淪。第二十九齣、逮社の事柄を指す。

（四一）蘇翁柳老。蘇崑生と柳敬亭。

（四二）半夜君逃。本書第三十六齣、逃難の事をいふ

（四三）弔忠魂。本書第三十六齣沈江の事につき忠臣史可法の英靈を弔ふをいふ。

（四四）指迷津。迷を解き悟を開くこと。

道猶未了。那侯公子早已登場。列位請看。

(四五)曲調鏗鏘。音曲の妙なること。
(四六)奸馬阮。奸臣馬士英、阮大鋮のこと。
(四七)巧柳蘇。智巧に富める柳敬亭と蘇崑生。
(四八)花月緣。佳人才子春花秋月の契情をいふ。
(四九)張道士。道士張瑤星。

第一齣　聽稗(一)

癸未二月

〔生儒(二)扮上〕

(戀芳春)　孫楚樓(三)邊。莫愁湖(四)上。又添幾樹垂楊。偏是江山勝處。酒賣斜陽。勾引遊人醉賞。學金粉(五)南朝(六)模樣。暗思想。那些鶯顚燕狂(七)。關甚興亡。

(鷓鴣天)　院靜厨寒睡起遲。秣陵人老看花時。城連曉雨枯陵樹。江帶春潮壞殿基。傷往事。寫新詞。客愁鄕夢亂如絲。不知烟水西村舍。燕子(八)今年宿傍誰。

(一)聽稗。講談を聽くこと。
(二)儒扮。學者風の服裝にいでたつこと。
(三)孫楚樓。金陵城の西に在り。
(四)莫愁湖。南京の西門外に在り。梁の時名妓莫愁此の湖上に住む、武帝爲めに莫愁の歌を作れり。
(五)金粉。南朝の美人に譬ふ。
(六)南朝。宋、齊、梁、陳、金陵(南京)に都して江南半壁を保つ、之を南朝といふ。
(七)鶯顚燕狂。莫愁湖上に春を賞する佳人才子の群。
(八)燕子。唐の劉禹錫の南京雑詩に「舊時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家。」と、ここにては侯生を指して燕子といへるなり。

小生姓侯名方域。表字朝宗。中州(九)歸德人也。夷門(一〇)譜牒。梁苑(一一)冠裳。先祖太常(一二)。家父司徒。久樹東林(一三)之幟。選詩雲間(一四)。徵文白下(一五)。新登復(一六)社之壇。蚤歲清詞。吐出班香宋豔(一七)。中年浩氣。流成蘇海韓潮(一八)。人鄰耀華(一九)之宮。偏宜賦酒。家近洛陽(二〇)之縣。不願栽花。自去年壬午。南闈(二一)下第。使僑寓這莫愁湖畔。烽烟(二二)未靖。家信難通。不覺又是仲春時候。儞看。碧草粘天。誰是還鄉之伴。黃塵匝地。獨爲避亂之人。〔歎介〕莫愁。莫愁。教俺怎(イカンゾ)生不愁也。幸喜。社友(二三)陳定生。吳次尾。寓在蔡益所書坊。時常(ツネニ)往來。頗不寂寞。今日約到冶城道院(二四)。同(トモニ)看梅花。須(スベカラク)索早去。

〔懶畫眉〕乍(タチマチ)暖風烟滿江鄉。花裏行厨。携著玉缸(二五)。笛聲吹亂客中腸。莫過烏衣巷(二六)。是別姓人家(二七)。新畫梁。〔下〕

〔末小生儒扮上〕

〔前腔〕王氣金陵漸凋傷。鼙鼓旌旗何處忙。怕隨梅(二八)柳渡春江。

(九)中州。河南省は天下の中央に位する故なり。
(一〇)夷門。大梁の門の名、今の河南開封府。
(一一)梁苑。開封府、魏の古都。
(一二)太常、司徒。共に官名。
(一三)東林。東林黨といふ。明の神宗の時、顧憲成野に下り、無錫に還り、東林書院を修め、學を講じ、兼ねて當世を評論す、東林黨議の名之より起る。
(一四)雲間。江蘇松江府のことここにては廣く江南の意に用ひたるもの。
(一五)白下。南京のこと。
(一六)復社。文社の名、東林黨中の人多し。
(一七)班香宋豔。後漢の班固、楚の宋王、共に賦に巧みなり。
(一八)蘇海韓潮。唐の韓愈、宋の蘇軾、共に文章を以て名あり。
(一九)耀華宮。梁の孝王の作る所の宮殿。
(二〇)洛陽。今の河南府、周漢の古都、花の名所たり。
(二一)南闈下第。南京の考試、明時、南北兩京に禮部の試驗あり、下第は落第。
(二二)烽烟。戰亂のこと。
(二三)社友。復社中の人。
(二四)冶城道院。道觀の名、兼ねて遊覽の地たり。
(二五)玉缸。酒瓶。
(二六)烏衣巷。巷の名。
(二七)別姓人家。主人の代りしこと。暗に明亡清興の意を寓す。

(二八)梅柳云々。「梅柳渡江春」の句唐詩にあり、明朝も漸く傾き、兵亂江南に及びたるを嘆じたるなり。
(二九)宜興。縣名、江蘇常州府に屬す。
(三〇)貴池。縣名、安徽池州府治。
(三一)次兄。吳應箕字は次尾、故に次兄といふ。
(三二)邸鈔。京報に同じ。
(三三)中原。中國に同じ。
(三四)無主。眺むる人のなきをいふ。
(三五)請了。挨拶の辭。「オハヤウ」「サヨナラ」處によつて意を異にす。
(三六)相公。旦那といふが如し、紳士に對する稱なり。
(三七)魏府。魏國公、明朝開國の元勳。
(三八)秦淮。南京城内を流るる水の名、秦の始皇帝の穿つ所と傳ふ、兩岸には酒樓妓院のある處なり、杜牧の夜泊秦淮の詩に言ふ、「烟籠寒水月籠沙、夜泊秦淮近酒家、商女不知亡國恨、隔江猶唱後庭花」と。
(三九)有趣。おもしろしといふ程の意。
(四〇)泰州。江蘇揚州府に屬す。
(四一)柳敬亭。名は逢春、本姓は曹、仇を避けて江湖に流落し、柳下に憩ひ、因て姓を柳と改む、讀書を能くす。

[末] 小生宜興(二九)陳貞慧是也。
[小生] 小生貴池(三〇)吳應箕是也。
[末問介] 次兄(三一)可知流寇消息麼。
[小生] 昨見邸鈔(三二)流寇連敗官兵。漸逼京師。那寧南侯左良玉。還軍襄陽。中原(三三)無人。大事已不可問。我輩且看春光。
(合) 無主(三四)春飄蕩。風雨梨花摧曉粧。
[生上相見介] 請了(三五)。兩位社兄。果然早到。
[小生] 豈敢爽約。
[末] 小弟既著人打掃道院。沽酒相待。
[副淨扮家僮忙上] 節寒嫌酒冷。花好引人多。稟相公(三六)。來遲了。請回罷。
[末] 怎麼來遲了。
[副淨] 魏府(三七)徐公子。要請客看花。一座大大道院。早已占滿了。
[生] 既是這等。且到秦淮(三八)水榭。一訪佳麗。倒也有趣(三九)。
[小生] 依我說。不必遠去。兄可知道。泰州(四〇)柳敬亭(四一)。說書最妙。曾見

賞於呉橋范(四二)大司馬。桐城何老(四三)相國。聞他在此作寓。何不同往一聽。消(四四)遣春愁。

[末] 這也好。

[生怒介] 那柳麻(四五)子。新做了閹兒(四六)阮(四七)鬍子的門客。這樣人說書不聽也罷了。

[小生] 兄還不知。阮鬍子漏(四八)網餘生。不肯退藏。還在這裏蓄養聲伎。結納朝紳。小弟做了一篇留(四九)都防亂的揭(五〇)帖。公討其罪。那班門客。纔曉的他是崔魏(五一)逆黨。不待曲終。拂衣散盡。這柳麻子也在其內。豈不可敬。

[生驚介] 呵呀。竟不知此輩中也有豪傑。該去物色的。[同行介]

(前腔) 仙院參差弄笙簧。人住深深丹(五二)洞旁。閒將雙眼閱滄(五三)桑。

[副淨] 此間是了。待我叫門(五四) [叫介] 柳麻子在家麼。

[末喝介](五五) 唗(五六)。他是江湖名士。稱他柳相公纔是。

[副淨又叫介] 柳相公開門。

（四二）范大司馬。范景文、萬曆の進士、魏忠賢にも附かず、東林にも與せず、崇禎の末東閣大學士を兼ね、機密に參與す、京都陷りし時、竟に節に殉す。

（四三）何老相國。何如寵、萬曆の進士、武英殿大學士となる、卒して文瑞と謚す。

（四四）消遣。憂はらし。

（四五）麻子。あばたづら。

（四六）閹兒。閹官、即ち宦官の兒分。

（四七）阮鬍子。阮大鋮、鬚あるによりていふ。

（四八）漏網。罪を逃れること。

（四九）留都。明の時、北京を京師となし、南京を留都と稱す。

（五〇）揭帖。檄文。

（五一）崔魏。崔呈秀と魏忠賢、魏忠賢は少時より無賴也、自ら宮して宦官となり、熹宗の乳媼客氏と私す、熹宗即位するに及んで、大に用ひられ、東廠の事を掌り、大に東林の名士を讒害す、阿附の徒拜伏して九千歲と呼ぶ、（天子の萬歲に對して）崇禎位に即くに及んで貶せられ、自縊して死す、崔呈秀は萬曆の進士、後魏忠賢の養子となり、遂に用ひられて腹心となり、日に與に計畫して、名流を貶黜し、善類爲に空し、閹黨の五虎、呈秀を魁となす、兵權を握り、憲法を總べ、勢朝野を傾く、忠賢の敗るるに及んで自ら縊れて死す。

（五二）丹洞。山海經に出づ、仙境をいふ、柳敬亭の隱棲の處たり

［丑小帽海青(五七)白髯扮ニ柳敬亭ー上］

門掩青苔長。話レ舊樵漁(五八)來ニ道房(五九)ー。

［見介］ 原來(六〇)是陳吳二位相公。老漢(六一)失迎(六二)了。［問レ生介］ 此位何人。

［末］ 這是敝友河南侯朝宗。當今名士。久慕ニ清談ー。特來領(六三)レ敎。

［丑］ 不敢不敢(六四)。請坐獻レ茶。［坐介］

［丑］ 相公都是讀書君子。甚麼(六五)史記通鑑(六六)不ニ曾看ー熟。倒來ニ聽老漢的俗談ー。［指介］ 儞看。

（前腔） 廢苑枯松靠ニ著頹墻ー。春雨如レ絲宮草香。六朝興廢怕ニ思量ー。鼓板(六七)輕輕放。沾レ淚說レ書兒女腸(六八)。

［生］ 不必過謙。就求レ賜レ敎。

［丑］ 既蒙ニ光降ー。老漢也不ニ敢推辭ー。只怕演義盲(六九)詞。難レ入ニ尊耳ー。沒奈何。且把ニ相公(七〇)們讀的論語ー說ニ一章ー罷。

［生］ 這也奇了。論語如何說的。

（五三）滄桑。桑田碧海の變、世事の變轉に喩ふ。
（五四）叫門。案内を乞ふこと。
（五五）喝。叱りつけること。
（五六）咤。叱る聲也。
（五七）海青。廣袖の禮服。
（五八）樵漁。江湖の閑人にして俗人に非ざる者。
（五九）道房。道士の家。
（六〇）原來。俗語の「これはこれは」といふが如し。
（六一）老漢。老人の自稱。
（六二）失迎。出迎せざりしを詫ぶる意。
（六三）領敎。お話を承りに參つたとの意。
（六四）不敢。不敢當に同じく、謙遜の辭、いたみいる意也。
（六五）甚麼史記云々。史記、通鑑の如きは讀書人の常に熟讀すべき書也。
（六六）通鑑。資治通鑑、宋の司馬溫公の編。
（六七）鼓板。讀書の際に打ち鳴らす板。
（六八）兒女腸。兒女を說ばすに足るのみ、敢て大人の爲めに言ふに足らざる也。
（六九）盲詞。盲女のひきかたる歌。
（七〇）相公云々。みなさんが論語の講義をなさるに、私に論語の講義が出來ない譯はないとの意。

［丑笑介］相公說得。老漢就說不得。今日偏要假斯文(七一)說他一回。［上座敲鼓板說書介］問余何事棲碧山(七二)。笑而不答心自閒。桃花流水杳然去。別有天地非人間。［拍醒木(七三)說介］敢告列位。今日所說。不是別的。是魯論(七四)大師摯(七五)適齊全章。這一章書。是申魯三家(七六)僭竊(七七)之罪。表孔聖人正樂之功。當時周轍(七八)既東。魯道衰微。三家者以雍徹(七九)。季氏(八〇)八佾(八一)舞於庭。僭竊之罪。已是到了盡頭(八二)了。我夫子自(八三)衞反魯。然後樂正。那些樂官。一箇箇愧悔交集。東走西奔。只當夫子不知費了多少氣力。豈知我夫子手把一管筆。眼看幾本書。纂(八四)到易經。上律天時。下襲水土。修到書經(八五)。祖述堯舜。憲章文武。訂到禮記(八六)。父子有親。君臣有義。長幼有序。朋友有信。夫婦有別。作到春(八七)秋。而亂臣賊子懼。今日刪到詩經。而雅頌(八八)各得其所。竝不曾費一些氣力。登時(八九)把權臣勢家。鬧洪洪的箇戲場。霎時散盡。頃刻冰冷。那一時到也痛快。倆說聖人的手段利害(九〇)不利害。神妙不神妙。
［敲鼓板唱介］
（鼓詞一） 自古聖人手段能。他會呼風喚雨。撒(九一)豆成

(七一) 斯文。論語のこと。論語子罕篇に曰く「天之未喪斯文也、匡人其如予何」と。
(七二) 問余云々。唐の李白の詩。
(七三) 醒木。戒方ともいふ、說書の際に打つもの。
(七四) 魯論。現今普通に行はるる論語。他に齊論語、古論語の二種あり。
(七五) 大師摯。論語微子篇に曰く「大師摯適齊、亞飯干適楚、三飯繚適蔡、四飯缺適秦、鼓方叔入於河」云々と。
(七六) 魯三家。孟孫、叔孫、季孫の三氏、魯の大夫也。
(七七) 僭竊之罪。僭越に同じ、國主の權を竊むこと。
(七八) 周轍東。周室の東遷をいふ。
(七九) 以雍徹。雍は樂の名、膳を徹する時に、雍の樂を奏するは諸侯のこと也、之を三家が敢てしたる故、孔子之を貶せる也、八佾篇に曰ふ「三家者以雍徹、子曰、相維辟公、天子穆穆、奚取於三家之堂」と。
(八〇) 季氏。季孫のこと。
(八一) 八佾。佾は舞列也、天子は八佾、諸侯は六佾、大夫は四佾の定めなり、論語八佾篇に曰く「孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也」と。
(八二) 盡頭。頂上也。
(八三) 夫子自衞云々。論語子罕篇に曰く「子曰、吾自衞反魯、然後樂正、雅頌各得其所」と。
(八四) 纂到易經。以下孔子が易、書、詩、禮、春秋の五經を修め

兵。見一夥亂臣無禮教歌舞。使了箇些小方法弄的他(九二)精打精。正排著低品走(九三)狗奴才隊。都做了高節淸風大英雄。

〔拍醒木說介〕那太師名摯。他第一箇先適了齊。他爲何適齊聽俺道來。〔敲鼓板唱介〕

（鼓詞二）好(九四)一箇爲頭爲領的太師摯。他說。咳。俺爲甚的替撞三家景(九五)陽鐘。往常時瞎(九六)了眼睛。在泥窩裏混。到如今抖起身子去箇淸。大撒腳步正往東北走。合夥了箇敬(九七)仲老先生。才顯俺的名。管喜的孔子三(九八)月忘肉味。景(九九)公擦淚側著耳朶聽。那賊臣就喫了豹(一〇〇)子心肝熊的膽。也不敢去姜(一〇一)太公家裏。去拿樂工。

〔拍醒木說介〕管亞(一〇二)飯的名干。適了楚。管三飯的名繚。適了蔡。管四飯的名缺。適了秦。這三人爲何也去了。聽我道來。〔敲鼓板唱

て、道德を明にしたる功を說くなり。

（八五）祖述堯舜。中庸に曰く「仲尼祖述堯舜、憲章文武、上律天時、下襲水土」と。

（八六）父子有親。以下五條、五倫の敎を敍するなり。

（八七）春秋。魯の史記なり、孔子之を筆削す、孟子曰く「孔子成春秋、而亂臣賊子懼」と。

（八八）雅頌。前出。

（八九）權臣勢家。三家の徒をいふ。

（九〇）利害。非常なるをいふ。

（九一）撒豆成兵。聖人の神通力をいふ。

（九二）精丁精。きれいさつぱりとなる意。

（九三）走狗奴才。魯の三家に使はるる衆人をいふ。

（九四）好一箇。好は助語。

（九五）景陽鐘。景陽は樓の名、後宮の鐘なり。齊書に曰く「武帝置鐘於景陽樓上、令宮人聞鐘聲、即起粧飾」と。

（九六）瞎了。目の見えぬこと。何意は往時は禮儀を辨へずして權臣の家に仕へしが、一旦夫子の敎によりて、其の非を悟り辭し去るをいふ。

（九七）敬仲老先生。田齊の祖なり。

（九八）三月忘肉味。樂に聽きほれること、論語述而篇に曰く「子在齊、聞韶、三月不知肉味、曰不圖、爲樂至於斯也」と。

（九九）景公。齊の景公。

介〕

(鼓詞三) 這一班勸膳的樂官。不見了領隊長。一箇箇各尋門路奔前程。亞飯說亂臣堂上掇著碗。俺倒去吹吹打打伏侍著他聽。俺看。咱長官此去齊邦。誰敢去找。我也投那熊繹大王。倚仗他的威風三飯說。河南蔡國雖然小。那堂堂的中原。緊靠著京城。四飯說。遠望西秦有天子氣。那强兵營裏。我去抓響箏。一齊說俺每日。倚著賽門椿子使喚俺。從今後。叫俺聞著俺的風聲腦子疼。

〔拍醒木說介〕 擊鼓的名方叔。入於河。播鞉的名武。入於漢。少師名楊。擊磬的名襄。入於海。這四人另是箇走法。聽俺道來。〔敲鼓板唱介〕

(鼓詞四) 這擊磬搖鼓的三四位。他說俺丟下這亂

(一〇〇) 豹子心肝云々。凶惡大膽なるをいふ、意は如何に凶惡大膽なる賊臣も、齊侯の家まで踏みこんで、大師摯を捕へまじとなり。

(一〇一) 姜太公。齊の祖太公望は姜姓なり、齊國をいふ。

(一〇二) 亞飯。二度目の飯の際に樂を奏して飯を侑むるもの、三飯、四飯之に準ず、鼓詞三は亞飯干適楚、三飯繚適蔡、四飯缺適秦を演ずるなり。

(一〇三) 吹吹打打。笛を吹き鼓を打ち、音樂を演奏すること。

(一〇四) 熊繹大王。楚國の祖なり。

(一〇五) 蔡國。春秋時代の一小國。

(一〇六) 靠著。接近せる意。

(一〇七) 强兵。秦國は强兵を以て聞ゆ。

(一〇八) 賽門椿子。一に寨門に作る、權威を假りて脅す意か。

(一〇九) 腦子疼。頭痛のすること。

(一一〇) 擊鼓的云々。鼓方叔入于河、播鞉武入于漢、少師楊擊磬襄入于海を說くなり、河は黃河、漢は漢水。

(一一一) 鞉。でんでん太鼓の如きもの。

(一一二) 少師。樂官の佐なり。

(一一三) 磬。石の樂器。

(一一四) 排場。亂臣の家をいふ。

(一一五) 幹不成。かまはないの意。

(一一六) 亂鬼。權臣を罵りて言ふ。

（一一七）低三下四。下流の卑しい階級をいふ。或は平身低頭の意となすも亦通ず。
（一一八）舊營生。もとの生業。
（一一九）桃源路。武陵桃源の故事、晋の陶淵明の桃花源記に見ゆ。
（一二〇）江湖滿地云々。惡人の社會を逃れて何處へでも往つて漁夫となる意。
（一二一）十丈珊瑚。龍宮の美しきことをいふ。
（一二二）金童玉女。水晶宮の仙子をいふ。
（一二三）鳳簫象管。簫は鳳鳴に似たり、管は笛のこと、仙樂の聲こまやかなるをいふ。
（一二四）溜著。急ぎ行くことなり。
（一二五）舊弟兄。故人をいふ。
（一二六）打破紙窗。眼光を大にして博く世界を看ること。
（一二七）火院。恐しき世の中にたとふ。
（一二八）老師父。孔子を言ふ。
（一二九）六經。詩、書、易、禮、樂、春秋。

紛紛的(一一四)排場。俺也幹不成(一一五)。您嫌這裏(一一六)亂鬼當家別處尋主。只怕到那裏低三下四(一一七)。還幹舊營生(一一八)。俺們一葉扁舟桃源路(一一九)。這纔是。江湖滿地(一二〇)幾箇漁翁。

〔拍醒木說介〕這四箇人去的好。去的妙。去的有意思。聽他說些甚麼。〔敲鼓板唱介〕

（鼓詞五）他說。十丈珊瑚(一二一)映日紅。珍珠捧著水晶宮。龍王留俺宮中宴。那金童玉女(一二二)不比凡同。鳳簫象管(一二三)龍吟細。可教人家吹打著俺們纔聽。那賊臣就溜著(一二四)河邊來趕俺。這萬里烟波路也不明。莫道山高水遠無知己。俺看海角天涯都有他舊弟兄(一二五)。全要打破紙窗(一二六)看世界。虧了那位神靈提出俺火院(一二七)。憑世上滄海變田田變海。俺那老師父(一二八)。只管朦朧著兩眼。定六經(一二九)。正是。

魯國團團一座城。　中間悶煞(一三〇)幾英雄。
荊(一三一)棘叢裏難ㇾ容ㇾ鳳(一三二)。　滄海波心好ㇾ變ㇾ龍(一三三)。

〔說完起介〕　獻(一三四)醜。獻醜。獻醜。

〔末〕　妙極(一三五)。妙極。如今應ㇾ制(一三六)講義。那能如ㇾ此痛快。眞絕技也。

〔小生〕　敬亭纔出ニ阮家一。不ㇾ肯ニ別投ニ主人一。故此現身說法(一三七)。

〔生〕　俺看ニ敬亭一人品高絕。胸襟灑脫。是我輩中人。說ㇾ書乃其餘技耳。

(解三酲)〔生・末・小生〕　暗(一三八)紅塵霎時雪亮。熱春光一陣氷涼。淸白人(一三九)會ㇾ算ニ黏(一四〇)塗帳一。(同笑介)　這笑罵風流跌宕。一聲拍板温而厲(一四一)。三下漁陽(一四二)慨以慷(一四三)。

〔丑〕　重來訪。但是桃花誤處問ニ俺漁郎一。

〔生問介〕　昨日同出ニ阮衙(一四四)一。是那幾位朋友。

〔丑〕　都已散去。只有ニ善謳的蘇崑生一還寓ニ比鄰一。

〔生〕　也要ニ奉訪一。尚望同來賜ㇾ教。

(一三〇)幾英雄。大師摯等をいふ。
(一三一)荊棘叢裏。亂臣の家をいふ。
(一三二)鳳。大人物に喩ふる也
(一三三)變龍。魚の龍に變ずること、悟道に入る意。
(一三四)獻醜。さぞ聞き苦しかりしならんとの意。
(一三五)妙極。賞讃の辭。
(一三六)應制。天子の詔を受くること。
(一三七)現身說法。自分の言ふことを其の儘身に行ふこと。
(一三八)暗紅塵云々。從來の迷が醒めて一時に明るくなり、柳敬亭の講談を聽いて、心中頓に爽快を感じたるをいふ。
(一三九)淸白人云々。操行の純潔なる人にして、初めて紛亂せる世局を收拾することが出來るといふ意なり。
(一四〇)黏塗。又糊突に作る。不明白の意。
(一四一)温而厲。論語述而篇に曰く、「子温而厲云々」
(一四二)三下漁陽云々。三下は三たび打つなり、漁陽摻撾は鼓曲の名、禰衡が鼓を拍つて曹操を罵れる故事を用ふ。
(一四三)慨以慷。曹操の短歌行の語、柳敬亭の意氣に感激する意。
(一四四)阮衙。阮大鋮の邸。

［丑］自然奉拜的。

［丑］歌聲歇處已斜陽。 ［末］賸有殘花隔院香。

［小生］無數樓臺無數草。 ［生］清談(一四五)霸業兩茫茫。

(一四五)清談霸業。 六朝の往事をいふ、清談は魏晉の際に流行し、天地萬物無を以て本となすをいふ、今の禪宗の問答の如し。

第二齣　傳歌(一)

癸未二月

［小旦靚粧(二)扮鴇妓(三)李貞麗上］

（秋夜月）深畫(四)眉。不把紅樓(五)閉。長板橋(六)頭垂楊細。絲絲牽惹遊人騎。將箏絃(七)緊繫。把笙囊(八)巧製。

梨花似雪草如烟。 春在秦淮兩岸邊。

一帶妝樓臨水蓋。 家家分影照嬋娟(九)。

妾身姓李。表字貞麗。烟花(一〇)妙部(一一)。風月名班。生長舊院(一二)之中。迎送長橋之上。鉛華(一三)未謝。丰韻猶存。養成一箇假女。溫柔纖小。纔陪玳瑁(一四)之筵。宛轉嬌羞。未入芙蓉(一五)之帳。這裏有位罷職縣令(一六)。叫做楊龍友。

(一)傳歌。 歌の稽古の場なり。

(二)靚粧。 厚化粧なり。

(三)鴇妓。 老妓をいふ。

(四)畫眉。 潜確類書に曰く「瑩娘、平康妓也、玉淨花明、尤善梳掠、畫眉日作一樣」と。

(五)紅樓。 妓樓のこと、不閉は樓を開いて客を迎ふる也。

(六)長板橋。 秦淮に架したる橋、絲絲は柳絲也。

(七)箏絃云々。 管絃を奏する也。

(八)笙囊。 笙をば立派なる袋に收むるなり。

(九)嬋娟。 美人のこと、美人の影が人に映るをいふ。

(一〇)烟花、風月。 何れも美人に喩ふ。

(一一)妙部、名班。 何れも第一流をいふ。

(一二)舊院。 新院に對す。 秦淮の花柳界をいふ。

乃鳳陽(一七)督撫(一八)馬士英的妹夫。原做光祿(一九)院大鉞的盟弟(二〇)。常到院中。誇俺孩兒。要替他招客梳櫳(二一)。今日春光明媚。敢待好來也。〔叫介〕

丫鬟。捲簾掃地。伺候客來。

〔內應介〕　曉得。

〔末扮楊文驄上〕

三山(二二)景色供圖畫。　六代(二三)風流入品題(二四)。

下官楊文驄。表字龍友。乙榜(二五)縣令。罷職閒居。這秦淮名妓李貞麗。是俺舊好。趁此春光。訪他閒話。來此已是。不免竟入。〔入介〕　貞娘那裏。〔見介〕　好呀(二六)。儞看梅錢(二七)已落柳線纔黃。軟軟濃濃(二八)。一院春色。叫俺如何消遣也。

〔小旦〕　正是。請到小樓焚香煮茗。賞鑒詩篇罷。

〔末〕　極妙了。〔登樓介〕　簾紋(二九)籠架鳥。　花影護盆魚。

〔看介〕　這是令愛(三〇)妝樓。他往那裏去了。

〔小旦〕　曉妝未竟。尙在臥房。

〔末〕　請(三一)他出來。

（一三）鉛華。脂粉なり、ここにては紅顔の意。
（一四）玳瑁之筵。立派なる宴席。
（一五）芙蓉之帳。閨の中をいふ。
（一六）罷職。休職のこと。
（一七）鳳陽。今安徽省に屬す。
（一八）督撫。今の督軍の如し。
（一九）光祿。光祿卿は宮殿禁門のことを掌る。
（二〇）盟弟。義兄弟なり。
（二一）梳櫳。上頭に同じ、髮を結ぶことにて人に嫁するの意、此處では身受けする義也。
（二二）三山。李白の詩に「三山半落青天外、一水中分白鷺洲」の句あり、南京より迥に三峯を天外に望む。
（二三）六代。六朝に同じ。吳、晋、宋、齊、梁、陳皆南京に都せり、之を六朝と稱す。
（二四）品題。品評に同じ。
（二五）乙榜。擧人をいふ、進士を呼ぶに甲榜を以てす、故にいふ。
（二六）好呀。挨拶の辭、「ごきげんよう」と云ふが如し。
（二七）梅錢。梅花のこと。
（二八）軟軟濃濃。春光酣なる光景。
（二九）簾紋云々。鳥籠に軟簾をかけ、花影が盆水に映つること。
（三〇）令愛。令嬢に同じ、香君をいふ。
（三一）請。案內すること。

〔小旦喚介〕孩兒出來。楊老爺在此。

〔末看四壁上詩篇介〕(三二)那是些名公題贈。卻也難得。〔背手吟哦介〕

〔旦艷妝上〕

(前腔)香夢回。纔褪紅鴛被。(三三)重點檀脣。(三四)臙脂膩。匆匆挽箇拋家髻。(三五)這春愁怎替。那新詞(三六)且記。

〔見介〕老爺萬福。(三七)

〔末〕幾日不見。益發標緻了。這些詩篇贊的不差。(三八)〔又看驚介〕呀呀。張天如。夏彝仲。這班大名公。都有題贈。下官也少不的(三九)和韻一首。

〔小旦送筆硯介〕

〔末把筆久吟介〕做他不過。索性藏拙。(四一)聊寫墨蘭數筆。點綴素壁(四二)罷。

〔小旦〕更妙。

〔末看壁介〕這是藍田叔(四三)畫的拳石(四四)呀。就寫蘭於石旁。借他的襯(四五)

(三二)四壁上。壁上に掛けたる幅。

(三三)褪。卸に同じ。

(三四)檀脣。美しき脣なり。檀は淡紅色なれば絳脣といふに同じ。

(三五)拋家髻。櫛卷といふが如きか。「唐書」に曰く「唐末、京都婦人梳髮、以兩鬢拋髮、狀如椎髻」と。

(三六)新詞。新しく習ひし歌をいふ。

(三七)萬福。婦人の挨拶。「旦那樣、今日は」といふ程の意。

(三八)不差。賞讚に價するをいふ。

(三九)少不的。「ぜひとも」と譯して可也、少不得に同じ。

(四〇)和韻。前の詩韻によりて作ること。

(四一)藏拙。自ら作らざること。

(四二)素壁。白壁のこと。

(四三)藍田叔。有名なる畫家。後に出づ。

(四四)拳石。拳大の石、中庸に曰く「一卷石之多」と。結局卷と拳とは相同じ。

(四五)襯帖。陪伴なり、「あひて」「とりあはせ」の意。

(四六) 騷人。詩人に同じ。
(四七) 香苞。蘭花のこと。
(四八) 雨困云々。墨の痕淋漓たる形容。
(四九) 宣石。宣州產の石。
(五〇) 幾點蒼苔云云。青い苔が石根に亂點せること。
(五一) 將就。がまんする意。
(五二) 湘蘭佩。屈原の離騷に「紉秋蘭以爲佩」とあり、湘は川名、湖南に在り、屈原の往來せる所なり。
(五三) 生色。光を生ずの意。
(五四) 落欵。姓名を書き入れること。
(五五) 蘭有國香。鄭の穆公の故事、宣公三年に出づ。

帖也好。〔畫介〕
(梧桐樹) 綾紋素壁輝。寫出騷人(四六)致。嫩葉香苞(四七)雨困(四八)烟痕醉。一拳宣石(四九)墨花碎。幾點蒼苔(五〇)亂染砌。〔遠看介〕也還將就(五一)得去。怎比元人瀟洒墨蘭意。名姬恰好湘蘭(五二)佩。
〔小旦〕眞眞名筆。替俺妝樓生色(五三)多矣。
〔末〕見笑。〔向旦介〕請敎尊號。就此落欵(五四)。
〔旦〕年幼無號。
〔小旦〕就求老爺賞他二字罷。
〔末思介〕左傳云。蘭有國香(五五)。人服媚之。就題他香君何如。
〔小旦〕甚妙。香君過來謝了。
〔旦拜介〕多謝老爺。
〔末笑介〕連樓名都有了。〔落欵介〕崇禎癸未仲春。偶寫墨蘭於媚香樓。博香君一笑。貴筑楊文驄。

〔小旦〕寫畫俱佳。可稱雙絕。多謝了。〔俱坐介〕
〔末〕我看香君。國色第一。只不知技藝若何。
〔小旦〕一向嬌養慣了。不曾學習。前日纔請一位清客。傳他詞曲。
〔末〕是那箇。
〔小旦〕就叫什麼蘇崑生。
〔末〕蘇崑生本姓周。是河南人。寄居無錫。一向相熟的。果然是箇名手。〔問介〕傳的那套詞曲。
〔小旦〕就是玉茗堂四夢。
〔末〕學會多少了。
〔小旦〕纔將牡丹亭學了半本。〔喚介〕孩兒楊老爺不是外人。取出曲本。快快温習。待儞師父對過。好上新腔。
〔旦皺眉介〕有客在坐。只是學歌怎的。
〔小旦〕好傻話。我們門戸人家。舞裡歌裙。喫飯莊屯。儞不肯學歌。閒著做甚。
〔旦看曲本介〕

(五六)嬌養。我儘をさせること。
(五七)清客。元來門客のこと、藝術に多能にして清高を以て任ずる故にいふ。「御師匠さん」といふが如し。
(五八)什麼蘇崑生。蘇崑生とやら申すの意。
(五九)玉茗堂四夢。玉茗堂は湯臨川の號なり、四夢は臨川の傑作、紫釵記、還魂記、南柯記、邯鄲記をいふ、就中牡丹亭還魂記最も名高し。
(六〇)牡丹亭。還魂記のこと也。
(六一)外人。他人の意。
(六二)對過。おさらひ也。
(六三)新腔。さきを習ふこと。
(六四)怎的。客の前で歌の稽古をするは無用なりとの意。
(六五)門戸人家。妓女のこと、張見世の意か。

〔前腔〕〔小旦〕生來粉黛園。(六六)跳入鶯花隊。一串(六七)歌喉。是俺金錢地。莫將紅豆(六八)輕拋棄。學就曉風殘月(六九)墜。緩拍紅牙(七〇)。奪了宜春(七一)翠。門前繫住王孫轡。

〔淨扁巾(七二)褶子(七三)扮蘇崑生上〕

閒來翠館(七四)調鸚鵡。　嬾去朱門(七五)看牡丹。

在下固始(七六)蘇崑生是也。自出阮衙(七七)。便投妓院。做這美人的教習。不強似做那義子(七八)的幫閒(七九)麼。〔竟入見介〕楊老爺在此。久違了。

〔末〕崑老恭喜(八〇)收了個絕代的門生。

〔小旦〕蘇師父來了。孩兒見禮(八一)。

〔旦拜介〕

〔淨〕免勞罷(八二)。〔問介〕昨日學的曲子。可曾記熟了。

〔旦〕記熟了。

〔淨〕趁著(八三)楊老爺在坐。隨我對來(八四)好求指示。

〔末〕正要領教

(六六)粉黛園、鶯花隊。共に妓女の群。

(六七)一串。一本の意。

(六八)紅豆。一名相思子、和名たうあづき、古の女人之を以て曲を記すといふ、猶ほ商賣道具をすつるなといふ意。

(六九)曉風殘月。詞曲をいふ。宋の柳耆卿の詞に出づ、墜は押韻の爲に加ふ。

(七〇)紅牙。紅牙板なり。

(七一)宜春。唐の宮の名、宜春院は梨園の弟子の居る所なり、「翠を奪ふ」とは、歌舞の妙、梨園の弟子を壓倒するをいふ。

(七二)扁巾。大黑頭巾の如きものか。

(七三)褶子。袷のこと。

(七四)翠館。青樓のこと。

(七五)朱門。富家のこと、言ふは青樓に來りて妓女に歌を敎ふるとも、「權門に去いて媚を呈するを欲せず」との意。

(七六)固始。縣名、河南省に屬す。

(七七)阮衙。阮大鋮の邸をいふ

(七八)義子。阮大鋮を指す、阮は魏忠賢の義子なるによりていふ。

(七九)幫閒。たいこもちのこと

(八〇)恭喜。祝賀の辭、おめでたうの意。

(八一)見禮。御挨拶せよの意。

(八二)免勞罷。それには及ばぬと、拜禮を止むるなり。

(八三)趁著。時に及ぶ意なり。

(八四)對來。對過に同じ、さしむかひでおさらひするなり。

〔淨旦對坐唱介〕

（卓羅袍）原來姹(八五)紫嫣紅開遍。似這般都付與斷(八六)井頹垣。良辰(八七)美景奈何天。〔淨〕錯了錯了。美字一板。奈字一(八八)板。不可連下去。另(八九)來另來。良辰美景奈何天。賞心樂事誰家院。朝飛暮卷(九〇)。雲霞翠軒。雨絲風片(九一)。〔淨〕又不是了。絲字是務頭(九二)。要在嗓子內唱。雨絲風片。烟波畫船。錦屛人(九三)。忒看的這韶光(九四)賤。〔淨〕妙妙是的狠了。往下來。

（好姐姐）遍青山啼紅了杜鵑(九五)。荼蘼(九六)外烟絲醉軟(九七)。牡(九八)丹雖好。他春歸怎占的先。〔淨〕這句畧生些。再來一遍。牡丹雖好。他春歸怎占的先。閒凝盼。生生燕語明如剪。嚦嚦鶯聲溜的圓。〔淨〕好好。又完一折(九九)了。

〔末對小旦介〕可喜令愛聰明的緊。不愁不是一箇名妓哩。〔向淨介〕昨日會著侯司徒的公子侯朝宗。客囊頗富。又有才名。正在這裏物色名姝(一〇〇)。崑老知道麼。

(八五)姹紫嫣紅。紫紅の美しき花。
(八六)斷井頹垣。屋敷の荒れ果てた樣をいふ。
(八七)良辰、美景。賞心、樂事と并せて四美といふ。王敎の滕王閣序に見ゆ。
(八八)板。板眼をいふ。唱歌のタイム也。
(八九)另來。另は別の俗字。
(九〇)朝飛暮卷。王敎の詩に「畫棟朝飛南浦雲、朱簾暮捲西山雨」の句あり。
(九一)雨絲風片。春雨春風にいふ。
(九二)務頭。唱曲中緊要の處、猶ほアクセントと云ふが如し、然れども嗓子の內にて唱ふと相碍するに似たり。
(九三)錦屛人。深閨の人といふが如し。
(九四)韶光。春光なり、句の意は深閨の女子は三春の好季節を空しく過すをいふなり。
(九五)杜鵑。滿山の杜鵑花をいふ。
(九六)荼蘼。紫藤の如し。
(九七)烟絲醉軟。いといふの荼蘼にからむこと。
(九八)牡丹云云。牡丹は花王とはいへ、暮春に咲く花なれば、いかでか花の魁たるを得ん。
(九九)一折。ひとふし。
(一〇〇)名姝。尤物に同じ。

[淨] 他是敝鄉世家。果然大才。
[末] 這段姻緣。不可錯過(一〇一)的。
(瑣窗寒) 破瓜(一〇二)碧玉(一〇三)佳期。唱嬌歌細馬騎。纏頭(一〇四)擲錦。攜手傾杯。催妝(一〇五)艷句。迎婚油壁(一〇六)。配他公子千金體。年年不放阮郎(一〇七)歸。買宅桃葉(一〇八)春水。
[小旦] 這樣公子。肯來梳櫳。好的緊了。只求楊老爺極力幫襯(一〇九)成此好事(一一〇)。
[末] 自然(一一一)在心的。
(尾聲) [小旦] 掌中女好珠難比。學得新鶯恰恰(一一二)啼。春鎖重門(一一三)人未知。如此春光。不可虛度。我們樓下小酌罷。
[末] 有趣。[同行介]
[末] 蘇小(一一四)簾前花滿畦。[小旦] 鶯酣燕嬾(一一五)隔春隄。
[旦] 紅綃(一一六)裹下櫻桃顆。[淨] 好待潘車(一一七)過巷西。

(一〇一) 錯過。 はづしてはならぬとの意。
(一〇二) 破瓜。 瓜の字を割きて八の字二を得べし、故に二八十六歳となす、又女子の破身をいふとの説あり。
(一〇三) 碧玉。 晉の汝南王の妾、樂府、情人碧玉歌に「碧玉破瓜時、相爲情顚倒」とあり。
(一〇四) 纏頭。 はなをやること。
(一〇五) 催妝。 上頭に同じ、嫁入の意。
(一〇六) 油壁。 婦人の乘車、婚姻の時に用ふ、錢唐蘇小歌に「妾乘油壁車、郎騎靑驄馬」とあり。
(一〇七) 阮郎。 阮筆、劉晨、藥を採りて天台山に遊び、道に迷ひて仙窟に入りし故事。
(一〇八) 桃葉。 秦淮に桃葉渡あり、意は香君を侯生に配して、秦淮に住ましめんとなり。
(一〇九) 幫襯。 とりなすこと。
(一一〇) 好事。 慶事をいふ。
(一一一) 自然。 當然の意。
(一一二) 恰恰。 鶯の啼く聲、歌聲に喩ふ。
(一一三) 春鎖重門云云。 春日深く門を閉ぢたれば、中に年頃の香君あるを知るものなし。
(一一四) 蘇小。 蘇小小は六朝の名妓也、其の墓は杭州の西湖に在り、香君に喩へていふ。
(一一五) 鶯燕。 春遊の男女に喩ふ。
(一一六) 紅綃。 手巾なり。
(一一七) 潘車。 晉の潘岳容姿美にして才名世に冠たり、外に出

づれば婦人果を投じて車に満ちたりといふ、侯生をめがけて果を擲ち、その歡心を得んと欲する意。

第三齣　鬨丁(一)

癸未二月

〔副淨・丑扮二壇(二)戶上〕

〔副淨〕　俎豆(三)傳家鋪排戶。

〔丑〕　祖(四)父。

〔副淨〕　各壇祭器有號簿。

〔丑〕　查(五)數。

〔副淨〕　朔(六)望開門點蠟炬。

〔丑〕　掃(七)路。

〔副淨〕　跪迎祭(八)酒早進署。

〔丑〕　休誤。

(一)鬨丁。丁は丁祭、仲春、仲春の上丁の日に孔夫子の祭典を行ふ、丁祭を騒がせし場なり

(二)壇戶。鋪排戶に同じ、祭典に俎豆の事を管する小官なり。

(三)俎豆。祭器なり、己の家は世々代祭官の小使なり」の意。

(四)祖父。家に傳ふといふ故、成程「祖父の代から」とつけたるなり、戶と父と同韻、以下(衆笑介)まで副淨と丑との對話にして、其の答ふる處は常に前の語を承けて、滑稽的の洒落をいへるなり、且つ一一押韻せり。

(五)查數。號簿といふについて調べて見よといふ。

(六)朔望。毎月一日と十五日とに廟祭あり。

(七)掃路。祭日には門前を掃除すべし。

(八)祭酒。國子祭酒なり、今の大學總長にあたる。

〔丑〕怎麼只說這樣沒體面的話。

〔副淨〕倆會說(九)讓倆說來。

〔丑〕四季關糧(一〇)進戶部(一一)。

〔副淨〕誇富(一二)。

〔丑〕紅牆綠瓦(一三)圍家住。

〔副淨〕娶婦(一四)。

〔丑〕乾柴只靠一把鋸。

〔副淨〕偸樹(一五)。

〔丑〕一年到頭(一六)不吃素。

〔副淨〕醃胙(一七)。

〔丑〕啐(一八)。倆接得不好。倒底露出脚色(一九)來。

〔同笑介〕咱們南京國子監鋪排戶。苦熬(二〇)六箇月(二一)。今日又是仲春丁期(二二)。太常寺(二三)早已送到祭品。待俺擺設起來。〔排卓介〕

〔副淨〕栗・棗・芡・菱・榛(二四)。

〔丑〕牛・羊・猪・兎・鹿。

(九) 會說。いへるならいつて見よとの意。

(一〇) 關糧。領糧と同じく、俸給を受け取ること。

(一一) 戶部。今の財政部。

(一二) 誇富。「金持だれ」と前の丑の語をひやかしていふ。俸給を受取るといふことより誇富といへるなり。

(一三) 紅牆綠瓦。孔子の廟をいふ。

(一四) 娶婦。立派な家が出來たら今度は嫁を取るんだらうとの洒落なり。

(一五) 偸樹。薪柴は買はず、廟内の樹をぬすんですますとの意。

(一六) 一年到頭。一年中の意。

(一七) 醃胙。祭肉を漬けて溜めて置くこと。

(一八) 啐。呸と同じ、コラといふ程の意。

(一九) 脚色。馬脚をあらはす、お里が知れたの意。

(二〇) 苦熬。待ちくたびれる意。

(二一) 六箇月。春秋二季の丁祭の間。

(二二) 仲春丁期。二月の丁祭。

(二三) 太常寺。儀式を掌る役所。

(二四) 栗・棗・芡・菱・榛。くり、なつめ、おにばす、ひし、はしばみ、御供の果物。

(二五) 魚・芹・菁・筍・韭、さかな、せり、かぶら、たけのこ、にら、
(二六) 不少。皆揃ふの意。
(二七) 悔氣。吾等に後悔さする樣なことがあつてはならぬ。
(二八) 就殼了。汝等さへ偸まざればそれでよろしいの意。
(二九) 賴。僞り誣ふること。
(三〇) 拱。手を合せて挨拶すること、揖禮に同じ。
(三一) 得罪得罪。御免下さい、謝罪の意。
(三二) 偸嚼。摘み食ひ。
(三三) 混。渾に同じ、戲謔の意。
(三四) 蠟紅。蠟燭の燃える心。
(三五) 宮懸。樂器をいふ。
(三六) 爵帛。酒と幣帛。
(三七) 牲醴。肉とあまざけ。
(三八) 司業。國司子業、大學の教授に當る。
(三九) 班聯。丁祭に列席する人人。
(四〇) 南雍。雍は辟雍なり、南京の大學を云ふ。
(四一) 釋奠。孔子の祭典。
(四二) 文廟。孔子廟なり。

[副淨] 魚(二五)・芹・菁・筍・韭。
[丑] 鹽・酒・香・帛・燭。
[副淨] 一件也不少(二六)。仔細看看。不レ要レ叫ニ贊禮們偸吃ー。尋ニ我們的悔氣(二七)ー呀。
[副末扮ニ老贊禮ー暗上] 啐。偏壇戸不レ偸就殼了(二八)。倒賴(二九)ニ我們ー。
[副淨拱(三〇)介] 得罪得罪(三一)。我說的是那沒體面的相公們。老先生是正人君子。豈有ニ偸嚼(三二)之理ー。
[副末] 閒話少說。天已發亮。是時候了。各處快點ニ香燭ー。
[丑] 是。[同混(三三)下]
(粉蝶兒) [外冠帶執レ笏扮ニ祭酒ー上] 松柏籠レ烟。兩堦蠟紅(三四)初剪。排ニ笙歌ー堂上宮懸(三五)。捧ニ爵帛(三六)ー。供ニ牲醴(三七)ー。香芹早薦。
[末冠帶執レ笏扮ニ司業(三八)ー上] 列ニ班聯(三九)ー。敬陪ニ南雍(四〇)釋奠(四一)ー。
[外] 下官南京國子監祭酒是也。
[末] 下官司業是也。今値ニ文廟(四二)丁期ー。禮當ニ釋奠ー。[分立介]

〔四園春〕〔小生衣巾(四三)扮二吳應箕一上〕 楹鼓(四四)逢逢(四五)將レ曙天。諸生接レ武杏壇(四六)前。

〔雜(四七)扮二監生(四八)四人一上〕 濟濟禮樂(四九)繞二三千一。萬仞門牆瞻二聖賢一。

〔副淨滿髯冠帶(五〇)扮二阮大鋮一上〕 淨二洗含羞面一。混二入几筵(五一)邊一。

〔小生〕 小生吳應箕。約二同楊維斗。劉伯宗。沈崑銅。沈眉生。衆社兄(五二)一。同來與レ祭。

〔雜四人〕 次尾社兄到的久了。大家依レ次排起班來。

〔副淨掩レ面介〕 下官阮大鋮。問二住南京一。來二觀盛典一。〔立二前列一介〕

〔副末上唱レ禮(五三)介〕 排班(五四)。班齊。鞠躬。俯伏。興。俯伏。興。俯伏。興。俯伏。興。

〔衆依レ禮各四拜介〕

〔泣顏回〕〔合〕百尺翠雲巔(五五)。仰見二宸題(五六)金扁一。素王(五七)端拱顏曾四座(五八)。冠冕迎神樂奏。拜二彤墀(五九)一。齊把二袍笏一展讀二詩書一。不レ愧二膠庠(六〇)一。畏二先聖(六一)洋洋靈顯一。

〔拜完立介〕〔唱レ禮介〕 焚帛(六二)。禮畢(六三)。〔衆相見揖介〕

(四三)衣巾。常服なり。
(四四)楹鼓。柱にかけたる太鼓。
(四五)逢逢。太鼓の音。
(四六)杏壇。文廟の前にある壇。
(四七)雜。はした役。
(四八)監生。國子監の生徒。
(四九)禮樂三千。禮樂に通じたる三千の弟子、劉滄の經二曲阜城一詩に三千弟子標青史、萬代先生號二素王一の句あり。
(五〇)冠帶。禮裝なり。
(五一)几筵。祭場のこと。
(五二)衆社兄。復社の同人を指す。
(五三)唱禮。號令をかけること。
(五四)排班。班齊、鞠躬、俯伏、興、皆號令の語、曰く列を作れ、整頓せよ、腰を屈めよ、地に拜せよ、起て。
(五五)百尺翠雲巔。天井の高きをいふ。
(五六)宸題金扁。天子親筆の金字の扁額。
(五七)素王。孔子をいふ。
(五八)顏曾四座。顏回、曾子、子思、孟子四賢の座なり。
(五九)彤墀。廟前の朱堦。
(六〇)膠庠。古の大學。
(六一)先聖。孔夫子をいふ。
(六二)焚帛。幣帛をやくをいふ。

(六三)禮畢。「をはり」といふが如し。
(六四)北面。夫子は南面せり、故にいふ。
(六五)趨蹌環佩。進退に従つて帶にさげたる環の鳴るをいふ。
(六六)鵷班鷺序。行列をいふ。
(六七)籩豆。祭器なり。
(六八)瑚璉。夏には瑚といひ、殷には璉といひ、周には簠簋といふ。皆宗廟の祭器にして、人物に譬ふるなり、孔子子貢を評して瑚璉といひしこと論語に見えたり。
(六九)留都。南京のこと。
(七〇)散職逍遙。阮大鋮自ら非職となりて暇あることを喜ぶなり。
(七一)投閒。職をやめさせられること。
(七二)名流謫貶。東林の名士。
(七三)氣。有氣なり、立腹すること。
(七四)蒙面。厚顏無恥。
(七五)喪心。良心のなきこと。
(七六)不曾……麼。何何を言はざりしかにあたる。
(七七)乾。乾兒をいふ。

(前腔)〔外・末〕北(六四)面竝臣肩。共事春丁祭典。趨(六五)蹌環佩。鵷(六六)班鷺序旋轉(メグル)。
〔小生等〕司籩(六七)執豆魯諸生。盡(コトゴトク)是瑚(六八)璉選。
〔副淨〕喜留(六九)都散(七〇)職逍遙。歎投(七一)閒名(七二)流謫貶。
〔外・末下〕
〔副淨拱介〕
〔小生驚看問介〕倆是阮鬍子。如何也(マタ)來與(アヅカル)祭。唐突先師。玷辱斯文。〔喝介〕快快(ハヤク)出(イデ)去(サレ)。
〔副淨氣(七三)介〕我乃堂堂進士。表表名家。有何罪過。不容(ユルサ)與祭。
〔小生〕倆的罪過。朝野倶知。蒙(七四)面喪(七五)心。還(マタ)敢入廟。難(ア)道(ニ)前日防亂揭帖。不(七六)曾說著倆病根麼。
〔副淨〕我正爲暴白心跡。故來與祭。
〔小生〕倆的心跡。待我替倆說來。
(千秋歲)魏家乾(七七)。又是客家乾。一(イツ)處處(モ)兒字難免同

氣崔・田。同氣崔・田。(七九)熱兄弟。(八〇)糞爭嘗。癰同吮。東林裏丟飛箭。西廠裏(八一)牽長線。怎掩旁人眼。〔合〕笑(八二)氷山消化。(八三)鐵柱翻掀。

〔副淨〕諸兄不諒苦衷。橫加辱罵。那知俺阮圓海。原是(八四)趙忠毅先生的門人。魏黨暴橫之時。(八五)我丁艱未起。何曾傷害一人。這些話都從何處說起。

〔前腔〕(八六)飛霜寃。不比黑盆寃。一件件(八七)風影敷衍。初識忠賢。初識忠賢。救(八八)周・魏。把好身名甘心貶。　前輩(八九)康對山爲救(九〇)李空同。曾入(九一)劉瑾之門。我前日屈節。也只爲著東林諸君子。怎麼倒責起我來。　(九二)春燈謎。誰不見。十錯認。無人辯。箇箇將咱譴。〔指介〕恨輕薄新進。(九三)也放屁狂言。

〔小生〕好罵好罵。

〔衆〕　儞這等人。敢在文廟之中。公然罵人。眞是反了。

〔副末亦喊介〕反了反了。讓我老贊禮。打這箇奸黨。〔打介〕

(七八)崔、田。　崔呈秀と田吉、共に魏忠賢の義士、吳淳夫、倪文煥、李夔龍と併せて五虎と稱せらる。
(七九)熱兄弟。　同氣に同じ、兄弟分となること。
(八〇)糞爭嘗。　癰同吮、諂諛の狀、越王勾踐、吳王夫差の糞を嘗め、吳起、士卒の癰を吮へり。
(八一)牽長線。　私かに魏忠賢に通ずるをいふ。
(八二)氷山消化。　魏忠賢の失敗せること。
(八三)鐵柱翻掀。　前に同じ。
(八四)趙忠毅先生。　趙南星、字は夢白、東林黨の名士、明の萬曆の進士、穀宗の時、吏部尙書となり、後魏忠賢の爲めに貶ぜらる。
(八五)丁艱。　父母の喪に服するなり。
(八六)飛霜寃、黑盆寃。　飛霜、黑盆共に寃罪をしくめる劇なり、自分の無實の罪は此の二劇の比に非ずとの意。
(八七)風影敷衍。　跡方も無きことが廣まれりとの意。
(八八)周・魏。　東林堂の人物、東林の名士を救はんが爲めに、一時權に魏忠賢に從ひ、名譽を墜すも滿足せり。
(八九)康對山。　康海、弘治の進士、文才あり、前七子の一人也、時に劉瑾政を專にし、海を幕下に致さんと欲す、海聽かず、會〻李夢陽獄に下り救を海に求む、海卽ち往いて瑾に謁し、其の罪を解くを得たり、後瑾の敗

ろに及び、瑾の黨なるに坐して貶ぜらる。
(九〇) 李空同。 名は夢陽、前七子の領袖なり。
(九一) 劉瑾。 宦官なり、武宗に寵あり、權を擅にす。
(九二) 春燈謎。 阮大鋮の作れる戯曲なり、春燈の謎を以て題となす、一に十錯認ともいふ。
(九三) 放屁狂言。 亂罵せるをいふ
(九四) 鬍。 つけひげなり。
(九五) 閹兒。 魏忠賢の乾兒となれるをいふ。
(九六) 瑫子。 瑫は耳飾なり、後來轉じて閹官を瑫と稱す、瑫子は閹兒に同じ。
(九七) 文宣。 明の時孔子を文宣王と謚す。
(九八) 庠序。 學校をいふ、借りて文廟の意に用ひたるなり。
(九九) 鳴鼓。 罪を鳴らして攻めること、論語に出づ。
(一〇〇) 荒服。 內制五服の一、蠻夷の境なり、惡人を遠方に追放する義。
(一〇一) 知和而和。 附和雷同の意、論語に曰く「知和而和、不以禮節之、亦不可行也」と。
(一〇二) 雞肋。 力の弱きに譬ふ、晉の劉伶、拳を以て己に向ふものに對して曰く、雞肋、安んぞ尊拳を奉ずるに足らんと。
(一〇三) 流連。 ぐづぐづ何時までも留ること。
(一〇四) 逆案。 逆黨の判結は鐵の如く堅く、決して動かざるをいふ。
(一〇五) 掀天轉。 勢盛にして天

[小生] 掌他的嘴。撏他的毛。
[衆亂採鬍(九四)指罵介]
(越恁好) 閹兒(九五)瑫子(九六)。閹兒瑫子。那許倆拜文宣(九七)。辱人賤行。玷庠序(九八)。愧班聯。急將吾黨鳴鼓(九九)傳。攻之必遠。屏荒服(一〇〇)。不與同州縣。投豺虎。只當閒豬犬。
[副淨] 好打好打。[指副末介] 連倆這老贊禮。都打起我來了。
[副末] 我這老贊禮。纔打倆箇知和而和(一〇一)的。
[副淨看鬚介] 把鬍鬚。都採落了。如何見人。可惱之極。[急跑介]
(紅繡鞋) 難當雞肋(一〇二)拳揎。拳揎。無端臂折腰攧。腰攧。忙躲去莫流連(一〇三)。[下]
[小生] [衆] 分邪正。辯奸賢。黨人逆案(一〇四)鐵同堅。黨人逆案鐵同堅。
(尾聲) 當年勢焰掀天轉(一〇五)。今日奔逃亦可憐。儒冠打(一〇六)

扁。歸家應自焚筆硯(一〇七)。

〔小生〕今日此舉。替東林雪憤。爲南監(一〇八)生光。好不爽快。以後大家努力。莫容此輩再出頭來。

〔衆〕是是。

〔衆〕堂堂義擧聖門前。〔小生〕黑白(一〇九)須爭一著先(一一〇)。

〔衆〕只恐輸贏(一一一)無定局。〔小生〕治由人事亂由天(一一二)。

地を動すをいふ。
(一〇六)打扁。打平に同じ、ひしやげるなり。
(一〇七)焚筆硯。復た詩文を作らず、書生と交際せざるべし。
(一〇八)南監。南京の國子監、南雍に同じ。
(一〇九)黑白。碁局に喩ふ。
(一一〇)一著先。先づ發して人を制する意なり。
(一一一)輸贏。勝敗。
(一一二)亂由天。人事を盡して治めんとしても、天下の亂るるは天意なり。

第四齣　偵戯(一)

癸未三月

〔副淨扮阮大鋮憂容上〕

(雙勸酒)前局(二)盡翻。舊人皆散。飄零鬢斑(三)。牢騷歌嬾。又遭時流(四)欺謾(五)。怎能得高臥加餐。

下官阮大鋮。別號圓海。詞章才子。科第(六)名家。正做著光祿(七)吟詩。恰合著步兵(八)愛酒。黃金肝膽。指顧中原(九)。白雪(一〇)聲名。馳驅上國。可恨身

(一)偵戯。芝居見物中の樣子を伺ふ場なり。
(二)前局。前半世得意の時、魏忠賢の失敗を嘆ずるなり。
(三)牢騷。抑欝悶悶の情なり。
(四)時流。時人也。
(五)欺謾。はづかしめらるるなり。
(六)科第。進士出身をいふ。
(七)光祿。晋の顔延之、光祿卿となる、詩に巧にして、謝靈運と名を齊しうす、圓海亦光祿卿なり、故に自ら比す。

家念重。勢利情多。偶投二客・魏之門一。便入二兒孫之列一。那時權飛二烈焰一。用二著他當道豺狼(一一)。今日勢敗二寒灰(一二)一。賸二了俺枯林鴞鳥(一三)一。人人唾罵。處處撃攻。細想起來。俺阮大鋮。也是讀二破萬卷一之人。甚麼忠佞賢奸。不レ能二辨別一。彼時既無二失心之瘋(一四)一。又非二汗邪之病一。怎的主意一錯。竟做二了一箇魏黨一。[跌レ足(一五)介] 纔題(一六)二舊事一。愧悔交加。罷了罷了。幸這京城寬廣。容二的雜人一。新在二這褲子襠(一七)裏一。買二了一所大宅一。巧蓋二園亭一。精緻二歌舞一。但有二當事朝紳一。肯來納レ交的。不レ惜二物力一。加倍趨迎(一八)。倘遇二正人君子一。憐而收レ之。也還不レ失レ爲二改過之鬼(一九)一。[悄語(二〇)介] 若是天道好レ還。死灰有二復然之日(二一)一。我阮鬍子呵。也顧二不レ得名節一。索性要二倒行逆施(二二)了。這都不レ在二話下(二三)一。昨日文廟丁祭。受二了復社少年一場痛辱。雖二是他們孟浪(二四)一。也是我自己多事。但不レ知レ有二何法兒一。可三以結二識(二五)這般輕薄(二六)一。[搔レ首尋思介]

(步步嬌) 小子翩翩(二七)皆狂簡(二八)。結レ黨欺二名宦一。風波(二九)動幾番。搶二落吟鬚一。捶二折書腕一。無レ計雪二深怨一。叫二俺閉レ戸空羞赧一。

(八) 步兵。晉の阮籍步兵校尉たり、性酒を好む、故に此の稱あり、阮姓なるを以て自らいふなり。
(九) 黄金肝膽。胸中百萬の兵あるをいふ。
(一〇) 白雪。陽春白雪は詞集の名、詞の意に用ふ。
(一一) 豺狼。惡黨に喩ふ。
(一二) 寒灰。烈焰に對す、勢力の失墜をいふ。
(一三) 鴞鳥。惡禽をいふ。
(一四) 瘋。精神病をいふ。
(一五) 跌足。ぢだんだ踏むこと。
(一六) 題。說き起すなり。
(一七) 褲子襠。南京の街名。
(一八) 趨迎。歡迎追從すること。
(一九) 鬼。再生の人の意。
(二〇) 悄語。小聲にて語ること。
(二一) 死灰復然。再び世に用ひらるること。
(二二) 倒行逆施。恩を仇で復すこと。
(二三) 不在話下。話をあづかる辭、此の話はこれまでにして置くとの意。
(二四) 孟浪。冒失と同義、疎忽なり。
(二五) 結識。知合になること。
(二六) 輕薄。輕薄の少年、復社の連中をいふ。
(二七) 翩翩。文彩風流の貌。
(二八) 狂簡。志の大なること、論語に曰く「子在レ陳曰、歸與、歸與、吾黨之小子、狂簡斐然成レ章、不レ知レ所二以裁一レ之。」と
(二九) 風波。騒動をいふ。

[丑扮家人持帖上] 地僻疏冠蓋(三〇)。門深隔燕鶯。
禀老爺。有帖(三一)借戲。
[副淨看帖介] 通家(三二)教弟陳貞慧拜。[驚介] 呵呀。這是宜興陳定生。聲名赫赫。是箇了不得(三三)的公子。他怎肯向我借戲。[問介] 那來人如何說來。
[丑] 來人說還有兩位公子。叫什麽方密之。冒辟疆。都在雞鳴埭(三四)上吃酒。要看老爺新編的燕子箋(三五)。特來相借。
[副淨吩咐介] 速速上樓。發出那一副上好行頭(三六)。吩咐班裏人。梳頭洗臉。隨箱快走。儞也拏帖跟去。俱要仔細著(三七)。
[丑應下]
[雜抬箱衆戲子(三八)繞場下]
[副淨喚丑介] 轉來。[悄語介] 儞到他席上。聽他看戲之時。議論什麽。速來報我。
[丑] 是。[下]
[副淨笑介] 哈哈。竟不知他們目中還有下官。有趣有趣。且坐書

(三〇)冠蓋。冠蓋の往來は紳士の訪問をいふ、蓋は車の蓋なり。
(三一)帖。名帖、名刺の鄭重なもの。
(三二)通家。代代の交誼ある家の意、教弟は謙辭なり。
(三三)了不得的。俗語、すばらしいの意。
(三四)雞鳴埭。名所なるべし。
(三五)燕子箋。戲曲の名、燕子が箋を啣んで才子佳人の媒介をなすといふ仕組なり。
(三六)上好行頭。上等の道具なり。
(三七)仔細。小心の意、氣をつけて行けといふ意なり。
(三八)戲子。役者なり。

齋。靜聽回話。〔虛下〕

〔末巾服扮楊文驄上〕

周郎(三九)扇底聽新曲。　米老(四〇)船中訪故人。

下官楊文驄。與圓海筆硯至交。彼之詞曲。我之書畫。兩家絕技。一代傳人。今日無事。來聽他燕子新詞。不免竟入。〔進介〕這是石巢園(四一)。爾看山石花木。位置不俗。一定是華亭張南垣(四二)的手筆了。

〔指介〕

(風入松)花林疏落石斑斕(四三)。收入倪黃(四四)畫眼。

〔仰看讀介〕詠懷堂。孟津王鐸(四五)書。〔贊介〕寫的有力量。〔下看介〕一片紅氈(四六)鋪地。此乃顧曲(四七)之所。

草堂(四八)圖裏烏巾(四九)岸。好指點(五〇)銀箏紅板。

〔指介〕那邊是百花深處了。

爲甚的蕭條閉關。敢是新詞改。舊稿删。

〔立聽介〕隱隱有吟哦之聲。圓老在內讀書。〔呼介〕圓老。略歇

(三九)周郎。三國吳の周瑜、音律に精し、當時の諺に云ふ、曲誤あれば周郎顧ると、故に顧曲の周郎の稱あり。

(四〇)米老。米芾、字は元章、書畫の名人也、黃山谷の米元章に贈る詩に「滄江靜夜虹貫レ月、定是米家書畫船」の句あり。

(四一)石巢園。阮大鋮の莊園の名

(四二)張南垣。明代著名の石匠、善く假石山を砌すといふ。

(四三)斑斕。まばらに蒼苔の點するをいふ。

(四四)倪・黃。倪瓚、字は雲林、黃公望、字は子久、共に元人にして畫を以て名あり、殊に黃公望は元末四大家の一人なり。

(四五)王鐸。字は覺斯、天啓の進士、禮部尙書に擢んでられ、福王の時、東閣大學士となり、後、淸に降る、博學好古、詩文に工にし、書畫を能くす。

(四六)紅氈。毯子をいふ。

(四七)顧曲之所。觀劇の處といふに同じ。

(四八)草堂。屏に杜甫の草堂の圖を畫けるなり。

(四九)烏巾岸。黑頭巾の高くそびゆるなり。

(五〇)指點。しらべること。

一歇(五一)性命要緊呀。

〔副淨出見大笑介〕 我道是誰。原來是龍友。請坐請坐。〔坐介〕

〔末〕 如此春光。爲何閉戸。

〔副淨〕 只因傳奇四種。目下發刻。恐有錯字在此對閲。

〔末〕 正是。聞得燕子箋已授梨園。特來領略(五二)。

〔副淨〕 恰好今日全班不在。

〔末〕 那裏去了。

〔副淨〕 有幾位公子借去遊山(五三)。

〔末〕 且把抄本賜教。權當漢書(五四)下酒罷。

〔副淨喚介〕 叫家僮安排酒酌。我要和楊老爺在此小飲。

〔内〕 曉得。

〔雜上排酒果介〕

〔末・副淨同飲看書介〕

（前腔）〔末〕 新詞細寫烏絲闌。都是(五五)金淘沙揀。簪花

(五一) 性命要緊。命が大事なりとの意。

(五二) 領略。領教に同じ、うかがひにまゐりましたとの意。

(五三) 遊山。遊樂の意。

(五四) 漢書下酒。宋の蘇舜欽、字は子美、古文を能くす、嘗て漢書に對して且つ讀み且つ飲む、外舅杜公竊に見て、好好の下酒物となす。

(五五) 金淘沙揀。金玉の文字といふ意なり。

美女心情慢。又逗出煙慵雲懶。看到此處。令我一往情深。這燕子啣春未殘。怕的楊花白。人鬢斑。

〔副淨〕 蕪詞俚曲。見笑大方。〔讓介〕 請乾一杯。〔同飲介〕

〔丑急上〕 傳將隨口話。 報與有心人。

稟老爺。小人到雞鳴埭上。看著酒斟十巡。戲演三折。忙來回話。

〔副淨〕 那公子們怎麼樣來。

〔丑〕 那公子們看老爺新戲。大加稱贊。

（急三鎗） 點頭聽。擊節賞。停盃看。

〔副淨喜介〕 妙妙他竟知道賞鑑哩。〔問介〕 可曾說些甚麼。

（丑） 他說眞才子。筆不凡。

〔副淨驚介〕 呵呀呀。這樣傾倒。卻也難得。〔問介〕再說甚麼來。

（丑） 論文采。天仙吏。謫人間。好教執牛耳。主騷壇。

〔副淨佯恐介〕 太過譽了。叫我難當。越往後看。還不知怎麼樣哩。

〔吩咐介〕 再去打聽。速來回話。

（五六）心情慢。春思をいふ。
（五七）煙慵雲懶。風流韻事をいふ。
（五八）未殘。春のなほ盡きざるをいふ。意は燕子の春は盡きざるに、人間の春は既に盡きて鬢の白きを嘆ずるなり。
（五九）蕪詞俚曲。謙辭なり。
（六〇）大方。大方の君子をいふ。
（六一）隨口語。口から出まかせの語。
（六二）有心人。待てる人。
（六三）擊節賞。手を以て物を擊ち、調子をとるなり。
（六四）傾倒。感服すること。
（六五）天仙吏。原來天上の仙人なりしが、罪を得て人間に貶せられたりとの意、李太白謫仙の故事を用ふ。
（六六）騷壇。藝文界をいふ。

〔丑急下〕

〔副淨大笑介〕不料這班公子。倒是知己。〔讓介〕請乾一盃。

〔風入松〕俺呵南朝看足古江山。翻閱風流舊案。(六七)花樓雨榭燈窗晚。嘔吐了心血無限。每日價(六八)琴對牆彈。(六九)知音(七〇)賞這一番。

〔末〕請問借戲的。是那班公子。

〔副淨〕宜興陳定生。桐城方密之。如皐冒辟疆。都是了不得學問他竟服了小弟。

〔末〕他們是不輕許可人的。這本燕子箋。詞曲原好。有甚麽說處。

〔丑急上〕去如走兎。(七一)來似飛烏。稟老爺。小的又到雞鳴埭看著戲演半本。酒席將完。忙來回話。

〔副淨〕那公子又講些甚麽。

〔丑〕他說老爺呵。

〔急三鎗〕是南國秀。東林彥。(七二)玉堂(七三)班。

(六七)舊案。舊事をいふ、南朝の江山、風流の舊事を案じて、劇を作る意。
(六八)每日價。每日の意、價は助字。
(六九)琴對牆。聞く人の無きをいふ。
(七〇)知音。知る人ぞ知るの意。
(七一)去如走兎　使者の口上にふさはし。
(七二)彥。秀と同じ。
(七三)玉堂。翰林の列にあるをいふ。

〔副淨佯驚介〕句句是讚俺。益發惶恐。〔問介〕還說些什麼。

（丑）他說爲何投崔魏。自擢殘。

〔副淨皺眉拍案惱介〕只有這點點（七四）不才。如今也不必說了。〔問介〕還講些什麼。

〔丑〕話多著哩。小人也不敢說（七五）了。

〔副淨〕但說無妨（七六）。

（丑）他說老爺呼親父。稱乾子。忝羞顏。也不過仗人勢狗一般。

〔副淨怒介〕阿呀呀。了不得（七七）。竟罵起來了。氣死（七八）我也。

〔風入松〕平章（七九）風月有何關。助俺看花對盞。新聲一部空勞讚。不把俺心情剖辯（八〇）。偏加些惡諢毒頑。這欺（八一）侮受應難。

〔末〕請問這是爲何罵起。

〔副淨〕連小弟也不解。前日好好（八二）拜廟。受了五個秀才一頓狠打。

（七四）點點。一點一點の意。

（七五）不敢說遠慮して言はず

（七六）無妨。差支なし、遠慮するに及ばずとの意。

（七七）了不得。俗語のやりきれぬの意。

（七八）氣死。立腹して悶絶する意

（七九）平章風月平章品評なり、言ふは唯唯詞曲を品評すれば足る、他の事に及ぶ必要はなしとの意。

（八〇）剖辯。分別に同じ、自分の心情をよく解せずに、やたらに批評する意。

（八一）欺侮。侮辱に同じ、甘んじて受け難しとなり。

（八二）好好。善意からの意なり。

今日好好借戲。又受這三箇公子一頓狠罵(八三)。此後若不設箇法子。如何出門。[愁介]

[末] 長兄不必吃惱(八四)。小弟倒有箇法兒。未知肯依否(八五)。

[副淨喜介] 這等絕妙了。怎肯不依。

[末] 兄可知道。吳次尾是秀才領袖。陳定生是公子班頭(八六)。兩將罷兵。千軍解甲矣。

[副淨拍案介] 是呀。[問介] 但不知誰可解勸(八七)。

[末] 別箇沒用。只有河南侯朝宗。與兩君文酒至交。言無不聽。昨聞侯生閒居無聊(八八)。欲尋一秦淮佳麗。小弟已替他物色一人。名喚香君。色藝皆精。料中其意。長兄肯爲出梳櫳(八九)之費。結其歡心。然後託他兩處分解(九〇)。包管(九一)一擧雙擒。

[副淨拍手笑介] 妙妙好箇計策。[想介] 這侯朝宗原是敝年姪(九二)。應該料理(九三)的。[問介] 但不知應用若干。

[末] 妝奩酒席。約費二百餘金。也就豐盛了。

[副淨] 這不難。就送三百金。到尊府(九四)。憑君區處(九五)使(九六)了。

(八三) 狠打。ひどく打つこと。

(八四) 不必吃惱。心配なさるには及ぶまいの意。吃惱は心配なり。

(八五) 依。從ふこと。

(八六) 班頭。領袖に同じ、組頭の意。

(八七) 解勸。仲裁すること。

(八八) 閒居無聊。つれづれの意。

(八九) 梳櫳。身受のこと。

(九〇) 分解。辯解の意。

(九一) 一擧雙擒。一擧兩得に同じ、こちらも先方も滿足なり。包管はうけあひなり。

(九二) 敝年姪。侯朝宗の父と阮大鋮とは同年の進士なり、故にいふ。

(九三) 料理。辨理に同じ。

(九四) 尊府。貴宅といふに同じ。

(九五) 區處。處分に同じ。

（九六）便了。それでよろしの意。
（九七）白門。南京のこと、宣陽門の俗稱なり。
（九八）弱柳。妓女に喩ふ、白門の弱柳は秦淮の歌妓をいふ。
（九九）等閒。なほざりに酒歌三昧に日を送る意。
（一〇〇）春山。春山の眉を畫くの意、一美人を買はんといふなり。

［末］那消許多。
［末］白門(九七)弱柳(九八)許誰攀。［副淨］文酒笙歌倶等閒(九九)。
［末］惟有美人稱妙計。［副淨］憑君買黛畫春山(一〇〇)。

第五齣　訪翠(一)

癸未三月

（一）訪翠。秦淮に佳人を訪ふの場なり。
（二）金粉。美人のこと、六朝美人の昔ながらの面影の存するをいふ。
（三）滿天涯烟草。見渡す限りはてしなきこと。
（四）催花信云々。李香君を身受けせんとする侯朝宗の意の切なるをいふ。
（五）風風雨雨。身受けの障碍となることをいふ。
（六）書劍飄零。客となつて他郷に流寓すること。
（七）平康。長安に平康坊あり、

［生麗服上］
（緱山月）金粉(二)未消亡。聞得六朝香。滿(三)天涯烟草斷人腸。怕催(四)花信緊(五)。風風雨雨。誤了春光。
小生侯方域。書劍飄零(六)。歸家無日。對三月艷陽之節。住六朝佳麗之場。雖是客況不堪。卻也春情難按。昨日會著楊龍友。盛誇李香君妙齡絕色。平康(七)第一。現在蘇崑生教他吹歌。也來勸俺梳攏。奈

何蕭索奚囊難成好事。今乃清明佳節。獨坐無聊。不免借歩踏青。
竟到舊院一訪。有何不可。〔行介〕
（錦纏道）望平康。鳳城東千門綠楊。一路紫絲繮。引遊郎。誰家乳燕雙雙。
〔丑扮柳敬亭上〕黃鶯驚曉夢。白髮動春愁。
〔喚介〕侯相公何處閒遊。
〔生回頭見介〕原來是敬亭。來的好也。俺去城東踏青。正苦無伴哩。
〔丑〕老漢無事。便好奉陪。〔同行介〕
〔丑指介〕那是秦淮水了。
（生）隔春波碧烟染窗。倚晴天紅杏窺牆。
〔丑指介〕這是長橋。我們漫漫的走。
（生）一帶板橋長。閒指點茶寮酒舫。
〔丑〕不覺來到舊院了。

（八）奚囊。財布のこと。
（九）踏青。郊外散歩のこと。
（一〇）有可不可何の差支もなしの意。
（一一）紫絲繮。公子の馬の手綱。
（一二）乳燕雙雙。雌雄のむつまじきにいふ。
（一三）隔春波云云。以下數句秦淮の景を叙する處、眞に畫くが如し。
（一四）長橋。長板橋、秦淮の橋なり。
妓女の居る所、一般に花柳街を指していふ。

（生）聽聲聲賣花忙。穿過了條條深巷、
[丑指介] 這一條巷裏都是有名姊妹家。(一五)
[生] 果然不同。儞看黑漆雙門之上。
插一枝帶露柳嬌黃。
[丑指介] 這箇高門兒。便是李貞麗家。
[生] 我問儞。李香君住在那箇門裏。
[丑] 香君就是貞麗的女兒。
[生] 妙妙俺正要訪他。恰好到此。
[丑] 待我敲門。[敲介]
[内問介] 那箇。
[丑] 常來走動的老柳。陪著貴客來拜。
[内] 貞娘香姐。都不在家。
[丑] 那裏去了。
[内] 在卞姨娘家。做盒子會(一六)哩。
[丑] 正是。我竟忘了。今日是盛會。

(一五) 姊妹。妓女の稱。

(一六) 盒子會。演藝會の如きもの。

[生] 爲何今日做會。
[丑拍腿介] 老腿走乏了。且在這石磴上。略歇一歇。從容告稟。
[同坐介]
[丑] 相公不知這院中名妓。結爲手帕姊妹。(一七)就像香火兄弟(一八)一般。每遇時節。便做盛會。
(朱奴剔銀燈) 結羅帕烟花雁行。(一九)逢令節齊鬪新妝。
[生] 是了。今日清明佳節。故此皆去赴會。但不知怎麼叫做盒子會。
[丑] 赴會之日。各携一副盒兒。(二〇)都是鮮物異品。
有海錯・江瑤(二一)・玉液漿。(二二)
[生] 會期做些甚麼。
[丑] 大家比較技藝。
撥琴阮(二三)笙簫嘹喨。
[生] 這樣有趣。也許子弟入會麼。

(一七)手帕姊妹。兄弟分の意、そろひの手帕でもしるしとなすなるべし。
(一八)香火兄弟。唐の時、妓女氣類を以て相集り、神前に燒香して、兄弟の約束をなす風習行はる、之を香火兄弟といふ、教坊記に見ゆ。
(一九)結羅帕卽ち手帕兄弟をいふ、雁行、姊妹をいふ。
(二〇)盒兒。重箱の如きもの、此處にては辨當なるべし。
(二一)海錯江瑤。山海の珍味。
(二二)玉液漿。よき飲料。
(二三)阮。樂器なり、形琵琶に似たり。

〔丑搖レ手介〕不レ許。不レ許。最怕ニ的是子弟混鬧。深深鎖ニ住樓門。只許ニ樓下賞鑑。

〔生〕賞鑑中レ意的。如何會面。

〔丑〕若中ニ了意。便把ニ物事。抛ニ上樓頭。他樓上也便抛ニ下果子ー來。相當。竟飛來捧レ觴。密約在ニ芙蓉錦帳。

〔生〕既然如レ此。小生也好走走了。

〔丑〕走走何妨。

〔生〕只不レ知卞家住ニ在那廂。

〔丑〕住ニ在煖翠樓。離レ此不レ遠。卽便同行。〔行介〕

〔生〕掃レ墓(二五)家家柳。

〔丑〕吹レ餳(二六)處處簫。

〔生〕鶯花三里巷。

〔丑〕烟水兩條橋。〔指介〕此間便是。相公請進。〔同入介〕

〔末扮ニ楊文驄。淨扮ニ蘇昆生ニ迎上〕

〔末〕閒陪簇簇鶯花隊(二七)。

（二四）芙蓉錦帳。閨の中。

（二五）掃墓云々。淸明の時節に墓參して、柳の枝を插す俗なり

（二六）吹餳云々。餳屋の簫。

（二七）鶯花、粉黛。妓女の群をいふ。

〔淨〕同望迢迢粉黛圍。〔見介〕

〔末〕侯世兄(二八)怎肯到此。難得難得。

〔生〕聞楊兄今日去看阮鬍子。不想這裏遇著。

〔淨〕特爲侯相公喜事而來

〔丑〕請坐。〔俱坐介〕

〔生望介〕好箇煖翠樓。

〔雁過聲〕端詳(二九)。窗明院敞。早來到温柔(三〇)睡鄉。

〔問介〕李香君爲何不見。

〔末〕現在樓頭。

〔淨指介〕儞聽樓頭奏技了。

〔内吹笙笛介〕

〔生聽介〕鸞笙鳳管(三一)雲中響。

〔内彈琵琶箏介〕

〔生聽介〕絃悠揚。

(二八)世兄。世交ある家の子弟の稱呼。

(二九)端詳。仔細に同じ、よくみればの意。

(三〇)温柔鄉。婦人界をいふ、飛燕外傳に出づ。

(三一)鸞笙鳳管。笙管は鸞鳳の音に似たるを以て、飾り模樣となす。

〔内打雲鑼介〕(三二)

〔生聽介〕玉玎璫。(三三)一聲聲亂我柔腸。

〔内吹簫介〕

〔生聽介〕翺翔雙鳳凰。(三四)〔大叫介〕這幾聲簫。吹的我消魂。(三五)小生忍不住要打采了。(三六)〔取扇墜(三七)抛上樓介〕

海南異品(三八)風飄蕩。要打著美人心上痒。(三九)

〔内將白汗巾包櫻桃(四〇)抛下介〕

〔丑〕有趣有趣。擲下果子來了。

〔淨解汗巾傾櫻桃盤内介〕好奇怪。如今竟有櫻桃了。

〔生〕不知是那箇擲來的。若是香君。豈不可喜。

〔末取汗巾看介〕看這一條氷綃汗巾。(四一)有九分是他了。

〔小旦扮李貞麗捧茶壺領香君捧花瓶上〕

〔小旦〕香草(四二)偏隨蝴蝶扇。美人又下鳳凰臺。

〔淨驚指介〕都看天人下界了。

(三二)雲鑼。小銅鑼十面を一木架に懸け、小槌を以て之を擊つ、響各々異り。

(三三)玉玎璫。玉の音なり、雲鑼の音之に似たり。

(三四)雙鳳凰。列仙傳に曰く「秦の穆公の女弄玉簫を好み、蕭史と夫婦となる、一日簫史簫を吹いて鳳鳴をなししに、雙鳳來り降る、二人鳳に乘りて登仙す」と。

(三五)消魂。魂が天涯に飛ぶ意。

(三六)打采。纏頭を投げること。

(三七)扇墜。扇緒の根付け。

(三八)海南異品。南海の香木にて作れる意。

(三九)心上痒。心の急處をいふ。

(四〇)櫻桃。西洋のチエリーの如し、今我が國にも産す。

(四一)氷綃汗巾。薄絹のハンケチ。

(四二)香草。香草は蝴蝶に隨ひて靡く意、香草を以て妓に比し、蝴蝶を以て客に比する意なり。

〔丑合レ掌介〕 阿彌陀佛。(四三)
〔衆起介〕
〔末拉レ生介〕 世兄認認這是貞麗。這是香君。
〔生見二小旦一介〕 小生河南侯朝宗。一向渴慕。今纔遂レ願。〔見レ旦介〕
果然妙齡絕色。龍老賞鑑。眞是法眼。(四四)
〔小旦〕 虎邱(四五)新茶。泡來奉敬。〔斟レ茶衆飲介〕
〔旦〕 綠楊紅杏(四六)。點二綴新節一。
〔衆贊介〕 有趣有趣。煑レ茗看レ花。可レ稱二雅集一矣
〔末〕 如レ此雅集。不レ可レ無レ酒。
〔小旦〕 酒已備下。玉京主レ會。不レ得レ下レ樓奉陪。賤妾代レ東(四七)罷。〔喚介〕
(四八)保兒燙レ酒來。
〔雜提レ酒上〕
〔小旦〕 何不レ行二箇令兒(四九)一大家歡飮。
〔丑〕 敬候二主人發揮一。
〔小旦〕 怎敢僭越(五〇)。

(四三) 阿彌陀佛。合掌して佛名を唱ふ、隨喜の意。
(四四) 法眼。正眼に同じ。
(四五) 虎邱。茶の名所、蘇州に在り。
(四六) 綠楊紅杏。男女相交る貌に喩ふ。
(四七) 東。東家の略、主人なり。
(四八) 保兒。給仕なり。ボーイの如し。
(四九) 令兒。令會のこと、酒宴の席にて催す餘興の規定をいふ。
(五〇) 僭越。さしでがましき意。

(五一) 院中舊例。妓院の習慣。
(五二) 骰盆。さいと盤なり。
(五三) 酒底。下物なり、餘興と見るべし。
(五四) 么。一なり。
(五五) 香扇墜。香木にて造れる團扇のねつけ。
(五六) 氷綃汗巾。うすぎぬのハンケチ。
(五七) 郞。侯生自ら言ふ、蓋し扇墜を以て香君に擬し、我がものにせんとする意を寓す。

[淨] 這是院中舊例。
[小旦取骰盆介] 得罪了。[喚介] 香君把盞待我擲色奉敬。
[衆] 遵令
[小旦宣令介] 酒要依次流飲。每一杯乾。各獻所長。便是酒底。么爲櫻桃。二爲茶。三爲柳。四爲杏花。五爲香扇墜。六爲氷綃汗巾。
[喚介] 香君敬侯相公酒。
[旦斟生飲介]
[小旦擲色介] 是香扇墜。[讓介] 侯相公速乾此杯。請說酒底。
[生告乾介] 小生做首詩罷。[吟介] 南國佳人佩。休敎袖裏藏。
隨郞團扇影。搖動一身香。
[末] 好詩好詩。
[丑] 好箇香扇墜。只怕搖擺壞了。
[小旦] 該奉楊老爺酒了。
[旦斟末飲介]
[小旦擲介] 是氷綃汗巾。

〔末〕我也做詩了。
〔小旦〕不許雷同。
〔末〕也罷。下官做箇破承題（五八）罷。〔念介〕覩拭汗之物。而春色撩（五九）人矣。夫汗之沾巾。必由於春之生面也。伊何人之面。而以冰綃拭之。紅素（六〇）相著之際。不亦深可愛也耶。
〔生〕絶妙佳章。
〔丑〕這樣好文彩。還該中兩榜（六一）纔是。
〔旦斟丑酒介〕柳師父（六二）請酒。
〔小旦擲色介〕是茶。
〔丑飲酒介〕我道恁蒲（六三）。
〔小旦笑介〕非也。儞的酒底是茶。
〔丑〕待我說箇張三郎喫茶（六四）罷。
〔小旦〕說書（六五）太長。說箇笑話（六六）更好。
〔丑〕就說笑話。〔說介〕蘇東坡同黃山谷（六七）訪佛印（六八）禪師。東坡送了一（六九）把定瓷壺。山谷送了一觔陽羡茶（七〇）。三人松下品茶。佛印說。黃

（五八）破承題。當時科擧に用ひられたる八股文をいふ、八股文に破題承題あり、故に此の別稱あり。
（五九）春色撩人。赤面すること、大意はハンケチを見ればはづかしくなつて赤面をする、赤面をすれば汗をかく、さて此のハンケチにて何人の面を拭ふのであらうか、白きハンケチと赤き頰と相觸れる樣は、なんと美くしいであらうといふ意なり。
（六〇）紅素。美人の紅頰と氷綃の素巾と。
（六一）兩榜。甲榜は又會榜といひ、進士及第をいひ、乙榜は又鄕榜といひ、擧人及第をいふ、合せて兩榜となす。
（六二）師父。師匠といふが如し。
（六三）恁蒲。茶といはれたるに對し、酒をさしていかにも薄しとしやれたるなり。
（六四）張三郎喫茶。講談の題目をいふ。
（六五）說書。講談なり。
（六六）笑話。落語なり。
（六七）黃山谷。名は庭堅、字は魯直、詩文を善くし、東坡と詩名を齊しうし、蘇黃と稱せらる。
（六八）佛印。本名は了元、饒江

秀才茶癖(七一)天下聞名。但不知蘇鬍子(七二)的茶量何如。今日何不鬪一鬪。分箇誰大誰小。東坡說。如何鬪來。佛印說。儞問一機鋒(七三)。叫黃秀才答。他若答不來。吃儞一棒。我便記一筆。鬍子打了秀才了。儞若答不來。也吃黃秀才一棒。我便記一筆。秀才打了鬍子了。末後總算。打一下。吃一碗(七四)。東坡說。就依儞說。東坡先問沒鼻針如何穿線。山谷答。把針尖磨去(七五)。佛印說。答的好。山谷問沒把葫蘆(七六)怎生拏。東坡答。抛在水中(七七)。佛印說。答的也不錯。東坡又問虱在袴中(七八)有見無見。山谷未及答。東坡持棒就打。山谷正拏壺子斟茶。失手落地。打箇粉碎。東坡大叫道。和尙記著。鬍子打了秀才了。佛印笑道。儞聽(七九)哄啷一聲。鬍子沒打著秀才。秀才倒打了壺子(八〇)了。

[衆笑介]

[丑] 衆位休笑。秀才利害(八一)多著哩。[彈壺介] 這樣硬壺子都打壞。何況軟壺子(八二)。

[生] 敬老(八三)妙人。隨口詼諧(八四)。都是機鋒。

[小旦] 香君敬儞師父。

の金山寺に住持たり。辯才あり、東坡と友とし善し、東坡嘗て之を訪ふ、佛印曰く、內翰何處より來れると、此間坐處なしと、東坡戲れて曰く、和尙の四大を借りて禪林となさんと、佛印曰く、山僧一轉語あり、內翰言下に卽答せよ、如し稍擬議に涉らば請ふ玉帶を留めて山門を鎭せよと東坡之を許す、佛印曰く、四大はもと空、五蘊は有に非ずと、東坡擬議して未だ卽答せず、佛印急に侍者を呼び、東坡の玉帶を取り、衲裾を以て相報いたりと云ふ。

（六九）定窯盞。定州燒の磁器なり

（七〇）陽羨茶。陽羨は縣の名、江蘇に屬す、茶の名所。

（七一）茶癖。茶好きなり。

（七二）蘇鬍子。鬍子は髯なり。東坡長髯あり、故に蘇鬍子といふ。

（七三）機鋒。今の禪宗問答の如し。

（七四）吃一碗。卽ち罰杯の意なり。

（七五）把針尖磨去。めどなき針は、針として役にたたぬ故に、針尖を磨りへらしてしまへといふなり。

（七六）葫蘆。水を汲むに用ふ。

（七七）水中云云。棄てて用ひざるなり。

（七八）袴中。さるまたなり。

（七九）哄啷。壞はれる音の形容。

（八〇）壺子。鬍子と音通なり。

（八一）利害。機敏の意。

（八二）軟壺子。原音院鬍子と通ず。

（八三）敬老。柳敬亭をいふ、老は敬稱なり。

〔旦斟浄飲介〕

〔小旦擲介〕是杏花。

〔浄唱介〕晩妝樓上杏花殘。(八五) 猶自怯衣單。

〔旦向小旦介〕孩兒敬媽媽酒了。(八六)(八二)

〔小旦飲乾擲介〕是櫻桃。

〔浄〕讓我代唱罷。〔唱介〕櫻桃紅綻。(八七) 玉粳白露。半晌恰方言。

〔丑〕崑生該罰了。唱的唇上櫻桃。不是盤中櫻桃。

〔浄〕領罰。〔自斟飲介〕

〔小旦〕香君該自斟自飲了。

〔生〕待小生奉敬。〔生斟旦飲介〕

〔小旦擲介〕不消猜是柳了。香君唱來。

〔旦羞介〕

〔小旦〕孩兒靦覥請箇代筆相公罷。(八八) 〔擲介〕二點是柳師父。(八九)

〔浄〕好好。今日是他當値之日。(九〇)

〔丑〕我老漢姓柳。(九一) 飄零半世。最怕的是柳字。今日清明佳節。偏把

(八四) 隨口詼諧。口をついて出づる滑稽。

(八五) 晩妝樓上云云。此の二句西廂記の語なり、蘇崑生歌曲の師匠なるを以て、西廂記を唱ふるなり。

(八六) 媽媽。母親をいふ。

(八七) 櫻桃云云。此の三句亦西廂記中の語なり、ここにては鶯鶯少姐の唇に喩へ、玉粳は白き齒に喩ふ、粳は精米なり。

(八八) 代筆相公。代理人の意。

(八九) 二點。柳敬亭は先に二點にあたり、茶の話をなせり。

(九〇) 當値。當番なり。

(九一) 柳。流の字に通はせ、飄

柳圈兒(九二)。套(九四)住我老(九三)狗頭。

[衆大笑介]

[淨] 算了俺的笑話罷。

[生] 酒已有了(九五)。大家別過。

[丑] 才子佳人難得聚會。[拉(九六)生・旦介] 俺們一對兒。吃箇交(九七)心酒何如。

[旦羞遮袖下]

[淨] 香君面嫩。當面不好講得。前日所定梳櫳之事。相公意下允否。

[生笑介] 秀才中狀(九八)元。有甚麼不肯處。

[小旦] 既蒙不棄。擇定吉期。賤妾就要奉(九九)擎了。

[末] 這三月十五日。花月良辰。便好成親。

[生] 只是一件。客(一〇〇)囊羞澁。恐難備禮。

[末] 這不(一〇一)須愁。妝奩(一〇二)酒席。待小弟備來。

[生] 怎好相累(一〇三)。

容の意を寓せしめたり。

(九二) 柳圈兒云云。清明の時節に家家柳を門に挿し、又小兒は柳枝を圈にして頭に戴く風俗あり。

(九三) 老狗頭。老頭といふを更に卑しめていへり。

(九四) 套住。巻くことなり。

(九五) 有了。充分の意。

(九六) 拉、生と旦との手を取る意。

(九七) 交心酒。夫婦の杯をいふ。

(九八) 狀元。進士及第の第一なり、ここにては自分を秀才、香君を花柳界の狀元に喩へていふなり。

(九九) 奉擎。御案内申すべしとの意。

(一〇〇) 客囊羞澁。客中にて懐中の不如意なるを嘆ずるなり。

(一〇一) 不須。無用の意。

(一〇二) 妝奩。嫁入仕度なり。

(一〇三) 相累。費心の義、心配

を掛けては濟まぬといふ意なり。

(一〇四) 當得。應該と同義。

(一〇五) 巫峰。宋玉の高唐賦に見ゆる楚の襄王の故事による。

(一〇六) 行雲想。戀情をいふ。

(一〇七) 春宵の花月。三月十五日、花月の良辰に身受のこと。

(一〇八) 謊。うそ、いつはり。

(一〇九) 高唐。觀の名、襄王の夢に神女と逢ひし所、大意に云ふ、吾誤つて秦淮に遊び、李香君を見そめて忘るゝこと能はず、降りかかり來れる良縁は辭し難く、春宵花月の約をたがへず、身受の準備をせんとなり。

(一一〇) 黃將軍。黃得功なるべし。

(一一一) 水西門。南京の城門。

(一一二) 祭旗。今の軍旗祭の如きものなるべし。

(一一三) 借重。借傘と同じ、わづらはすの意。

(一一四) 花滿牀。美人の多きこと、盛大なる結婚の披露に喩ふ。

[末] 當得效力。(一〇四)

[生] 多謝了。

(小桃紅) 誤走到巫峰上。(一〇五)添了些行雲想。(一〇六)匆匆忘卻仙模樣。(一〇七)春宵花月休成謊。(一〇八)良緣到手難推讓。准備著身赴高唐。(一〇九) [作辭介]

[小旦] 也不再留了。擇定十五日。請下清客。邀下姊妹。奏樂迎親罷。[小旦下]

[丑向淨介] 呵呀。忘了忘了。咱兩個不得奉陪了。

[末] 爲何。

[淨] 黃將軍(一一〇)船泊水西門。(一一一)也是十五日祭旗。(一一二)約下我們吃酒的。

[生] 這等怎處。

[末] 還有丁繼之。沈公憲。張燕筑。都是大清客。借重(一一三)他們陪陪罷。

[淨] 煖翠樓前粉黛香。[末] 六朝風致說平康。

[丑] 踏青歸去春猶淺。[生] 明日重來花滿牀。(一一四)

第六齣　眠香　癸未三月

〔小旦艶粧上〕

（臨江仙）短短春衫雙捲袖。調箏花裏迷樓（一）。今朝全把繡簾鉤（二）。不教金線柳。遮斷木蘭舟（三）。

妾身李貞麗。只因孩兒香君。年及破瓜。梳櫳無人。日夜放心不下。幸虧楊龍友。替俺招了一位世家（四）公子。就是前日飲酒的侯朝宗。家道才名。皆稱第一。今乃上頭（五）吉日。大排筵席。廣列笙歌。清客俱到。姊妹全來。好不費事。〔喚介〕保兒那裏。

〔雜扮保兒掮扇慢上〕

席前攙趣話（六）。花裏聽情聲。

媽媽喚保兒。那處送衾枕麼。

〔小旦怒介〕啐。今日香姐上頭。貴人（七）將到。儞還做夢哩。快快捲簾掃地。安排桌几。

〔雜〕是了。

（一）迷樓。隋の煬帝驕奢にして迷樓を造れり、一般に妓樓を稱していふ。

（二）簾鉤。簾を捲き上げること。

（三）木蘭舟。遊客の船をいふ、大意に云ふ、雙袖を捲いて箏を樓上に彈じ、繡簾をかかげて、客の來るを待ち受ける仕度をなすべしと。

（四）世家。名家に同じ、代々官吏となれる家。

（五）上頭。梳櫳に同じ、くしあげなり、嫁入のこと。

（六）趣話、情聲。共に色話。

（七）貴人。新郎を指していふ。

〔小旦指點排席介〕

〔末新服上〕

〔一枝花〕 園桃紅似繡。艶覆文君酒。(八)屏開金孔雀。(九)圍春晝。滌了金甌。點著噴香獸。(一〇)這當壚紅袖。(一一)誰最温柔。拉與相如消受。(一二)

下官楊文驄。受圓海囑託。(一三)來送梳櫳之物。〔喚介〕 貞娘那裏。

〔小旦見介〕 多謝作伐。(一四)喜筵俱已齊備。〔問介〕 怎麼官人。還不見到。

〔末〕 想必就來。(一五)〔笑介〕 下官備有箱籠數件。爲香君助妝。教人搬來。

〔雜擡箱籠・首飾(一六)・衣物上〕

〔末吩咐介〕 擡入洞房。鋪陳齊整著。

〔雜應下〕

〔小旦喜謝介〕 如何這般破費。(一七)多謝老爺。

〔末袖出銀介〕 還有備席銀(一八)三十兩。交與厨房。一應酒殽。俱要豐

(八) 文君。卓文君のこと、香君に喩ふ。

(九) 屏開金孔雀。唐書竇后傳に、隋の竇毅の女、奇相あり、識凡ならず、毅因て二孔雀を屏間に畫き、婚を請ふものをして射しめ、目に中つれば許さんと約す、唐の高祖射て各々一目に中て、遂に之を得たりといふ。

(一〇) 噴香獸。獅子などの形をなした香爐。

(一一) 當壚。壚は酒房、帳場といふが如し、卓文君壚に當り、酒を賣る故事。

(一二) 相如。司馬相如のこと、侯生に喩ふ、大意に云ふ、園花、繡の如く、香君の酒樓を艶ならしむ、孔雀の屏風を圍らし、金甌を洗ひ、香爐に火を點じ、盛宴を設けて温柔なる香君を侯生に妻はさんとすと。

(一三) 圓海。阮大鋮なり。

(一四) 作伐。作媒に同じ、詩經幽風伐柯篇に「伐柯如何、匪斧不克、取妻如何、匪媒不得」とあり。

(一五) 就。やがての意。

(一六) 首飾。あたまの物。

(一七) 破費。ものいりの意。

(一八) 備席銀。宴會費。

盛。

[小旦] 益(マスマス)發當不起了(一九)(オソレイリマス)。[喚介] 香君快來(ハヤクキタレ)。

[旦盛妝上]

[小旦] 楊老爺賞了許多東西(イクバクノシナモノ)。上前(ススンデ)拜謝。

[旦拜謝介]

[末] 些須(スコシバカリ)小意(ノココロザシ)。何敢當謝。請回(カヘレ)請回(カヘレ)。

[旦即入介]

[雜急上報介] 新官人(二〇)到門了。

[末・小旦迎見介]

[生盛服從人上] 雖非科第天邊客(二一)。也(マタ)是嫦娥(二二)月裏人。

[末] 恭喜世兄(オメデタウキミヨ)。得了平康佳麗。小弟無以爲敬。草辦(二三)妝奩。粗陳筵席。聊助一宵之樂。

[生揖介] 過承周旋。何以克當。

[小旦] 請坐(スワリタマヘ)獻(ススメン)茶。[俱坐]

[雜捧茶上飲介]

(一九) 當不起了。恐縮の挨拶なり。

(二〇) 新官人。新郎なり。

(二一) 科第天邊客。進士及第、侯朝宗自らをいふ。

(二二) 嫦娥。月中の仙子なり、香君を喩へていふ。

(二三) 草辦。ザット調べるといふ謙辭。

〔末〕一應(二四)喜筵(二五)。安排齊備了麽。

〔小旦〕託賴(二六)老爺。件件完全。

〔末向生拱介〕今日吉席。小弟不敢僭越(二七)。竟此告別。明日早來道喜罷。

〔生〕同坐何妨。

〔末〕不便(二八)不便。〔別下〕

〔雜〕請新官人更衣。

〔生更衣介〕

〔小旦〕妾身不得奉陪。替官人打扮新婦。擡掇(二九)喜酒罷。〔別下〕

〔副淨・外・淨扮三清客上〕

〔副淨〕在下丁繼之。

一生花月張三影(三〇)。　五字宮商(三一)李二紅(三二)。

〔外〕在下沈公憲。

〔淨〕在下張燕筑。

〔副淨〕今日吃侯公子喜酒。只得早到。

(二四) 一應。一切に同じ。
(二五) 喜筵。祝宴のこと、喜酒も同じ。
(二六) 託賴。老爺の御蔭をもちましての意。
(二七) 僭越。僣越に同じ、餘計のお世話をせぬの意。
(二八) 不便。不妥の意。
(二九) 擡掇。安排といふに同じ。
(三〇) 張三影。北宋の詞人、張先、字は子野、その詞中に花影、月影、人影あるを以て、張三影と號す。
(三一) 五字宮商。五字とは宮商角徵羽をいふ、猶ほ音階の如し。
(三二) 李二紅。詞曲の名家、風流を以て聞ゆ、錄鬼簿には紅字李二とあり。

〔淨〕不レ知請ニ那幾位賢歌ニ來陪レ俺哩。

〔外〕説是舊院幾箇老在行。

〔淨〕這等都是我梳櫳的了。

〔副淨〕倆有ニ多大家私一梳ニ櫳許多一

〔淨〕各人有ニ幫手一倆看。今日侯公子。何曾費ニ了分文一

〔外〕不レ要ニ多話一侯公子堂上更レ衣。大家前去作レ揖。

〔衆與レ生揖介〕

〔衆〕恭喜恭喜。

〔生〕今日借光。

〔小旦・老旦・丑扮ニ三妓女一上〕

情如ニ芳草連レ天醉一 身似ニ楊花盡日忙一〔見介〕

〔淨〕喚的那一部歌妓。都報レ名來。

〔丑〕倆是敎坊司壓。叫ニ俺報一レ名。

〔生笑介〕正要レ請ニ敎大號一

〔老旦〕賤妾卞玉京。

(三三) 賢歌。歌妓をいふ。

(三四) 在行。猶ほくろうとといふが如し。

(三五) 家私。家の財産。

(三六) 幫手。幫は助なり、後援者の意。

(三七) 分文云云。一文も入らぬの意。

(三八) 借光。力を借る意。おかげさま、おせわさまといふが如し。

(三九) 盡日。終日の意。

(四〇) 敎坊司。朝廷の歌舞音曲を取締る役人。

（四一）玉京。天上をいふ。

（四二）妥當不過。至極穩當なりといふが如し、不過は不錯の意なるべし。

（四三）不妥。妥當ならず、あぶないの意。

（四四）偷漢子。私通、賣淫の意。

（四五）吃得云云。男妾を罵る意、互に素破拔をなすなり。

（四六）十番。樂曲の名。

〔生〕果然（ハタシテ）玉京（四一）仙子。

〔小旦〕賤妾寇白門。

〔生〕果然白門柳色。

〔丑〕奴家（ワタクシハ）鄭妥娘。

〔生沈吟介〕果然妥當（四二）不過（タガハズ）。

〔淨〕（四三）不妥（ヤスカラズ）不妥。

〔外〕怎麽（イカンゾ）不妥（ヤスカラザル）。

〔淨〕好（四四）偷漢子（ヌスムコトラ）。

〔丑〕呸（ヘツ）。我不偷漢。儞如何（四五）吃得恁胖（カクフトレル）。

〔衆諢（オドケ）笑介〕

〔老旦〕官人在此。快請香君出來罷。

〔小旦・丑扶香君上〕

〔外〕我們做樂迎接。

〔副淨・淨・外吹打十番（四六）介〕

〔生・旦見介〕

〔丑〕俺院中規矩。不(四七)興拜堂。就吃喜酒罷。
〔生・旦上坐(四八)〕
〔副淨・外・淨坐左邊介〕
〔小旦・老旦・丑坐右邊介〕
〔雜執壺上〕
〔左邊奉酒右邊吹彈介〕
（梁州序）〔生〕齊梁詞賦。陳隋花柳。日日芳情迤(四九)逗。青衫(五〇)偎倚。今番小(五一)杜楊州。尋思描(五二)黛。指點吹(五三)簫。從此(五四)春入手。秀才渇(五五)病急須救。偏是斜(五六)陽遲下樓。剛飲得一杯酒。
〔右邊奉酒左邊吹彈介〕
（前腔）〔旦〕樓臺花顫。簾(五七)櫳風抖。倚著雄姿英秀。春情無限。金釵肯與梳頭。閒(五八)花添艶。野草生香。消(五九)得夫人做。今宵燈影紗紅透。見(六〇)慣(六一)司空也應羞。破(六二)題兒眞

(四七) 不興。はやらないとの意。
(四八) 上坐。上坐に就くこと。

(四九) 迤逗。逗留の義。
(五〇) 偎倚。流連荒亡の意なり。
(五一) 小杜揚州。杜牧之の揚州に在りし時と、同樣の境遇なるをいふ。杜の詩に「十年一覺揚州夢、博得青樓薄倖名。」の句あり。
(五二) 描黛。張敞が妻の爲めに眉を描きし故事。
(五三) 吹簫。小杜の揚州の詩に「二十四橋明月夜、玉人何處敎吹簫。」の句あり。
(五四) 春入手。美人を手に入れたことを云ふ。
(五五) 渇病。相思病なり、司馬相如消渇病あり。
(五六) 斜陽云云。日子の長きをいふ、待ち遠きなり。
(五七) 簾櫳。簾のかかれるまど。
(五八) 閒花、野草。妓女の身分をいふ。

難ㇾ就。

〔副淨〕儞看紅日銜ㇾ山。烏鴉選ㇾ樹。快送ニ新人一回ㇾ房罷。

〔外〕且不ㇾ要ㇾ忙。俟官人當今才子。梳ニ攏了絕代佳人一。合歡(六三)有ㇾ酒。豈可ニ定情(六四)無一ㇾ詩乎。

〔淨〕說的有ㇾ理。待ニ我磨ㇾ墨拂一ㇾ箋。伺ニ候揮毫一。

〔生〕不ㇾ消(六五)ニ詩箋一。小生帶ニ有宮扇(六六)一柄一。就題贈ニ香君一。永爲ニ訂盟(六七)之物一罷。

〔丑〕妙妙我來捧ㇾ硯。

〔小旦〕看ニ儞這觜臉(六八)一。只好ㇾ脫ㇾ鞾(六九)罷了。

〔老旦〕這箇硯兒。倒該ㇾ借ニ重(七〇)香君一。

〔衆〕是呀。

〔旦捧ㇾ硯生書ㇾ扇介〕

〔衆念(七一)介〕

夾ㇾ道朱樓(七二)一徑斜。　王孫初御富平車(七三)。

青溪(七四)盡是辛夷(七五)樹。　不ㇾ及東風桃李花(七六)。

(五九) 消得夫人。立派に夫人となり得たること。
(六〇) 紅透。紅燈の光あかるきこと。
(六一) 見慣司空。韋應物、蘇州刺史を罷め、杜鴻漸を過ぎて飲す、大に醉ひ、妓を見て一詩を賦す、曰く「高髻雲鬟宮樣粧、春風一曲杜韋娘、司空見慣渾閑事、惱斷蘇州刺史腸」と鴻漸妓をして之を送り、傳舍に就かしむ。
(六二) 破題兒。新婚第一夜をいふ。
(六三) 合歡。三三九度の杯をいふ。
(六四) 定情。夫婦の契を結ぶこと。
(六五) 不消。要せずといふに同じ。
(六六) 宮扇。宮中にて用ふる扇子。
(六七) 訂盟之物。結婚記念の品。
(六八) 觜臉。容貌のこと。
(六九) 脫鞾。唐の高力士が、李白の爲めに靴を脫がせし故事。
(七〇) 借重。煩はすこと。
(七一) 念。よむこと。
(七二) 朱樓。妓樓のこと。
(七三) 富平車。漢の富平侯張放の故事、成帝常に放と微行を爲し、自ら富平侯の家人といふ。

（七四）靑溪。秦淮をいふ。
（七五）辛夷樹。和名こぶし、枯木に似たり、老妓に喩ふ。
（七六）桃李花。少女に喩ふ、香君をいふ。
（七七）鮮花著雨來。鶯鳴かせた事もあるの意。
（七八）婀娜。たをやかなること。
（七九）十二巫峰女。巫山に十二峰あり、楚の襄王高唐に遊べる時、夢に巫山の女來りて枕席を薦めたりといふこと、宋玉の賦にあり。
（八〇）催妝。婦女の上頭を催すをいふ。嫁入の意なり。
（八一）一搦。一握の意、身の小なるをいふなり。西廂記に「柳腰兒恰一搦」の句あり。
（八二）香扇墜。香君の諢號なり。
（八三）琥珀猫兒墜。鄭妥娘の目玉のくりくりせるを笑ふ意なり。

〔衆〕好詩好詩。香君收了。
〔旦收扇袖中介〕
〔丑〕俺們不及桃李花罷了。怎的便是辛夷樹。
〔淨〕辛夷樹者。枯木逢春也。
〔丑〕如今枯木逢春。也曾鮮花著雨來。(七七)
〔雜持詩箋上〕楊老爺送詩來了。
〔生接讀介〕生小傾城是李香。懷中婀娜(七八)袖中藏。
緣何十二巫峰女。(七九)夢裡偏來見楚王。
〔生笑介〕此老多情。送來一首催妝(八〇)詩。妙絕妙絕。
〔淨〕懷中婀娜袖中藏。說的香君一搦(八一)身材。竟是箇香扇墜兒。
〔衆笑介〕
〔丑〕他那香扇墜。(八二)能値幾文。怎比得我這琥珀(八三)猫兒墜。
〔副淨〕大家吹彈起來。勸新人多飲幾杯。
〔丑〕正是帶些酒興。好入洞房。
〔左右吹彈生・旦交讓酒介〕

(八四)酒籌。酒令に用ふる籌、くじを引きて酒を飲むなり。
(八五)玉倒。醉ひつぶれること。
(八六)眉黛愁。羞恥の色あるなり。
(八七)天長久。夜の長くして待遠きこと。
(八八)芙蓉扣。扣はボタンの如し。帶を解く意なり。
(八九)宮壺。宮中に用ふる銅壺。
(九〇)蓮花漏。漏は水時計なり、早く夜が更けて宴會の終るを待ち兼ぬる意なり。
(九一)吃淨。御馳走をきれいに食べ盡すなり。
(九二)胡纏。うろさく附け纏ふなり。
(九三)度清謳。面白い歌を唱ふ意。
(九四)迷離。目にちらちらすること。
(九五)阮劉。劉晨阮肇、天台山に入りて藥を採る、溪邊に二女子あり二人を見て喜ぶ事甚し、卽ち相攜へて家に歸りたりといふ。
(九六)貪花。貪花眠柳は妓を買ふこと。
(九七)對兒。男女二人づつ。
(九八)現錢。現金のこと。

(節節高)〔生旦〕金尊佐酒籌(八四)。勸不休。沈沈玉倒(八五)黃昏後。私攜手。眉黛愁(八六)。香肌瘦。春宵一刻天長久(八七)。人前怎解芙蓉扣(八八)。盼到燈昏玳筵收。宮壺(八九)滴盡蓮花漏(九〇)。

〔副淨〕儞聽譙樓二鼓。天氣太晚。撤了席罷。

〔淨〕這樣好席。不曾吃淨(九一)。就撤了去。豈不可惜。

〔丑〕我沒吃彀哩。衆位略等一等兒。

〔老旦〕休得胡纏(九二)。大家做樂。送新人入房罷。

〔衆起吹打十番送生旦介〕

(前腔)〔合〕笙簫下畫樓。度清謳(九三)。迷離(九四)燈火如春晝。天台岫。逢阮劉(九五)。眞佳偶。重重錦帳香薰透。旁人妒得眉頭皺。酒態扶人太風流。貪(九六)花福分生來有。

〔雜執燈生旦攜手下〕

〔淨〕我們都配成對兒(九七)。也去睡罷。

〔丑〕老張休得妄想。我老妥是要現錢(九八)的。

[淨]數與十文錢[拉介]
[丑]接錢再數。換低錢(九九)諢(一〇〇)[下]
[尾聲][合] 秦淮烟月無新舊(一〇一)。脂香粉膩滿東流。夜夜春情散不收(一〇二)。
[副淨] 江南花發水悠悠。[小旦] 人到秦淮解盡愁。
[外] 不管風烟(一〇三)家萬里。[老旦] 五更懷裏(一〇四)轉歌喉。

(九九)低錢。悪質の錢なり。
(一〇〇)諢。ふざけること。
(一〇一)無新舊。新院舊院の別なきこと。
(一〇二)散不收。夜夜春情の散滿して盡さぬこと。
(一〇三)風烟。戰亂をいふ。
(一〇四)懷裏。人に抱かれつつ歌を唱ふ意。

第七齣 卻奩(一)　癸未三月

[雜扮保兒掇馬桶上] 龜尿(二)龜尿。撒出小龜。鱉血鱉血。變成小鱉。龜尿鱉血。看不分別(三)。鱉血龜尿。說不清白(四)。看不分別。混了親爺。說不清白。混了親伯。[笑介] 胡鬧胡鬧。昨日香姐上頭。亂了半夜。今日早起。又要刷馬桶。倒溺壺。忙箇不了。那些孤老表子(五)。還不知摟到幾時哩。[刷馬桶介]

(一)卻奩。奩は香箱、鏡匣の類、嫁入道具をいふ、卽ち嫁入道具をつきかへす場なり。
(二)龜鼈。皆賤妓男女を罵る語、此の一節皆褻語、解說を須ひず。
(三)分別。明かなること。
(四)清白。はつきりすること。
(五)孤老表子。男女をいふ、表子は妓なり。

(六) 平康。花柳街をいふ。
(七) 花郎。花賣り。
(八) 簾鉤。簾をつるかぎ。
(九) 春阻云云。幾重の帳裏に春を知らずに朝寢せること。
(一〇) 道喜。「おめでたう」といふこと。
(一一) 新人。花婿花嫁をいふ。
(一二) 胡說。「じようだんをいふな」といふ意。
(一三) 好事。よきこと。
(一四) 好說。「どういたしまして」と挨拶する語。
(一五) 不必。「それにはおよばぬ」との返事。

(夜行船)〔末〕人宿平(六)康深柳巷。驚好夢門外花(七)郎。繡戸未開。簾(八)鉤纔響。春(九)阻十層紗帳。

下官楊文驄。早來與侯兄道(一〇)喜。你看院門深閉。侍婢無聲。想是高眠未起。〔喚介〕保兒你到新(一一)人窗外。說我早來道喜。

〔雜〕昨日睡遲了。今日未必起來哩。老爺請回。明日再來罷。

〔末笑介〕胡(一二)說。快快去問。

〔小旦內問介〕保兒。來的是那一箇。

〔雜〕是楊老爺。道喜來了。

〔小旦忙上〕倚枕春宵短。敲門好(一三)事多。

〔見介〕多謝老爺。成了孩兒一世姻緣。

〔末〕好(一四)說。〔問介〕新人起來不曾。

〔小旦〕昨晚睡遲。都還未起哩。〔讓坐介〕老爺請坐。待我去催他。

〔末〕不(一五)必不必。

［小旦下］

（步步嬌）［末］兒女濃情如花釀。(一六)美滿(一七)無他想。黑甜(一八)共一鄉。可也虧了俺幫襯。珠翠輝煌。羅綺飄蕩。件件助新妝。懸出風流榜。(一九)

［小旦上］好笑好笑。兩箇在那裏。交扣丁香。(二〇)並照菱花。(二一)梳洗纔完。穿戴(二二)未畢。請老爺同到洞房。喚他出來。好飲扶頭卯酒。(二三)

［末］驚卻好夢。得罪不淺。［同下］

［生・旦艷妝上］

（沈醉東風）［生］這雲情(二四)接著雨況。剛搔了心窩(二五)奇痒。誰攙起睡鴛鴦。被(二六)翻紅浪。喜匆匆滿懷歡暢。

［合］枕上餘香。帕上餘香。消魂(二七)滋味。纔從夢裏嘗。

［末・小旦上］

［末］果然起來了。恭喜恭喜。［一揖坐介］

［末］昨晚催妝詩句。可還說的入情(二八)麼。

（一六）花釀。花を以て釀したる蜜湯。
（一七）美滿。充分滿足なること。スキートの意。
（一八）黑甜。よく睡ること。蘇軾の詩に「一枕黑甜餘」と。又青箱雜記に「北人以晝寢爲黑甜」とあり。
（一九）風流榜。新婚の披露をいふ。
（二〇）丁香。釦をいふ。
（二一）菱花。鏡なり。
（二二）穿戴。衣を著け、冠を戴くこと。
（二三）扶頭卯酒。朝の迎へ酒なり。
（二四）雲情雨況。歡會のこと。
（二五）心窩。心中のかゆき所まで手がとどいたといふ意。
（二六）被。布團。
（二七）消魂。愉快の意。
（二八）入情。御意に叶ふ。

〔生揖介〕多謝。〔笑介〕妙是妙極了。只有二一件一。

〔末〕那一件。

〔生〕香君雖レ小。還該レ藏二之金屋一。(二九)〔看レ袖介〕小生衫袖。如何著得(三〇)下。〔倶笑介〕

〔末〕夜來定情。必有二佳作一。

〔生〕草草塞レ責。不二敢請一レ教。

〔末〕詩在二那裏一。

〔旦〕詩在二扇頭一。〔旦向二袖中一取二出扇一介〕

〔末接看介〕是一柄白紗宮扇。〔嗅介〕香的有レ趣。〔吟レ詩介〕妙妙。只有二香君不一レ愧二此詩一。〔付レ旦介〕還收好了。〔旦收レ扇介〕

（園林好）〔末〕正芬芳桃香李香。(三一)都題二在宮紗扇上一。怕遇二著狂風吹蕩一。(三二)須二緊緊袖中藏一。須二緊緊袖中藏一。

〔末看レ旦介〕儞看香君上頭之後。更絶艷麗了。〔向レ生介〕世兄有レ福。消二此尤物一。(三三)

〔生〕香君天姿國色。今日挿二了幾朶珠翠一。(三四)穿二了一套綺羅一。十分花

（二九）金屋。漢の武帝の金屋藏嬌の故事、武帝の幼時、姑（をば）の長公主、女阿嬌を指して曰く汝婦を得んと欲するや否やと、帝答へて曰く、若し阿嬌を得ば當に金屋を造りて之を藏すべしと。此の意は楊の詩に「袖中に藏す」とあるによりていへるなり。

（三〇）著。藏する意。

（三一）桃香李香。共に李香君にかかる。

（三二）狂風吹蕩。扇子の風に吹き飛ばさるること、人世の風波に喩ふ。

（三三）消此尤物。絶世の美人を手に入れたこと。

（三四）珠翠。頭のかざり。

貌。又添二分。果然可愛。

〔小旦〕這都虧了楊老爺幫襯(三五)哩。

〔江兒水〕送到纏頭錦。百寶箱。珠圍翠繞(三六)流蘇帳(三七)。銀燭籠紗(三八)通宵亮。金杯勸酒合席唱。今日又早早來看。恰似親生自養(三九)。賠了妝奩。又早敲門來望。

〔旦〕俺看楊老爺。雖是馬督撫(四〇)至親。卻也拮据(四一)作客(四二)。爲何輕擲金錢。來塡烟花之窟。在奴家受之有愧。在老爺施之無名。今日問個明白。以便圖報(四三)。

〔生〕香君問得有理。小弟與楊兄萍水(四四)相交。昨日承情太厚。也覺不安。

〔末〕既蒙問及。小弟只得實告了。這些妝奩酒席。約費三百餘金。皆出懷寧(四五)之手。

〔生〕那個懷寧。

〔末〕曾做過光祿的阮圓海。

(三五)幫襯。御世話の意。
(三六)珠圍翠繞。屏風、ついたて等の家具類。
(三七)流蘇帳。ふさのさがれる幕。
(三八)銀燭籠紗。ぼんぼりの如し。
(三九)親生自養。自分の手しほにかけた子。
(四〇)馬督撫。鳳陽の督撫、馬士英。
(四一)拮据。裕かならぬ生活をすること。
(四二)作客。游寓の身となるをいふ。
(四三)圖報。謝禮をすること。
(四四)萍水。旅中をいふ。
(四五)懷寧。安徽安慶府、阮大鋮出身の地名、因て阮をさしていふ。

【生】是那皖(四六)人阮大鋮麽。
【末】正是。
【生】他爲何這樣周旋。
【末】不過欲納交足下之意。
（五供養）【末】羨爾風流雅望。東洛(四七)才名。西漢文章。逢迎(四八)隨處有。爭看坐車郞(四九)。秦淮妙處。暫尋箇佳人相傍。也要些鴛鴦被芙蓉妝。爾道是誰的。是那南鄰大阮嫁衣全忙(五〇)。
【生】阮圓老原是敝年伯(五一)。小弟鄙其爲人。絕之已久。他今日無故用情。令人不解。
【末】圓老有一段苦衷。欲見白於足下。
【生】請教。
【末】圓老當日曾遊趙夢白(五二)之門。原是吾輩。後來結交魏黨(五三)。只爲救護東林。不料魏黨一敗。東林反與之水火(五四)。近日復社諸生。倡論

（四六）皖。安徽省の別號。
（四七）東洛。漢の賈誼は洛陽の人、才名あり、文章を能くす。
（四八）逢迎。到る處人の歡迎を受くるをいふ。
（四九）坐車郞。晉の潘岳の故事、潘岳貌美なり、車を驅つて外出すれば都下の女爭つて之に花を投じ、花車中に滿てりといふ。
（五〇）嫁衣全忙。元曲に多く「嫁衣終日爲人忙」の句を用ふ、これも其の意なり。
（五一）敝年伯。自分の父と同年の進士をいふ。
（五二）趙夢白。趙忠毅先生なり。
（五三）魏黨。魏忠賢の黨、東林の反對派なり。
（五四）水火。敵同士をいふ。

攻撃。大肆殴辱。豈非操同室之戈(五五)乎。圓老故交雖多。因其形跡可疑。亦無人代爲分辯。毎日向天大哭。説道同類相殘。傷心慘目。非河南侯君。不能救我。所以今日諄諄納交。

[生] 原來如此。俺看圓海。情辭切迫。不覺可憐。就便眞是魏黨。悔過來歸。亦不可絶之太甚。況罪有可原乎。定生・次尾・皆我至交。明日相見。即爲分解。

[末] 果然如此。吾黨之幸也。

[旦怒介] 官人是何説話。阮大鋮趨附權奸。廉恥喪盡。婦人女子。無不唾罵。他人攻之。官人救之。官人自處(五六)於何等也。

(川撥棹) 不思想(五七)。把話兒輕易講。要與他消釋災殃。要與他消釋災殃。也隄防(五九)旁人短長(五八)。官人之意。不過因他助我粧奩。便要徇私廢公。那知道這幾件釵釧衣裙。原放不到我香君眼裏(六〇)。 [抜簪脱衣介] 脱裙衫。窮不妨。布荊人(六一)。名自香。

(五五) 同室之戈。内輪の喧嘩なり。

(五六) 處。「どうなさるおつもりにや」といふ意。

(五七) 不思想。よく考慮せずに。

(五八) 短長。批評なり。

(五九) 隄防。用心すること。他人の批評を用心せよとの意。

(六〇) 眼裏。是等の品物が眼中になしとなり。

(六一) 布荊人。布裙荊釵の人。貧乏して名譽を重んずる義。

〔末〕阿呀。香君氣性。忒也剛烈。

〔小旦〕把好好東西。都丟一地。可惜可惜。〔拾介〕

〔生〕好好好。這等見識。我倒不如。眞乃侯生畏友(六二)也。〔向末介〕

老兄休怪。弟非不領教。但恐爲女子所笑耳。

(前腔)〔生〕平康巷。他能將名節講。偏是咱學校朝堂。偏是咱學校朝堂(六三)。混賢奸不問青黃(六四)。

那些社友平日重俺侯生者。也只爲這點義氣。我若依附奸邪。那時羣起來攻。自救不暇。焉能救人乎。節和名。非泛常(六五)。重和輕(六六)。須審詳。

〔末〕圓老一段好意。也還不可激烈(六七)。

〔生〕我雖至愚。亦不肯從井救人(六八)。

〔末〕既然如此。小弟告辭(六九)了。

〔生〕這些箱籠。原是阮家之物。香君不用。留之無益。還求取去罷。

〔末〕正是。多情(七〇)反被無情惱。乘興(七一)而來興盡還。〔下〕

〔旦〕惱(七二)介〕

(六二)畏友。尊敬せる友人。

(六三)學校朝堂。讀書人の階級をいふ。

(六四)青黃。禾の青黃をいふ、卽ち熟せると然らざるとなり、故に人物の賢奸に喩ふ。

(六五)泛常。平常に同じ。

(六六)重和輕。名譽は重く、一身は輕し。

(六七)激烈。過激の處置に出づべからずとの意。

(六八)從井救人。孟子に出づ、君子は自ら危險を冒してまでも、人を救ふことをせず。

(六九)告辭。別るゝ時の挨拶なり。

(七〇)多情。無情。多情は阮圓海、無情は李香君をいふ。

(七一)乘興云云。王子猷の故事。王子猷雪の朝、輿に乘じて友を訪ひ、門に及びて曰く、興盡きたりと、入らずして去る。

(七二)惱。立腹する意。

〔生看旦介〕俺看二香君天姿國色一。摘二了幾朶珠翠一。脫二去一套綺羅一。十分容貌。又添二十分一。更覺レ可レ愛。

〔小旦〕雖レ如レ此說。舍二了許多東西一。倒底可レ惜。

〔尾聲〕金珠到レ手輕輕放。慣二成了嬌癡模樣一。孤二負俺辛(七三)勤做二老娘一。

〔生〕些須東西。何足レ挂レ念。小生照(七四)レ樣賠來。

〔小旦〕這等纔好。

〔小旦〕花(七五)錢粉鈔費二商(七六)量一。〔旦〕裙布釵荊也不レ妨。

〔生〕只有二湘(七七)君能解一レ佩。〔旦〕風標不レ學世(七八)時妝。

(七三) 辛勤云云。元時の成語、おてんばの娘、親の苦勞を知らざるをいふ。

(七四) 照樣。前と同じやうなる品物をいふ。

(七五) 花錢粉鈔。花簪粉黛の費用

(七六) 商量。惜しむべしの意。

(七七) 湘君。香君に喩ふ。

(七八) 世時妝。流行を追ふこと。

第八齣 鬧樹(一)

癸未五月

〔末・小生扮二陳貞慧・吳應箕一上〕

〔金雞叫〕〔末〕貢(二)院秦淮近。賽二青(三)衿一。賸(四)金零粉。

(一) 鬧樹。燈船見物のうてな騒がせの場。

(二) 貢院。科擧の試驗場、南京の貢院は秦淮の孔子廟の側に在り今も猶ほ其の遺趾を存す。

(三) 青衿。書生のこと、賽は競爭の意なり。秀才美人の角力、何れを勝、何れを負と知り難し。
(四) 賸金零粉。昔の名殘を留めたる妓女をいふ。青衿は貢院を承け、金粉は秦淮を承けていふ也。
(五) 端陽。端午の節句。
(六) 鬧。雜遝の意。
(七) 王謝。六朝の名族、意は六朝の繁華の零落せるをいふ。
(八) 燈船。燈籠をつるせる遊覽船。
(九) 水榭。水に臨める屋臺なり。
(一〇) 河房。卽ち水榭なり。
(一一) 搭。こしらへる。
(一二) 榴花。柘榴花、ざくろの花。
(一三) 艾葉。五月節句には艾と菖蒲とを軒端にさして、邪氣を拂ふ風俗なり。
(一四) 好事。好意に同じ。
(一五) 俗子闖入。俗人の勝手に入り來ること。

[小生] 節鬧(六)端陽(五)只一瞬。滿眼繁華。王謝(七)少人問。
[末喚小生介] 次尾兄。我和你旅邸抑鬱。特到秦淮賞節。怎的不見同社一人。
[小生] 想都在燈船(八)之上。 [指介] 這是丁繼之水榭(九)。正好登眺。
[場上搭(一一)河房(一〇)一座懸燈垂簾]
[同登介]
[末喚介] 丁繼老在家麼。
[雜扮小僮上] 榴花(一二)紅似火。 艾葉(一三)碧如烟。
[見介] 原來是陳・吳二位相公。我家主人赴燈船會去了。家中備下酒席。但有客來。隨便留坐的。
[末] 這樣有趣。
[小生] 可稱主人好事(一四)矣。
[末] 我們在此雅集。恐有俗子闖入(一五)。不免設法拒絕他。 [喚介] 童子取箇燈籠來。
[雜應下] [取燈籠上]

〔末寫介〕復社會文(一六)。朋人免進(一七)。
〔雜挂燈籠介〕
〔小生〕若同社朋友到此。便該請他入會了。
〔末〕正是。
〔雜指介〕備聽鼓吹之聲。燈船早已來也。
〔末・小生凭欄(一八)望介〕
〔生・旦雅妝。同丑扮柳敬亭、淨扮蘇崑生、吹彈鼓板(一九)坐船上〕
(八聲甘州)〔末〕絲竹(二〇)隱聞。載將來一隊烏帽紅裙(二一)。天然風韻。映著柳陌斜曛。名姝也須名士襯(二二)。畫舫(二三)偏宜畫閣鄰。
〔小生〕消魂(二四)趁晚涼。仙侶同群(二五)。
〔末指介〕那燈船上好似侯朝宗。
〔小生〕侯朝宗是我們同社。該請入會的。
〔末指介〕那個女客。便是李香君。也好請他麼。

(一六)會文。文會と同じ、會文は免進と語尾を調へる爲めに言へるなるべし。
(一七)朋人免進。「無用の者入るべからず」に同じ。
(一八)欄。欄干のこと。
(一九)吹彈鼓板。笛を吹き、絃を彈き、鼓を打ち、板をたたく。
(二〇)絲竹。奏樂の聲。
(二一)烏帽紅裙。紳士と美人。
(二二)襯。うちかちの意、つれそふ意。
(二三)畫舫。美しく塗りたてし遊船、その畫舫を此の畫閣(水榭)の下に著けて、相應酬せんとの意也。
(二四)消魂。意多樣なり、ここにてはたまげるの意。
(二五)仙侶同群。船中の男女恰も神仙に似たるよりいふ。

〔小生〕李香君不受阮鬍子妝奩。竟是復社的朋友。請來何妨。

〔末〕這等說來。〔指介〕那兩個吹歌的。柳敬亭。蘇崑生。不肯做阮鬍子門客。都是復社朋友了。請上樓來。更是有趣。

〔小生〕待我喚他。〔喚介〕侯社兄侯社兄。

〔生望見介〕那水榭之上。高聲喚我的。是陳定生。吳次尾。〔拱介〕請了。

〔末招手介〕這是丁繼之水榭。備有酒席。侯兄同香君。敬亭。崑生。都上樓來。大家賞節(二六)罷。

〔生〕最妙了。〔向丑淨旦介〕我們同上樓去。〔吹彈上介〕

〔排歌〕〔生・旦〕龍舟(二七)並。畫槳分。葵花蒲葉(二八)泛金尊(二九)。朱樓密。紫障勻(三〇)。吹簫打鼓入層雲(三一)〔見介〕

〔末〕四位到來。果然成了個復社文會了。

〔生〕如何是復社文會。

〔小生指燈介〕請看。

〔生看燈籠介〕不知今日會文。小弟來的恰好。

(二六)賞節。端午の節句を祝ふこと。

(二七)龍舟。船の頭尾に龍頭龍尾を飾り、船上の人左右に分れて槳を執り、走ること甚だ快なり、恰も我がボートレースに似たり。端午の節句の餘興にて屈原を弔ふといふ。

(二八)葵花蒲葉。端午の節句の節のものなり。

(二九)金尊。尊は樽に同じ。

(三〇)紫障勻。紫障は屏風ついたての類、勻とは一樣に立ち並ぶ意。

(三一)層雲。音樂が雲上に聞ゆる意なり。

〔丑〕閒人免進我們未免唐突矣。(三二)

〔小生〕俺們不肯做阮家門客的。那箇不是復社朋友。

〔生〕難道香君也是復社朋友麼。

〔小生〕香君卻替一事。只怕復社朋友還讓一籌哩。

〔末〕已後竟該稱他老社嫂了。(三三)

〔旦笑介〕豈敢。

〔末喚介〕童子把酒來斟。我們賞節。

〔末・小生・生坐一邊丑・淨・旦坐一邊飲酒介〕

〔八聲甘州〕

〔末・小生〕相親。風流俊品。(三四)滿座上。都是語笑春溫。(三五)

〔丑・淨〕梁愁隋恨。(三六)憑(三八)他燕惱鶯嗔。(三七)

〔生・旦〕榴花照樓如火噴。暑汗難沾白玉人。(三九)

〔雜報介〕燈船來了。燈船來了。〔指介〕俺看人山人海。(四〇)圍著一條燭龍(四一)快快看來。

(三二)唐突。だしぬけ、失敬の意。

(三三)老社嫂。社中の姉さん株といふ意。

(三四)俊品。上等の人物。

(三五)語笑春溫。笑ひ興じて樂しむ意。

(三六)梁愁隋恨。六朝の零落を傷む意。

(三七)燕惱鶯嗔。燕語鶯聲といふも亦六朝を弔ふ意。

(三八)憑。我は關せずの意。

(三九)暑汗云云。樓上の涼しきをいふ。白玉の人は李香君を指すなり。

(四〇)人山人海。人の多きこと。

(四一)燭龍。龍の形をなしたる燈籠なり。

〔衆起凭闌看介〕
〔扮出燈船。懸五色角燈。(四二)大鼓大吹。繞場數廻下〕
〔丑〕 儞看。這般富麗。都是(四三)公侯勳衞之家。
〔又扮燈船。懸五色(四四)紗燈。打(四五)粗十番。繞場數廻下〕
〔淨〕 這是些富商大賈。衙門(四六)書辦。卻也鬧熱。
〔末〕 儞看船上吃酒的。都是些(四七)翰林部院老先生們。
〔小生〕 我輩的施爲。倒底有些(四八)郊寒島瘦。
〔衆笑介〕
〔合〕 紛紜。望金波。(四九)天漢迷津。
〔生〕 夜闌更深。燈船過盡了。我們做篇詩賦。也不負會文之約。
〔末〕 是是。但不知做何題目。
〔小生〕 做一篇(五〇)哀湘賦。倒有(五一)意思的。
〔生〕 依小弟愚見。不如(五二)即景聯句。更覺暢懷。
〔末〕 妙妙。〔問介〕 我三人誰起誰結

(四二) 大鼓大吹。盛大なる奏樂。
(四三) 公侯勳衞。名門貴族をいふ。
(四四) 紗燈。紗にて張りし燈、紙燈より贅澤なるもの。
(四五) 粗十番。細十番の反、熱鬧の曲、俗惡なるものなり。
(四六) 書辦。書記、屬官なり。
(四七) 翰林部院。翰林院は文書、記錄を司る、内閣の文書課の如し。部院は官省をいふ。老先生は學者の稱なり。
(四八) 郊寒島瘦。唐の孟郊、賈島の詩風を評する語、寒瘦とは猶ほしぶ味といふが如し。
(四九) 天漢迷津。天の川の渡、金波を望むとは、秦淮の水に月光の流るるをいふ。
(五〇) 哀湘賦。屈原を弔ふ賦なり、屈原身を湘流に投じて死せしを以てなり。
(五一) 有意思的。面白しの意。
(五二) 即景聯句。眼前の景につき各句を作りて唱和すること。

［生］自然讓定生兄起結了。(五三)

［丑問介］三位相公聯句消夜。俺們三箇陪著打盹麼。

［末］也有箇借重(五四)之處。

［淨］有何使喚。

［末］俺們每成四韻(五五)。飲酒一杯。俺們便吹彈一回。

［生］有趣有趣。眞是文酒笙歌之會。

［末拱介］小弟意借了。(五六)［吟介］

賞節秦淮榭。論心劇孟(五七)家。

［小生］黃開金裹葉。(五八)紅綻火燒花。(五九)

［生］蒲劍(六〇)何須試。葵心(六一)未肯差。

［末］辟兵逢綵縷。(六二)却鬼(六三)得丹砂。(六四)［末・小生・生飲酒］

［丑擊雲鑼(六五)淨彈月琴旦吹簫一回介］

［小生］蜃市(六六)樓縹緲。虹橋(六七)洞曲斜。

［生］燈疑羲氏(六八)馭。舟是豢龍(六九)拏。

［末］星宿纔離海。玻璃(七〇)更鍊媧。(七一)

(五三)起結。首尾をいふ、聯句の首尾最も難し。

(五四)借重。御苦勞を願ふ意。

(五五)四韻。八句、一解となす。

(五六)借了。「御免を蒙る」の意。

(五七)劇孟。漢の洛陽の人、俠名を以て鳴る。

(五八)金裹葉。金果子、金柑なり、端午節に用ふ。

(五九)火燒花。石榴花をいふ。

(六〇)蒲劍。菖蒲の葉にて造れる劍、端午の節に之を門上に懸けて、邪氣を拂ふといふ。

(六一)葵心。葵花は日に向ふ、以て奉上の心に喩ふ。

(六二)綵縷。美しく飾れる屋臺。

(六三)却鬼。邪を拂ふ意。

(六四)丹砂。硃砂を酒中に置いて邪氣を拂ふ。

(六五)雲鑼。樂器の名、小銅鑼十面を一架に懸け、小槌を以て之を打つ。

(六六)蜃市。蜃氣樓。秦淮の妓樓をいふ。

(六七)虹橋。長板橋なるべし。

(六八)羲氏。日輪の御者、楚辭に出づ。「吾令羲和弭節兮。」(離騷)

(六九)豢龍。龍を養ふ官、左傳に出づ。古者畜龍、故國有豢龍氏、御龍氏。

(七〇)玻璃。晴れたる天空をいふ。

(七一)媧。昔女媧氏五色の石を鍊つて、天柱の折れたるを補ひたりといふ。

(七二)赤城。山名。

[小生] 光流銀漢水。影動赤城霞。(七二)
[照前介](七三)
[生] 玉樹(七四)難諸拍。漁陽(七五)(七六)不辨撾。
[末] 龜年(七七)喧笛管。中散(七八)鬧箏琶。
[小生] 撃纜千條錦。連牕萬眼紗(七九)。
[生] 楸枰(八〇)停鬪子。瓷注(八一)屢呼茶。
[照前介]
[末] 焰比焚(八二)椒烈。聲同對壘(八三)譁。
[小生] 電雷(八四)爭此夜。珠翠勝(八五)誰家。
[生] 螢照無人苑。烏啼(八六)有樹衙。
[末] 憑闌人散後。作賦弔長沙(八七)。
[照前介] [衆起介]
[末] 有趣有趣。竟聯成一十六韻。明日可以發刻(八八)了。
[小生] 我們倡和得許多感慨。他們吹彈出無限淒涼。樓下船中。料無解人也。

(七三)照前。前の通り、酒を飲み、樂を奏すること。
(七四)玉樹。玉樹後庭花の歌。
(七五)拍。拍板の調子なり。
(七六)漁陽。漁陽參は鼓曲の名、後漢書禰衡傳に云ふ、曹操衡の善く鼓をうつを聞き、召して鼓吏となす、衡方に漁陽參撾をなす、聲節悲壯、聽くもの慷慨せざるなしと、註に云ふ、撾は鼓をうつ杖なりと。又王元美の藝苑卮言に、顚曲之周郎、辨撾之王應の語あり、晉の王應よく撾を辨ぜりといふ。
(七七)龜年。唐玄宗の名伶李龜年、梨園の樂長たり。
(七八)中散。晉の嵇康中散大夫たり、能く阮を彈ず。
(七九)萬紗眼。窓に吊されたる紗籠の多きこと。
(八〇)楸枰。棋局なり。
(八一)瓷注。急須なり。
(八二)焚椒。除夜に椒を焚いて邪氣を拂ふ。
(八三)對壘。戰爭のこと。
(八四)電雷。花火のこと。
(八五)勝。第一の意。
(八六)烏啼。六朝の樂府に烏棲曲あり、此の二句は夜景の寂寥を敍し、古を弔ふ意を述ぶ。
(八七)長沙。漢の賈誼、長沙に貶ぜられ、賦を作りて屈原を弔ふ、賈誼を弔ふは屈原を弔ふなり。
(八八)發刻。出版すること。

〔淨向丑介〕閒話且休講。自古道。良宵苦短。勝事(八九)難逢。我兩個一邊唱曲。陳吳二位相公。一邊勸酒。讓他名士美人(九〇)另做一箇風流佳會何如。

〔丑〕使得這是我們幫閒本等(九一)也。

〔末〕我與次兄。原有主道(九二)。正該少申敬意(九三)。

〔小生〕就請依次(九四)坐來。

〔生・旦正坐末・小生坐左丑・淨坐右介〕

〔生向旦介〕承衆位雅意。讓我兩個並坐牙牀。又吃一回合巹(九五)雙杯。倒也有趣。

〔旦做笑介〕

〔末・小生勸酒淨・丑唱介〕

（排歌）歌纔發。燈未昏。佳人重抖(九六)玉精神。詩題壁。酒沾脣。才郎偏會語溫存(九七)。

〔雜報介〕燈船又來了。

〔末〕夜已三更。怎的還有燈船。〔俱起凭闌望介〕

(八九)勝事。よきこと。

(九〇)名士美人。侯朝宗と李香君。

(九一)本等。本分といふに同じ。

(九二)主道。主人たる義務。

(九三)申敬意。酒を勸むること。

(九四)次。順序なり。

(九五)合巹。夫婦の盃なり。

(九六)玉精神。美しき精神を發揮して、歌を唱へ酒を勸むること。

(九七)語溫存。睦言なり。

[副淨扮阮大鋮坐燈船雜扮優人(九八)細吹細唱緩緩上]
[淨] 這船上像些老白相(九九)。大家洗耳。細細領略(一〇〇)。
[副淨立船頭自語介] 我阮大鋮買舟載歌。原要早出遊賞。只恐遇著輕薄(一〇一)斷鬧(一〇二)。故此半夜纔來。好惱人也。[指介] 那丁家河房。尙有燈火。[喚介] 小廝。看有何人在上。
[雜上岸看回報介] 燈籠上寫著復社會文。閒人免進。
[副淨驚介] 了不得(一〇三)。了不得。[搖袖介] 快歇笙歌。快滅燈火。
[滅燈止吹悄悄(一〇四)撐船下]
[末] 好好一隻燈船。爲何歇了笙歌。滅了燈火。悄然而去。
[小生] 這也奇怪。快著人看來。
[丑] 不必去看。我老眼雖昏。早已看眞(一〇五)了。那箇鬍子。便是阮圓海。
[淨] 我道吹歌。那樣不同(一〇六)。
[末怒介] 好大膽老奴才。這貢院之前。也許他來遊耍(一〇七)麼。
[小生] 待我走去。採掉他鬍子。[欲下介]
[生攔介] 罷罷。他既迴避。我們也不必爲已甚之行(一〇八)。

(九八) 細吹細唱。通人のする遊なり。
(九九) 老白相。老頭子といふに同じ、たいこもちのこと。
(一〇〇) 領略。聽くこと。
(一〇一) 輕薄。輕薄の少年。
(一〇二) 斷鬧。喧嘩すること。
(一〇三) 了不得。これは大變、やりきれぬといふ意。
(一〇四) 悄悄。すごすごと。
(一〇五) 看眞。正體を見屆けたりとの意。
(一〇六) 那樣不同。成る程格段なりとの意。
(一〇七) 遊耍。なぐさむこと。
(一〇八) 已甚之行。餘りひどいこと。

〔末〕侯兄不知。我不已甚。他便已甚了。

〔丑〕船已去遠。丟開手(一〇九)罷。

〔小生〕便益(一一〇)了這鬍子。

〔旦〕夜色已深。大家散罷。

〔丑〕香姐(一一一)想媽媽了。我們送他回去。

〔末・小生〕我二人不回寓。就下榻(一一二)此間了。

〔生〕兩兄既不回寓。我們過船的(一一三)。就此作別罷。請了。

〔末・小生〕請了。〔先下〕

〔生・旦・丑・淨下船。雜搖船行介〕

(餘文)下樓臺。遊人盡。小舟留得一家春(一一四)。只怕花底難敲深夜門(一一五)。

〔生〕月落烟濃路不眞。〔旦〕小樓紅處是東鄰(一一六)。

〔丑〕秦淮十里盈盈水(一一七)。〔淨〕夜半春帆送美人。

(一〇九)丟開手。かまはず置く意。

(一一〇)便益。まけてやれの意。

(一一一)香姐。香君をいふ。

(一一二)下榻。投宿の意。

(一一三)過船的。船に移るもの。

(一一四)一家春。侯生香君の同船をいふ。

(一一五)深夜門。賈島の詩に「僧敲月下門」の句あり。

(一一六)東鄰。古の美人の名、李白の詩に「自古有秀色、西施與東鄰」の句あり。

(一一七)盈盈水。滿水をいふ。

第九齣　撫兵(一)

癸未七月

(一)撫兵。兵隊鎭撫の場。
(二)軍牙。牙は將軍の旗、牙門といへば軍門のことなり。
(三)射潮弩。强弩をいふ。吳越王錢鏐防波塘を築かんと欲し、怒潮急湍の工事を妨ぐるを患へ、强弩五百を備へて之を射しむ、潮之が爲めに退く。遂に能く其の基礎を定むるを得たり。
(四)鼓角。練調の軍樂。
(五)寗南侯。左良玉功を以て寗南侯に封ぜらる。
(六)點卯。朝の點呼。
(七)吹打。笛を吹き鼓を打つこと。
(八)七尺昂藏。七尺は吾身、昂藏は氣宇軒昂なるをいふ。高昂の故事。
(九)虎頭燕頷。後漢の班超、人をして相せしむ、曰く燕頷虎頭、飛んで肉を食ふ、萬里侯の相ありと。
(一〇)莽男兒。勇猛の好漢。
(一一)活騎人。活潑なる騎馬武者。
(一二)風雲叱咤。戰場に往來すること。

[副淨・末扮二將官一雜扮四小卒上]

(點絳脣)旗捲軍牙。(二)射潮弩發鯨鯢怕。(三)操弓試馬。鼓角(四)斜陽下。

俺們鎭守武昌兵馬大元帥寗南侯(五)麾下將士是也。今日點卯(六)日期元帥陞帳。只得在此伺候。[吹打(七)開門介]

[小生戎裝扮左良玉上]

(粉蝶兒)七尺昂藏(八)。虎頭燕頷(九)如畫。莽男兒(一〇)走遍天涯。活騎人(一一)。飛食肉。風雲叱咤(一二)。報國恩一腔熱血揮灑(一三)。

建牙(一四)吹角(一五)不聞喧。三十登壇(一六)衆所尊。
家散(一七)萬金酬士死。身留一劍答君恩。

咱家左良玉。表字崑山。家住遼陽。世爲都司(一八)。只因得罪罷職。補糧(一九)

昌平。幸遇軍門(二〇)侯恂(二一)拔於走卒。命爲戰將。不到一年。又拜總兵(二二)之官。北討南征。功加侯伯。强兵勁馬。列鎭荊襄(二三)。[作勢介](二四) 看俺左良玉。自幼習學武藝。能挽五石之弓(二五)。善爲左右之射(二六)。那李自成(二七)。張獻忠。幾箇毛賊(二八)。何難勦滅。只可恨督師無人。機宜錯過。熊文燦(二九)。楊嗣昌。旣以偏私而敗績。丁啓睿。呂大器。又因怠玩而無功。只有俺恩帥侯公智勇兼全。儘能經理中原。不意奸人忌功。纔用卽休。叫俺一腔熱血。報主無期(三〇)。好不恨也。[頓足介](三一) 罷罷罷。這湖南湖北。也還可戰可守。且觀成敗。再定行藏(三二)。[坐介]

[内作衆兵喊叫小生驚問介] 轅門(三三)之外何人喧嘩。

[副淨・末稟介] 稟上元帥。轅門肅靜。誰敢喧嘩。

[小生怒介] 現在喧嘩。怎報沒有。

[副淨・末] 那是飢兵討餉(三四)。並非喧嘩。

[小生] 唗。前自湖南借糧三十船。不到一月。難道支完了。

[副淨・末] 稟元帥。本鎭人馬已足三十萬。了(三五)些須糧草。那夠(三六)支銷。

[小生拍案介] 呵呀。這等卻也難處哩(三七)。[立起唱介]

(一三) 揮洒。そそぐこと。
(一四) 牙。牙旗なり。
(一五) 角。喇叭なり。
(一六) 登壇。大將に拜せらるること。韓信の故事。
(一七) 家散萬金云云。唐人の句。
(一八) 都司。都使揮使司なり。
(一九) 補糗。復用ひらるること。
(二〇) 軍門。大將に當る。
(二一) 侯恂。侯朝宗の父。
(二二) 總兵。鎭臺の司令官。今の師團長の如し。
(二三) 荊襄。今の湖北地方をいふ。
(二四) 作勢。武者振ひをなすこと。
(二五) 五石之弓。强弓なり。
(二六) 左右之射。左に右に亂射すること。
(二七) 李自成、張獻忠。明末の流賊。
(二八) 毛賊。小賊。
(二九) 熊文燦、楊嗣昌、丁啓睿、呂大器。皆武將なり。
(三〇) 報主無期。主の恩に報ゆる機會を失へる意。
(三一) 頓足。足をばたばたさすること。
(三二) 行藏。進退といふに同じ。
(三三) 轅門。軍門のこと。
(三四) 餉。軍糧なり、轉じて軍用金の意。
(三五) 些須。少量の意。
(三六) 夠。能夠、足る意。
(三七) 難處。處分に苦しむ意。

〔北石榴花〕俺看中原(三八)豺虎(三九)亂如麻。都窺伺龍樓鳳(四〇)闕帝王家。有何人勤王報主。肯把義旗拏。那督師無老將。選士皆嬌娃(四一)。卻教俺自撑達(四二)。卻教俺自撑達。正騰騰(四三)殺氣。這軍粮又早缺乏。一(四四)陣陣拍手喧嘩。一陣陣拍手喧嘩。百忙中教我如何答話。好一似薨薨(四五)白晝鬧蜂衙(四六)。〔坐介〕

〔內又喊介〕

〔小生〕俺聽外邊將士。益發鼓譟。好像要反(四七)的光景。左右聽俺吩(四八)咐。〔立起唱介〕

〔上小樓〕您不要錯怨咱家。您不要錯怨咱家。誰不是天朝犬馬(四九)。他三百年養士不差(五〇)。三百年養士不差。都要把(五一)良心拍打。爲甚麼擊鼓敲門鬧轉加。致則(五二)要劫庫搶官衙。俺這裏望眼巴巴(五三)。俺這裏望眼巴巴。候

(三八) 中原。黃河の左右、即ち古の王畿の地なり。
(三九) 豺虎。盜賊に喩ふ。
(四〇) 龍樓鳳闕。宮城をいふ。
(四一) 嬌娃。小兒の意。
(四二) 撑達。支持に同じ、ふんばる意。
(四三) 騰騰。殺氣の盛なること。
(四四) 一陣陣。連續してほゞ間斷ある意。そのたびごとに。
(四五) 薨薨。群り飛ぶ貌。
(四六) 蜂衙。蜂窩なり。
(四七) 反。謀反すること。
(四八) 吩咐。申しつけること。
(四九) 犬馬。臣子をいふ。
(五〇) 不差。あやまらず、甚だ好しの意。
(五一) 把良心云云。自ら良心に問へといふ意。
(五二) 致則。致待に同じ。
(五三) 望眼巴巴。甚しく期望するを形容していふ俗語なり。元曲に多多見ゆ。

江州(五四)軍粮飛下。[坐介][抽(五五)令箭擲地介]
[副淨・末拾箭向內吩咐介] 元帥有令。三軍聽者。目下軍餉缺乏。乃人馬歸附之多。非粮草屯積之少。朝廷深恩。不可不報。將軍嚴令。不可不遵。況江西助餉。指(五六)日到轅(五七)。各宜靜聽。勿得喧嘩。
[副淨・末回(五八)話介] 奉元帥軍令。俱已曉諭三軍了。
[內又喊叫介]
[小生] 怎麽鼓譟之聲。漸入轅門。爾再去吩咐。[立起唱介]
(黃龍犯) 您且忍枵(五九)腹這一宵。盼江西那幾艇(六〇)。俺待要飛檄金陵(六一)。俺待要飛檄金陵。告兵曹(六二)轉達車駕(六三)。許咱們遷鎮移家。許咱們遷鎮移家。就粮東去。安營歇馬。駕樓船(六四)到燕子磯(六五)邊耍。
[副淨・末持令箭向內吩咐介] 元帥有令。三軍聽者。粮船一到。即便支發(六六)。仍恐轉運維艱。枵腹難待。不日撤兵漢口。就食南京。永無缺乏之虞。同享飽騰(六七)之樂。各宜靜聽。勿再喧嘩。

(五四)江州。今の江西省、武昌より下流に在り。
(五五)令箭。指揮に用ふる矢。
(五六)指日。日を定めて。
(五七)轅。轅門の略。
(五八)回話。復命なり。
(五九)枵腹。空腹に同じ。
(六〇)幾艇。艇は小船なり、押韻の爲めに艇の字を用ふ。
(六一)金陵。今の南京。
(六二)兵曹。兵部尚書、即ち陸軍大臣なり。
(六三)車駕。天子をいふ。
(六四)樓船。屋形船。
(六五)燕子磯。今江蘇江寧縣北の觀音山に在り。山上に石あり、俯して大江を瞰れば形飛燕に似たり、故に名づくと。
(六六)支發。支給すること。
(六七)飽騰。士飽き馬騰る、人馬の滿腹して勇む意。

〔內歡呼介〕 好好好。大家收拾(六八)行裝。豫備東去呀。
〔副淨・末同(六九)生介〕 稟上元帥。三軍鬨令。俱各歡呼散去了。
〔小生〕 事已如此。無可奈何。只得擇期移鎮。暫慰軍心。〔想介〕
且住。未奉明旨。輒自前行。雖聖恩寬大。未必加誅。只恐行跡之閒。(七〇)
難免天下之議。事非小可。(七一)再作商量。(七二)

〔尾聲〕 慰三軍沒別法。許就糧喧聲纔罷。誰知俺一
片葵傾向日花。(七三)〔下〕

〔內作吹打掩門四卒下〕
〔副淨向末〕 老哥。咱兄弟們(七四)商量。天下强兵勇將。讓俺武昌。明日
順流東去。料知沒人抵當。(七五)大家擁著元帥爺。一直搶了南京。就扯
起黃旗。(七六)往北京進取。有何不可。
〔末搖手介〕 我們左爺爺忠義之人。這樣風話。(七七)且不要題。(七八)依著我
說。還是移家就糧。且吃飽飯爲妙。
〔副淨〕 儞還不知。一移南京。人心驚慌。就不取北京。這箇惡名也
免不得了。

(六八) 收拾。片付けること。
(六九) 同。同話の略。
(七〇) 行跡之閒。自由行動に出づることは、天下の人の誤解を招かんとの意。
(七一) 小可。小事。
(七二) 商量。考へること。
(七三) 葵傾向日。葵花の傾いて日に向ふ心、即ち天子に忠孝を存すること。
(七四) 兄弟。弟のこと。謙稱なり。
(七五) 抵當。抵抗に同じ。
(七六) 黃旗。天子の旗なり、即ち左良玉を擁立し、天子の旗を立てて、北京に進むこと、謀反の意なり。
(七七) 風話。風は瘋に同じ、たわごとをいふ。
(七八) 題。いふ。
(七九) 細柳營。周亞夫の故事、將軍の幕府をいふ。

[末] 紛紛將士願移家。[副淨] 細柳營(七九)中起暮笳(八〇)。

[末] 千古英雄須打算。[副淨] 樓船東下一生差(八一)。

(八〇) 起暮笳。日暮に胡笳の聲を聞きて、將士家を思ふの情切なり。

(八一) 一生差。一生の誤り。

第十齣 修札(一)

癸未八月

[丑扮柳敬亭上] 老子(二)江湖漫自誇。收今販古(三)是生涯。

年來怕作朱門客(四)。閑坐街坊吃冷茶。

[笑介] 在下柳敬亭。自幼無籍(五)。流落江湖。雖則爲談詞之輩(六)。卻不是飲食之人(七)。[拱介] 列位看我像箇甚的。好像一位閻羅王。掌著這本大帳簿。點了沒數的鬼魂姓名(八)。又像一尊(九)彌勒佛(一〇)。腆著這副大肚皮。裝了無限的世態炎涼(一一)。鼓板(一二)輕敲。便有風雷雨露(一三)。舌唇纔動。也成月旦春秋(一四)。這些含冤的孝子忠臣。少不得還他箇揚眉(一五)吐氣。那班得意的奸雄邪黨。免不了加他些人禍天誅。此乃補救(一六)之微權。亦是褒譏(一七)之妙用。

(一) 修札。手紙を認むる事、札は手札、手紙なり。

(二) 老子。自分のこと。

(三) 收今販古。古今の事を講說するをいふ。

(四) 朱門客。大家のおかかへとなること。

(五) 籍。本籍。

(六) 談詞之輩。講談師のこと。

(七) 飲食之人。徒食して生を送る人。

(八) 鬼魂姓名。古人の姓名。

(九) 一尊。一座に同じ。

(一〇) 彌勒佛。佛の名、ここには布袋和尚をいふ。

(一一) 炎涼。熱鬧と寂寞、榮枯盛衰のこと。

（一二）鼓板。講談師必携の道具なり。
（一三）風雷雨露。天象の變化、以て世態の變遷に喩ふ。
（一四）月旦春秋。月旦は後漢許劭の故事、人物の評をすること。春秋は孔子の作る所、褒貶の意を寓す。卽ち講話の中にも人物の評論をなし、又褒貶の意を寓するをいふ。
（一五）揚眉吐氣。氣焔を吐くこと。
（一六）補救。天を補ひ人を救ふ意。
（一七）褒譏之妙用。例へば恨を含んで死せる忠臣には、必ず復讎の機會を與へ、天下を取りし奸雄には、その末路に天誅を加ふる等の事をいふなり。
（一八）胡談。でたらめをいふ。
（一九）燥脾。愉快の意。
（二〇）茶資。茶代なり。
（二一）平話。俗話に同じ、講談なり。
（二二）利市。錢をもうける意。
（二三）扯談。胡談のこと。
（二四）滋味酸甜。悲歡苦樂をいふ。
（二五）十萬八千。佛說に因める數なり。
（二六）一霎飛鴻。光陰の速に過ぐること。

〔笑介〕 俺柳麻子信口（一八）胡談。卻也（一九）燥脾。昨日河南侯公子。送到（二〇）茶資。約定今日午後。來聽（二一）平話。且把鼓板取出。打箇招客的（二二）利市。

〔取出鼓板敲唱介〕 無事消閒（二三）扯談。就中（二四）滋味酸甜。古來（二五）十萬八千年。（二六）一霎飛鴻去遠。幾陣（二七）猝風暴雨。各家（二八）虎帳龍船。爭名奪利片時喧。讓他（二九）陳摶睡扁。

〔生上〕 芳草烟中尋（三〇）粉黛。 斜陽影裡說（三一）英雄。

今日來聽老柳平話。裏面鼓板鏗鏘。早已有人（三二）領教。

〔相見大笑介〕 看官俱未到。獨自在此。說與誰聽。

〔丑〕 這說書是老漢的本業。譬如相公閑坐書齋彈琴吟詩。都要人聽麼。

〔生笑介〕 講的有理。

〔丑〕 請問今日。要聽那一朝故事。

〔生〕 不拘何朝。儞只揀著（三三）熱鬧爽快的。說一回罷。

〔丑〕 相公不知。那熱鬧局。就是（三四）冷淡的（三五）根芽。爽快事。就是（三六）牽纏的（三七）枝葉。倒不如把（三八）賸水殘山。孤臣孽子。講他幾句。大家滴些眼淚罷。

[生嘆介] 咳。不料敬老。倆也看到這箇田地。眞(三九)可慮也。

[末扮楊文驄急上] 休教(四〇)鐵鎖沈江底。怕有(四一)降旗出石頭。下官楊文驄。有緊急大事。要尋侯兄計議。一路問來。知在此處。不免竟入。[見介]

[生] 來的正好。大家聽敬老平話。

[末急介] 目下(四二)何等時候。還聽平話。

[生] 龍老爲何這等驚慌。

[末] 兄還不知麼。左良玉領兵東下。要搶南京。且有窺伺北京之意。(四三)本兵熊明遇。束手無策。故此託弟前來。懇求妙計。

[生] 小弟有何妙策。

[末] 久聞(四四)尊翁老先生。乃甯南之(四五)恩帥。若肯發一手諭。必能退卻。不知足下主意若何。

[生] 這樣(四六)好事。怎肯不做。但家父罷政(四七)林居。縱肯發書。未必有濟。且(四八)往返三千里。何以解目前之危。

[末] 吾兄素稱豪俠。當此國家大事。豈忍坐視。何不代寫一書。且

(二七)猝風暴雨。海内の騷亂をいふ。
(二八)虎帳龍船。戰爭をいふ。
(二九)陳摶。宋初の道士、字は希夷、圖南と號す、華山に隱る、元曲には陳摶高臥あり。
(三〇)尋粉黛。李香君を秦淮に訪ふこと。
(三一)說英雄。柳敬亭の軍談を聽くこと。
(三二)領教。話を聽くこと。
(三三)熱鬧。盛なること。
(三四)冷淡。衰ふること。
(三五)根芽。根本、もとの意。
(三六)牽纏。心配のこと。
(三七)枝葉。結果、末の意。
(三八)賸水殘山。亡國前、朝をいふ。
(三九)可慮。敬服すべきの意。
(四〇)鐵鎖云云。吳主孫皓淫虐なり、晉大擧して之を討つ、吳人江磧要害の處に於て、鐵鎖を以て江を橫ぎつて之を截つ、又鐵錐の長さ丈餘なるものを作り、暗に江中に置いて、晉の舟艦を拒ぐ、晉將王濬筏を以て錐を去り、炬火を以て鎖を斷ち、遂に能く江を渡りて、石頭城に入ることを得たり。此の句の意は左良玉の兵の東下を拒ぐべきをいふ。
(四一)降旗云云。此の句意は南京

解目前之危。另日稟明尊翁。料不見責也。

〔生〕應急(四九)權便。倒也可行。待我回寓起稿。大家商量。

〔末〕事不宜遲。卽刻發書。還恐無及。那裏等的商量。

〔生〕既是如此。就此修書便了。〔寫書介〕

〔一封書〕老夫愚不揣。勸將軍自忖裁。旄旗且慢來。兵出無名道路猜。(五〇)高帝(五一)留都(五二)陵樹在。誰敢輕將馬足躪。乏糧柴。善安排。一片忠心窮莫改。〔寫完末看介〕妙妙。寫的激切婉轉。有情有理。叫他(五四)不好不(五三)依。又不敢不依。足見世兄(五五)經濟。

〔生〕雖然如此說。還該送與熊大司馬。細加改正。方爲萬妥。

〔末〕(五六)不必煩擾。待小弟說與他便了。〔愁介〕只是一件。書雖有了。須差一的當家人。早寄爲妙。

〔生〕小弟輕裝薄(五七)遊。只帶兩個童子。(五八)那能下的書來。

〔末〕這樣密書。豈是生人可以去得。

の落城を恐るゝなり。劉禹錫の詩に基づく。

西塞山懷古

王濬樓船下益州。金陵王氣黯然收。千尋鐵鎖沈江底。一片降旗出石頭。人世幾回傷往事。山形依舊枕寒流。從今四海爲家日。故壘蕭蕭蘆荻秋。

(四二)何等時候。如何なる時機ぞ。實に國家危急存亡の時なりとの意。

(四三)本兵。兵部尚書。

(四四)傘翁老先生。傘大人に同じ。

(四五)恩帥。左良玉が侯恂に拔擢せられしことをいふ。

(四六)好事。善事に同じ。

(四七)林居。野に下りて閒居する意。

(四八)往返三千里。南京より侯の故鄕なる歸德まで、距離の非常に遠きこと。

(四九)權便。臨機の處置なり。

(五〇)高帝。明の太祖のこと。

(五一)留都。明の成祖、既に北京を以て京師となし、南京を以て留都となす。

(五二)陵樹。明の太祖の陵、卽ち孝陵は南京の城外に在り。

(五三)依。從ふなり。

(五四)不好。可からずなり。

第十一齣　投轅(一)　癸未九月

[淨・副淨扮二卒上]

[淨]　殺賊拾賊囊。救民佔民房。當差領官倉(二)。一兵喫三糧(三)。

[副淨]　如今不是這樣唱了。

[淨]　㑚唱來。

[副淨]　賊凶少棄囊。民逃賸空房。官窮不開倉。千兵無一糧。

[淨]　這等說。我們這窮兵。當眞要(四)餓死了。

[副淨]　也差不多(五)哩。

[淨]　前日鼓譟(六)之時。元帥著忙。許咱們就糧南京。這幾日不見動(七)靜。想又變(八)卦了。

[副淨]　他變了卦。咱們依舊鼓譟。有何難哉。

(一) 投轅。營門に到着の場。轅は轅門の略。
(二) 官倉。官の米倉。
(三) 三糧。三人前の糧食、所謂一擧三得、是れ實に支那兵の病根なり。
(四) 要餓死。當然餓死する外はないの意。
(五) 差不多哩。近しの意。
(六) 鼓譟。騷動、今の勞働運動の如し。
(七) 動靜。沙汰に同じ。
(八) 變卦。變心に同じ。
(九) 點卯。朝の點呼、卯は今の午前六時頃なり。
(一〇) 餓殺。餓死に同じ。
(一一) 犯法。餓死が恐しいから軍法を犯して鼓譟する意なり。

〔淨〕閒話少說。且到轅門點卯(九)。再作商量。正是不怕餓殺(一〇)。誰肯犯(一一)法。〔俱下〕〔丑扮柳敬亭背包裹上〕

〔北新水令〕走出了空林落葉響蕭蕭。一叢叢蘆花紅蓼。倒戴著接羅帽(一二)。橫跨著湛盧刀(一三)。白髯兒飄飄。誰認的談諧玩世東方老(一四)。

俺柳敬亭衝風冒雨。沿江行來。並不見亂兵搶糧。想是訛傳了。且喜已到武昌城外。不免在這草地下打開包裹。換了靴帽。好去投書。

〔坐地換靴帽介〕

〔副淨・淨(一五)上〕

〔南步步嬌〕曉雨城邊飢烏(一六)叫。來往荒烟道。軍營半里遙。〔指介〕風捲旌旗。鼓角縹緲(一七)。前面是轅門了。大家趲行幾步。餓腹好難熬。還點三八(一八)卯。

〔丑起拱介〕兩位將爺。借問一聲。那是將軍轅門。

(一二)接羅。白色の帽なり、李白襄陽歌に「倒著接羅花下迷」とあり。

(一三)湛盧刀。劍の名、吳の名劍なり、一夜飛んで楚に入る、是れ吳が楚を討つ張本となる、今柳敬亭南京より武昌に趣く、故に一層此の記事に切なり。

(一四)東方老。漢の東方朔なり、此處にては柳敬亭に當てていへり。柳のかかる風態を見ては誰も滑稽な說書家とは思はないとの意。

(一五)副淨、淨。前の二卒なり。

(一六)飢烏。餓兵に切なり。

(一七)縹緲。鼓角の聲遠く聞ゆること。

(一八)三八卯。三八の日の點呼なり。

〔淨向副淨私語介〕這箇老兒。是江北語音。不是逃兵。就是流賊。
〔副淨〕何不收拾起來。詐他幾文。且買飯吃。
〔淨〕妙。
〔副淨問介〕倆尋將軍衙門麽。
〔丑〕正是。
〔淨〕待我送倆去。〔丟繩套住丑介〕
〔丑〕呵呀。怎麽拏起我來了。
〔副淨〕俺們是武昌營專管巡邏的弓兵。不拏倆。拏誰呀。
〔丑推二淨倒地指笑介〕兩箇沒眼色的花子。怪不得餓的東倒西歪的。
〔淨〕倆怎曉得我們捱餓。
〔丑〕不爲倆們捱餓。我爲何到此。
〔副淨〕這等說來。倆敢是解糧來的麽。
〔丑〕不是解糧的。是做甚的。
〔淨〕啐。我們瞎眼了。快般行李。送老哥轅門去。

（一九）逃兵。脫走せし兵卒。
（二〇）流賊。一定の根據地なく、所在を掠め歩く賊、唐の黃巢、明の李自成、張賢忠の如き是なり
（二一）收拾。物を片付ける意、因て我が國の俗語「たたんでしまへ」の意なり。
（二二）詐。着服なり。
（二三）東倒西歪。左右によろめくこと。
（二四）解。運送すること。

[副淨・淨同丑行介]
(北折桂令)[丑] 俺看城枕著江水滔滔。鸚鵡洲(二五)濶。黃鶴樓高。鷄犬寂寥。人烟慘淡。市井蕭條。都只把豺狼餵飽。好江城畫破圖抛(二六)。滿耳呼號。鼙鼓聲雄。鐵馬嘶驕。

[副淨指介] 這是帥府轅門了。[喚介] 老哥在此等候。待我傳鼓(二七)。[擊鼓介]

[末扮中軍官(二八)上] 封拜(二九)惟知元帥大。征誅(三〇)不讓帝王尊。

[問介] 門外擊鼓(三一)。有何軍情。速速報來。

[淨] 適在汛地(三二)。捉了一箇面生(三三)可疑之人。口稱解糧到此。未知眞假。拏赴轅門。聽候發落(三四)。

[末問丑介] 爾稱解糧到此。有何公文(三五)。

[丑] 沒有公文。只有書函。

[末] 這就可疑了。

(二五) 鸚鵡州、黃鶴樓。鸚鵡州は武昌の上流に在り、黃鶴樓は城内に在り、崔灝の登黃鶴樓の詩に「芳草萋萋鸚鵡洲」とあり。
(二六) 畫破圖抛。江城の光景の荒れ果てたるをいふ。
(二七) 傳鼓。取次を乞ふこと。
(二八) 中軍官。副官の如し。
(二九) 封拜。朝廷より侯に封ぜられ、將に拜せらるゝこと。
(三〇) 征誅。大將外にある時は君命を待たずして征伐することを得。
(三一) 擊鼓。即ち傳鼓なり。
(三二) 汛地。衛戍地即ち受持の場所なり。
(三三) 面生。見知らぬ人なり。
(三四) 發落。指圖なり。
(三五) 公文。官衙の照會狀等をいふ。

（南江兒水）倆的北來意費レ推敲（三六）一。一封書信無レ名號一。荒唐（三七）言語多二虛冒（三八）一。憑（三九）レ空何處軍粮到。無レ端左支右調（四〇）。看二他神情一。大抵非（四一）レ逃卽盜。

［丑］此話差（タガヘリ）矣。若（モシ）是逃盜爲レ何自尋二轅門一。

［末］說的也是（ソレモモットモナリ）。既有二書函一。待二我替（タメニ）レ他傳進（四二）一。

［丑］這（コレハ）是一封密書。要下當面（マノアタリ）交中與元帥上的。

［末］這話益（マスマス）發可レ疑了。倆且（シバラク）外邊（ソトモニマチ）伺候。待下我稟二過元帥一傳レ倆進見上。

［副淨・淨・丑倶下］

［內吹打（四三）開レ門雜扮二軍卒六人一各執レ械（四四）對立介］

［小生扮二左良玉一戎服上］荆襄雄鎭大江濱（ホトリ）。四海安危七尺身。日日軍儲（四五）勞二計畫一。那能談笑淨二烟塵（四六）一。

［升レ坐吩咐（イヒツクル）介］昨因二飢兵鼓譟一。本帥詐二他就二粮南京一。後來（ソノノチ）細想。兵去就レ粮何如二粮來就（四七）一レ兵。聞得九江助レ餉（カテヲ）。不レ日（マモナク）就到。今日暫免二點卯一。各回二汛地一。靜候二關粮（四八）一。

（三六）推敲。疑はしくして考慮を要するなり、考へものなりとの意。
（三七）荒唐。でたらめなり。
（三八）虛冒。虛假に同じ、うそなり。
（三九）憑空。空語、何の證據もなきこと。
（四〇）左支右調。つじつまの合はぬこと。
（四一）非逃云云。逃兵でなければ盜賊ならん、頗る怪しむべしとの意。
（四二）傳進。取次ぐこと。
（四三）吹打。奏樂のこと。
（四四）械。刑具なり。
（四五）軍儲。糧餉をいふ。
（四六）烟塵。戰亂をいふ。
（四七）粮來就兵。他所より兵糧を送り來ること。
（四八）關粮。送糧の意。

〔末〕得令(四九)。〔虚下(五〇)即上〕本元帥軍令。掛牌(五一)免卯。三軍各回汛地了。

〔小生〕有甚軍情(五二)。早早報來。

〔末〕別無軍情。只有差役一名。口稱解糧到此。要見元帥。

〔小生喜介〕果然糧船到此。可喜。可喜。〔問介〕所賫文書。係何衙門。

〔末〕並無文書。只有私書。要當堂(五三)投遞。

〔小生〕這話就奇了。或是流賊細作(五四)。亦未可定。〔吩咐介〕左右軍牢(五五)。小心防備。著他膝行而進。

〔衆〕是。

〔末喚丑進介〕〔左右交執器械丑鑽入(五六)見介〕〔揖介〕元帥在上(五七)。晩生拜揖(五八)了。

〔小生〕唗。爾是何等様人。敢到此處放肆(五九)。

〔丑〕晩生一介平民。怎敢放肆。

〔北雁兒落帯得勝令〕俺是箇不出山老漁樵(六〇)。那曉的王侯大賓客。小看這長槍(六一)大劍列門旗。只當深林

(四九)得令。仰せをかしこむ意。
(五〇)虚下。舞臺を下りし風をなすこと。
(五一)掛牌。掲示を出すこと。
(五二)軍情。情報なり。
(五三)當堂。呼び出されての意。
(五四)細作。廻はしもの。
(五五)軍牢。軍警なり。
(五六)鑽入。進み入るなり。
(五七)在上。あらたまりし時に、上に對する敬語なり。
(五八)拜揖。揖禮に同じ。
(五九)放肆。無禮なること。
(六〇)老漁樵。云ふは山野の匹夫禮節を知らざる意なり。
(六一)長槍云云。此の一節は、軍隊の嚴しき固めの中を行くこと、山中を行くが如く、怕るる所なき意なり。

密樹穿荒草儘著(六二)狐狸縱橫虎咆哮。這威風何須要、偏嚇俺孤身客無門跑。便作箇(六三)長揖兒不是驕。[拱介] (六四)求饒。軍中禮原不曉。[笑介] (六五)氣也麼消。有書函。將軍仔細瞧。

[小生問介] 有誰的書函。

[丑] 歸德侯老先生寄來(六六)奉候的。

[小生] 侯司徒是俺的恩帥。爾如何認得的。

[丑] 晩生現在(六七)侯府。

[小生拱介] 這等失敬了。[問介] 書在那裏。

[丑送上書介]

[小生] 吩咐掩門。

[內吹打掩門衆下]

[小生] (六八)尊客請坐。

[丑旁坐介]

[小生看書介]

(六二) 狐狸云云。將卒の跋扈に喩ふ。

(六三) 長揖兒。長揖して拜せず。對當の禮なり。

(六四) 求饒。御免下さいの意。

(六五) 氣也麼消。怒りも解くる意又ははりあひぬけ、がつかりする意。

(六六) 奉候。問候に同じ。

(六七) 侯府。府は邸なり。

(六八) 尊客請坐。急に態度を改めしなり。

(南僥僥令) 看他諄諄情意好。不曾教兒曹。這書中文理。一時也看不透徹。無非勸俺鎭守邊方。不可移兵內地。

[歎介] 恩帥恩帥。那知俺左良玉。一片忠心天可告。怎肯背深恩。辱薦保。[問丑介] 足下尊姓大號。

[丑] 不敢。晚生姓柳。草號敬亭。

[雜捧茶上]

[小生] 敬亭請茶。

[丑接茶介]

[小生] 儞可知這座武昌城。自經張獻忠一番焚掠。十室九空。俺雖鎭守在此。缺草乏糧。日日鼓譟。連俺也做不得主了。

[丑氣介] 元帥說那裏話。自古道。兵隨將轉。再沒箇將逐兵移的。

(北收江南) 儞坐在細柳營。手握著虎龍韜。管千軍。山可動。令不搖。飢兵鼓譟犯天朝。將軍無計。從他去。

(六九) 不透徹。一寸見てよく解らないがの意。

(七〇) 薦保。推薦保證の意。

(七一) 不敢。おそれ入るの意、長者の問に答ふる禮なり。

(七二) 請。人に薦むる意。請坐の請の如し。

(七三) 兵隨將。兵卒は將軍の命令を遵奉するものにして、將軍の兵士に率ゐらるるものなしとの意。

(七四) 細柳營。將軍の幕府、漢の周亞夫の故事に出づ。

(七五) 虎龍韜。周の呂望の撰なる六韜卽ち文韜、武韜、龍韜、虎韜、豹韜、犬韜是なり。

(七六) 令不搖。將軍の命令の嚴明なること。

自逍遙（七七）。這惡名怎逃。這惡名怎逃。說不起三軍權柄

帥難操。［摔茶鍾（七八）於地下介］

［小生怒介］呵呀。這等無禮。竟把茶杯擲地。

［丑笑介］晚生怎敢無禮。一時說的高興。順手摔去了。

［小生］順手摔去。難道爾的心。做不得主麼。

［丑］心若做的主。呵也不教手下（七九）亂動了。

［小生笑介］敬亭講的有理。只因兵丁餓的急了。許他就糧內裏（八〇）。

亦是無可奈何之一著（八一）。

［丑］晚生遠來。也餓急了。元帥竟不問一聲兒。

［小生］我倒忘了。叫左右快擺飯（八二）來。

［丑摩腹介］好餓好餓。

［小生催介］可惡奴才。還不快擺。

［丑起介］等不的了。竟往內裏吃去罷。［向內行介］

［小生怒介］如何進我內裏。

［丑回顧介］餓的急了。

（七七）逍遙。自由の行動。

（七八）茶鍾。茶碗なり。

（七九）手下。自分の手と、左良玉の部下とにかけていふ、卽ち詞のしやれなり。

（八〇）內裏。宮城、南京のこと。

（八一）一著。一著の手段なり。

（八二）擺飯。膳立てすること。

〔小生〕餓的急了。就許俺進內裏麼。
〔丑笑介〕餓的急了。也不許進內裏。元帥竟也曉的哩。
〔小生大笑介〕句句譏誚俺的錯處。好箇舌辯之士。俺這帳下。倒少不得俺這箇人哩。
〔南園林好〕俺雖是江湖泛交。認得出滑稽曼老。這胸次包羅不少。能直諫。會旁嘲。
〔丑〕那裏那裏。只不過遊戲江湖。圖哺啜耳。
〔小生問介〕俺看敬亭。既與縉紳往來。必有絶技。正要請教。
〔丑〕晚生自幼失學。有何技藝。偶讀幾句野史。信口演說。曾蒙吳橋范大司馬。桐城何老相國。謬加賞贊。因而得交縉紳。實堪慚愧。
〔北沽美酒帶太平令〕俺讀些稗官詞。寄牢騷。稗官詞寄牢騷。對江山吃一斗苦松醪。小鼓兒顫杖輕敲。寸板兒輭手頻搖。一字字臣忠子孝。一聲聲龍吟虎嘯。快舌尖鋼刀出鞘。響喉嚨轟雷烈礮。呀似這般冷

(八三)少不得。かき得ず、ぜひともなくてならぬの意。
(八四)江湖泛交。深交の間柄に非ざるなり。
(八五)曼老。東方朔、字は曼倩、滑稽詼諧を善くし、漢の武帝に寵あり。
(八六)包羅。網羅に同じ、胸中の含蓄なり。
(八七)旁嘲。諷諭の意。
(八八)哺啜。喫飯のこと。
(八九)范大司馬。名は景文、字に夢章、萬暦の進士、兵部尚書となり、東閣大學士を兼ね、機務に參與す。崇禎の末、京城陷るに及んで、難に殉ず。
(九〇)何老相國。名は如寵、字は康侯、萬暦の進士、禮部尚書、武英殿大學士となる、卒して文端と謚す。
(九一)稗官。稗史小説のこと。
(九二)牢騷。不平なり、我が不平の情を稗史小説に託して談る意。
(九三)苦松醪。一種の苦酒なり、江山の勝景に對し、酒を飲んで不平を慰する意。
(九四)顫杖。年老いて手が顫へる意。
(九五)輭手。やさしき手。
(九六)龍吟虎嘯。戰爭の話。

嘲熱挑。用不著筆鈔墨描(九八)。勸英豪一盤錯帳(九九)速勾了。

[小生] 說的爽快。竟不知敬亭有此絕技。就留下楊衙齋。早晚領敎罷。

(淸江引) 從此談今論古日傾倒(一〇〇)。風雨(一〇一)開懷抱。偏那蘇張(一〇二)舌辯高。我的巧射驚羿奡(一〇三)。只愁那匝地烟塵何日掃。

[丑] 閒話多時。到底不知元帥向內移兵。有何主見。

[小生] 耿耿(一〇四)臣心。惟天可表(一〇五)。不須口勸。何用書責。

[小生] 臣心如水(一〇六)照淸霄。 [丑] 咫尺天顏路不遙。

[小生] 要與西南撐半壁(一〇七)。 [丑] 不須東看海門潮(一〇八)。

(九七)冷嘲熱挑。冷やかしたりおだてたりすること。

(九八)筆鈔墨描。文章に書きつゞるに及ばず。

(九九)錯帳云云。失計違算を帳消しにせよ、即南京に兵を移すことの、不心得なるを勸止する意。

(一〇〇)傾倒。感心すること。

(一〇一)風雨云云。風雨の夕、柳の說書を聞いて心中の鬱悶を開く意か。

(一〇二)蘇張。蘇秦張儀、共に辯者なり、借りて柳敬亭に擬す。

(一〇三)羿奡。羿は射を善くし、奡は舟を盪かすと論語に見ゆ。古の勇者なり、左良玉自ら云ふ。

(一〇四)耿耿。明かなる貌。

(一〇五)天可表。臣の心は、皇天后土の照鑑せらるるありとの意。

(一〇六)臣心如水。心の淸白なるに喩ふ、漢書鄭崇の傳に「臣門如市、臣心如水」の語あり。

(一〇七)半壁。西南半壁の地を支持する意、半壁は天下を二分してその一半をいふ。

(一〇八)海門潮。錢塘江の潮を見ること、卽ち左良玉の東下をいふなり。

第十二齣 辭院(一) 癸未十月

(一)辭院。秦淮の妓院を立ち退く場。

[末扮楊文驄冠帶上]

(西地錦) (二)錦繡東南列郡。英雄割據紛紛。而今還起(三)周郎恨。(四)江水向東奔。

下官楊文驄。昨奉熊司馬之命。託侯兄發書(五)寗南。阻其(六)北上。已遣柳敬亭連夜寄去。還怕投書未穩。一面奏聞朝廷。加他官爵(七)廕他子姪。又一面(八)知會各處督撫。及在城大小文武。齊集(九)清議堂。公同計議。助他粮餉。這也是不得已調停之法。下官與阮圓海。雖(一〇)罷閒流寓。都有(一一)傳單。只得早到。

[副淨扮阮大鋮冠帶上] (一二)黑白看成棋裏事。(一三)鬚眉扮作戲中人。

[見介] 龍友請了。今日會議軍情。既(一四)傳我們到此。也不可默默無言。

[末] 事體重大。我們廢員閒官。立不得主意。(一五)身到就是了。

[副淨] 說那裏話。

(啄木兒) 朝廷事。須認眞。太祖(一六)神京今未穩。莫漫愁(一七)鐵鎖船開。只怕有(一八)蕭牆人引。角聲鼓音城樓震。帆揚

(二) 錦繡。江南佳麗の地をいふ。
(三) 周郎。三國吳の周瑜なり。周瑜赤壁に曹操の兵を破り、而して竟に北方を恢復し得ざるを恨んで死せり。
(四) 江水向東。此度は左良玉の軍の東下をいふなり。
(五) 寗南。寗南侯左良玉。
(六) 北上。南京を經て北京へ上ること。
(七) 廕。廕官とて、父祖の功勞によりて官職に拜すること。
(八) 知會。通知なり。
(九) 清議堂。內閣堂の議事堂なり
(一〇) 罷閒。罷職にて閒散の身。
(一一) 傳單。呼出狀。
(一二) 黑白。善惡の爭、世局を棋局に譬ふるなり。
(一三) 鬚眉。かつらを付けて舞臺に上ること、亦現代を戲場に譬ふるなり。
(一四) 傳。呼び出すこと。
(一五) 身到。出席すれば足るの意
(一六) 神京。南京をいふ。
(一七) 鐵鎖。此の故事前出、船開は左軍の東下をいふ。
(一八) 蕭牆。內輪より內應する人あること、暗に侯朝宗等を指していふなり。論語季氏に「吾恐季孫之憂、不在顓臾、而在蕭牆之內也」とあり。

織飛江風順。明取金陵。有人私放門(一九)。

[末] 這話未確。且莫輕言。

[副淨] 小弟實有所聞。豈可不說。

[丑扮長班(二〇)上] 處處軍情緊。朝朝會議多。稟老爺。淮安漕撫(二一)史可法老爺。鳳陽督撫馬士英老爺倶到了。

[末・副淨出候介]

[外白鬚扮史可法淨禿鬚扮馬士英各冠帶上]

[末] 天下軍儲一線漕(二二)。無能空佩呂虔刀(二三)。

[淨] 長陵(二四)抔土關龍脈(二五)。愁絶烽煙(二六)搔二毛(二七)。

[末・副淨見各揖介]

[外問介] 本兵(二八)熊老先生爲何不到。

[丑稟介] 今日有旨(二九)。往江上點兵去了。

[淨] 這等又會議不成。如何是好。

(前腔)(外) 黃塵(三〇)起。王氣昏。羽扇(三一)難揮建業(三二)軍。幕府(三三)

(一九)私放門。內應をなすこと。
(二〇)長班。用人のこと。
(二一)漕撫。運河を管し、徵米漕糧を司る長官。
(二二)一線漕。一道の運河をいふ。
(二三)呂虔刀。晉の呂虔佩刀あり工人之を相して曰く、必ず三公に登るべしと、虔之を王祥に與ふ、祥薨ずるに臨みて更に之を王覽に授けて曰く、汝の後必ず興り、此の刀に稱ふに足らんと。
(二四)長陵抔土。明の太祖の陵の方角が風水を犯し、國の運命に關する意、抔土は陵墓のこと、漢の張釋之の言に出づ。
(二五)龍脈。地脈をいふ。風水說による。
(二六)烽烟。戰亂を報ずる烽火。
(二七)二毛。兩毛の義にて、胡麻鹽頭なり。
(二八)本兵。兵部尙書。
(二九)旨。朝旨、官令のこと。
(三〇)黃塵。戰亂のこと。
(三一)羽扇。軍師の執る所、此の句當時軍師共の人無きを歎ずるなり。
(三二)建業。南京の古名。
(三三)幕府山、五馬渡。共に南京の地名。

山。蠟檄(三四)星馳。五馬渡。樓船飛滾(三五)。江東應レ須二夷吾(三六)鎭一。淸(三七)談怎消二南朝恨一。少不レ得努力。同捐二衰病身一。

[末] 老先生不レ必二深憂一。左良玉係二侯司徒舊卒一。昨已發レ書勸止。料無レ不レ從者。

[外] 學生亦聞二此擧一。雖レ出二熊司馬之意一。實皆年兄(三八)之功也。

[副淨] 這倒不レ知(三九)。只聞左兵之來。實有二暗裏勾レ之者一。

[外] 是那箇。

[副淨] 就是敝同年(四〇)侯恂之子。侯方域。

[外] 他也是敝世兄(四一)。在二復社中一。錚錚(四二)有レ聲。豈肯爲レ此。

[副淨] 老公祖(四三)不レ知。他與二左良玉一相交最密。常有二私書往來一。若不レ早除二此人一。將來必爲二內應一。

[淨] 說的有レ理。何惜二一人一。致レ陷二滿城(四四)之命一乎。

[外] 這也是莫レ須レ有之事。況阮老先生。罷閑之人。國家大事。也不レ可二亂講一。[別介] 請了。正是邪人無二正論一。公議總私情。[下]

[副淨指恨介] [向レ淨介] 怎麼史道鄰就拂レ衣而去。小弟之言。鑿(四五)

(三四) 蠟檄。蠟にて封じたる檄文。

(三五) 飛滾。流を下つて駛るなり。

(三六) 夷吾。管仲をいふ。晉の南渡するや、周顗は王導を見て歎じて曰く「江左に管夷吾あり」と。

(三七) 淸談。晉の時淸談流行し、諸名士國事を憂へず、國勢日に傾く。言ふ意は、南京を守るには管仲の如き名將なかるべからず、然るに諸公國を憂へず、優遊自適せば復南朝の二の舞を踏み、國を亡すに至るべしと。

(三八) 年兄。同年に進士に及第したるものを呼んでいふ。

(三九) 這倒不知。皆さんは倒つて御承知なしとの意。譏口なり

(四〇) 敝同年。我れと同年の進士の意。

(四一) 敝世兄。史可法は侯恂の門生なり、故に朝宗を呼んで世兄といふ。

(四二) 錚錚。勝れたるもの、所謂鐵中の錚錚なり。

(四三) 老公祖。敬稱。

(四四) 滿城。滿城の人なり。

(四五) 鑿鑿。議論のきちんとあたること。

鑿有據。聞得前日。還託柳麻子去下私書的。
[末] 這太屈彼了。敬亭之去。小弟所使。寫書之時。小弟在旁。倒斷
他寫的懇切。怎反疑起他來。
[副淨] 龍友不知。那書中都有字眼暗號。人那裏曉的。
[淨點頭介] 是呀。這樣人該殺的。小弟回去。即著人訪拏。[向末
介] 老妹丈就此同行罷。
[末] 請舅翁先行一步。小弟隨後就來。
[副淨向淨介] 小弟與令妹丈不曾同胞。常道及老公祖垂念。難
得今日會著。小弟有許多心事。要爲竟夕之談。不知可否。
[淨] 久荷高雅。正要請教。[同下]
[末] 這事那裏說起。侯兄之素行。雖未深知。只論寫書一事。呵。
(三段子) 這寃怎伸。硬疊成曾參殺人。這恨怎吞。强
書爲陳恆弑君。不免報他一信。叫他趁早躲避。[行介]
眠香占花風流陣。今宵正倚薰籠睏。
那知打散鴛鴦金彈狠來。此李家別院。不免叫門。[敲門介]

(四六) 屈。寃屈。無實の罪なり。
(四七) 字眼暗號。字眼といふも亦暗號のことなり。
(四八) 先行一步。お先きへ一足といふことなり。
(四九) 竟夕之談。夜通し語ること。
(五〇) 高雅。高情の意なり。
(五一) 那裏說起。どうしてそんなことがいへようかの意。
(五二) 曾參殺人。曾參は孔子の門人にして、德行に秀で、孝を以て聞ゆ、人ありその母に報じて曰く「曾參人を殺せり」と、母機を織りて自若たり、三度告ぐるに及んで、母機を下りて走れりといふ。
(五三) 陳恆弑君。陳恆は齊の大夫、其の君簡公を弑せり、然れども實は恆の手を下ししに非ず。
(五四) 眠香。妓樓に宿すること。
(五五) 薰籠。猶ほ炬燵といふが如し、白樂天の詩に「斜倚薰籠坐到明」の句あり。
(五六) 打散鴛鴦。鴛鴦は夫婦に喩ふ、金彈にて鴛鴦を打ち散らすは、ひどくむごいことなり。

[內吹唱(五八)介]
[淨扮蘇崑生上] 是那箇。
[末] 快快開門。
[淨開門見介] 原來是楊老爺。天色已晚。還來閒遊。
[末認介] 倆是蘇崑老。[問介] 侯兄在那裏。
[淨] 今日香君學完一套(五九)新曲。都在樓上聽他演腔(六〇)。
[末] 快請下樓。
[淨入喚介] [小旦・生・旦出介]
[生] 濃情人帶酒。寒夜帳籠花(六一)。楊兄高興。也來消夜(六二)。
[末] 兄還不知。有天大(六三)禍事來尋倆了。
[生] 有何禍事。如此相嚇。
[末] 今日清議堂議事。阮圓海對著大衆。說倆與寧南有舊。常通
私書。將為內應。那些當事(六四)諸公。俱有拏倆之意。
[生驚介] 我與阮圓海素無深讐。爲何下這毒手(六五)。
[末] 想因卻奩(六六)一事。太激烈了。故此老羞(六七)變怒耳。

(五七) 叫門。案內を乞ふこと。
(五八) 吹唱。笛を吹き歌を唱ふこと。
(五九) 一套。一本の意。
(六〇) 演腔。歌のおさらひ。
(六一) 花。美人に喩ふ。
(六二) 消夜。夜を明かすこと。
(六三) 天大。天の如く大なる意。
(六四) 當事。當局に同じ。
(六五) 毒手。非常手段。
(六六) 卻奩。嫁入仕度を斷りしこと。前に詳かなり。
(六七) 老羞。舊時の恥辱が發して怒となる意。

〔小旦〕事不宜遲。趁早高飛遠遁。不要連累別人(六八)。
〔生〕說的有理。〔愁介〕只是燕爾新婚(六九)。如何捨得。
〔旦正色(七〇)介〕官人(七一)素以豪傑自命。爲何學兒女子態。
〔生〕是是。但不知那裏去好。
〔滴溜子〕雙親在。雙親在。信音未準。烽烟起。烽烟起。梓桑(七二)半損。欲歸歸途誰問。天涯到處迷。將身怎隱。岐(七三)路窮途。天暗地昏。
〔末〕不必著忙。小弟倒有個算計。
〔生〕請敎。
〔末〕會議之時。漕撫史可法。鳳撫(七四)馬舍舅。俱在坐。舍舅語言甚不(七五)相爲。全虧史公一力分豁(七六)。且說與尊府(七七)原有世誼的。
〔生想介〕是是。史道鄰是家父門生。
〔末〕這等何不隨他到淮。再候家信。
〔生〕妙妙。多謝指引了。

(六八)別人。香君等を指していふ。
(六九)爾新婚。新婚の宴會、詩經に「如兄如弟、燕爾新婚」とあり。
(七〇)正色。あらたまること。
(七一)官人。だんなさまといふが如し。
(七二)梓桑。故鄕のこと。
(七三)岐路窮途。途方にくれること。
(七四)鳳撫。鳳陽督撫の略。
(七五)不相爲。爾の爲めにならず。
(七六)分豁。辯解分疏するなり。
(七七)尊府。御宅といふが如し。

[旦] 待奴家收拾行裝。[旦束裝介](七八)

(前腔) 歡娛事。歡娛事。兩心(七九)自忖。生離苦。生離苦。且將恨忍。結成眉峯(八〇)一寸。香沾翠被池(八一)。重重束緊(八二)。藥裹巾箱(八三)。都帶淚痕。

[丑上挑行李介]

[生別旦介] 暫此分別。後會不遠。

[旦彈淚介] 滿地烟塵(八四)。重來亦未可必也。

(哭想思) 離合悲歡分一瞬。後會期無憑准。

[小旦] 怕有巡兵蹤跡。快行一步罷。

[生] 吹散俺西風太緊。停一刻無人肯。

[生] 但不知史漕撫寓在那廂。

[淨] 聞他來京公幹(八五)。常寓市隱園。待我送官人去。

[生] 這等多謝。[生・淨・丑急下]

[小旦] 這椿禍事都從楊老爺起的。也還求楊老爺歸結。明日果(八六)

(七八)束裝。荷造りのこと。

(七九)兩心。侯生と香君。

(八〇)眉峯一寸。愁眉を鎖すこと。

(八一)翠被池。夜着にだぶだぶと香水をふりかけろ意か。

(八二)束緊。かたくしばろこと。

(八三)巾箱。手文庫。

(八四)滿地烟塵。實に斷腸の意、此の語讖を爲し、侯生香君と終に相見ろの期なし。

(八五)公幹。公用なり。

(八六)果來云云。果して人を拿へに來たならば、何といたして宜しからうかの意。

來挐ㇾ人。作ニ何計較一。
[末] 貞娘放心。侯郎既去。都與ㇾ爾無ㇾ干(八七)了。
[末] 人生聚散事難ㇾ論。[旦] 酒盡歌終被(ヒ)尚温。
[小旦] 獨照(八八)ニ花枝一眠不ㇾ穩。[末] 來朝風雨(八九)掩ニ重門一。

(八七) 無干。まるで關係なしの意。
(八八) 照花枝。照は對の意なり、花枝は蓋し香君をいふ。
(八九) 風雨。花にあらしの意、異變をいふ。

第十三齣　哭主(一)　甲申三月

[副淨扮ニ旗牌官(二)一上] 漢陽烟樹隔ニ江濱一。影裏(三)青山畫裏人。
可ㇾ惜城西(四)佳絕處。朝朝遮斷馬頭塵(五)。
在下(ワレハ)甯南帥府。一箇(ヒトリノ)旗牌官的便是(トイフモノナリ)。俺元帥收ニ復武昌一。功封(エテ)ニ侯爵一。昨日又奉ニ新恩一。加ニ了太傅之銜(六)一。少爺(ワカ)左夢庚。亦挂ニ總兵之印一。特差(ツカハシ)ニ巡(七)按御史黄澍老爺一到ㇾ府宣ㇾ旨。今日九江督撫袁繼咸老爺。又解(オクリ)ニ粮三十船一。親來給發(八)。元帥大喜。命ㇾ俺設ニ宴黄鶴樓一。請ニ兩位老爺(フタリノトノガタ)一飲ㇾ酒看(ナガメントス)ㇾ江。[望介] 遙見晴川(九)樹底。芳草洲邊。萬姓歡歌。三軍嬉笑。

(一) 哭主。君主崩御の場。
(二) 旗牌官。傳令使。
(三) 影裏。畫裏に同じ。
(四) 城西佳絕處。黄鶴樓の邊をいふ。
(五) 馬頭塵。戰塵なり。
(六) 銜。官に同じ。
(七) 巡按御史。地方を巡行按察する監察官。
(八) 給發。支給するなり。
(九) 晴川樹底。崔灝の詩に「晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲」の句あり。

好一段太平景象也。遠遠喝道之聲。元帥將到。不免設起席來。
〔臺上挂黃鶴樓匾(一〇)〕
〔副淨設席安牀介〕〔雜扮軍校旗仗鼓吹引導(一一)〕
〔小生扮左良玉戎裝上〕
(聲聲慢) 逐人春色。入眼晴光。連江芳草青青。百尺(一二)樓高。吹笛落梅(一三)風景。領著花間小乘(一四)。載行廚。帶緩衣輕。便笑咱將軍好武。也愛儒生(一五)。
咱家左良玉。今日設宴黃鶴樓。請袁・黃兩公飲酒看江。只得早候
〔吩咐介〕 大小軍卒。樓下伺候。〔衆應下〕〔作登樓介〕
三春雲物(一六)歸胸次。萬里風烟到眼中。
〔望介〕 俺看浩浩洞庭。蒼蒼雲夢(一七)。控西南之險。當江漢之衝。俺左良玉鎮此名邦。好不壯哉。〔坐呼介〕 旗牌官何在。
〔副淨跪介〕 有。
〔小生〕 酒席齊備不曾。

(一〇) 匾。 扁額なり。
(一一) 引導。 先驅なり。
(一二) 百尺樓。 黃鶴樓のこと。
(一三) 落梅。 笛曲に梅花落あり。
(一四) 小乘。 轎車なり。
(一五) 儒生。 文雅のこと、云ふは演武練兵の外に、文雅風流の遊を好む意。
(一六) 雲物。 景色に同じ、句の意は樓に登りて遠く四方を眺め、心のせいせいしたること。
(一七) 雲夢。 大澤の名、湖北に在り、方八九百里、孟浩然の臨洞庭の詩に「氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城」の句あり。

〔副淨〕齊備多時了。
〔小生〕怎麼兩位老爺還不見到。
〔副淨〕連請(一八)數次。袁老爺正在江岸盤糧。黃老爺又往龍華寺拜客。大約傍晚纔來。
〔小生〕在此久候。豈不困倦。叫左右速接柳相公上樓。閒談撥悶。
〔雜跪稟介〕柳相公見在樓下。
〔小生〕快請。
〔雜請介〕
〔丑扮柳敬亭上〕氣呑(一九)雲夢澤。聲撼岳陽樓。〔見介〕
〔小生〕敬亭爲何早來了。
〔丑〕晚生知道元帥悶坐。特來奉陪的。
〔小生〕這也奇了。你如何曉得。
〔丑〕常言秀才(二〇)會課。點燈告坐。天生文官(二一)。再不能爽快(二二)的。
〔小生笑介〕說的有理。〔指介〕你看天纔午轉(二三)。幾時等到點燈也。

(一八)連請。催促のこと。

(一九)氣呑云云。前に引ける孟浩然の詩句を取りて字を改めたる處に、柳敬老の面目躍如たり。

(二〇)秀才。儒生のこと、儒生は萬事に優暢なり、その文會は點燈頃に漸く集るといふなり。
(二一)天生文官。袁黃の兩人は科擧出身なるを以て云ふなり。
(二二)爽快。はきはきすること。
(二三)午轉。午過ぎ。

[丑] 若不嫌聒噪呵。把昨晚說的秦叔寶見姑娘。再接上一回罷。
[小生] 極妙了。[問介] 帶有鼓板麼。
[丑] 自古官不離印。貨不離身。老漢管著做甚的。[取出鼓板介]
[小生] 叫左右泡開岕片。安下胡牀。咱要紗帽隱囊。清談消遣哩。
[雜] 設牀泡茶。小生更衣坐。雜扶背修養介]
[丑] 旁坐敲鼓板說書介] 大江滾滾浪東流。淘盡興亡古渡頭。
屈指英雄無半箇。從來遺恨是荊州。
按下新詩。還提舊話。且說人生最難得的。是亂離之後。骨肉重逢。總是地北天南。時移物換。經幾番凶荒戰鬪。怎免得梗泛萍漂。可喜秦叔寶。解到羅公帥府。枷鎖連身。正在候審。遇著嫡親姑娘。捲簾下階。抱頭大哭。當時換了新衣。設席款待。一箇候死的囚徒。登時上了青天。這就叫運去黃金減價。時來頑鐵生光。[拍醒木介]
[小生] 掩淚介] 咱家也都經過了。
[丑] 再說那羅公。問及叔寶的武藝。滿心歡喜。特地要誇其本領。即日放徽傳操。下了教場。雄兵十萬。雁翅排開。羅公獨坐當中。一

(二四) 官。役人、役人は官印を離さずとの意。
(二五) 貨。商賣道具、商人は常に商品を持てる意。
(二六) 岕片。即ち岕茶、浙江長興縣より產する銘茶。又羅氏の居る所なるを以て羅岕とも名づく。
(二七) 胡牀。椅子の類。
(二八) 隱囊。隱几の類、脇息の如し。
(二九) 大江滾滾。蘇東坡の赤壁懷古の詞に「大江東去、浪淘盡、千古風流人物」との句あり。淘盡は洗盡の意。
(三〇) 荊州。三國の時に在りて荊州は吳蜀との爭の衝點なりき。
(三一) 按下。今唱へた詩はやめにしての意。
(三二) 梗泛萍漂。流離漂泊する意。
(三三) 秦叔寶。名は瓊、唐の太宗に仕へ、馬車總管に拜せられ、剛勇を以て聞ゆ。
(三四) 羅公。羅士信、唐の高祖に從ひ、陝西道行軍總管となる。
(三五) 操。演武のこと。
(三六) 教場。演武道場なり。
(三七) 雁翅。兩邊に竝ぶこと。

呼百諾。掌著生殺之權。秦叔寶跕在旁邊。(三八)點頭贊歎。口裏不言。心中暗道。大丈夫定當如此。［拍醒木介］

［小生作驕態(三九)笑介］ 俺左良玉也不枉爲人一世矣。

［丑］ 那羅公眼看叔寶。高聲問道。秦瓊。看你身材高大。可曾學些武藝麼。叔寶慌忙跪地。應答如流。小人會使雙鐧(四〇)。羅公卽命家人。將自己用的兩條銀鐧。擡將下來。那兩條銀鐧共重六十八斤。比叔寶所用鐵鐧。輕小一半。叔寶是用過重鐧的人。接在手中。如同無物。跳下階來。使盡身法(四一)。左輪右舞(四二)。恰似玉蟒纏身。銀龍護體。玉蟒纏身。萬道毫光臺下落。銀龍護體。一輪月影(四三)面前懸。羅公在中軍帳裏。大聲喝采道。好呀。那十萬雄兵。一齊答應。［作賊介］ 如同山崩雷響。十里皆聞。

［拍醒木介］

［小生照鏡鑷(四四)鬢介］ 俺左良玉。立功邊塞。萬夫不當。也是天下一箇好健兒。如今白髮漸生。殺賊未盡。好不恨也。

［副淨上］ 稟元帥爺。兩位老爺俱到樓了。

(三八) 點頭。うなづくこと。

(三九) 驕態。得意の樣子。

(四〇) 雙鐧。二本の棒なり。

(四一) 身法。棒の形をいふ。

(四二) 左輪右舞。左右に鐧を振り廻すこと、以下玉蟒、銀龍凡て叔寶が棒を用ふるの妙なるを形容す。

(四三) 月影。銀棒を圓形に振り廻はすこと。

(四四) 鑷鬢。白鬢を拔くこと、若返る意なり。

〔丑暗(ヒソカニ)下〕

〔小生換二冠帶一雜撤レ牀排レ席介〕〔外扮二袁繼咸一末扮二黃澍一冠帶喝道(サキバラヒ)上〕

〔外〕 長湖落日氣蒼茫。 黃鶴樓高望二故鄉一。

〔末〕 吹(四五)レ笛仙人稱二地主一。 臨レ風把レ酒喜洋洋。

〔小生迎揖介〕 二位(フタリノ)老先生。俯二臨敝鎮一。曷(ナンゾタヘン)勝二光榮一。聊設二杯酒一。同看二春江一。

〔外・末〕 久欽二威望一。喜レ近二節(四六)麾一。高樓盛設(四七)。大快二生平一。〔安レ席坐斟レ酒欲レ飲介〕

〔淨扮二塘(四八)報人一急上〕 忙(イソガハシク)將二覆(四九)地翻天事一。 報二與勤王救主人一。稟二元帥爺一。不(タイ)好(ヘン)了(ナリ)。不好了。

〔衆驚起介〕 有二甚麼緊急軍情一。這等(カクノゴトク)喊叫(サケブヤ)。

〔淨急白介〕 稟二元帥爺一。大夥(オホゼイノ)流賊北犯。層層圍(カコム)二住神京一。三(五〇)天不レ見二救援兵一。暗把二城門一開動。放レ火焚二燒宮闕一。持レ刀殺二害生靈一。〔拍レ地介〕可レ憐聖主好崇禎。〔哭說介〕 縊二死煤(五一)山樹頂一。

(四五) 吹笛仙人。呂洞賓の故事、常に黃鶴樓に來りて酒を飲み笛を吹きしといふ。

(四六) 近節麾。元帥なる故にいふ。御目にかかること。

(四七) 盛設。盛宴なり。

(四八) 塘報。早馬の使なり。

(四九) 覆地翻天。國家の滅亡をいふ。

(五〇) 三天。三日に同じ。

(五一) 煤山。宮城の後苑中に在り、一に萬歲山といふ、元時築城の際、煤を積んで山を起し、以て籠城の用に備へたりといふ。

〔衆驚問介〕有這等事。是那一日來。

〔淨喘介〕就是這這這三月十九日。

〔衆望北叩頭大哭介〕

〔小生起搓手跳哭介〕我的聖上呀。我的(五二)崇禎主子呀。我的(五三)大行皇帝呀。孤臣左良玉。遠在邊方。不能(五四)一旅勤王。罪該萬死了。

〔勝如花〕高皇帝在(五五)九京。不管亡家(五六)破鼎。那知他聖子神孫。反不如(五七)飄蓬斷梗。十七年(五八)憂國如病。呼不應天靈祖靈。調不來親兵救兵。(五九)白練無情。送君王一命。(六〇)傷心煞煤山私幸。獨殉了社稷蒼生。獨殉了社稷蒼生。

〔衆又大哭介〕

〔外搖手喊介〕且莫舉哀。還有大事相商。

〔小生〕有何大事。

〔外〕既失北京。江山無主。將軍若不早建義旗。頃刻亂生。如何安

(五二)崇禎主子。思宗なり、崇禎は其の年號。

(五三)大行皇帝。皇帝崩じて、諡號未だ定まらざる間、之を大行皇帝といふ。

(五四)一旅。古は五百人を旅となす。

(五五)九京。九天に同じ。

(五六)破鼎。亡國の意。

(五七)飄蓬斷梗。流寓漂泊の意。

(五八)憂國如病。非常に國家を憂ふること。

(五九)白練。白練の紐にて首を縊れり。

(六〇)傷心煞。煞は殺に同じ、意を強むる語助。

撫。

〔末〕正是。〔指介〕這江漢荊襄。亦是西南半壁。萬一失守。恢復無及矣。

〔小生〕小弟濫握兵權。實難辭責。也須兩公努力。共保邊疆。

〔外・末〕敢不從事。(六一)

〔小生〕既然如此。大家換了白衣。(六二)對著大行皇帝在天之靈。慟哭拜盟一番。〔喚介〕左右可曾備下縗衣(六三)麼。

〔副淨〕一時不能備齊。暫借附近民家素衣三領。白布三條。(六四)

〔小生〕也罷。且穿戴起來。〔吩咐介〕大小三軍亦各隨拜。

〔小生・外・末穿衣裹(六五)布介〕

〔領衆齊拜擧哀介〕我的先帝呀。

(前腔)〔合〕宮車出。廟社傾。破碎中原費整。(六六)養文臣(六七)帷幄無謀。養武夫疆場不猛。到今日山殘水賸。對大江月明浪明。滿樓頭呼聲哭聲。〔又哭介〕這恨怎平。

(六一)從事。力を盡すこと。
(六二)白衣。喪服なり。
(六三)縗衣。喪服の名。
(六四)白布三條。頭を裹む白布なり。
(六五)裹布。布にて頭を裹むなり。
(六六)整。整頓すること。
(六七)文臣云云。文武の臣を平生より養ひ置きしが、いざといふ時に、少しも役に立たざりしを歎ずるなり。

有皇天作證。從今後戮力併命。報國讐早復神京。報國讐早復神京。

[小生] 我等拜盟之後義同兄弟。臨侯(六八)督師。仲霖(六九)監軍。我左崑山。操兵練馬。死守邊方。倘有太子諸王。中興定鼎(七〇)。那時勤王北上。恢復中原。也不負今日一番義擧。

[外・末] 領教(七一)了。

[副淨稟介] 稟元帥。滿城喧譁。似有變動之意。快請下樓。安撫民心。[俱下樓介]

[小生] 二位要向那裏去。

[外] 小弟還回九江。

[末] 小弟要到襄陽。

[小生] 這等且分手。請了。[別介]

[小生呼介] 轉來。若有國家要事。還望到此公議。

[外・末] 但寄片紙(七二)。無不奔赴。請了。[外・末下]

[小生] 呵呀呀。不料今夜天翻地覆。嚇死(七三)俺也。

(六八) 臨侯。袁繼咸の字。

(六九) 仲霖。黃澍の字。

(七〇) 定鼎。國を建つる意。

(七一) 領教。仰せに從ふ意。

(七二) 片紙。手紙のこと。

(七三) 嚇死。驚き氣絕せしむる意。

飛花送酒不曾擎(七四)。片語傳來滿座驚。
黃鶴樓中人哭罷。江昏月暗夜三更。

第十四齣　阻奸(一)　甲申四月

〔生上〕

(遶地遊)　飄飄家舍。怎把平安(二)寫。哭蒼天滿喉新血。國讐未雪。卿心難說。把閒情(三)丟開後些。

小生侯方域。自去冬倉皇避禍。夜投史公。隨到淮安漕署(四)。不覺半載。昨因南大司馬(五)熊公內召(六)。史公即補其缺(七)。小生又隨渡江。虧他重俺才學。待同骨肉(八)。正思移家金陵。不料南北隔絕。目今議立(九)紛紛。尙無定局(一〇)。好生愁悶。且候史公回衙(一一)。一問消息。〔暫下〕

〔外扮史可法憂容。丑扮長班隨上〕

(三臺令)　山河今日崩塌(一二)。白面(一三)談兵掉舌(一四)。奕局事堪

(七四)擎。杯を擧ぐること、まだ宴會の始まらぬ中に、崇禎帝の凶聞が傳はりて滿座の者が驚きしこと。

(一)阻奸。奸謀を阻止する場。
(二)平安。平安の家信、家は遠方にして書を寄せ難き意なり。
(三)閒情。風流韻事、李香君との關係をいふ。
(四)漕署。漕督衙門なり。
(五)南大司馬。南京の兵部尙書。
(六)內召。宮中に召されしこと。
(七)補其缺。兵部尙書となる。
(八)骨肉。兄弟に同じ。
(九)議立。天子を立つることを議するなり。
(一〇)無定局。廟議の定まらざること。
(一一)衙。衙門。
(一二)山河今日云云。皇帝の崩御をいふ。
(一三)白面。白面の書生、馬士英、阮大鋮の徒をいふ。

嗟。望ニ長安(一五)ニ誰家傳舍。

下官(ワレハ)史可法。表字道鄰。本貫河南。寄ニ籍燕京ニ。自ニ崇禎辛未(一六)ニ叨(ミダリニ)中ニ進士ニ。便値ニ中原多故ニ。內爲ニ曹郎(一七)ニ。外作ニ監司(一八)ニ。歇歷(一九)(ヤウレキ)十年。不ニ曾一日安ニ枕。今由ニ淮安漕撫ニ。陞ニ補南京兵部尙書ニ。那知到レ任一月。遭ニ此大變(二〇)ニ。萬死無レ裨(タスクル)。一籌(二一)莫レ展。幸虧(ヨツテ)長江天險ニ。護ニ此留都ニ。但一月無レ君。人心皇皇(二二)。每日議レ立議レ迎。全無ニ成說ニ。今早操ニ兵江上ニ。探ニ得北信(二三)ニ。不レ免(イデヤ)請ニ出侯兄ニ。大家快談(ミナミナハヤクカタラン)。

〔丑〕 侯爺(ドノイザタマヘ)有レ請。

〔生上見介〕 請ニ問老先生ニ。北信若何。

〔外〕 今日得ニ一喜信ニ。說(イフ)北京雖レ失。聖上無レ恙早已航レ海而南。太子亦問道東奔。未レ知ニ果否ニ。

〔生〕 果然(ハタシテ)如レ此。蒼生之福也。

〔小生扮ニ差役(二四)ニ上〕 朝廷無ニ詔旨ニ。將相有ニ傳聞ニ。〔到レ門介〕 門上(モンニ)有レ人(ヒトアリヤ)麼。

〔丑問介〕 那裏來(イツコヨリキタレルモノゾ)的。

(一四) 奕局。 時局に喩ふ。
(一五) 長安。 都をいふ。此の句遠く京師を望んで、天子の未だ定まらざるを歎ずる意。
(一六) 崇禎辛未。 崇禎四年。
(一七) 曹郎。 官署の屬官。
(一八) 監司。 州郡を監察する官。
(一九) 歇歷。 官途の經歷。
(二〇) 大變。 崇禎帝の崩御をいふ
(二一) 一籌云云。 籌は策に同じ、何の方法もない。
(二二) 人心皇皇。 皇は惶に通ず、狼狽の意なり。
(二三) 北信。 北方の消息。
(二四) 差役。 用人なり。

〔小生〕是鳳撫衙門來的。有馬老爺候札。(二五)卽討回書。

〔丑〕待我傳上去。〔入見介〕稟老爺。鳳撫馬老爺差人投書。

〔外拆看皺眉介〕這箇馬瑤草。又講甚麼迎立之事了。

〔高陽臺〕淸議堂中。三番公會。攢眉(二六)仰屋蹴鞾。相對長吁。低頭不語如呆。堪嗟。軍國大事非輕擧。俺縱有廟謨(二七)難說。這來書謀迎議立。邀功(二八)情切。

〔向生介〕看他書中意思。屬意福王。(二九)又說聖上確確縊死煤山。太子奔逃無蹤。若果如此。俺縱不依他(三〇)。也竟自擧行了。況且昭穆倫次。(三一)立福王亦無大差。罷罷罷。答他回書。明日會稿。(三二)一同列名便了。

〔生〕老先生所言差矣。福王分藩敝鄕。(三三)晩生知之最詳。斷斷立不得。

〔外〕如何立不得。

〔生〕他有三大罪。人人俱知。

〔外〕那三大罪。

(二五)候札。時候見舞の手紙。

(二六)攢眉。以下思案の貌なり。

(二七)廟謨。政治上の意見をいふ

(二八)邀功情。卽ち射倖心なり。

(二九)福王。後に詳出せり。

(三〇)不依地。他の說に贊成せざるも、彼は實行するに至るべし。

(三一)昭穆倫次。宗廟に左昭、右穆あり、世代の順なり、此にては王族の登時に、順序あるべきを云へり。

(三二)會稿。會合の上稿を起すこと。

(三三)敝鄕。福王河南に封ぜらる。卽ち朝宗の故鄕なり。

〔生〕待晚生數來。

〔前腔〕福邸藩王(三四)。神宗驕子(三五)。母妃鄭氏淫邪。當日謀害太子。欲行自立。若無調護良臣。幾將神器奪竊。

〔外〕此一罪卻也不小。〔問介〕還有那一罪。

〔生〕驕奢。盈裝滿載分封去。把內府金錢偸竭。昨日寇逼河南。竟不捨一文助餉。以致國破身亡。滿宮財寶。徒飽賊囊。

〔外〕這也算的一大罪。〔問介〕那第三大罪呢。

〔生〕這一大罪。就是現今世子德昌王(三六)。父死賊手。暴屍未葬。竟忍(三七)心遠避。還乘離亂之時。納民妻女。

這君德全虧盡喪。怎圖皇業。

〔外〕說的一些不差。果然是三大罪。

〔生〕不特此也。還有五不可立(三八)。

〔外〕怎麼又有五不可立。

〔前腔〕〔生〕第一件車駕存亡。傳聞不一。天(三九)無二日

(三四)福邸藩王。卽ち福王、弘光帝の父をいふ。

(三五)驕子。道樂息子の意。

(三六)世子德昌王。卽ち弘光帝となる。

(三七)忍心。忍ぶべからざるを忍ぶなり。

(三八)不可立。帝位に卽くべからざること。

(三九)天無二日同協。孟子に「天無二日、民無二王」といへり。

同協。第二件。聖上果殉社稷。尚有太子監國(四〇)。爲何。明棄儲君。翻尋枝葉旁牒(四一)。第三件。這中興之主。原不必拘定倫次的分別。中興定霸如光武。要訪取出群英傑。第四件。怕强藩。乘機保立。第五件。又恐小人呀。將擁戴功挾。

[外] 是是。世兄高見。慮的深遠。前日見副使(四二)雷縯祚・禮部周鑣。都有此論。但不及這番透徹耳。就煩世兄。把這三大罪。五不可立之論寫書囘他便了。

[生] 遵命。[點燭寫書介]

[副淨扮阮大鋮雜扮家僮提燈上]

[副淨] 須將奇貨(四三)歸吾手。莫把新功讓別人。

下官阮大鋮。潛往江浦(四四)。尋著福王。連夜囘來。與馬士英倡議迎立。只怕本兵史可法。臨時掣肘。今日修書相商。還恐不妥(四五)。故此昏夜叩門。與他細講。

[見小生(四六)介] 俺早來下書。如何還不囘去。

(四〇) 監國。攝政なり。

(四一) 枝葉旁牒。諸牒の上の旁系なり。

(四二) 副使。樞密副使。

(四三) 奇貨。よき代物といふ語、呂不韋邯鄲に在り、秦の公子を見ていふ「奇貨居くべし」と。

(四四) 江浦。江蘇省淮安府淸江浦なり。

(四五) 不妥。手紙では不充分なりとの意。

(四六) 小生。馬士英の使者。

〔小生〕等候回書。不見發出。〔喜介〕阮老爺來的正好。替小人催一催。
〔雜〕門上大叔那裏。
〔丑〕是那箇。
〔副淨見作足恭介〕煩位下通報一聲。說褲子襠裏阮求見老爺。
〔丑混介〕褲子襠裏軟。這可未必。常言十箇鬍子九箇騷。待我摸一摸果然軟不軟。
〔副淨〕休得取笑。快些方便罷。
〔丑〕天色已晚。老爺安歇了。怎敢亂傳。
〔副淨〕有要話商議。定求一見的。
〔丑〕待我傳上去。〔進稟介〕稟老爺。有褲子襠裏阮。到門求見。
〔外〕是那箇姓阮的。
〔生〕在褲子襠裏住。自然是阮鬍子了。
〔外〕如此昏夜。他來何幹。
〔生〕不消說。又是講迎立之事了。

(四七) 大叔。大哥といふに同じ、用人に對する敬語なり。
(四八) 足恭。鄭重に過ぐること。
(四九) 褲子襠。南京の衙名。又褲子はづぼんをいふ。
(五〇) 軟。音阮に通ず、笑話なり。
(五一) 鬍子。男子のこと。
(五二) 騷。好色の意なり。
(五三) 何幹。何用かの意。
(五四) 不消。不要に同じ。

[外] 去年在清議堂。誣害世兄的便是他。這人原是魏黨。眞正小人。不必理他。叫長班回他罷了。

[丑出怒介] 我說夜晚了。不便相會。果然惹箇沒趣(五五)。請回罷。

[副淨拍丑肩介] 位下是極在行的(五六)。怎不曉得。夜晚來會。纔說的是極有趣的(五七)話哩。那靑天白日。都是些掃帳兒(五八)。

[丑] 儞老說的有理。事成之後。隨封(五九)都要雙分(六〇)的。

[副淨] 不消說。還要加厚(六一)些。

[丑] 旣是這等。待我再傳。[進稟介] 稟老爺。姓阮的定求一見。要說極有趣的話。

[外] 啶放屁(六二)。國破家亡之時。還有甚麽趣話說。快快趕出。閉上宅門。

[丑] 鳳撫回書。尙未打發哩。

[生] 書已寫就。求老先生過目(六三)。

[外讀介]

(前腔) 二祖列宗(六四)。經營垂創。吾皇辛苦力竭。一旦傾

(五五) 沒趣。有趣の反對、不興といふに同じ。
(五六) 在行的。行は店の意、老功者をいふ。
(五七) 有趣。有利の意なり。
(五八) 掃帳兒。掃興に同じ、日中ではおもしろからざる意なり。
(五九) 隨封。進物のこと。
(六〇) 雙分。二人で分けること。
(六一) 加厚。餘計に加へること。
(六二) 放屁。罵る語なり、馬鹿をいふなの意。
(六三) 過目。目を通すこと。
(六四) 二祖列宗。祖宗をいふ。

移。誰能重續滅絕。詳列。福藩，罪案三椿(六五)大。五不可，勢局當歇(六六)。再尋求賢宗雅望。去留先決(六七)。

〔外〕寫的明白。料他也不敢妄動了。〔吩咐介〕就交與鳳撫來人。早閉宅門。不許再來囉唕(六八)。

〔起介〕正是江上孤臣生白髮(六九)。

〔生〕燈前旅客罷冰絃(七〇)。〔外生下〕

〔丑出呼介〕馬老爺差人哩。

〔小生〕有。

〔丑〕領了回書(七一)。快快出去。我要閉門哩。

〔小生接書介〕還有阮老爺要見。怎麼就閉門。

〔副淨向丑介〕正是我方纔央過。求見老爺的。難道忘了。

〔丑佯問介〕爾是誰呀。

〔副淨〕我便是褲子襠裏阮哪。

〔丑〕啐。半夜三更。只管軟裏硬裏(七二)。奈何的人不得睡。〔推介〕好好的去罷。〔竟閉門入介〕

(六五) 三椿。三件に同じ。

(六六) 當歇。福王を立つる計劃は中止すべし。

(六七) 去留先決。自分の進退は先づ定まつたとの意。

(六八) 囉唕。がやがやいふこと。

(六九) 生白髮。憂多きが故なり。

(七〇) 罷冰絃。琴をひくこと、罷は樂まざる義なり。

(七一) 回書。返事のこと。

(七二) 軟裏硬裏。軟は阮に通ず、邦語のなんとかかんとかいふに同じ。

[小生] 得了回書。我先去了。[下]

[副淨惱介] 好可惡也。竟自閉門不納了。[呆介] 罷了。俺老阮十年之前。這樣氣兒。也不知受過多少(七三)。且自耐他。[搓手介] 只是當前機會。不可錯過(七四)。這史可法。現掌著本兵之印。如此執拗起來。目下迎立之事。便行不去了。這怎麼處。[想介] 呸。我倒獃氣了。如今皇帝玉璽。且無下落(七五)。儞那一顆部印(七六)。有何用處。[指介] 老史。老史。一盤好肉包(七七)。掇(七八)上門來。儞不會吃。我去讓了別人。日後不要見怪(七九)。正是。

窮途(八〇)纔解阮生嗟。無主江山信手拏。
奇貨(八一)居來隨處贈。不知福分在誰家。

(七三) 多少。多きなり、度々かかる目に遇うたとの意。
(七四) 錯過。機會をはづすこと。
(七五) 無下落。ゆくへを知らぬ意
(七六) 部印。兵部尙書の印をいふ
(七七) 好肉包。帝位に喩ふ。
(七八) 掇。御膳を据ゑる意。
(七九) 見怪。咎むる意。
(八〇) 窮途。晋の阮籍途に哭する故事「此の一句却て窮して纔に通ずるの意に用ふ。
(八一) 奇貨。呂不韋秦王の趙に質たるを見て奇貨居くべしといへり「奇貨は帝位に喩ふ、卽ち弘光帝迎立の事を諸人に相談しても、誰が之に贊成して、中興の元勳となるであらうかとの意なり。

第十五齣　迎駕(一)

甲申四月

(一) 迎駕。弘光帝迎立の場。

[淨扮馬士英冠帶上]

(元卜算) 一旦神京失守(二)。看中原逐鹿(三)交走。捷足(四)爭先。拜相與封侯。憑著這擁立功。大權歸手。

下官馬士英。別字瑤草。貴州貴陽衞人也。起家(五)萬歷己未進士。現任鳳陽督撫。幸遇國家大變(六)。正我輩得意之秋。前日發書約會史可法。同迎福王。他回書中。有三大罪五不可立之言。阮大鋮走去面商(七)。他又閉門不納。看來是不肯行(八)的了。但他現握著兵權。一倡此論。那九卿班裏。如高弘圖。姜日廣。呂大器。張國維等。誰敢竟行。這迎立之事。便有幾分不妥(九)了。沒奈何。又托阮大鋮。約會四鎮武臣。及勳戚內侍。未知如何。好生焦燥(一〇)。

[副淨扮阮大鋮急上] 胸有已成之竹(一一)。山無難劈之柴(一二)。這是馬公書房。不免竟入。

[淨見問介] 圓老回來了。大事如何。

[副淨] 四鎮武臣。見了書函。欣然許諾。約定四月念八。全備儀仗(一三)。齊赴江浦(一四)矣。

[淨] 妙妙。那高黃二劉。怎麼說來。[坐介]

(二) 失守。北京の陷落をいふ。
(三) 中原逐鹿云云。天下を爭ふに喩ふ。蒯通の言に曰く、秦其の鹿を失ひ、天下共に之を逐ふ、高材疾足の者、先づ得と。
(四) 捷足。足の早きこと、疾足に同じ。
(五) 起家。出身の意。
(六) 大變。先帝の崩御をいふ。
(七) 面商。商議の意。
(八) 不肯行。擁立を實行することを欲せざる意。
(九) 不妥。不安心なり。
(一〇) 焦燥。氣をあせること、じれたきこと。
(一一) 胸有已成之竹。宋の文與可、竹を畫くに妙なり、其の畫くに當つて胸中已に成竹ありと云ふ、胸中旣に成算ある意なり。
(一二) 山無難劈之柴。何事もやつて出來ないことはないとの意。
(一三) 儀仗。迎駕の儀仗なり。
(一四) 江浦。當時福王江浦に在り。

〔催拍〕〔副淨〕他說。受君恩爵封列侯。鎭江淮千里(一五)
借籌。神京未收。神京未收。似我輩濫功糜餉。建牙(一六)堪
羞。江浦迎鑾。願領貔貅(一七)。扶新主持節復讐。臨大事。敢
夷猶(一八)。

〔淨〕此外還有何人肯去。

〔副淨〕還有魏國公徐鴻基。司禮監韓贊周。吏科給事李沾。監察
御史朱國昌。

〔淨〕勳衛(一九)科道(二〇)。都有箇把(二一)。也就好了。他們都怎麼說來。

〔前腔〕〔副淨〕他說。馬中丞當先出頭。衆公卿誰肯
逗留。職名早投(二二)。職名早投。大家去上書陳表擁入皇
州。新主中興。拜舞龍樓(二三)。將今日勞苦功酬。遷舊秩。壯
新猷(二四)。

〔淨〕果然如此。妙的狠了。只是一件。我是一箇外吏(二五)。那幾箇武臣
勳衛。也算不得部院卿僚(二六)。目下寫表。如何列名。

(一五)千里借籌。我に相談するの意。
(一六)建牙。鎭臺の司令官たること。
(一七)貔貅。精兵をいふ。
(一八)夷猶。猶豫に同じ。

(一九)勳衛。武勳門閥の家。
(二〇)科道。監察官なり、明の制に、都察院衙門内に、吏、戶、禮、兵、刑、工、六科の給事中、及び京畿、遼瀋等各道の監察史を設け、統べて科道と稱せり。
(二一)把。把持の意。
(二二)職名早投。早く出頭して官姓名を報ずること。
(二三)龍樓。鳳闕などいふに同じ、大內なり。
(二四)新猷。新主中興の大計を翼贊すること。
(二五)外吏。地方官。
(二六)部院卿僚。內閣の官吏をいふ、「武臣勳衛では、內閣の官吏でなければ、新主を擁立するに都合あしとの意。

[副淨] 這有甚麼考證。(二七)取本搢紳便覽(二八)來。從頭鈔寫便了。

[淨] 雖如此說。萬一駕到。沒有百官迎接。我們三五箇官。如何引進朝去。(二九)

[副淨] 我看滿朝諸公。那箇是有定見的。乘輿一到。只怕遞職名的。還挨擠不上(三〇)哩。

[淨] 是是。表已寫就。只空銜名。(三一)取本搢紳來。快快開列。(三二)

[外扮書辦(三三)取搢紳上] 西河沿(三四)洪家(三五)高頭(三六)便覽在此。 [下]

[副淨] 待我鈔起來。 [偏頭遠視介] 表上字體。俱要細楷(三七)的。目昏難寫。這怎麼處。 [想介] 有了。 [腰內(三八)取出眼鏡戴鈔介]

吏部尚書臣高弘圖。 [作手顫介] 這手又顫起來了。目下等著起身。(三九)一時寫不出。急殺(四〇)人也。

[淨] 還叫書辦寫去罷。

[副淨] 這姓名裏面。都有去取。(四一)他如何寫得。

[淨] 備指示(四二)明白。自然不錯了。 [叫介] 書辦快來。

[外上] [副淨照搢紳指點(四三)向外介] [外下]

(二七) 考證。何人が何官をして居るかを一一當つて見ること。
(二八) 搢紳便覽。職員錄に同じ。
(二九) 引進朝去。擁立すること。
(三〇) 挨擠不上。官姓名を報告するものが、推しきれぬ程込み合ふ意。
(三一) 銜名。官名に同じ。
(三二) 開列。書き出すこと。
(三三) 書辦。書記に同じ。
(三四) 西河沿。化京の街名。
(三五) 洪家。便覽の板元。
(三六) 高頭。上欄を高くあけた板式なり。
(三七) 細楷。楷書の細字。
(三八) 腰內。ズボンのかくしといふ如し。
(三九) 起身。出發すること。
(四〇) 急殺。急ぐこと。
(四一) 去取。取舍に同じ。
(四二) 指示。何人の名を書くべきか、何人の名を省くべきかを明に示すこと。
(四三) 指點。指圖すること。

[淨] 自古道。中原逐鹿(四四)。捷足先得。我們不可落他人之後。快整衣冠。收拾箱包。今日務要出城。

[丑扮長班(四五)收拾介]

[副淨問介] 請問老公祖(四六)。小弟怎生打扮。

[淨] 迎駕大典。比不得尋常私謁。俱要冠帶纔是。

[副淨] 小弟原是廢員(四七)。如何冠帶。

[淨] 正是。[想介] 沒奈何。儞且權充箇賚表官(四八)罷。只是屈尊(四九)些兒。

[副淨] 說那裏話。大丈夫要立功業。何所不可。到這時候還講剛方(五〇)麽。

[淨笑介] 妙妙。纔是箇軟圓老(五一)。

[副淨換差吏(五二)服色介]

(前腔) 拚餘生寒灰(五三)已休。喜今朝涸海(五四)更流。金鰲(五五)上鉤。金鰲上鉤。好似太公(五六)一釣。享國千秋。牛馬(五七)風塵。暫

(四四)中原逐鹿。先鞭を著けること。

(四五)長班。用人のこと。前出。

(四六)老公祖。長上に對する敬稱。

(四七)廢員。罷職の官員。

(四八)賚表官。迎立の表を持參するもの。

(四九)屈尊。尊嚴をけがすこと。

(五〇)剛方。柔の反、頑固の意。

(五一)軟圓老。阮大鋮、字は圓海、故にいふ。軟圓は剛方の反、妙用、妙用。

(五二)差吏。差人に同じ、使者なり。

(五三)寒灰。死灰に同じ、寒灰の休すとは、全然政海より身を退きしこと。

(五四)涸海。涸海の更に流るるとは、埋木の花咲く意なり。

(五五)金鰲。金鰲の鉤に上るは功名の手に入りしこと。

(五六)太公。太公望の故事、渭水の濱に釣を垂れて、周の文王に見出され、遂に齊國の始祖となれり。

屈何憂。刀筆吏(五八)丞相根由。人笑罵。我不差。

〔外上〕表已列名。老爺過目(五九)。

〔副淨看介〕果然一些不差。就包裹好了。裝入箱中。

〔外包裹裝箱內介〕

〔副淨〕下官只得(六〇)背起來了。

〔外・丑與副淨綁箱背上介〕

〔淨看笑介〕圓老這件功勞。卻也不小哩。

〔副淨正色介〕不要取笑。日後畫在凌烟閣上(六一)。到有些神氣(六二)的。

〔丑牽馬介〕天色將晚。請老爺上馬。

〔淨吩咐介〕這迎駕大事。帶不的(六三)多人。只俺兩箇跟去罷。

〔副淨〕便益(六四)俺們。後日都要議敘的。〔俱上馬急走繞場介〕

〔前腔〕〔合〕趁斜陽南山雨收。控青驄(六五)烟驛水郵(六六)。金鞭急抽(六七)。金鞭急抽。早見浦江雲氣。楚尾吳頭(六八)。應運英雄。虎赴龍投(六九)。恨不的雙翅颼颼(七〇)。銀燭(七一)下。拜冕旒(七二)。

(五七)牛馬風塵。道途に奔走すること。

(五八)刀筆吏。書記なり、蕭何は秦の時刀筆の吏なりしが、漢の高祖を助けて、遂に相國となれり。

(五九)過目。目を通すこと。

(六〇)只得。俗語ぜひなく、ぜひともの意、少不得に同じ。

(六一)凌烟閣。唐の太宗、閻立本に命じて、功臣二十四人を凌烟閣上に圖畫せしめたり。

(六二)神氣。かうがうしき氣象、今こそ見る影もなき身なれども、他日功業を立て、凌烟閣上に畫かるゝに至つては一層の光彩を添へんとの意。

(六三)帶不的。つれられざる意。

(六四)便益。仕合せすること、褒美をやる意なり。

(六五)青驄。傳馬なり。

(六六)烟驛水郵。宿場のこと。

(六七)急抽。馬に鞭をあてることをいふ。

(六八)楚尾吳頭。吳楚の境。

(六九)虎赴龍投。英雄の爭つて迎へに往くこと。

(七〇)雙翅颼颼。少しも早く飛んで行きたき意なり。

(七一)銀燭。即位の盛儀をいふ。

(七二)冕旒。天子のかむり、新天子に謁見する意なり。

[淨] 叫左右早去尋下店房。
[副淨] 呵呀。我們做的何事。今日還想安歇(七三)。快跑。快跑。[加鞭跑介]
[淨] 江雲山氣晚悠悠。[副淨] 馬走平川(七四)似水流。
[淨] 莫學防風(七五)隨後到。[副淨] 塗山(七六)明日會諸侯。

(七三) 安歇。休むこと、今夜は休むどころではなしとの意。
(七四) 平川。平地に同じ。
(七五) 防風。夏時の諸侯、防風氏なり。
(七六) 塗山。大禹諸侯を塗山に會す、防風氏後れて至る、禹因つて之を誅す。

第十六齣　設朝　甲申五月

[小生扮弘光衮冕(一)。小旦・老旦扮二監(二)引上]
(念奴嬌) 高皇舊宇(三)。看宮門殿閣。重重初敞。滿目飛騰新紫氣(四)。倚著鍾山(五)千丈。祖德重光。民心合仰。迎俺青天上(六)。雲消簾捲。東南烟景雄壯(七)。
一朶(八)黃雲捧御牀。醒來魂夢自徬徨。
中興不用親征戰。纔洗塵顏(九)著衮裳(一〇)。
寡人乃神宗皇帝之孫。福邸(一一)親王之子。自幼封爲德昌郡王。去年

(一) 衮冕。衮は衮龍、天子の衣、冕は天子の冠なり。
(二) 二監。監は宦官なり。
(三) 舊宇。南京は明の太祖高皇帝の嘗て都せし所なり。
(四) 新紫氣。紫氣は瑞氣なり、新とは新に位に即くをいふ。杜甫の詩に「東來紫氣滿函關」の句あり。
(五) 鍾山。南京の東郊に在り、麓に太祖の廟あり。
(六) 靑天上。天子の位に即くことをいふ
(七) 烟景雄壯。中興の氣象をいふ
(八) 一朶。一片に同じ、黃雲の御牀を捧ぐとは、天子の位が、天より降れるをいふ、群臣の擁立せることに喩ふ。

賊陷河南。父王殉國。寡人逃避江浦。九死餘生。不料北京失守。先帝升遐[一二]。南京臣民。推俺爲監國[一三]之主。今乃甲申年五月初一日早謁孝陵[一四]。回宮暫御偏殿[一五]。看百官有何奏章。

[外扮史可法淨扮馬士英末扮黃得功丑扮劉澤淸文武袍笏[一六]上]

再見冠裳盛。重瞻殿闕高。金甌[一七]仍未缺。玉燭[一八]又新調。

我等文武百官。昨日迎鑾江浦。今早陪位孝陵。雖投職名。未稱朝賀禮。當恭上表文。請登大寶[一九]。[衆前跪上表介] 南京吏部尚書臣高弘圖等。恭請陛下早正大位。改元聽政。以慰臣民之望。恭惟陛下呵。

(本序) 潛龍[二〇]福邸。望揚揚。貌似神宗。嫡派天潢[二一]。久著仁賢。聲譽重。中外推戴陶唐[二二]。瞻仰。牒出金枝。系連花蕚[二三]。宜承大統[二四]。諸宗長。臣伏願登庸御宇[二五]。早繼高皇。

[四拜介]

[小生] 寡人外藩衰宗[二六]。才德涼薄。倘順臣民之請。來守高帝之宮。

(九)塵顏。道中塵にまみれし顏をいふ。

(一〇)袞裳。袞龍の御衣をいふ。

(一一)福邸親王。名は常洵、前出。

(一二)升遐。崩御のこと。

(一三)監國。攝政に同じ。

(一四)孝陵。太祖の陵。

(一五)偏殿。正殿の傍にある便殿なり。

(一六)袍笏。大禮服。

(一七)金甌。國家のこと、梁の武帝曰く、我が國家は、金甌の一傷缺無きが如しと。

(一八)玉燭。四時の和すること、新調は新帝の卽位するをいふ。

(一九)大寶。帝位なり。

(二〇)潛龍。太子たること。

(二一)嫡派天潢。正統の皇統をいふ。

(二二)陶唐。堯のこと、弘光の盛德を美する意。

(二三)金枝花蕚。金枝玉葉に同じ、皇族をいふ。

(二四)大統。帝位。

(二五)御宇。天下を統治すること。

(二六)衰宗。分家のこと、謙稱なり。

君父含冤。大讐未報。有何面顔。忝然(二七)正位(二八)。今暫以藩王監國。仍稱崇禎十七年。一切政務。照常辦理。諸卿勿得諄請(二九)。以重寡人之罪。

(前腔)〔換頭(三〇)〕休强。中原板蕩(三一)。歎王孫乞食江頭(三二)。棲止榛莽。回首塵沙(三三)。何處去。洛下名園(三四)花放。盼望。兵燹難消。松楸(三五)多恙。鼎湖弓劍(三六)無人葬。吾怎忍垂旒正冕。受賀當陽(三七)。

〔衆跪介〕萬歲萬萬歲。眞仁君聖主之言。臣等敢不遵旨。但大讐不當遲報。中原不可久失。將相不宜緩設。謹具題本(三八)。伏候裁決。

〔上本介〕

(前腔)〔換頭〕開朗。中興氣象。見罘罳(三九)瑞靄祥雲。王業重創。不共天(四〇)讐。從此後。嘗膽眠薪(四一)休忘。參想。收復中原。調變(四三)黃閣(四二)。急須封拜卜忠亮。還缺少百官庶士。乞選才良。

〔小生〕覽卿題本。汲汲以報讐復國爲請。俱見忠悃(四四)。至於設立將

(二七)忝然。天氣での意。
(二八)正位。帝位につくこと。
(二九)諄請。固く願ふ意。
(三〇)換頭。大體前と同調にして、首二三句を異にする體なりといふ。
(三一)板蕩。亂るること、詩の大雅に板蕩の二篇あり、皆厲王の無道にして、天下の亂るるをいふ。
(三二)王孫云云。杜甫の詩に「哀王孫」「哀江頭」あり、共に王孫の零落を述べたるものなり。
(三三)塵沙。戰亂をいふ。
(三四)洛下名園。洛陽には名園多く、花を以て名高し、福王は河南に封を受けしを以て言ふなり。
(三五)松楸。墓地に植うる樹なるを以て墓の意に用ふ。
(三六)鼎湖弓劍。黃帝龍に騎りて昇天し、弓劍を鼎湖の邊に落す、人民之を抱いて泣くと、故に皇帝の崩御に喩へていふ。
(三七)當陽。帝位につくをいふ。
(三八)題本。職員錄の如きもの。
(三九)罘罳。殿角をいふ。
(四〇)不共天。禮記に「父の讐は與に共に天を戴かず」とあり。
(四一)嘗膽。眠薪。吳越春秋に云ふ、越王勾踐、薪に臥し膽を嘗めて吳に報ぜんと欲すと。
(四二)黃閣。宰相の衙門をいふ。
(四三)調變。料理に同じ、政務を處理するなり。
(四四)忠悃。忠誠に同じ。

相。寡人已有成議。衆卿聽著。

(前腔) [換頭] 職掌。先設將相。論麒麟畫閣(四五)功勞。迎(四六)立爲上。捧表江頭。星夜去。擁著乘輿儀仗。尋(四七)訪。加體黃(四八)袍。嵩(四九)呼拜舞。百(五〇)忙難把璽符讓。今日裏論功敍賞。文武誰(五一)當。

衆卿且退。午(五二)門候旨。 [小生內官隨下]

[外・淨・末・丑退班立介]

[外] 若論迎立之功。今日大拜。自然讓馬老先生了。

[淨] 下官風(五三)塵外吏。焉能越次而升。若論國家用武之際。史老先生。現居本(五四)兵。禮當大拜。 [向末・丑介] 四鎭實有護駕之勞。加封公侯。只在目下。

[末・丑] 皆賴恩帥提(五五)拔。

[老旦扮內監捧旨上] 聖旨下。鳳陽督撫馬士英倡議迎立。功居第一。卽陞補內(五六)閣大學士。兼兵部尙書。入閣辦事。吏(五七)部尙書高弘

(四五) 麒麟畫閣。漢の宣帝、功臣十一人の像を、麒麟閣上に畫きし故事。
(四六) 迎立爲上。弘光帝を迎立せるものが、功臣の第一なりとの意。
(四七) 尋訪。二字句なり、福王を尋ね出ししこと。
(四八) 黃袍。天子の御衣。
(四九) 嵩呼。萬歲を呼ぶこと、漢の武帝の故事、武帝嵩山に封ぜし時、山中に萬歲の聲を聞きしといふ。
(五〇) 百忙。政務多端の際なれば、帝位を辭し難しとの意。
(五一) 誰當。誰が功賞に當らんの意なり。
(五二) 午門。宮城の正門。
(五三) 風塵外吏。鎭臺の督撫なるをいふ。
(五四) 本兵。兵部尙書。
(五五) 提拔。拔擢登庸せらるること。
(五六) 內閣大學士。卽ち內閣の大臣なり、機務に參與し、位は六部尙書の上に在り。
(五七) 吏部。官吏の任免、黜陟を掌る。

圖。(五八)禮部尚書姜日廣。兵部尚書史可法。亦皆陞ニ補大學士一。各兼ニ本銜一。高弘圖。姜日廣。入レ閣辦レ事。史可法。著レ督ニ師江北一。其餘部院。大小官員。現任者。各加ニ三級一。缺員者。將ニ迎駕人員一。論レ功選補。又四鎭武臣。靖南伯黃得功。興平伯高傑。東平伯劉澤淸。廣昌伯劉良佐。俱進ニ封侯爵一。各回ニ汛地一(五九)。謝レ恩(六〇)。

〔衆謝レ恩介〕 萬歲萬萬歲。〔起介〕

〔外向ニ末・丑一介〕 老夫職居ニ本兵一。每以レ不レ能レ克ニ復中原一爲レ恥。聖上命レ俺督ニ師江北一。正好ニ勠レ力報效一。今與ニ列侯一約定。於ニ五月初十日一。齊集ニ揚州一。共商ニ復讐之事一。各須ニ努力一。勿レ得ニ遲延一。

〔丑・末〕 是。

〔外〕 老夫走レ馬到レ任去也。正是重ニ興東漢一。逢ニ明主一(六一)。收ニ復中原一。任ニ老臣一(六二)。〔別レ衆下〕

〔末・丑欲レ下介〕

〔淨喚介〕 將軍轉來。〔拉レ手語介〕 聖上錄ニ咱迎立之功一。拜レ相封レ侯。我等皆係ニ勳舊大臣一。比ニ不レ得別箇一。此後內外消息。須レ要ニ兩相照(六三)

(五八) 禮部。我が式部職の如し、儀禮祭祀を掌り、又學事を管す。

(五九) 汛地。衛戍地なり。

(六〇) 謝恩。謝恩の二字は、敍任の辭令の結尾に用ふ。

(六一) 明主。光武帝のこと、弘光を中興の主に比する意。

(六二) 老臣。史可法自ら任ずるなり。

(六三) 照應。相通ずる意。

應千秋富貴。可以常保矣。

[末・丑] 蒙恩携帶(六四)。得有今日。敢不遵諭。[丑・末急下]

[浄笑介] 不料今日。做了堂堂首相。好快活也。

[副浄扮阮大鋮探頭(六五)瞧介]

[浄欲下介] 且住。立國之初。諸事未定。不要叫高姜二相。奪了俺的大權。且慢(六六)回家。竟自入閣辦事便了。[欲入介]

[副浄悄上作揖介] 恭喜老公祖。果然大拜了。

[浄驚問介] 儞從那裏來。

[副浄] 晩生在朝房(六七)藏著。打聽新聞(六八)來。

[浄] 此係禁地。今日立法之始。儞靑衣小帽(六九)。在此不便。請出去罷。

[副浄] 晩生有要緊話說。[附耳介] 老師相叙迎立之功。獲此大位。晩生賫表前往。亦有微勞。如何不見提起。

[浄] 方纔宣旨。各部院缺員。許將迎駕之人。叙功選補矣。

[副浄喜介] 好好(七〇)。還求老師相薦拔。

(六四) 携帶。引き立つる意。

(六五) 探頭。戯臺の内より頭を出して外を望むこと。

(六六) 且慢。「まあゆつくり」の意。

(六七) 朝房。官房といふが如し。

(六八) 新聞。新しき消息。

(六九) 靑衣小帽。平服無位無官のものをいふ。

(七〇) 好好。それはけつこう、では何卒といふ意。

〔淨〕 倆的事。何待諄囑(七一)。〔欲入介〕

〔副淨〕 事不宜遲。晩生權當班役(七二)。跟進內閣。看看機會何如。

〔淨〕 學生初入內閣。未諳機務。倆來幫一幫。也不妨事。只要小心著。

〔副淨〕 曉得。〔替淨拿(七四)笏板(七三)隨行介〕

〔賽觀音〕〔淨〕 舊黃扉(七五)。新丞相。喜一日。趾高氣揚(七六)。廿四考(七七)中書模樣。

〔副淨〕 莫忘辛勤老陪堂(七八)。

〔淨〕 殿閣東偏曉霧黃。〔副淨〕 新參知政(七九)氣昂昂。

〔淨〕 過江同是從龍彥(八〇)。〔副淨〕 也步金階抱笏囊(八一)。

(七一) 諄囑。うるさく賴むこと。
(七二) 班役。副官といふが如し。
(七三) 笏板。笏なり。
(七四) 拿。一に套に作る、套はつつむ意。
(七五) 黃扉。黃閣に同じ、內閣のこと。
(七六) 趾高氣揚。得意の貌、楚の屈瑕王、命を奉じて外征す、鬪伯比之を送り、還つて曰く、莫敖は敗れん、趾を擧ぐること高しと。
(七七) 廿四考。唐の郭子儀、中書令に至るに、凡そ二十四回の試驗を經たりといふ、やつと大臣になつたといふ得意の有樣をいふ。
(七八) 陪堂。宰相を中堂といひ、協辦を陪堂といふ、此處にては伴食大臣、又副官の意に見るべし。
(七九) 新參知政。馬士英を指す、參知政事は宋の宰相なり。
(八〇) 從龍。天子に從ふこと、彥は俊才の意。
(八一) 抱笏囊。御供の意。

第十七齣　拒媒(一)

甲申五月

[末扮楊文驄冠帶上]

(燕歸梁)　南朝(二)領(三)略風流盡。新立箇(ヒトリノ)妙齡君。淸江(四)隔斷濁烟塵(五)。蘭署(六)裏(ウチニ)買香薰(七)。

下官(ワレハ)楊文驄。因敍迎駕之功。補了禮部主事。盟兄阮大鋮。仍以光(八)祿起用(九)。又有同鄉越其杰。田仰等。亦皆補官。同日命下。可稱一時之盛。目下漕撫(一〇)缺人。該(マサニ)推陞田仰。適纔(イマシガタ)送(オクリ)到聘金(一一)三百。托俺尋一美妓。要帶往任所。我想靑樓色藝之精。無過香君。不免(イザヤ)替(タメニ)他去問。

[喚介]　長班(一二)走來(キタレ)。

[雜扮長班上]　胸中一部縉紳(一三)。脚下千條衚衕(一四)(チマタ)。

[見介]　老爺有何使喚(ゴヨウ)。

[末]　俺快(ハヤク)請淸客(一五)丁繼之。女客卞玉京。到我書房。說話(一六)(ハナシアリ)。

(一) 拒媒。媒人をことわる場。
(二) 南朝。新造の明朝をいふ。
(三) 領略。閱歷なり、風流を占め盡すの意。
(四) 淸江。揚子江のこと。
(五) 濁烟塵。戰亂をいふ。
(六) 蘭署。御史臺のこと、此處にては役所の意に用ふ。
(七) 香薰。美人のこと、大意は新造の南朝にては風流を盡し、妙齡の天子を擁立し、大江が戰亂を隔つるを幸に、官吏が役所に美人を連れこんで、遊蕩三昧に耽けるをいふなり。
(八) 光祿。官名。
(九) 起用。再び前官に復したるなり。
(一〇) 漕撫。運河の總督。
(一一) 聘金。身請けの金。
(一二) 長班。小使なり。
(一三) 縉紳。紳士錄なり。
(一四) 衚衕。巷、小路のこと、蒙古語なるべし。
(一五) 淸客。遊藝の師匠といふが如し。
(一六) 說話。用談の意。

[雜] 稟老爺。小人是長班。只認的各位官府。那些串客(一七)表子(一八)。沒處尋覓。

[末] 聽我吩咐。

(漁燈兒) 閙端陽(一九)正紛紜。水閣含春。便有那烏衣(二〇)子弟伴紅裙。難道是織女牽牛(二一)天漢(二二)津。

[雜] 就在那秦淮河房(二三)麼。小人曉得了。

[末指介] 偏望著棗花簾影(二四)杏紗紋。那壁廂欵問(二五)慇懃。

[副淨扮丁繼之外扮沈公憲淨扮張燕筑上] 院裏常留老白相(二六)。朝中新聘大陪堂(二七)。

[副淨] 來此是楊老爺私宅。待我叫門。 [叫介] 位下那裏。

[雜出見介] 衆位何來。

[副淨] 老漢是丁繼之。同這沈張兩敝友。求見楊老爺。煩位下通報一聲。

[雜喜介] 正要去請。來的湊巧(二八)。待我通報。 [欲入介]

[老旦扮卞玉京小旦扮寇白門丑扮鄭妥娘上] 紫燕(二九)來何早。

(一七) 串客。狎客、幫間の徒をいふ。

(一八) 表子。妓女なり。

(一九) 端陽。即ち端午の節句、閙は人出多くして騒がしき意なり。

(二〇) 烏衣。烏衣巷は秦淮の南に在り、劉禹錫の詩に「朱雀橋邊野草花、烏衣巷口夕陽斜」の句あり。此處にては富貴の子弟を指す。

(二一) 織女牽牛。七夕のおりひめとひこぼし。

(二二) 天漢。天の川なり、大意は端午の節句に、秦淮のほとりが大に賑ひ、公子が美姫を伴ひ、恰も七夕の二星が天の川に會するが如きをいふ。

(二三) 河房。水榭をいふ。

(二四) 棗花簾影。門前の暖簾や窓の紗に棗や、杏の花紋を織りなせるなり。

(二五) 欵問。ねんごろに尋ぬること。

(二六) 老白相。無事の閑人を白相といふ。幫間の徒なり。

(二七) 大陪堂。阮大鋮をいふ。

(二八) 湊巧。丁度よい鹽梅の意。

(二九) 紫燕黃鶯。清客と女客との男女に喩へていふ。

黃鶯到已遲。

［小旦叫介］　三位畧等一等。同進去罷。

［副淨］　原來是儞姊妹們。

［淨］　儞們來此何幹。

［丑］　大家是一樣病根。儞們怕做師父。(三〇)我們怕做徒弟的。［俱入介］

［末喜介］　如何來的恰好。

［衆］　無事不敢徑造。今日特來懇恩。(三一)倘容拜見。［俱叩介］(三二)

［末拉起介］(三三)　請坐。有何見教。

［副淨問介］　新補光祿阮老爺。是楊老爺至交麼。(三四)

［末］　正是。

［副淨］　聞得新主登極。(三五)阮老爺獻了四種傳奇。聖心大悅。把燕子箋。鈔發(三七)總綱(三六)。要選我們入內教演。有這話麼。

［末］　果然有此盛舉。

［淨］　不瞞老爺說。我們兩片脣(三八)。養著八張嘴(三九)。這一入內庭。豈不滅

(三〇) 師父徒弟。共に宮中に入りて、歌舞の稽古をすること。

(三一) 懇恩。御願の意。

(三二) 叩。叩頭なり。

(三三) 拉起。それに及ばずと、拜跪叩頭するを、手を拉きて起すなり。

(三四) 至交。親友なり。

(三五) 登極。帝位につくこと。

(三六) 總綱、大要の意。

(三七) 鈔發。寫し出すこと。

(三八) 兩片脣。口のこと、歌を唱ふ意。

(三九) 八張嘴。八人の家内。

門絶戸了一家兒。

［丑］我們也是八張嘴。靠著兩片皮哩。

［末笑介］不必著忙。(四〇)當差承應。自有一班(四一)教坊男女。偺們都算名士數裏的。誰好爭攔。

［衆］只求老爺護庇(四二)則箇。

［末］明日開列姓名。送與阮圓海。叫他一概免拏便了。

［衆］多謝老爺。

（前腔）看一片秣陵春。煙水(四三)消魂。借著些笙歌裙屐醉斜曛。若把俺盡數選入呵。從此後江潮暮雨(四四)掩柴門。再休想(四五)白舫青簾載酒尊。老爺果肯見憐。這功德不小。保秦淮(四六)水軟山溫。

［末］下官也有一事借重。

［副淨］老爺有何見教。

［末］舍親田仰。不日就陞漕撫。適纔送到聘金三百。託俺尋一小

（四〇）當差。やくづとめの意。

（四一）教坊。俳優の仲間。

（四二）則箇。俗語、就是了に同じ それでよろしの意。

（四三）消魂。愉快極る意、得もいはれぬ景色であるとの意。

（四四）掩柴門。秦淮の酒樓を閉づること。

（四五）白舫清簾。遊覽の畫船。

（四六）水軟山溫。やさしき景色をいふ。「蒲團著て寢たる姿や東山」の句を想はしむ。

罷。

〔丑〕讓我去罷。

〔淨〕儞去不得。儞去了。這院中便散了板兒(四七)了。

〔丑〕怎的便散了板兒。

〔淨〕沒人和我打釘(四八)了。

〔丑〕啐。

〔副淨〕老爺意中可有一箇人兒麼。

〔末〕人是有一箇在這裏。只要儞去作伐(四九)。

〔老旦〕是那箇。

〔末〕便是李家的香君。

〔副淨搖頭介〕這使不得。

〔末〕如何使不得。

〔副淨〕他是侯公子梳櫳過的。

〔錦漁燈〕現有箇秦樓(五〇)上吹簫舊人。何處去覓封侯(五一)。

柳老三春。留著他燕子樓(五二)中晝閉門。怎教學改嫁的

(四七) 板兒。板は音班に通ず、一座が分散すること。

(四八) 打釘。文字通りの解は、釘を打つものがないから、板がばらばらとなることとなり、又打釘は打聽に通ず、歌をきくこと、即ち相手を失ふ意なり、板散じて釘を打つ能はざるにかけたり

(四九) 作伐。作媒の意、詩經に出づ。

(五〇) 秦樓。秦の穆公の女弄玉音を好む。簫史善く簫を吹く、穆公弄玉を以て之に妻し、鳳樓を作る、二人簫を吹けば、鳳凰來り集る、遂に鳳凰に乘りて去れりといふ、秦樓は妓館の意に用ふ。

(五一) 覓封侯。侯朝宗の史可法の幕に參することをいふ、王昌齡の詩に「忽見陌頭楊柳色、悔教夫壻覓封侯」の句あり。

(五二) 燕子樓。唐の張建封、妓關盼盼を愛して、之を燕子樓中に置く、建封死する後、盼盼恩に感じて、他に適かず、竟に樓中に死せり。

(五三) 卓文君。卓王孫の女、新に寡にして閒居し、司馬相如を見て之を喜び、遂に私奔せり。此の句の大意は、香君は朝宗の去りし後、樓を閉ぢて客を見ず、如何ぞ再び他人に適かしめんやといふなり。

(五四) 高興。愉快の極なるをいふ

(五五) 去無妨。改嫁の勸說にゆくに差支なき意。

(五六) 長齋繡佛。縫ひ取りした佛像に對して念佛する意。

(五七) 落了風塵。再び身を沈めて妓女となること。

(五八) 覿面。臆面もなく。

(五九) 皮肉行裏經紀。色を賣る商賣をいふ。

卓文君。(五三)

〔末〕 侯公子一時高興。(五四)如今避禍遠去。那裏還想著香君哩。但去(五五)無妨。

〔老旦〕 香君自侯郎去後。立志守節。不肯下樓。豈有嫁人之理。去也無益。

〔錦上花〕 似一隻雁失群。單宿水。獨叫雲。每夜裏月明樓上度黃昏。洗粉黛。抛扇裙。罷笛管。歇喉脣。竟是長齋繡佛(五六)女尼身。怕落了風塵。(五七)

〔末〕 雖如此說。但有强如侯郎的。他自然肯嫁。

〔副淨〕 香君之母。是老爺厚人。倒是老爺面講更好。

〔末〕 儞是知道的。侯郎梳櫳香君。原是下官作伐。今日覿面。(五八)如何講說。還煩二位走走。自有重謝。

〔淨・外〕 這等我們也去走走。

〔小旦・丑〕 呸。(五九)皮肉行裏經紀。只許儞們做麼。俺也同去。

〔末〕不必爭鬧。待他二位說不來時。爾們再去。
〔衆〕是是。辭過老爺罷。
〔末〕也不遠送(六〇)了。狎客滿堂。消我悶。嫁衣(六一)終日爲人忙。〔下〕
〔副淨・老旦〕楊老爺免了咱們差事。莫大的恩典哩。
〔外・淨〕正是。
〔副淨〕儞四位先回。俺要到香君那邊。替楊老爺說事去了。
〔丑〕賺了錢。不可偏背(六二)。大家八刀(六三)纔好。
〔衆譁下〕〔副淨・老旦同行介〕
〔副淨〕記得侯公子梳櫳香君。也是我們幫襯來。
(錦中拍)想當初華筵盛陳。配才子佳人。排列著花林粉陣(六四)。逐趁著箏聲笛韻。如今又去幫襯別家。好不赧顏。恁似郵亭馬廝(六五)。迎官送賓。
〔老旦〕我們不去何如。
〔副淨〕俺若不去呵。

(六〇)遠送。客を見送ること。
(六一)嫁衣云云。人の爲めになかうどすること。
(六二)偏背。ないしょで着服すること。
(六三)八刀。分の字を洒落れて分解して用ひたるなり。
(六四)花林粉陣。美人の群をいふ。
(六五)郵亭馬廝。宿場の馬夫が、客人を送迎するに似たりとの意。

（六六）新錚錚。パリパリの意。
（六七）春官。禮部をいふ、楊文驄、阮大鋮を指す。
（六八）匣印。官印なり、公文書のこと。
（六九）秋宮。後宮をいふ、秋宮は春官と對して用ふ、即ち楊老爺の言ふことを聽かざれば、楊は怒つて我等の依賴を許さず、我等を內庭に奉仕せしむるに至るべしといふなり。
（七〇）兩全。一擧兩得の意、雙方の顏を立てること。
（七一）閙蜂媒。串譯に媒をする意。
（七二）懨懨。うとうとする意。
（七三）令堂。人の母を尊んでいふ。

又怕他新錚錚（六六）春官（六七）匣印（六八）。硬選入秋宮（六九）院門。

[老旦] 這等如之奈何。

[副淨] 俺自有箇兩全（七〇）之法。

到那邊款語商量。柔情索問。做一箇閙蜂媒（七一）花裏混。

[老旦] 妙妙。

[副淨] 來此已是。不免竟進。[喚介] 貞娘出來。

[旦上] 空樓寂寂含愁坐。　長日懨懨（七二）帶病眠。

[問介] 樓下那箇。

[老旦] 丁相公來了。

[旦望介] 原來是卞姨娘。同丁大爺光降。請上樓來。

[副淨・老旦見介] 令堂（七三）怎的不見。

[旦] 往盒子會裏去了。[讓介] [請坐獻茶同坐介]

[老旦] 香君閒坐樓窗。和那箇頑耍。

[旦] 姨娘不知。

（錦後拍）俺獨(ヒトリ)自守二空樓一。望二殘春一。白頭吟(七四)罷涙沾レ巾。

〔老旦〕何不レ招二一新婿一。

〔旦〕奴家(ワラハハ)已嫁二侯郞一。豈敢改レ志。

〔淨〕我們曉二倆苦心一。今日禮部楊老爺說(イフ)。有二一位(ヒトリノ)大老田仰一。肯輸二三百金一。娶レ倆爲レ妾。託レ俺來問(ヒトツタヅネキタラシム)一聲。

〔旦〕這(コノ)題目(七五)(ハナシハ)錯認(アヤマレリ)。這題目錯認。可レ知定情詩(七六)。紅絲(七七)拴(ツナゲ)緊(コトカタク)。抵(アタル)二過他萬兩雪花銀(七八)(シロガネ)一。

〔老旦〕這事憑二倆裁著(カンガヘ)一。倆既不レ肯。另問二別家一。

〔旦〕賣二笑哂一。有二勾欄(七九)艷品一。奴(ワラハ)是薄福人。不レ願レ入二朱門(八〇)一。

〔老旦〕既如レ此說(ヘンジセバ)。回二他便了(ヨロシ)一。

〔副淨〕令堂回レ家。不レ要レ見二錢眼開(八一)(ホシクナル)一。

〔旦〕媽媽(ハハ)疼(カハユガレバ)レ奴。亦不二肯相强一的。

〔副淨〕如レ此甚好。可レ敬可レ敬。〔起介〕別過了(サヤウナラ)。

〔外・淨・小旦・丑急上〕兩處紅絲千里繫。一條黑路(八二)六人忙。

（七四）白頭吟。卓文君の詩、司馬相如、茂陵の女子を聘せんとしたる時、卓文君白頭吟の詩を作つて之を怨じたれば、相如思ひ止まりたり、「皚如二山上雪一、皎如二雲間月一、聞君有二兩意一、故來相決絕云云。」

（七五）題目。問題といふが如し。

（七六）定情詩。猶は結婚の詩といふが如し。曹植の詩に「與レ君初定レ情、結髮恩愛深」の句あり。

（七七）紅絲。赤繩といふに同じ、男女の間をつなぐえにし。

（七八）雪花銀。白銀なり。

（七九）勾欄。妓女の居る所をいふ。

（八〇）朱門。富貴の家なり。

（八一）眼開。慾が出ること。

（八二）黑路。紅絲に對す、夜行の意。

［淨］快去快去。他二人說成。便偏背我們了。
［丑］我就不依他。饒他吃到口裏。還倒出臟來。［進介］
［淨］香君恭喜了。
［旦］喜從何來。
［小旦］雙雙媒人來倆家。還不喜哩。
［旦］敢也說田仰的事麼。
［淨］便是。
［旦］方纔奴已拒絕了。
［外］楊老爺的好意。如何拒得。
（北罵玉郎）他爲倆生小(八三)綠珠(八四)花月身(八五)。尋一箇金谷(八六)
綺羅裏石季倫(八七)。
［旦］奴家不圖富貴。這話休和我講。
［副淨・老旦］我二人在此勸了半日(八八)。他決不肯嫁人的。
［小旦］他不嫁人。明日拏去學戲(八九)。要見箇男子的面。也不能夠哩。
歌殘舞罷鎖長門(九〇)。臥氍毹(九一)夜夜傷神。

(八三) 生小。生れつき小さきなり。
(八四) 綠珠。晉の石崇の妾、綉秀之を求めしも、崇許さず、秀爲めに詔を矯めて崇を收む、綠珠因て自ら樓下に投じて死せりと。又綠珠といふ所以は崇、綠珠一斗を以て購へるによりて稱すともいふ。
(八五) 花月身。妓女をいふ。
(八六) 金谷。石崇の別業なり。
(八七) 石季倫。崇字は季倫、豪奢を以て聞ゆ。大意は倆のかよわき妓女の身分の爲めに豪奢な旦那を世話するといふことなり。
(八八) 半日。長時間の意。
(八九) 學戲。內庭に供奉せしむること。
(九〇) 長門。長門は漢宮の名、冷宮をいふ。
(九一) 氍毹。氈の類、毛布といふが如し。

(九二) 黃毛丫頭。罵語なり、丫頭は下婢をいふ。
(九三) 閒事云云。餘計な御世話の意。
(九四) 死在。憤怒の辭なり。
(九五) 撒潑。亂暴すること。
(九六) 小私窠賤根。惡罵の辭。
(九七) 尊親。れえさん株をいふ。
(九八) 拶掉。絃をひくことの出來ぬやうに、指枷をはめる意。
(九九) 風狂雨迅云云。楊老爺の怒に觸るればの意、觸惱は逆鱗に觸ること。
(一〇〇) 桃傷柳損云云。自ら殘敗を招くことを覺悟せよの意。
(一〇一) 嚇誂。怒り罵ること。
(一〇二) 氣死。腹が立つてたまらないこと、悶殺の意なり。
(一〇三) 扭。引きずること。
(一〇四) 雙輪。迎への車。
(一〇五) 湘裙。舞衣。
(一〇六) 當不的。だめ、むだの意なり。

[旦] 奴便終身守寡。有何難哉。只不嫁人。
[丑] 難道三百兩花銀。買不去儞這黃毛丫頭麼。
[旦] 儞要銀子。儞便嫁他。不要管人家閒事。
[丑怒介] 好丫頭。搶白起姨娘來了。我就死在儞家。[撒潑介]
小私窠賤根。小私窠賤根。掉巧舌訕謗尊親。
[淨發威介] 好大膽奴才。楊老爺新做了禮部。連儞們官兒都管的著。明日拏去拶掉儞指頭。管烟花要津。管烟花要津。觸惱他風狂雨迅。准備著桃傷柳損。
[旦] 儘儞嚇誂。奴的主意已定了。
[老旦] 看他小小年紀。倒有志氣。
[副淨] 嚇他不動。走罷走罷。
[丑] 我這裏撒潑。沒箇人來拉拉。氣死我也。他不嫁人。我扭也扭他下樓。硬推來門外雙輪。硬推來門外雙輪。兜折寶釧。扯斷湘裙。
[副淨] 自古有錢難買不賣貨。撒了賴當不的。大家散罷。

〔外・小旦〕我兩個原要不來吃虧（一〇七）。老燕老妥。强拉到此。惹了這場沒趣。走走走。快出門。掩羞面。氣忍（一〇八）呑聲。

〔淨・丑〕我們也走罷。乾發虛。沒鈔分。遺臊撒糞（一〇九）。〔外・淨・小旦・丑俱諢下〕

〔副淨・老旦〕香君放心。我們回絕楊老爺。再不來纏（一一〇）你便了。

〔旦拜介〕這等多謝二位。〔作別介〕

〔副淨〕蜂媒蝶使（一一一）鬧紛紛。〔旦〕闌入紅窗攪夢魂。

〔老旦〕一點芳心（一一二）採不去。〔旦〕朝朝樓上望夫君。

（一〇七）吃虧。損をすること、ひどい目に遇ふこと。
（一〇八）氣忍。怒を忍んで。
（一〇九）遺臊撒糞。糞つたれめといふ如き罵語なり。
（一一〇）纏。うるさくつきまとふなり。
（一一一）蜂媒蝶使。楊龍友の旨を受けて、香君に再婚を勸むる人をいふ。
（一一二）芳心。花心なり、此の句は香君の心を亂して、身を自由にし得ざりしをいふ。

第十八齣　爭位（一）　甲申五月

〔生上〕無定輸贏（二）似奕棋。書空殷浩（三）欲何爲。
長江（四）不限天南北。擊楫（五）中流看誓師。

小生侯方域。前日替史公修書。一時激烈。有三大罪五不可立之

（一）爭位。四鎭が互に座位を爭ふ場。
（二）輸贏。勝敗に同じ。
（三）殷浩。晉の殷浩、大志あり、其の黜けらるゝに及び日に咄咄怪事の四字を、空に書するのみ。

議。不レ料福王今已登レ極。馬士英竟入レ閣辦レ事。把二那些迎駕之臣一。皆錄レ功補用。史公雖二亦入一レ閣。又令レ督二師江北一。這分明有二外レ之之意一了。史公卻全不レ介レ意。反以二操兵剿一レ賊爲レ喜。如レ此忠肝義膽。人所レ難レ能也。現在開二府揚州一。令三俺參二共軍事一。約二定今日齊一二集四鎭一。共商二防河之計一。不レ免上前一問。[作レ至二書房一介] 管家那裏。

[小生扮二書僮一上] 俟爺來了。待二我通報一。

[小生] 請。

[外上]

(北點絳脣) 持レ節江皐。龍驤虎嘯。憂二國事一不レ顧二殘軀一。雙鬢蒼白了。

[見レ生介] 世兄可レ知今日四鎭齊集。共商二大事一。不日整レ師誓レ旅。雪二君父之讐一了。

[生] 如レ此甚妙。只有二一件一。高傑鎭二守揚・通一。兵驕將傲。那黃・劉三鎭。每發二不平之恨一。今日相見。大費二調停一。萬一兄弟不レ和。豈不レ爲二敵人之利一乎。

(四) 長江云云。魏の文帝、吳を討ちて江に臨み、波濤の洶湧するを見て、歎じて曰く、天の南北を限る所以なりと、遂に去る。

(五) 擊楫。晉の祖逖、慷慨にして大節あり、師を率ゐて江を渡り、中流にして楫を擊ち、誓つて曰く、逖、中原を清めずして復濟らば、此の江の如きあらんと。

(六) 外。疎外すること。

(七) 揚州。今江蘇揚州府。

(八) 四鎭。揚通の高傑、廬和の黃得功、淮徐の劉澤淸、鳳泗の劉良佐、是れなり。

(九) 防河。黃河の守備、卽ち淸兵の南下を防ぐこと。

(一〇) 管家。執事なり。

(一一) 書僮。ボーイ。

(一二) 持節。師を督すること。

(一三) 江皐。江上に同じ。

(一四) 龍驤虎嘯。威武の盛なること。

(一五) 揚通。揚州、通州共に江蘇に屬し、江北に在り。

(一六) 調停。仲を取り做すこと。

(一七) 費。盡力の意。

(一八) 敵人之利。鷸蚌の爭、漁人の利となる意。

〔外〕所說極是。今日相見。俺自有一番勸慰之言。

〔小生報介〕轅門傳鼓(一九)。說四鎭到齊。伺候參謁。

〔生下〕〔外升帳吹打開門〕〔雜排左右儀衞介〕

〔副淨扮高傑。末扮黃得功。丑扮劉澤淸。淨扮劉良佐。俱介冑(二〇)上〕

只恨燕京無樂毅(二一)。誰知江左有夷吾(二二)。

〔入見稟介〕四鎭小將。叩謁閣部大元帥(二三)。〔拜介〕

〔外拱手立介〕列侯請起。

〔副淨等俱排立介〕聽候元帥將令。

〔外〕本帥以閣部督師。君命隆重。大小將士。俱在指揮之下。

〔衆〕是。

〔外〕四鎭乃堂堂列侯。不比尋常武弁。〔擧手介〕(二四)屈尊(二五)侍坐。共議軍情。

〔衆〕豈敢。

〔外〕本帥命坐。便如軍令一般。不可推辭。

〔衆〕是。〔揖介〕告坐了(二六)。

(一九)傳鼓。案內を請ふこと。
(二〇)介冑。武裝なり。
(二一)樂毅。燕の昭王に用ひられ齊を討つて、其の七十餘城を下せり。
(二二)江左有夷吾。周顗江を渡り王導を見て曰く、江左に管夷吾ありと。
(二三)閣部大元帥。內閣大學士、兵部尙書をいふ。
(二四)擧手。敬禮の意。
(二五)屈尊。御出でを願ふ意。
(二六)告坐了。では御免と、挨拶して坐に就くこと。

〔副淨首坐末・丑・淨依次坐介〕〔末怒視副淨介〕

〔混江龍〕(二七)〔外〕淮南(二八)險要。江河保障勢滔滔。一帶奇雲結陣。滿目細柳(二九)垂條。鐵馬(三〇)嘶風先突塞。犀軍放弩(三一)早驚潮。說甚麼(オロカ)徐・常・沐・鄧(三二)。比得上(クラブベシ)絳・灌・蕭・曹(三三)。同心共把乾坤造。看古來功臣閣丹青圖畫。似今日列侯會劍佩弓刀。

〔末怒介〕元帥在上(三四)(オンマヘ)。小將本不敢爭論。〔指介〕這高傑。乃投誠(三五)草寇。有何戰功。今日公然坐俺(ワガ)三鎮之上。

〔副淨〕我投誠最早。年齒又尊(三六)(タカシ)。豈肯居爾等之下(シモ)。

〔丑〕此處是爾汛地(三七)。我們都是(スベテ)客兵(三八)。連(三九)(ヒトツノ)一箇賓主之禮(四〇)。不曉得。還要統兵。

〔淨〕他在揚州享受繁華。尊大慣了(ニナル)。今日也該(マタマサニ)讓咱們來享享(ウケシムベシ)。

〔副淨〕爾們敢來(四一)。我就奉讓(オユヅリセン)。

〔末〕那箇(タレカ)是不敢來的(モノゾ)。〔起介〕兩位(オフタリノ)劉兄同我出來。即刻見箇(クラベンコノ)(四二)

(二七)混江龍。此の曲の大意に云ふ、淮南は險要の地、大江滔滔として流れ、陣雲暗く、軍營嚴に、士馬强盛なり、今の四鎭は實に古の名將に比すべく、古來功臣の閣に畫かれたる丹青の像も、今日の列席の諸侯の、英姿颯爽たるに同じと。

(二八)淮南。淮水の南方、卽ち江北の地なり。

(二九)細柳。細柳營の故事にちなむ。

(三〇)鐵馬、犀軍。兵馬の强盛なるをいふ。

(三一)放弩。弩を放つて潮を射たるは吳越王の故事。

(三二)徐常沐鄧。明の名將、徐達、常遇春、沐英、鄧愈の四人なり。

(三三)絳灌蕭曹。漢の名臣、絳侯周勃、灌嬰、蕭何、曹參の四人なり。

(三四)在上。誓盟の辭。

(三五)投誠。官軍に投ずること。

(三六)尊。高に同じ、年長の意。

(三七)汛地。衞戍地。

(三八)客兵。御客のこと。

(三九)連。でさへもの意。

(四〇)賓主の禮。客に上席を讓るは、主人の禮なり。

强弱。〔怒下〕

〔外向副淨介〕他講的有理。俺還該謙遜纔是。

〔副淨〕小將寗死不在他們之下。

〔外〕俺這就大錯了。

(四三)〔油葫蘆〕四鎮堂堂氣象豪。倚仗著恢復北朝。看您挨肩雁序。恰似好同胞。爲甚的爭坐位失了同心好。(四四)鬪齒牙變了協恭(四五)貌。一箇眼睜睜(四六)同室操戈盾(四七)。一箇(四八)怒沖沖平地起波濤。沒見陣上逞威風。早已窩裏(四九)相爭鬧。笑中興封了一夥(五〇)小兒曹(五一)。

〔指介〕不料四鎮英雄。可笑如此。老夫一天高興(五二)。却早灰冷(五三)一半也。沒奈何。且出張告示。曉諭三鎮。叫他各回汛地。聽候調遣。

〔向副淨介〕俺既駐紮本境。就在本帥標下(五四)。做箇先鋒。各有執掌。他們也不敢來爭鬧了。

〔副淨〕多謝元帥。

(四一) 敢來。てむかふ意。
(四二) 箇强弱。誰が强きか、弱きか、箇は這箇、那箇の略、たれかれといふが如し。
(四三) 油胡蘆。此の曲の大意に云ふ。四鎭の大將は、堂堂としてけだかく、北京を恢復するは、實に其の力による、今肩を並べて坐する樣を見れば、恰も仲のよき兄弟に似たり、何の爲めに坐位を爭ひ、年輩を論じて、歡を失ひ、一方は目を怒らして、兄弟喧嘩をなし、一方はぷんぷんして平地に事を起すや、戰場に臨んで、奮戰せざるうちに、却て內輪もめをなす、實に中興といつても、つまらぬものを封じたるものかなと痛嘆する意。
(四四) 鬪齒牙。年齡を論ずること。
(四五) 協恭。謙恭に同じ。
(四六) 眼睜睜。怒つて眼を見張ること。
(四七) 同室操戈盾。兄弟喧嘩をなすに喩ふ。
(四八) 怒沖沖。ぷんぷんと怒ること。
(四九) 窩裏。家裏に同じ。
(五〇) 一夥。一群に同じ。
(五一) 小兒曹。小人を罵つていふ
(五二) 高興。愉快の意。
(五三) 灰冷。さますこと。
(五四) 標下。麾下に同じ。

〔外〕待老夫寫起告示來。〔寫介〕

〔內吶喊介〕〔副淨不辭出介〕

〔末・丑・淨持刀上〕高傑快快出來。

〔副淨出見介〕儞青天白日。持刀吶喊。竟是反(五五)了。

〔末〕我們爲甚麼反。只要殺儞這箇無禮賊子。

〔副淨〕儞們敢在帥府門前如此放肆。難道不是無禮賊子麼。

〔末・丑・淨趕殺(五六)副淨介〕

〔副淨入轅門叫介〕閣部大老爺救命呀。黃・劉三賊殺入帥府來了。

〔末・丑・淨門外喊罵介〕〔外驚立介〕

〔天下樂〕俺只道塞馬(五七)南來把戰挑。殺聲漸高。卻是咱兵自鏖。這時候協力同讐還愁少。怎當的鬩牆(五八)鼓譟。起了箇離開(五九)根苗。這纔是將難調(六〇)北賊易討。

〔吩咐介〕快請侯相公出來。

(五五)反。謀反なり。

(五六)趕殺。殺は助字なり。

(五七)塞馬。胡馬の意。清兵をいふ。

(五八)鬩牆。內輪喧嘩をいふ。

(五九)離開。仲間割れのこと。

(六〇)將難調。諸將を調和することは、北方の賊を討伐するよりも難きを歎ぜしなり。

[雜向內介] 侯爺有請。
[生急上] 晚生已聽的明白了。
[外] 借重高才。傳俺帥令。安撫亂軍。
[生] 如何安撫。
[外] 老夫有告示一紙。快去曉諭他們便了。
[生] 遵命。[接告示出見介] 列侯請了。小弟乃本府[六一]參謀。奉閣部大元帥之命。曉諭三鎭知悉。恭逢新主中興。闖賊未討。正我輩枕戈待旦。立功報效之時。不宜懷挾小忿致亂大謀。俟收復中原。太平賜宴。論功敘坐。自有朝儀。目下軍容匆遽。凡事權宜。皆當和諒。無失舊好。興平侯高。原鎭揚・通。今卽留在本帥標下。委作先鋒。靖南侯黃。仍回廬・和[六二]。東平侯劉。仍回淮・徐[六三]。廣昌侯劉。仍回鳳・泗[六四]。靜聽調遣[六五]。勿得抗違。軍法凜然。本帥不能容情[六六]也。特諭。
[末] 我們只要殺無禮賊子。怎敢犯元帥軍法。
[生] 目今轅門截殺[六七]。這就是軍法難容的了。
[丑] 既是這等。不要驚著元帥。大家且散。

(六一) 本府。幕府の意。

(六二) 廬和。廬州府と和州、共に安徽省に屬す。
(六三) 淮徐。淮安府と徐州府、共に江蘇省に屬す。
(六四) 鳳泗。鳳陽と泗州、共に安徽省に屬す。
(六五) 調遣。差遣に同じ。
(六六) 容情。罪を免すこと。
(六七) 截殺。爭鬪のこと。

〔淨〕明日殺ニ到高傑家裏ニ去罷。正是。國讐猶可レ恕。私恨最難レ消。

〔下〕

〔生入見介〕三鎭聞レ令。暫且散去。明日還要ニ厮殺ー哩。

〔外〕這卻怎處。〔指ニ副淨ー介〕

〔後庭花〕高將軍倆橫將ニ讐釁ー招。爲ニ甚的ー不ニ謙恭ー妄自驕。坐ニ了箇首席鄕三老ー。惹ニ動他諸侯五路刀ー。憑ニ儀・秦一番舌戰巧ー。也不レ過ニ息レ兵半晌饒ー。費ニ調停ー。乾焦躁。難ニ消釋ー。空懊惱。這情形待レ瞧。那事業全丟了。

〔副淨〕元帥不ニ必著急ー。明日和レ他見ニ過輸贏ー。把ニ三鎭人馬ー併ニ俺一處ー。隨ニ著元帥ー。恢ニ復中原ー。卻亦不レ難也。

〔外〕倆說的是那裏話。現今流寇北來。將レ渡ニ黃河ー。總兵許定國。不レ能ニ阻當ー。連夜告レ急。正要下與ニ四鎭ー商議上。發レ兵防レ河。今日一動ニ爭端ー。僨ニ俺大事ー。豈不レ可レ憂。

〔副淨〕他三鎭也不レ爲ニ別的ー。只因ニ揚州繁華ー。要ニ來奪取ー。俺怎肯讓

（六八）鄕三老。鄕の長老なり、漢の時鄕に三老あり。

（六九）五路刀。秦、趙の邯鄲を圍むこと急なり、魏の信陵君、五諸侯の兵を率ゐて、秦兵を海外に破りて、其の圍みを解けり、ここにては鄕三老、五路刀と對句に用ひしなり。

（七〇）儀秦云云。張儀、蘇秦の舌戰は、侯朝宗の調停の勞を指していふ。

（七一）這情形云云。此の四鎭の不和の有樣は、見るまでもなく明白にして、彼の調停のことは徒勞に歸せりとの意。

（七二）見過。勝負をつける意。

（七三）併一處。自分の部下に併せること。

（七四）三家。魯の三家を借りて、三鎭のことをいふ、句意は、三鎭と相爭ふは、恰も累卵を以て泰山を壓倒せんとする如くにて到底不可能なるをいふなり。

（七五）廿四橋云云。杜牧の揚州の詩に「二十四橋明月夜、玉人何處教ニ吹簫一」とあり。

（七六）隋堤柳下。隋の煬帝、江都（揚州）の離宮を營み、運河を通じ、その堤上に柳を植ゑたり。
（七七）蕃釐觀。唐の道院にして有名なるもの、遊人極めて多し。
（七八）瓊花。牡丹なるべし。
（七九）揚州鶴。古語に「腰纏ニ十萬貫一騎レ鶴下ニ揚州一」と、富貴の樂を極むるをいふ。句意は高傑の一人、揚州に在りて、富貴の樂を享くるを羨みて、三鎭が兵力を以て來り爭ふをいふなり。
（八〇）殺聲、咽斷。戰爭の始まる意。
（八一）廣陵。揚州の古名なり。
（八二）拚一死。一死の覺悟を決したる意。
（八三）弔場。一人舞臺に留りて跡を弔ひ、歎息することなり。
（八四）黃金壩。飛州城外に在るべし。
（八五）龍爭虎鬪。雌雄を決すること。
（八六）劉項。漢楚の爭。
（八七）將軍頭斷。關羽の故事か、一般に斷頭將軍といへば、嚴顏のことに用ひらる、然れども嚴顏は張飛に降らず、曹操に降らざりしに非ず、但しこの字押韻の爲めに用ひらる。

レ他。
〔外〕這話益發可レ笑了。
〔煞尾〕領ニ著一枝兵一。和ニ他三家（七四）一傲。似ニ累卵泰山壓倒一。倆占ニ住繁華廿四橋（七五）一。竹西明月夜吹レ簫。他也想ニ隋堤（七六）柳下安ニ營巢一。不レ教ニ倆蕃釐觀（七七）獨誇ニ瓊花（七八）少一。誰不レ羨ニ揚州鶴（七九）背飄一。妬殺倆腰纏十萬好。怕明日殺聲（八〇）咽ニ斷廣（八一）陵濤一。罷罷罷。老夫已拚（八二）ニ一死一。更無ニ他法一。俟兄長才。只索レ憑ニ倆籌畫一了。
〔生〕且看ニ局勢一再作ニ商量一。〔外・生下〕〔吹打掩レ門雜倶下〕
〔副淨弔（八三）レ場介〕俺高傑也是一條好漢。難道坐以待レ斃不レ成。明早黃金壩（八四）上。點ニ齊人馬一。排ニ下陣勢一。等ニ他來時一。迎レ敵便了。正是。
龍（八五）爭虎鬪逞ニ英豪一。杯酒筵邊動ニ劍刀一。
劉（八六）項何須ニ成敗論一。將（八七）軍頭斷不レ降レ曹。

第十九齣　和戰(一)

甲申五月

[末・淨・丑扮黃得功。劉良佐。劉澤淸戎裝。雜扮軍校執旂幟器械吶喊上]

[末] 兄弟們俱要小心著。聞得高傑點齊人馬。在黃金壩上。伺候迎敵。我們分作三隊。依次而進。

[淨] 我帶的人馬原少。讓我挑戰。兩兄迎敵便了。

[末] 我的田雄不會來。我作第二隊。總叫鶴州(二)哥哥壓哨(三)罷。

[丑] 就是如此。大家殺向前去。[搖旗吶喊急下]

[副淨扮高傑戎裝。軍校執械隨上] 大小三軍。排開陣勢。伺候迎敵。

[雜扮探卒(四)上] 報報報。三家賊兵。搖旗吶喊。將次到營了。

[淨持大刀上] 老高(五)。快快出馬。今日和俺爭箇誰大誰小。

[副淨持鎗罵上] 俺花馬劉(六)。是咱家小兄弟(七)。那箇怕俺。

(一)和戰。四鎭の相爭ふ場。

(二)鶴州哥哥。劉澤淸を呼んでいふ。

(三)壓哨。軍の後方にありて兵を督し、其退却を抑ふるなり、後衛の意。

(四)探卒。斥候なり。

(五)老高。老はおいぼれの意、罵語なり。

(六)花馬劉。劉良佐を罵りていふ花は文身の意か。

(七)小兄弟。弱卒をいふ。

〔內擊鼓。淨・副淨厮殺介〕

〔副淨叫介〕 三軍齊上。活捉(八)了這箇劉賊。

〔雜上亂戰介〕〔淨敗下〕

〔末持雙鞭上〕 我黃闖子(九)的本領。你是曉得的。快快磕頭。饒你一死。

〔副淨〕 我高老爺。不稀罕你這活頭。要取你那顆死頭(一〇)的。

〔內擊鼓〕〔末・副淨厮殺介〕

〔副淨叫介〕 三軍再來。

〔雜上亂戰介〕

〔末急介〕 從來將對將(一一)。兵對兵。如何這樣混戰。到底是箇無禮賊子。今日且輸與你。〔敗下〕

〔丑持雙刀領衆喊上介〕 高傑。你不要逞强。我劉鶴洲。也帶著些人馬哩。咱就混戰一場。有何不可。

〔副淨〕 我翻天鷂子(一二)。不怕人的。憑你竪戰(一三)也可。橫戰也可。殺殺殺。

〔兩隊領衆混戰介〕〔生持令箭(一四)立高臺小軍持鑼鼓介〕〔衆止殺

(八) 活捉。生擒の意。

(九) 黃闖子。諢號なり。

(一〇) 死頭云云。殺してしまふ意。

(一一) 將對將。將は將に對し、兵は兵に對するは尋常の仕合なり

(一二) 翻天鷂子。極めて猛き鷹の類、自分の勇猛に喩ふ。

(一三) 竪戰橫戰。左右前後より攻めかかる意。

(一四) 令箭。指揮の小旗なり。

仰看介]

[生搖令箭介] 閣部大元帥有令。四鎭作反。皆督師之過。請先到帥府。殺了元帥。次到南京。搶了宮闕。不必在此混戰。騷害平民。

[丑] 我們並不曾作反。只因高傑無禮。混亂坐次。我們爭箇明白。日後(一五)好參謁元帥。

[副淨] 我高傑乃本標先鋒。怎敢作反。他們領兵來殺。只得迎敵。

[生] 不奉軍令。妄行厮殺。都是反賊。明日奏聞朝廷。爾們自去分辯罷。

[丑] 朝廷是我們迎立的。元帥是朝廷差來的。我們違了軍令。使是叛了朝廷。如何使得。情願束身待罪。只求元帥饒恕。

[生] 高將軍爾如何說。

[副淨] 我高傑是元帥犬馬(一六)。犯了軍法。只聽元帥處分。

[生] 既如此說。速傳黃・劉三鎭。同赴轅門。央求元帥。

[丑] 二鎭敗走。各回汛地去了。

[生] 爾淮・揚兩鎭。脣齒之邦。又無宿嫌(一七)。爲何聽人指使(一八)。快快前去。

(一五) 日後。後日の意。

(一六) 犬馬。手兵、部下の意。

(一七) 宿嫌。宿恩に同じ、まへかたよりの不和をいふ。

(一八) 指使。差圖をいふ。

候元帥發落。
[衆兵下] [生下臺。丑・副淨同行到介]
[生] 已到轅門了。兩位將軍。在外等候。待俺傳進去。 [稍遲卽出介] 元帥有令。四鎭擅相爭奪。皆當軍法從事。但高將軍不知禮體。挑嫌起釁。罪有所歸。著與三鎭服禮。(一九)候解和之日。再行處分。
(香柳娘) 勸將軍自思。勸將軍自思。禍來難救。(二〇)負荊早向轅門叩。
[副淨惱介] 我高傑。乃元帥標下先鋒。元帥不加護庇。到叫與三鎭服禮。可不羞死人也。罷罷罷。看來元帥也不能用俺了。不免領兵渡江。另做事業去。這屈辱怎當。這屈辱怎當。渡過大江頭。(二一)事業(二二)掀天做。 [喚介] 三軍快來。隨俺前去。
[衆兵上。吶喊搖旗隨下]
[丑望介] 呀呀呀。高傑竟要過江了。想江南有他的黨與。不日要領來與俺厮殺。俺也早去。約會黃・劉二鎭。多帶人馬。到此迎敵。笑力窮遠走。笑力窮遠走。長江洗(二三)羞。防他重來作寇。 [丑下]

(一九) 服禮。謝罪の意。

(二〇) 負荊。趙の廉頗、藺相如の故事に出づ、頗肉袒荊を負うて罪を相如に謝し、遂に刎頸の交を爲す。

(二一) 事業云云。謀反を做さんとする意。

(二二) 掀天。掀は掀翻の意、掀天の事業は、蓋し謀反なり。

(二三) 洗羞。羞を雪ぐこと、捲土重來の意。

〔生呆介〕不料局勢如此。叫俺怎生收救。

〔前腔〕恨山河半傾。恨山河半傾。怎能重構。人心瓦解忘恩舊。

〔南望介〕那高傑竟是反了。看揚揚渡江。看揚揚渡江。旗幟亂中流。直入南徐口。〔北望介〕那劉澤淸。也急忙北去。要約會三鎭人馬。同來迎敵。這烟塵徧有。這烟塵徧有。好叫俺元帥搔頭。參謀搓手。〔行介〕且去回覆了閣部。再作計較。正是。

堂堂開府轄通侯。　江北淮南數上游。

只恐樓船與鐵馬。　一時都羨好揚州。

（二四）山河。國家をいふ。

（二五）重構。再興のこと。

（二六）南徐口。揚子江の渡なり。

（二七）烟塵。戰亂のこと。

（二八）搔頭搓手。共に當惑の體なり。

（二九）通侯。徹侯の意、四鎭の諸侯をいふ。轄は管轄すること。

（三〇）上游。出張すること。

（三一）樓船鐵馬。兵船と兵馬、南北の兩軍が共に揚州を爭ふこと

第二十齣　移防

甲申六月

〔副淨扮高傑領衆執械上〕

〔錦上花〕策馬欲何之。策馬欲何之。江鎖堅城。弩射

（一）移防。兵を移して河を防ぐこと、卽ち鎭營を移す場なり。

雄師。且收兵。且收兵。占住這揚州市。

俺高傑領兵渡江。要搶蘇杭(二)。不料巡撫鄭瑄。操舟架礮。堵住江口。沒奈何又回揚州。但不知黃・劉三鎮此時何往。

〔雜扮報卒上〕報上將軍。黃・劉三鎮。會齊人馬。南來迎敵。前哨已到高郵(三)了。

〔副淨〕呵呀。不好了。南下不得。北上又不能。好叫俺進退兩難。〔想介〕罷罷。還到史閣部轅門。央他的老體面(四)。替俺解救罷。〔行介〕

〔前腔〕速去乞恩慈。速去乞恩慈。空忝羞顏。答對何辭(五)。這纔是。這纔是。自作孽天教死(六)。

〔內喊介〕〔副淨領衆走下〕

〔外扮史可法從人上〕

〔搗練子〕局已變。勢難支。躊躕(七)中夜少眠時。

〔生上〕自歎經綸空滿紙(八)。

（二）蘇杭。蘇州、杭州地方。

（三）高郵。縣名、江蘇省に屬す。

（四）老體面。年寄の株の意。

（五）何辭。何とも申譯の致し樣もなし。

（六）自作孽云云。天災は避くべきも、自ら招きたる禍は逃るべからざるをいふ。書經太甲中篇に出づ「天の作せる孽は猶ほ違るべきも、自ら作せる孽は逭るべからず」と、孟子離婁上篇に此の語を引きて道を活に作る、故にここに「天も死なしむ」となすなり。

（七）躊躕。痛心の意。

（八）空滿紙。反古になりしこと。

[外向生介] 世兄。爾看高傑不辭而去。三鎭又不遵軍法。俺本標人馬。爲數無幾。怎能守得住江北。眼看大事已去。奈何奈何。

[生] 聞得巡撫鄭瑄。堵住江口。高傑不能南下。又回揚州來了。

[外] 那三鎭如何。

[生] 三鎭知他退回。會齊人馬。又來迎敵。前哨已到高郵了。

[外愁介] 目前局勢。更難處矣。

(玉抱肚) (九)三百年事。是何人掀翻到此。隻手兒怎擎青天。卻(一〇)萊兵總仗虛詞。

[合] 烟塵滿眼野橫屍。 只倚揚州兵一枝。

[丑扮中軍官傳鼓介]

[雜問介] 門外擊鼓。有何軍情。

[丑] 將軍高傑領兵到(一一)轅。求見元帥。

[外] 他果然來了。傳他進來。看他有何話說。

[外(一二)升帳開門左右排列介]

[副淨急跑上介] 小將高傑。擅離汛地。罪該萬死。求元帥開恩饒

(九) 三百年。明朝三百年の天下を何人が覆したるか、自分の獨力にては到底支へ難しとの意。

(一〇) 萊兵。春秋、夾谷の會に、齊侯萊人をして、兵を以て魯侯を劫さしむ、孔子禮を以て之を退く、此の句の意は、四鎭の兵を退くるにも、空言に仗り、實力の無きを歎ずるなり。

(一一) 轅。轅門なり。

(一二) 升帳。正座に就くこと。

恕。

[外] 儞原是一箇亂民。朝廷許儞投誠。加封侯爵。不曾薄待了儞。爲何一言不合。竟自反去。及至渡江不得。又投轅門。忽而作反。忽而投誠。把箇作　投誠。當做兒戲。豈不可恨。本該軍法(一三)從事。姑念儞悔罪之速。暫且饒恕。

[副淨叩頭起介]

[外問介] 儞還有何說。

[副淨又跪介] 前日擅離汛地。只爲不肯服禮。今三鎭知俺回來。又要交戰。小將雖强。獨力怎支。還望元帥解救。[向生央介] 侯先生。替俺美言(一四)一句。

[生] 儞不肯服禮。叫元帥如何處斷。

[外] 正是。事到今日。本帥也不能偏護(一五)了。

(前腔) 爭論坐次。動干戈不知進止(一六)。他三家鼎足(一七)稱雄。儞孤軍危命如絲。

[合前(一八)]

(一三) 軍法。軍の刑法により、死に處すべき所を、死を饒すなり。

(一四) 美言。善言に同じ、忠告の意。

(一五) 偏護。依怙贔屓の意。

(一六) 進止。進退に同じ。

(一七) 鼎足、鼎は三脚なり、故に三人の同盟をいふ。

(一八) 合前。合は合唱のこと、前は前の通りの意、前の「玉抱肚」の末に「[合]烟塵滿眼野橫屍、只倚揚州兵一枝」とあり、卽ち此の曲にても烟塵以下の句を合唱するなり。

〔副淨〕元帥不肯解救。小將寧可碎首轅門。斷不拜他下風。(一九)
〔生〕倆那黃金壎上威風。那裏去了。
〔副淨〕那時他沒帶人馬。俺用全軍混戰。因而取勝。今日三家捲(二〇)土齊來。小將不得不臨事而懼矣。
〔生〕小生倒有個妙計。只怕倆不肯依從。
〔副淨〕除了服禮。都依。都依。
〔生〕目今流賊南下。將渡黃河。許定國(二一)不能阻當。連夜告急。元帥正要發兵防河。倆何不奉命前往。坐鎮開・洛。(二二)既解目前之圍。又立將來之功。他三鎮知倆遠去。也不能與無名之師了。將軍以爲何如。
〔副淨低頭思介〕待我商量。(二三)
〔內吶喊介〕
〔外〕城外殺聲震天。是何處兵馬。
〔丑報介〕黃・劉三鎮領兵到城。要與高將軍廝殺哩。
〔副淨懼介〕這怎麼處。只得聽元帥調遣(二四)了。

(一九)不拜他下風。下につかぬこと。
(二〇)捲土。捲土重來にて、でなほしの意。
(二一)許定國。身を卒伍より起し河南の總兵となり、後高傑を殺して、淸に降る。
(二二)開洛。今河南の開封、洛陽地方。
(二三)商量。考慮すること。
(二四)調遣。派遣なり。

［外］既然肯去。速傳軍令。曉諭三鎭。［拔令箭丟地介］［丑拾令箭跪介］

［外］高傑無禮。本當軍法從事。但時値用人之際(二五)。又念迎駕之功。暫且饒恕。罰往開・洛防河。將功贖罪。今日已離揚州。三鎭各釋小嫌。共圖大事。速速回汛。聽候調遣。

［丑］得令。［下］

［外指高傑介］高將軍。高將軍。只怕爾的性氣。到處不能相安(二六)哩。

［前腔］黃河(二七)難恃。勸將軍謀終慮始。那許定國。也不是箇安靜(二八)的。須隄防(二九)酒前茶後。軟刀鎗(三〇)怎鬪雄雌。

［合前］

［向生介］防河一事。乃國家要著(三一)。我看高將軍。勇多謀少。倘有疏虞(三二)。罪坐老夫。仔細想來。河南原是貴鄉。吾兄日圖歸計(三三)。路阻難行。何不隨營前往。既遂還鄉之願。又好監軍防河。且爲桑梓造福。豈非一擧而三得乎。

［生］多謝美意(三四)。就此辭過元帥。收拾行裝。即刻起程(三五)便了。

(二五) 用人之際。人物を必要とする時。

(二六) 相安。他人と調和すること。

(二七) 黃河。黃河は天險なれども決して油斷すべからざる意。

(二八) 安靜。溫和の意。

(二九) 隄防。用心、豫防の意。

(三〇) 軟刀鎗。なまくら刀の意、宴席などにて、彼の術策に陷らぬ様、豫め用心すべきをいふ。

(三一) 要著。要計なり。

(三二) 疏虞。粗忽、失策の意。

(三三) 歸計。歸鄉の算段。

(三四) 美意。御厚意に同じ。

(三五) 起程。發程に同じ。

〔副淨〕一同告辭罷。〔拜別介〕

〔外向生介〕參謀(三六)此去。便如老夫親身防河一般。只恐勢局叵測。須要十分小心。老夫專聽好音也。正是人事(三七)無常爭勝負。天心有定管興亡。〔下〕

〔吹打掩門生副淨出介〕

〔副淨〕侯先生爾聽殺聲未息。只怕他們前面截殺。

〔生〕無妨也。他們知爾移防。怒氣已消。自然散去的。況且三鎭之兵。俱走東路(三八)。我們點齊人馬。宜出北門。從天長(三九)六合(四〇)。竟奔河南。有何阻當。

〔衆兵旗仗伺候介〕

〔副淨〕就此起程。〔行介〕

〔朝元令〕〔生〕鄉園繫思。久斷平安字。烏棲(四一)一枝。鬱鬱難居此。結伴還鄉。白雲(四二)如駛。遂了三年歸志。

〔副淨〕統著全師。烟城柳驛(四三)行參差(四四)。莫提舊雄姿。函關(四五)偸度時。

(三六) 參謀。侯朝宗をいふ。

(三七) 人事云云。人は常に勝負を爭ひ、興亡は天命ある意。

(三八) 東路。東の街道なり。

(三九) 天長。縣名、江蘇省に屬す。

(四〇) 六合。縣名、安徽省に屬す。

(四一) 烏棲一枝。烏に反哺の孝あり、一枝に棲むとは親子一家に同棲する意。

(四二) 白雲云云。唐の狄仁傑、山上より故郷の白雲を望み、老親のその下にあるを思ひて、悲みし故事。

(四三) 烟城柳驛。揚州道中の好景色をいふ。

(四四) 參差。行軍の整はざるをいふ。

(四五) 函關。函谷關なり、偸に度るは、孟嘗君の故事を用ふ、微行の意なり。

〔合〕揚州倒指。看不見平山蕭寺(四六)。平山蕭寺。

〔副淨〕落日林梢照大旗(四七)。〔生〕從軍北去慰鄉思。

〔副淨〕黃河(四八)曲裏(四九)防秋將。〔生〕好似英雄末路時。

(四六) 平山蕭寺。平山堂をいふ、揚州の名刹なり、梁武帝姓は蕭好んで寺を造る、故に寺を蕭寺といふ。
(四七) 大旗。大將軍の旗。
(四八) 黃河防秋。秋高く馬肥ゆる時、胡兵の來り侵すを防ぐこと元來は黃河の上流のことなれどもここにては借りて用ひたり。
(四九) 曲裏。黃河九曲と稱す。

閏(一)二十齣　閒(二)話　甲申七月

〔內鳴金擂鼓吶喊介〕

〔外扮老官人白巾麻衣(三)背包裹急上〕戎馬(四)消何日。乾坤賸(五)此身。白頭江上客。紅淚自沾巾。〔立住大哭介〕

〔小生扮山人背行李上〕日淡村烟起。江寒雨氣來。

〔丑扮賈客背行李上〕年年(六)經過路。離亂使人猜。

〔小生見丑介〕請了。我們都是上南京的。天色將晚。快些趲(七)行。

〔丑〕正是兵荒馬亂。江路難行。大家作伴纔好。〔指外介〕那箇

(一) 閏。餘りの意、附加の一齣なり。
(二) 閒話。旅人が三人で世間話をする場。
(三) 白巾麻衣。喪服なり。
(四) 戎馬。戰爭をいふ、何時になつたら、戰爭が止むであらうかの意。
(五) 賸。生殘る意。
(六) 年年云云。年年通る道ながら人をして亂離の狀を思はしむ。
(七) 趲行。急ぎ去るをいふ。

老者。爲何立住了脚。只顧啼哭。
〔小生問外介〕老兄。想是走錯了路。失迷什麼親人(八)了。
〔外搖手介〕不是。不是。俺是從北京下來的。行到河南。遇著高傑兵馬。受了無限驚恐。剛得逃生。渡過江(九)來。看見滿路都是逃生奔命之人。不覺傷心。慟哭幾聲。〔掩淚介〕
〔小生〕原來如此。可憐可歎。
〔丑〕既是北京下來的。俺正要問問近日的消息。何不同宿村店。大家談談。
〔外〕甚妙。我老腿(一〇)無力。也要早歇哩。
〔小生指介〕這座村店。稍有牆壁(一一)。就此同宿了罷。〔讓介〕請進。
〔同入介〕
〔外仰看介〕好一架豆棚(一二)。
〔小生〕大家放下行李。便坐這豆棚之下。促膝閒話也好。〔同放行李坐介〕
〔副淨扮店主人上〕村店新泥(一三)壁。田家老瓦(一四)盆。

(八) 親人。親子兄弟をいふ。
(九) 江。揚子江。
(一〇) 老腿。老いたる脚なり。
(一一) 牆壁。かべ造をいふ。
(一二) 豆棚。夕顔棚の類なるべし
(一三) 新泥。塗りたての意。
(一四) 老瓦。ふるぼけたる瓦。

（一五）不消。無用の意。
（一六）乏困。俗語にて、乏は疲勞の意。
（一七）取擾。饗應になること。
（一八）回敬。返禮のこと。
（一九）索債。掛け取り。
（二〇）狠狽。急ぎあわてる意。
（二一）錦衣衛。近衛軍なり。
（二二）堂官。長官をいふ。

〔問介〕衆位客官。還用晚飯麼。
〔衆〕不消（一五）了。
〔小生〕煩倆買壺酒來。削瓜剝豆。我與二位解解乏困（一六）罷。
〔外向小生介〕怎好取擾（一七）。
〔丑向外介〕四海兄弟。卻也無妨。待用完此酒。咱兩箇再回敬（一八）他。
〔副淨取酒菜上〕〔三人對飲介〕
〔外問介〕方纔都是路遇。不曾請教尊姓大號。要到南京。有何貴幹。
〔小生〕在下姓藍名瑛。字田叔。是西湖畫士。特到南京訪友的。
〔丑〕在下是蔡益所。世代南京書客。纔從江浦索債（一九）回來的。〔問外介〕老兄是從北京下來的了。敢問高姓大名。有甚急事。這等狠狽（二〇）。
〔外〕不瞞二位說。下官姓張名薇。原是錦衣衛（二一）堂官（二二）。
〔丑驚介〕原來是位老爺。失敬了。
〔小生問介〕爲何南來。

〔外〕 三月十九日。流賊攻破北京。崇禎先帝縊死煤山。周皇后也殉難自盡。下官走下城頭。領了些(二三)本官校尉。尋著屍骸。擡到東華門外。買棺(二四)收殮。獨自一個(二五)戴孝(二六)守靈。

〔小生〕 那舊日的文武百官。那裏去了。

〔外〕 何曾看見一人。那時(二七)闖賊搜查朝官。(二八)逼索兵餉。將我監禁(二九)夾打。我把家財盡數與他。纔放我守靈戴孝。別個官兒走的走。藏的藏。或被殺。或下獄。或一身殉難。或(三〇)闔門死節。

〔小生〕 有這樣忠臣。可敬可敬。

〔外〕 還有進朝稱賀。做闖賊(三一)僞官的哩。

〔丑〕 有這樣(三二)狗彘。該殺。該殺。

〔外掩涙介〕 可憐皇帝皇后兩位(三三)梓宮。丟在路旁。竟沒人(三四)倸睬。

〔小生・丑俱掩涙介〕

〔外〕 直到四月初三日。禮部奉了(三五)僞旨。將梓宮擡送皇陵。我執旛(三六)送殯。走到(三七)昌平州。虧了一個趙(三八)吏目。糾合義民。(四〇)捐錢(三九)三百串。掘開(四一)田皇妃舊墳。安葬當中。下官就看守陵旁。早晚上香。誰想五月初

(二三) 本官校尉。士官をいふ。
(二四) 收殮。屍を棺に收めること。
(二五) 戴孝。喪服を著けること。
(二六) 守靈。柩を守ること。
(二七) 闖賊。明末の流賊をいふ、闖は亡賴の意、崇禎二年馬賊高迎祥自ら闖王と稱す、李自成往いて之に依り、闖將と號す、後迎祥誅に伏し、賊將自成を推して闖王となす。
(二八) 逼索。無理にもとむること。
(二九) 夾打。夾板にて手を挾む刑なり。
(三〇) 闔門。全家に同じ。
(三一) 僞官。賊の役人。
(三二) 狗彘。畜生の意。
(三三) 梓宮。帝后の棺は、元來梓にて造る、故にいふ。
(三四) 倸睬。取り合ふこと。
(三五) 僞旨。賊の命。
(三六) 送殯。送葬に同じ。
(三七) 昌平州。今の北京の東北百餘里に在り、明の皇陵のある所なり。
(三八) 吏目。猶ほ書記といふ如し各州の吏目は、盜賊獄囚の事を掌る。
(三九) 三百串。串は貫に同じ。今吊といふ、一千文なり。
(四〇) 捐。義捐の意。
(四一) 田皇妃。崇禎帝の先后なり

句。大兵進關。殺退流賊。安了百姓。替明朝報了大讐。特差工部。查寶泉局内鑄的崇禎遺錢。發買工料。從新修造享殿碑亭。門牆橋道。與十二陵一般規模。眞是亙古希有的事。下官也沒等工完。親手題了神牌。寫了墓碑。連夜走來。報與南京臣民知道。所以這般狼狽。

〔小生〕 難得。難得。若非老先生在京。崇禎先帝竟無守靈之人。

〔丑問介〕 但不知太子二王。今在何處。

〔外〕 定・永兩王。並無消息。聞太子渡海南來。恐亦爲亂兵所害矣。

〔掩涙介〕

〔小生問介〕 聞得北京發書一封。與閣部史可法。責備亡國將相。不去奔喪哭主。又不請兵報仇。史公答了回書。特著左懋第披麻扶杖。前去哭臨。老先生可曉得麼。

〔外〕 下官半路相遇。還執手慟哭了一場的。

〔内作大風雷聲介〕

〔副淨掌燈急上〕 大雨來了。快些進房罷。

(四二) 大兵。清朝の兵をいふ。
(四三) 關。山海關をいふ。
(四四) 工部。工部省の役人。
(四五) 寶泉局。造幣局なり。
(四六) 工料。工事に用ふる材料。
(四七) 享殿。拜殿に同じ。
(四八) 碑亭。石碑を蓋ふ亭。
(四九) 十二陵。昌平には崇禎帝を併せて十三陵あり。
(五〇) 神牌。御位牌。
(五一) 難得。當世に得難き意なり
(五二) 二王。二皇子、卽ち定王と永王なり。
(五三) 並。俗語の「決して」に同じ。
(五四) 北京。清朝を指す。
(五五) 責備。責めるなり。
(五六) 回書。有名なる答睿親王書是なり、或は侯朝宗の筆になるともいふ。
(五七) 披麻。喪服を著るをいふ。

〔衆起以㆑袖遮㆑頭入㆑房介〕 好雨好雨。(五八)
〔外〕 天色已晚。下官該㆑行㆑香了。(五九)
〔丑問介〕 替㆓那箇㆒行㆑香。
〔外〕 大行皇帝(六〇)。未㆑滿㆓週年㆒。下官現穿㆓孝服㆒(六一)。每早每晚。要㆓行㆑香哭拜㆒的。〔取㆓包裹㆒出㆓香爐香盒㆒。設㆓几上㆒介〕〔洗㆑手介〕〔望㆑北兩拜介〕(六二)
〔跪上㆑香介〕 大行皇帝呀。大行皇帝呀。今日七月十五(六三)。孤臣張薇叩頭上㆑香了。
〔內作㆓大風雷㆒不㆑止介〕〔外伏㆑地放㆑聲大哭介〕
〔小生呼㆑丑介〕 過來。過來。我兩箇草莽之臣(六四)。也該㆓隨拜舉㆑哀的。
〔小生・丑同跪陪哭介〕〔哭畢俱叩頭起。又兩拜介〕
〔小生〕 老先生遠路疲倦。早早安歇了罷。
〔外〕 正是。各人自便了(六五)。
〔各解㆓行李㆒臥倒介〕
〔小生〕 窗外風雨。益發不㆑住。明早如何登㆑程(六六)。
〔外〕 老天(六七)的陰晴。人也料他不定。

(五八) 好雨。好は甚しき意。
(五九) 行香。燒香なり。
(六〇) 大行皇帝。皇帝新に崩じて諡號未だ定まらず、大行皇帝と稱す、神去ります意なり。
(六一) 孝服。喪服なり。
(六二) 兩拜。再拜に同じ。
(六三) 七月十五。盂蘭盆會の日なり。
(六四) 草莽之臣。野に在る臣の意。
(六五) 自便。自由隨便の意なり。
(六六) 登程。起程に同じ。
(六七) 老天。天の意。

(六八) 唱本。歌の本なり。
(六九) 手摺。手控なり。
(七〇) 奉送。贈呈の意。
(七一) 投順。降參の意。
(七二) 鈔本。手記なり。
(七三) 厲鬼。亡者なり。
(七四) 細樂、低聲の音樂。
(七五) 警蹕。さきばらひ、天子の出入に行路の人を警むる所以なり。

[丑問介] 請問老爺方纔說的。那些殉節文武。都有姓名麼。
[外] 問他怎的。
[丑] 我小舖中要編成唱本(六八)。傳示四方。叫萬人景仰他哩。
[外] 好好。下官寫有手摺(六九)。明日取出奉送(七〇)罷。
[丑] 多謝。
[小生] 那些投順(七一)闖賊。不忠不義的姓名。也該流傳。叫人唾罵。
[外] 都有鈔本(七二)。一總奉上。
[丑] 更妙。[俱作睡熟介]
[內作衆鬼號呼介]
[外驚聽介] 奇怪奇怪。窗外風雨聲中。又有哀苦號呼之聲。是何物類。
[雜扮陣亡厲鬼(七三)跳叫上]
[外隔窗看介] 怕人。怕人。都是些沒頭折足。陣亡厲鬼。爲何到此。
[衆鬼下] [外睡倒介] [內作細樂(七四)警蹕(七五)介]
[外驚聽介] 窗外又有人馬鼓樂聲。待我開門看來。[起看介]

[雜扮文武冠帶騎馬旛幢(七六)細樂。引導帝后乘輿上]
[外驚出跪迎介] 萬歲萬歲萬萬歲。孤臣張薇恭迎聖駕。
[衆下]
[外起呼介] 皇帝皇后。何處巡遊。我孤臣張薇。不能隨駕了。[又拜哭介]
[小生・丑醒問介] 天已發亮(七七)。老爺怎的又哭起來。想是該上早香(七八)了。
[外掩淚介] 奇事。奇事。方纔睡去。聽得許多號呼之聲。隔窗張看。都是些陣亡厲鬼。
[小生] 是了。昨夜乃中元赦罪之期。想是赴盂蘭會的。
[外] 這也沒相干。還有奇事哩。
[丑] 還有什麼奇事。
[外] 後來又聽的人馬鼓吹之聲。我便開門出看。明明見崇禎先帝。同著周皇后。乘輿東行。引導的文武官員都是殉難忠臣。前面奏著細樂。排著儀仗。像個要昇天的光景。我伏俯路旁。送駕過去。

(七六)旛幢。旗仗なり。
(七七)發亮。黎明をいふ。
(七八)早香。朝の燒香。

不覺失聲。大哭起來。

［小生］有這等異事。先皇帝先皇后。自然是超昇天界的。也還是張老爺一片至誠所感。故此特特顯聖。

［外］下官今日發一願心。要到明年七月十五日。在南京勝境。募建水陸道場。修齋追薦。竝脫度一切冤魂。二位也肯隨喜麼。

［丑］老爺果能做此好事。俺們情願搭醮。

［外］好人。好人。到南京時。或買書。或求書。不時要相會的。

［丑］正是。

［小生］大家收拾行李。前路作別罷。［各背行李下介］

雨洗鷄籠翠。江行趁曉涼。

烏啼荒塚樹。槐落廢宮牆。

帝子魂何弱。將軍氣不揚。

中原垂老別。慟哭過沙場。

(七九) 超昇。天に昇るなり。

(八〇) 顯聖。靈顯あらたかに、此の世にあらはれ給ふこと。

(八一) 水陸道場。施餓鬼會に同じ清淨なる地、又は水に食物を投じて、餓鬼に施す儀式なり。

(八二) 脫度。濟度すること。

(八三) 隨喜。他人の善事を爲すを喜ぶこと、此處にては參拜の意なり。

(八四) 好事。法要なり。

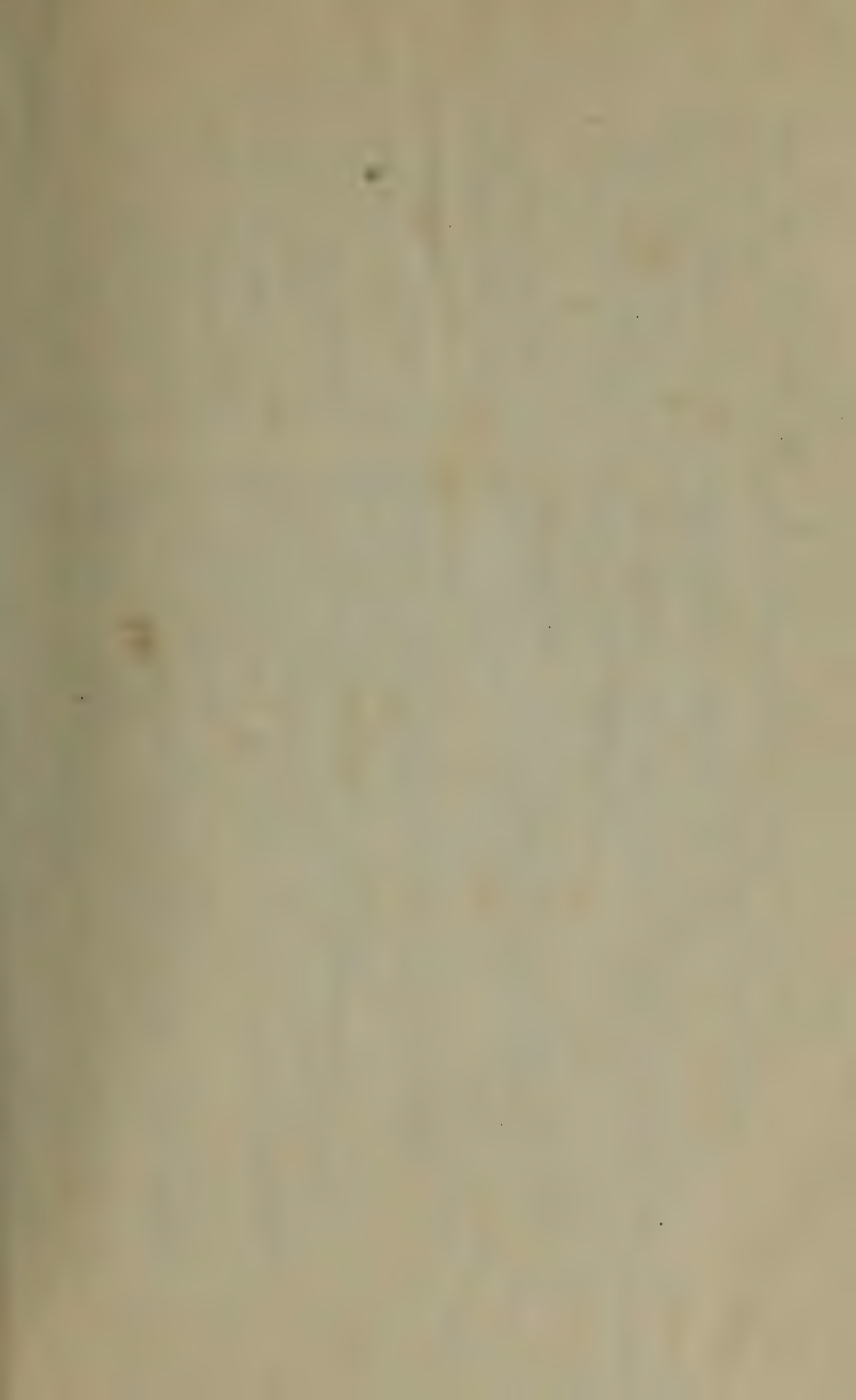
(八五) 醮。道士のする祈禱をいふ搭は分前を出すこと。

(八六) 前路。先へ行つてからの意。

(八七) 鷄籠翠。鷄籠は山の名。

(八八) 垂老別。年をとつてから中原の都に別れる意、杜甫の詩中に垂老別あり、老人が故鄕に別れて戰地に赴くをいふ。

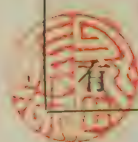
(八九) 沙場。戰場をいふ。

桃花扇 巻上 終

大正十五年五月十五日印刷
大正十五年五月十八日發行

支那文學大觀　第五卷

非賣

著作權者　代表者　佐々木久

東京市神田區駿河臺西紅梅町十三番地

發行兼印刷者　支那文學大觀刊行會
右代表者　永田勇造

著作權所有

發兌　東京市神田區西紅梅町一三
支那文學大觀刊行會
振替東京七四一五四番
電話神田二三九二番

蜀行至中途六軍不進右龍武將軍陳玄禮奏過殺了國忠禍連貴妃主上無可奈何只得從之縊死馬嵬驛中今日賊平無事主上還國太子做了皇帝主上養老退居西宮晝夜只是想貴妃娘娘今日教某掛起真容朝夕哭奠不免收拾停當在此伺候咱（正末上云）寡人自幸蜀還京太子做了逆賊即了帝位寡人退居西宮養老每日只是思量妃子教畫工畫了一軸真容供養着每日相對

也呵（做哭科）（唱）

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03011 9127